

茨城県教育財団文化財調査報告書第93集

研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理 事業地内埋蔵文化財調査報告書 (IV)

柴崎遺跡Ⅱ区・Ⅲ区

平成6年9月

住宅・都市整備公団つくば開発局
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告書第93集

研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理 事業地内埋蔵文化財調査報告書 (IV)

しばさき
柴崎遺跡Ⅱ区・Ⅲ区

平成6年9月

住宅・都市整備公団つくば開発局
財団法人 茨城県教育財団

序

つくば市は昭和62年、4町村が合併して誕生しましたが、この地域では、それに先立つ昭和38年に筑波研究学園都市計画地域の指定を受けて以来、我国最大のサイエンスシティとして、国や民間の研究機関や大学、また関連の工場等を集中的に誘致し、日本の科学技術の研究開発の核として整備を進めております。

その一環として、住宅・都市整備公団は、つくば市柴崎地区において『テクノパーク桜』の建設を進めております。これは職住接近の良好な住環境を研究学園都市の周辺に拡大するため、住宅用地と企業用地を同時に供給しようとする土地区画整理事業であります。

この予定地内に柴崎遺跡が存在していたため、財団法人茨城県教育財団は住宅・都市整備公団から埋蔵文化財発掘調査について委託を受け、昭和62年度から発掘調査を実施してまいりましたが、平成5年度をもって一連の調査を終了いたしました。また、平成元年度までの調査の成果は、既に『研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅰ)柴崎遺跡Ⅰ・Ⅱ-1区』、『同(Ⅱ)柴崎遺跡Ⅱ区・中塚遺跡』、『同(Ⅲ)柴崎遺跡Ⅲ区』として刊行してまいりました。

本書は、平成4年度、及び平成5年度に調査を実施した柴崎遺跡のⅡ区とⅢ区の一部に関する報告書であります。本書を、研究資料としてはもとより、この地域の歴史の理解を深め、ひいては教育・文化向上の一助として、広くご活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、住宅・都市整備公団、茨城県教育委員会、つくば市教育委員会をはじめ、関係機関及び関係各位から御指導・御協力を賜りました。厚く感謝申し上げます。

平成6年9月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 磯田 勇

例 言

- 1 本書は、平成4年度及び平成5年度に、住宅・都市整備公団の委託により、財団法人茨城県教育財団が発掘調査を実施した、茨城県つくば市(旧桜村)大字柴崎^{しばさき}字谷^やツ向^{つむかい}189番地ほか所在の柴崎遺跡^{しばさきいせき}II区の一部、及び字小田^{おだかいどう}海道126番地所在の同III区の一部の発掘調査報告書である。
- 2 柴崎遺跡の調査及び整理に関する当財団の組織は、次のとおりである。

理 事 長	磯 田 勇	昭和63年6月～	
副 理 事 長	角 田 芳 夫 小 林 秀 文	平成3年7月～平成6年3月 平成6年4月～	
専 務 理 事	中 島 弘 光	平成5年4月～	
常 務 理 事	本 田 三 郎	平成3年4月～平成5年3月	
事 務 局 長	藤 枝 宣 一	平成4年4月～	
埋 蔵 文 化 財 部 長	石 井 毅 安 藏 幸 重	平成2年4月～平成5年3月 平成5年4月～	
埋 蔵 文 化 財 部 長 代 理	河 野 佑 司	平成6年4月～	
企 画 管 理 課	課 長	水 飼 敏 夫	平成4年4月～
	係 長	根 本 達 夫	平成6年4月～
	主 任 調 査 員	根 本 康 弘	平成3年4月～平成5年3月
	主 任 調 査 員	川 井 正 一	平成5年4月～平成6年3月
	主 任 調 査 員	海 老 澤 稔	平成6年4月～
	主 事	杉 山 秀 一	平成4年4月～平成6年3月
経 理 課	課 長	藤 田 和 行	平成4年4月～平成5年3月
	課 長 代 理	小 幡 弘 明	平成5年4月～
	係 長	鈴 木 三 郎	平成5年4月～
	主 任	大 高 春 夫	平成6年4月～
	主 事	飯 島 康 司	平成4年4月～平成6年3月
	主 事	大 貫 吉 成	平成4年4月～平成5年3月
	主 事	軍 司 浩 作	平成5年4月～
調 査 課	課長(部長兼務)	石 井 毅	平成元年4月～平成5年3月
	課長(部長兼務)	安 藏 幸 重	平成5年4月～
	調 査 第 二 班 長	和 田 雄 次	平成4年4月～平成5年3月
	調 査 第 二 班 長	根 本 康 弘	平成5年4月～平成6年3月
	調 査 員	松 浦 敏	平成4年12月～平成5年2月調査
	調 査 員	黒 沢 秀 雄	平成4年12月～平成5年2月調査
	主 任 調 査 員	萩 野 谷 悟	平成5年11月～平成6年3月調査
	調 査 員	梶 山 雅 彦	平成5年11月～平成6年3月調査
整 理 課	課 長	阿 久 津 久	平成5年4月～
	主 任 調 査 員	萩 野 谷 悟	平成6年4月～平成6年9月整理・執筆・編集

- 3 本書に使用した記号等については、第3章第1節3「遺構・遺物の記載方法」の項を参照されたい。
- 4 本書の作成にあたり、旧石器については千葉県立中央博物館学芸員 橋本勝雄氏に、縄文土器については財団法人千葉県文化財センター主任研究員 西川博孝氏に、墨書土器等については国立歴史民俗博物館教授 平川南氏に御指導をいただいた。
- 5 発掘調査及び整理に際して御指導・御協力を賜った関係各機関、並びに関係各位に、深く感謝の意を表します。
- 6 遺跡の概略

ふりがな	けんきゅうがくえんとしけいかくさくらしばさきとちくかくせいりじぎょうちないまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ						
書名	研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書						
副書名	柴崎遺跡II区・III区						
巻次	(IV)						
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告書						
シリーズ番号	第93集						
著者	萩野谷 悟						
編集機関	財団法人 茨城県教育財団						
発行機関	財団法人 茨城県教育財団						
住所	〒310 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 0292-25-6587						
発行年月日	1994(平成6)年9月30日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
しばさきいせき 柴崎遺跡	いばらきけん つくばし 茨城県つくば市 おおあざしばさき あざやつ 大字柴崎字谷ツ むかい 向189ほか	08220 -128	36° 06' 23"	140° 06' 50"	平成4年度 19921210～ 19930228 平成5年度 19931101～ 19940331	1,182㎡ 3,690㎡	研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理事業に伴う事前調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
柴崎遺跡	集落跡	旧石器時代		ナイフ形石器, 尖頭器		花室川低地から入る谷津の周辺に展開する, 古墳時代から中世にかけての大集落	
		縄文時代	炉穴6基	縄文式土器片			
		古墳～中世	竪穴住居跡39軒	土師器, 須恵器, 鉄製品(鎌, 刀子, 鏃), 石製品(紡錘車)			

目 次

序	
例 言	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 遺跡	9
第1節 調査方法と遺構・遺物の記載方法	9
第2節 遺跡の概要	11
第3節 遺構と遺物	13
1 II (H4) 区	13
(1) 竪穴住居跡	13
(2) 炉穴	25
(3) 土坑	26
(4) 溝	27
2 II (H5) 区	31
(1) 竪穴住居跡	31
(2) 炉穴	114
(3) 土坑	117
(4) 溝	121
(5) 道路	123
(6) 遺構外の遺物	124
3 III区	130
(1) 竪穴住居跡	130
(2) 土坑	144
(3) 溝	145
(4) 道路	149
(5) 遺構外の遺物	149
第4節 まとめ	151
付章 柴崎遺跡土壌の自然科学分析	155
パリノ・サーヴェイ株式会社	155

挿 図 目 次

<p>第 1 図 周辺遺跡分布図 …………… 7</p> <p>第 2 図 柴崎遺跡調査区割図 …………… 8</p> <p>第 3 図 調査区呼称方法概念図 …………… 9</p> <p>第 4 図 基本土層図 ……………10</p> <p>第 5 図 第137号住居跡・竈実測図……………14</p> <p>第 6 図 第137号住居跡出土遺物実測図……………15</p> <p>第 7 図 第233号住居跡・竈実測図……………16</p> <p>第 8 図 第233号住居跡出土遺物実測図……………17</p> <p>第 9 図 第234号住居跡・竈実測図……………19</p> <p>第 10 図 第234号住居跡出土遺物実測図……………19</p> <p>第 11 図 第235号住居跡実測図……………21</p> <p>第 12 図 第235号住居跡出土遺物位置図・ 竈実測図 ……………22</p> <p>第 13 図 第235号住居跡出土遺物実測図(1)……………23</p> <p>第 14 図 第235号住居跡出土遺物実測図(2)……………24</p> <p>第 15 図 第 6 号炉穴実測図 ……………26</p> <p>第 16 図 第 1・3・4 号土坑実測図 ……………27</p> <p>第 17 図 第 1・2・3・4・5 号溝実測図(1) ……29</p> <p>第 18 図 第 1・2・3・4・5 号溝実測図(2) ……30</p> <p>第 19 図 第 1・4・5 号溝出土遺物実測図 ……30</p> <p>第 20 図 第47号住居跡実測図 ……………32</p> <p>第 21 図 第47号住居跡出土遺物実測図 ……………32</p> <p>第 22 図 第238A号住居跡出土遺物実測図……………34</p> <p>第 23 図 第238A・B・C・D・E・F・G号 住居跡実測図(1) ……………35・36</p> <p>第 24 図 第238A・B・C・D・E・F・G号 住居跡実測図(2) ……………37</p> <p>第 25 図 第238A・B・C・D・E・F・G号 住居跡実測図(3) ……………38</p> <p>第 26 図 第238E号住居跡実測図・第238B号 住居跡出土遺物位置図 ……………39</p> <p>第 27 図 第238A・B・D・F・G号 住居跡竈実測図 ……………40</p> <p>第 28 図 第238B号住居跡出土遺物実測図(1)……………42</p> <p>第 29 図 第238B号住居跡出土遺物実測図(2)……………43</p>	<p>第 30 図 第238C号住居跡出土遺物実測図……………46</p> <p>第 31 図 第238D号住居跡出土遺物実測図(1)……………48</p> <p>第 32 図 第238D号住居跡出土遺物実測図(2)……………49</p> <p>第 33 図 第238E号住居跡出土遺物実測図……………50</p> <p>第 34 図 第238F号住居跡出土遺物実測図……………52</p> <p>第 35 図 第238G号住居跡出土遺物実測図……………53</p> <p>第 36 図 第238号住居跡（一括）出土遺物 実測図 ……………54</p> <p>第 37 図 第239A・B・C号住居跡実測図(1)……………55</p> <p>第 38 図 第239A・B・C号住居跡実測図(2)……………56</p> <p>第 39 図 第239A・B・C号住居跡竈実測図……………57</p> <p>第 40 図 第239A・B・C号住居跡出土遺物 位置図 ……………59</p> <p>第 41 図 第239A号住居跡出土遺物実測図(1)……………60</p> <p>第 42 図 第239A号住居跡出土遺物実測図(2)……………61</p> <p>第 43 図 第239B号住居跡出土遺物実測図……………63</p> <p>第 44 図 第239C号住居跡出土遺物実測図……………65</p> <p>第 45 図 第240号住居跡・竈実測図……………66</p> <p>第 46 図 第240号住居跡出土遺物実測図……………68</p> <p>第 47 図 第241号住居跡実測図……………69</p> <p>第 48 図 第241号住居跡竈実測図……………70</p> <p>第 49 図 第241号住居跡出土遺物実測図……………71</p> <p>第 50 図 第242号住居跡・竈実測図……………73</p> <p>第 51 図 第242号住居跡出土遺物位置図……………74</p> <p>第 52 図 第242号住居跡出土遺物実測図……………75</p> <p>第 53 図 第243号住居跡・竈実測図……………77</p> <p>第 54 図 第243号住居跡出土遺物実測図……………78</p> <p>第 55 図 第244号住居跡実測図……………79</p> <p>第 56 図 第245・246号住居跡実測図(1) ……………81</p> <p>第 57 図 第245・246号住居跡実測図(2)・ 竈実測図 ……………82</p> <p>第 58 図 第246号住居跡出土遺物実測図……………83</p> <p>第 59 図 第248・249・250A・250B・251・ 252号住居跡実測図(1)……………85・86</p>
---	--

第 60 图	第248・249・250A・250B・251・ 252号住居跡実測図(2) ……………87	第 84 图	第 7 号土坑出土遺物実測図……………118
第 61 图	第249・250A・250B・251・252号 住居跡竈実測図 ……………88	第 85 图	第 7・8・14・15・21・23号土坑 実測図……………120
第 62 图	第248号住居跡出土遺物実測図……………89	第 86 图	第7A・7B・8・11A・11B・13・ 14号溝・第1・2号道路実測図……………122
第 63 图	第249号住居跡出土遺物実測図……………90	第 87 图	第7A・7B・8・11A・11B・15号溝・ 第1号道路実測図……………123
第 64 图	第250A号住居跡出土遺物実測図……………92	第 88 图	遺構外出土遺物実測図……………126
第 65 图	第250B号住居跡出土遺物実測図……………93	第 89 图	遺構外出土遺物縄文土器拓影図(1)………127
第 66 图	第250号住居跡(一括)出土遺物 実測図 ……………93	第 90 图	遺構外出土遺物縄文土器拓影図(2)………128
第 67 图	第251号住居跡出土遺物実測図……………95	第 91 图	遺構外出土遺物縄文土器拓影図(3)………129
第 68 图	第252号住居跡出土遺物実測図……………97	第 92 图	第196号住居跡実測図(1) ……………131
第 69 图	第253・254号住居跡実測図 ……………99	第 93 图	第196号住居跡実測図(2) ……………132
第 70 图	第253・254号住居跡竈実測・ 出土遺物位置図……………100	第 94 图	第196号住居跡竈実測図 ……………133
第 71 图	第253号住居跡出土遺物実測図 ……………101	第 95 图	第196号住居跡出土遺物位置図 ……………134
第 72 图	第254号住居跡出土遺物実測図 ……………102	第 96 图	第196号住居跡出土遺物実測図 ……………135
第 73 图	第256号住居跡・竈実測図 ……………105	第 97 图	第236号住居跡・竈実測図 ……………137
第 74 图	第256号住居跡出土遺物実測図 ……………106	第 98 图	第236号住居跡出土遺物実測図 ……………138
第 75 图	第257号住居跡・竈実測図 ……………107	第 99 图	第237号住居跡・竈実測図 ……………140
第 76 图	第257号住居跡出土遺物実測図(1) ……………108	第100图	第237号住居跡出土遺物実測図 ……………141
第 77 图	第257号住居跡出土遺物実測図(2) ……………109	第101图	第264号住居跡・竈実測図 ……………143
第 78 图	第259号住居跡・竈実測図 ……………110	第102图	第264号住居跡出土遺物実測図 ……………144
第 79 图	第259号住居跡出土遺物実測図 ……………111	第103图	第1・4・5・6号土坑実測図……………145
第 80 图	第261号住居跡出土遺物実測図 ……………112	第104图	第14A・14B・37・38・39・40・41・ 42号溝・第1号道路実測図……………146
第 81 图	第261・262号住居跡実測図……………113	第105图	第14A・14B・37・38・39・40・41・ 42号溝実測図……………147
第 82 图	第1・2・3・4・5号炉穴実測・ 第3号炉穴出土遺物縄文土器拓影図………116	第106图	第39号溝出土遺物実測図……………148
第 83 图	第5A・5B・6号土坑実測図……………118	第107图	遺構外出土遺物実測図……………150

付 図 目 次

付図 1 柴崎遺跡 I・II・III区遺構配置図

表 目 次

表 1 周辺遺跡一覧表…………… 5 表 2 平成 4・5 年度調査住居跡一覧表 ……153

写真図版目次

P L 1	遺跡周辺航空写真，平成 5 年度調査区全景	P L 18	第 243 号住居跡・遺物出土状況
P L 2	II (H4) 区全景，第 137 号住居跡	P L 19	第 243 号住居跡竈・竈掘り方
P L 3	第 233・234 号住居跡	P L 20	第 244・245・246 号住居跡
P L 4	第 235 号住居跡・遺物出土状況	P L 21	第 246 号住居跡遺物出土状況・竈・竈掘り方
P L 5	第 6 号炉穴，第 1・3 号土坑	P L 22	第 248・249 号住居跡，第 249 号住居跡竈遺物 出土状況
P L 6	III (H5) 区全景，第 47 号住居跡	P L 23	第 250 A・B 号住居跡，第 250 A 号住居跡遺 物出土状況
P L 7	第 238 A・B・C・D・E・F・G 号住居跡， 第 238 A 号住居跡	P L 24	第 250 A・B 号住居跡竈
P L 8	第 238 B 号住居跡・第 6 号土坑，第 238 B 号 住居跡竈周辺遺物出土状況・竈	P L 25	第 251 号住居跡・竈
P L 9	第 238 C 号住居跡・遺物出土状況・紡錘車出 土状況	P L 26	第 252 号住居跡・竈
P L 10	第 238 D・E 号住居跡，第 238 D 号住居跡遺 物出土状況	P L 27	第 253 号住居跡・遺物出土状況・竈
P L 11	第 238 F・G 号住居跡，第 238 F 号住居跡竈・ 竈掘り方	P L 28	第 254 号住居跡・遺物出土状況・竈
P L 12	第 239 A・B・C 号住居跡，第 239 号住居跡 遺物出土状況	P L 29	第 256 号住居跡・遺物出土状況・竈
P L 13	第 239 A 号住居跡竈遺物出土状況，第 239 B 号住居跡竈	P L 30	第 257 号住居跡・遺物出土状況・竈
P L 14	第 239 C 号住居跡遺物出土状況・南西部	P L 31	第 259 号住居跡・竈，第 261・262 号住居跡
P L 15	第 240 号住居跡・竈・竈掘り方	P L 32	第 1・2・3・4・5 号炉穴
P L 16	第 241 号住居跡・竈	P L 33	第 5・7・8・14・21・23 号土坑，第 1・ 2 号道路
P L 17	第 242 号住居跡・竈・遺物出土状況	P L 34	III (H5) 区全景，第 196 号住居跡
		P L 35	第 196 号住居跡遺物出土状況・竈
		P L 36	第 236 号住居跡・竈遺物出土状況
		P L 37	第 237 号住居跡・遺物出土状況・竈遺物出土 状況

- P L 38 第264号住居跡・竈
- P L 39 第4号土坑, 第38・40号溝
- P L 40 第37・38・39号溝
- P L 41 第233・234・235号住居跡出土遺物
- P L 42 第235号住居跡出土遺物, 第1・4・5号土坑出土遺物
- P L 43 第47・238A・238B号住居跡出土遺物
- P L 44 第238B・C・D号住居跡出土遺物
- P L 45 第238D号住居跡出土遺物
- P L 46 第238D・E・F・G号住居跡出土遺物, 第238号住居跡一括出土遺物
- P L 47 第238号住居跡一括出土遺物, 第239A号住居跡出土遺物
- P L 48 第239A・239B・239C・240号住居跡出土遺物
- P L 49 第241・242号住居跡出土遺物
- P L 50 第242・243・246・249号住居跡
- P L 51 第249・250B・251・252・253号住居跡出土遺物
- P L 52 第253・254・256・257・259号住居跡出土遺物
- P L 53 第257号住居跡・遺構外出土遺物
- P L 54 第196・236・237号住居跡出土遺物
- P L 55 第237号住居跡・第39号溝出土遺物, 縄文土器片(1)
- P L 56 縄文土器片(2)・(3)
- P L 57 縄文土器片(4)・(5)

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

当遺跡は、既に昭和62年度から平成元年度の3年にわたり、当財団が発掘調査を実施してきた。昭和62年度にはⅠ区（調査区割りについては第3章第1節参照）とⅡ区の一部、昭和63年度にはⅡ区、平成元年度にはⅢ区の調査を行い、その成果は『研究学園都市計画桜柴崎土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅰ）柴崎遺跡Ⅰ・Ⅱ-Ⅰ区』、『同（Ⅱ）柴崎遺跡Ⅱ区・中塚遺跡』、『同（Ⅲ）柴崎遺跡Ⅲ区』として刊行した。

調査に至る経過についてはそれらの報告書に詳しく記されているが、ごく簡単にまとめると次のとおりである。昭和56年に当時の桜村が柴崎地区における工業団地造成計画をまとめ、翌57年、桜村は住宅・都市整備公団に協力を依頼し、事業は住宅・都市整備公団が実施していくことになった。ところがこの地域で埋蔵文化財の存在が確認されたため、茨城県教育委員会により調整が行われ、その結果、当財団が委託を受け、発掘調査を実施した。

しかし、Ⅱ区の一部とⅢ区の一部、合計4,872㎡が、委託者側の都合により、平成元年度までの調査対象から除外されていた。平成4年度には調査が可能となったが、年度途中であったため、当財団としては対応が難しかった。一方、委託者側には工程上の都合があり、協議した結果、一部（1,182㎡）については年度内に、それ以外（3,690㎡）については平成5年度に調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

調査経過の概要は、以下のとおりである。

1 平成4年度

平成4年12月 発掘調査を開始するための諸準備を行い、10日には現地での作業を開始した。竹林の伐開（Ⅲ区）、重機による表土除去、遺構確認作業を行った。15日にはⅡ区から遺構調査に入った。

平成5年1月 Ⅱ区の遺構調査に併行して、6日からⅢ区の遺構調査を開始した。18日には、Ⅱ区の遺構調査を終了した。

2月 12日、Ⅲ区の遺構調査を終了した。同日、撤収も完了した。

2 平成5年度

平成5年11月 発掘調査を開始するための諸準備を行い、10日には現地での調査を開始した。Ⅲ区の竹林伐開、Ⅱ区の表土除去（人力による）及び遺構確認、Ⅲ区の表土除去（重機による）及び遺構確認を行った。

12月 10日、表土除去及び遺構確認作業を終了し、Ⅱ区の遺構調査を開始した。

平成6年1月 31日、筑波大学第一学群人文学類考古学専攻生の考古学実習授業（担当教官西野元教授、常木晃講師。実習生24名）を受け入れた。筑波大学はⅢ区の住居跡3軒の調査を行った。

2月 2日、Ⅲ区の住居跡以外の遺構についても調査を開始した。10日、筑波大学の実習は終了した。16日、航空写真撮影を実施した。23日にⅢ区の遺構調査を終了し、24日からは、滞りがちだったⅡ区の竪穴住居跡の竈の調査を本格的に開始し、併せてⅡ区の遺構調査終了部分から旧石器

時代文化層確認のための試掘調査を開始した。8 m×8 mの範囲に2 m×2 mの試掘坑を2か所配置した。したがって面積比は対象面積の12.5%である。

3月 3日から、II区と併行してIII区でも旧石器時代の試掘調査を開始した。14日、II区の旧石器時代の試掘調査は、遺構調査のため実施できない部分を除いて、終了した。16日にはIII区の旧石器時代の試掘調査が終了した。17日、II区の遺構調査を終了した。以後、撤収作業を行い、25日、現地調査を終了した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

柴崎遺跡は、つくば市大字柴崎字谷ツ向189番地ほか（II区）、字小田海道126番地（III区）に所在する。昭和62年11月の4町村合併によるつくば市誕生以前は、新治郡桜村に属していた。

つくば市は、茨城県の南部に位置し、東は新治郡新治村・土浦市、南は牛久市・稲敷郡茎崎町・筑波郡谷和原村、西は海ほろ市・結城郡石下町・下妻市、北は真壁郡明野町・同真壁町等に接する。

つくば市域は、地形的には北東は筑波山（標高876m）及びその支脈からなる筑波山塊、西は利根川の支流小貝川、東は霞ヶ浦に流入する桜川によって画されており、南東には土浦市域を挟んで霞ヶ浦が広がる。この地域は、千葉県北部から茨城県南部に広がる、いわゆる常総台地の北端近くに位置しており、小貝川と桜川によって東西が大きく開析されている。中央部はこれら2つの河川に挟まれた平坦な台地（筑波・稲敷台地）で、当遺跡付近での標高は25～26mである。桜川の低地は標高約5mであるので、約20mの標高差がある。

当遺跡が立地する台地には、中小河川の浸蝕によって形成された浅い開析谷や谷津が見られる。そうした河川の一つである花室川は、台地の東寄り、桜川に並行するように東南に流下し、霞ヶ浦に流入する。花室川の低地の標高は当遺跡付近で約20mで、遺跡からは約5m低くなっている。

柴崎遺跡は、つくば市の南東部、花室川の東側の台地上に、小さな谷津を取り囲むようにして立地している。今回調査を実施したII区はこの谷津の北側、III区は谷津の東側すなわち谷頭の奥にあたる。なお、I区は谷津の南側である。

地質的には、筑波・稲敷台地は常総台地の一部で、竜ヶ崎層と呼ばれる砂層・砂礫層が主体をなし、その上に板橋層または常総粘土層と呼ばれる灰白色粘土層（0.3～5.0m）、その上に関東ローム層（0.5～2.5m）が堆積し、最上部は腐植土層となっている。なお、関東ローム層については、第3章第1節で詳しく述べる。

遺跡周辺の土地利用の現状は、主として宅地と畑地、一部は平地林となっており、桜川・花室川の低地は主として水田、一部微高地は宅地や畑地となっている。なお柴崎遺跡の中央にある谷津は、以前は水田として利用されていた。こうした土地利用は、基本的には古代以来変化していないものと思われる。

第2節 歴史的環境

柴崎遺跡の年代は、後述するように、旧石器時代から中世に及ぶ。当遺跡周辺では調査が実施された遺跡は少なく、十分な資料があるわけではないが、当該時期の周辺遺跡を概観し、多少とも当遺跡の歴史的環境を理解するための一助としたい。なお、文中、市町村名を記していない遺跡は、つくば市所在の遺跡である。

旧石器時代については、柴崎遺跡〈1〉周辺では発掘調査が全く行われておらず、表採や表土中出土の断片的資料によるほかはない。柴崎遺跡の北西6～7kmの山木地前野遺跡・山木地大砂遺跡^{やまき ちまえの やまき ちおおすな}で、尖頭器・有舌尖頭器を中心とした資料が採集されている。これらの遺跡のある地域は小貝川水系東谷田川・西谷田川の流域に属し、柴崎遺跡とは水系が違ふものの、同一台地上にあり、似たような立地条件である。大砂遺跡と同じく西谷田川右岸台地上に大境遺跡^{おおざかい}があり、尖頭器・ナイフ形石器・搔器等が出土している。桜川を挟んで対岸の台地上には、中台遺跡^{なかだい}があり、表土中からナイフ形石器や剝片が出土している。桜川を挟んで東に隣接する新治村

では、桜川低地を望む台地縁辺の高岡根遺跡〈4〉で尖頭器等が、また台地を開析した小さな谷を望む台地縁辺の大畑本田遺跡〈6〉で尖頭器・有舌尖頭器・搔器等が採集されている。これらは旧石器時代でも比較的新しい段階の遺物である。この時期の調査が進めば遺跡数は飛躍的に増加すると思われる。

なお、震ヶ浦周辺からはナウマン象の臼歯や牙などの化石が多数発見されているが、花室川河床からも数点発見されている。そのうち、上広岡〈25〉発見例は、¹⁴C年代測定法により約30,000年前とされている。ナウマン象の棲息は同時期の人類の活動を示唆しており、この地域でもロームの下部まで調査が行なわれれば、やや古い段階の文化が明らかになる可能性がある。

縄文時代の遺跡は、花室川下流右岸の支谷を望む台地上に下広岡遺跡〈29〉がある。発掘調査により、中期の住居跡や袋状土坑が多数発見され、大集落であったことが明らかになった。中台遺跡でも中期の住居跡・袋状土坑が多数発見された。西方7kmの西谷田川右岸台地上の大境遺跡では、中期を中心に前～後期の住居跡等が発見され、包含層からは早期の土器が出土している。そのほか、ごく近在の遺跡としては、発掘調査は行われていないが、大山遺跡〈9〉(早期)・台坪才十郎遺跡〈8〉(中期)・大角豆遺跡〈26〉(中期)・下大角豆遺跡〈27〉(中期)・天神遺跡〈10〉(中期)・西坪B遺跡〈17〉(中～後期)・花室遺跡〈19〉(中～後期)・旭台貝塚〈13〉(後～晩期)など、中～後期の遺跡が多く確認されている。当遺跡との関係では、早期の大境遺跡と大山遺跡が注目される。大山遺跡は北東約1kmと近接した位置にあり、桜川低地を望む台地縁辺に立地する。

弥生時代の遺跡は、桜川右岸台地上に上流から山木遺跡・福王地遺跡・大角豆遺跡、福王地遺跡下の微高地(自然堤防)上で中菅間遺跡、左岸段丘上で上ノ台(旧・漆所)遺跡・中台遺跡、また上ノ台遺跡下の低地で神郡条里遺跡が確認されている。中台遺跡では後期後半の住居跡が10軒ほど確認されている。その他の遺跡はいずれも未調査、または断片的な調査が実施されているだけで、この地域の弥生時代の具体的な様相はほとんど不明である。時期はいずれも後期で、立地は桜川低地を望む台地上、及び低地の中の微高地が多い。筑波・稲敷台地の西側の小貝川水系でも同様の状況である。

古墳時代については、調査がなされた近在の集落遺跡としては、花室川下流右岸の小支谷に面した下広岡遺跡(前～後期)、桜川左岸の中台遺跡(前～後期の集落)、桜川左岸低地の小田橋遺跡〈3〉(後期)、小貝川左岸の神谷森遺跡(前期)がある。ほかに多くの未調査の遺跡があり、この時期、遺跡数が増加している。立地は、弥生時代とほぼ同じであるが、倉掛遺跡のように、花室川流域の台地縁辺に立地する遺跡も出てきた。古墳は、桜川右岸台地上の桜塚古墳(前期末)・山木古墳(中期初頭)、桜川左岸台地上または丘陵上の土塔山古墳(中期)・八幡塚古墳(後期)・中台古墳群(後期)・甲山古墳(後期)・新治村武者塚古墳〈7〉(後期)などがある。未調査のものも含め、桜川低地を望む台地縁辺に多いが、後期古墳では桜川低地の微高地に立地するものもある。柴崎遺跡のごく近在の古墳としては、桜川低地を望む台地縁辺に、北から東にかけて愛宕塚古墳〈5〉・どんどん塚古墳〈11〉・滝の台古墳群〈12〉・横町古墳群〈14〉などが立地している。最も近いどんどん塚古墳・愛宕塚古墳は、北東約1kmの位置にある。花室川流域で最も近い古墳は下大角豆の千現塚古墳〈28〉であるが、約6.5kmほど離れている。

奈良・平安時代では、まず注目されるのが平沢官衙遺跡である。桜川左岸台地上のこの遺跡は、調査の結果、多くの総柱の掘立柱建物などが確認され、筑波郡衙の一部と考えられている。西側の台地が既に何度も触れた中台遺跡で、その一角にある中台廃寺は郡寺と考えられている。さらに西方には日向遺跡があり、平安末期の鳳凰堂型式の阿弥陀堂が確認されている。桜川低地には神郡地区(神郡条里遺跡)等に条里の跡が見られる。この一帯が常陸国筑波郡の中心であった。柴崎遺跡からは、北に8km程の距離である。柴崎遺跡から南東に約2kmの桜川下流右岸台地上には西坪遺跡〈17〉と九重廃寺跡(東岡遺跡)〈16〉があり、河内郡衙及び郡寺と推

定されている。これらの東側および南東側の台地下には、現在は湮滅してしまっているが、条里遺跡である本田遺跡〈21〉・上ノ室条里遺跡〈22〉があった。律令制下における柴崎地区は、すぐ北の栗原地区（旧・桜村栗原）が筑波郡であり、河内郡域の北端ではあったが、郡衙等の存在する郡中心部に隣接する地域であった。

古代も末期になるとこの地域は荘園として支配されているが、支配関係等は明らかでない。中世には、小田城〈2〉を本拠とした小田氏により支配されることが多かったが、その関係の金田城〈15〉・花室城〈20〉・上ノ室城〈23〉等が築城されている。

*文中の遺跡名に付した〈 〉内の番号は、表1および第1図中の番号に対応する。

表1 柴崎遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺 跡 名	県遺跡番号	時 代					番号	遺 跡 名	県遺跡番号	時 代						
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良平安				中世	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良平安	中世
1	柴崎遺跡	2897	○	○		○	○	○	16	九重廃寺	2890					○	
2	小田城跡	2151						○	17	西坪遺跡	2085			○	○		
3	小田橋遺跡	5862				○	○		18	西坪B遺跡	2879		○				
4	高岡根遺跡	2070	○	○	○	○			19	花室遺跡	2880		○	○	○		
5	愛宕塚古墳	5779				○			20	花室城跡	2893						○
6	大畑本田遺跡	2073	○	○	○	○			21	本田遺跡	2097					○	
7	武者塚古墳	5796				○			22	上ノ室条里遺跡	2896					○	
8	台坪才十郎遺跡	2876		○					23	上ノ室城跡	2892						○
9	大山遺跡	2877		○		○			24	倉掛遺跡	2886				○		
10	天神遺跡	2878		○		○			25	上広岡ナウマン象化石出土地							
11	どんどん塚古墳	2089				○											
12	滝の台古墳群	2090				○			26	大角豆遺跡	2882		○	○			
13	旭台貝塚	2084		○					27	下大角豆遺跡	2898		○				
14	横町古墳群	2091				○			28	千現塚古墳	2096				○		
15	金田城跡	2891						○	29	下広岡遺跡	4012		○				

主な参考文献

- 茨城県教育庁文化課 『茨城県遺跡地図 2版』 茨城県教育委員会 1990年3月
- 茨城県 『茨城県史料 考古史料編 先土器・縄文時代』 1979年3月
- 茨城県 『茨城県史料 考古史料編 弥生時代』 1991年3月
- 茨城県 『茨城県史料 考古史料編 古墳時代』 1974年2月
- 茨城県 『茨城県史 中世編』 1986年3月
- 桜村教育委員会 『桜村史 上巻』 1982年3月
- つくば市 『筑波町史 上巻』 1991年9月
- 新治村教育委員会 『図説新治村史』 1986年1月
- 豊里町 『豊里の歴史』 1985年3月
- 茨城県教育財団 「常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書II」『茨城県教育財団文化財調査報告』第X集
1981年3月
- 茨城県教育財団 「研究学園都市計画手子生工業団地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書 大境遺跡」『茨城県教育財
団文化財調査報告』第34集 1986年3月
- 茨城県教育財団 「一般県道土浦岩井線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 神谷森遺跡」『茨城県教育財団文化
財調査報告』第66集 1991年3月



第1図 周辺遺跡分布図



第2図 柴崎遺跡調査区地図

第3章 遺 跡

第1節 調査方法と遺構・遺物の記載方法

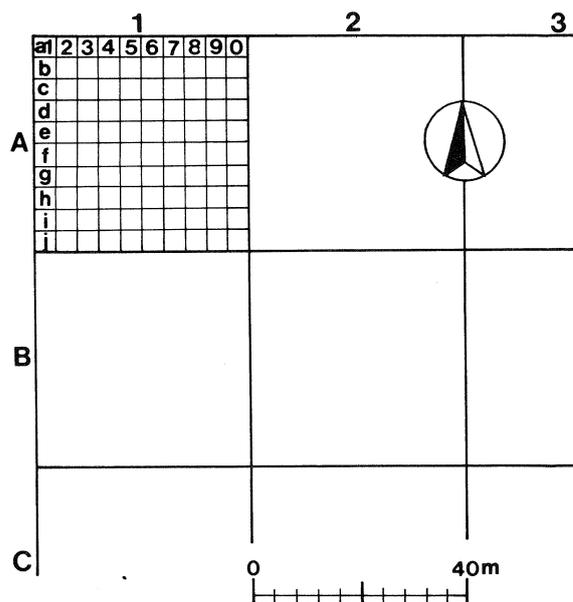
1. 地区設定 (第2・3図)

当遺跡は、これまでの調査の過程で、便宜上Ⅰ～Ⅲ区に分けられている(第2図)。遺跡は花室川の低地から北東に向かって入る小さな谷津を取り囲むように展開しているが、この谷津の南東側をⅠ区、北西側をⅡ区、北東側すなわち谷頭の奥をⅢ区としている。ただ、これは道路等現状による地区割りであり、遺構分布状況等によるものではない。なお、調査初年度には、Ⅱ区の一部について「Ⅱ-1区」と呼称したが、その後の調査では、調査年度の違によって当初の区割りを変更し、Ⅲ区の一部をⅡ区に、Ⅰ区の一部をⅢ区に編入している。したがって、場所による当初の調査区割りと、調査年度によるその後の区割りにより、呼称が繁雑になっていた。平成4年度及び平成5年度の調査では、当初の調査区割りに従い、その一部という意味において「Ⅱ区」・「Ⅲ区」とのみ呼称してきた。

本書では、基本的には調査時の呼称を踏襲し、調査年度による調査区の違いを区別して表記しなければならない場合には、「Ⅱ(H4)区」(平成4年度)・「Ⅱ(H5)区」(平成5年度)・「Ⅲ(H4)区」(平成5年度)・「Ⅲ(H5)区」(平成5年度)と表記することとする。

これとは別に、遺跡及び遺構の位置を明確にするため、公共座標に準拠した、方眼による調査区を設定した(第2図)。調査区の設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系、 $X=+12,080m$ 、 $Y=+25,000m$ の交点を基準点A1(ただし、仮定)として、そこから南へ360m、東へ560mの範囲を、40m四方の大調査区に分割し、さらに大調査区の中を4m四方の小調査区に分割する方法で行った(第3図)。

大調査区の呼称は、基準点から南へ40mごとにA～I、同じく東へ40mごとに1～14とし、それらアルファベットと算用数字を組み合わせ、例えば「A1区」・「B1区」のように呼称した。小調査区は、大調査区の中で北から南へa～j、西から東へ1～0とし、これらを組み合わせ、大調査区の名称を冠して、例えば「A1a1区」・「B2f3区」のように呼称した。なお、これらの調査区を画する杭の呼称については、それぞれの調査区の北西コーナーの杭をその調査区名によって呼称するものとした。



第3図 調査区呼称方法概念図

2. 基本層序の検討 (第4図)

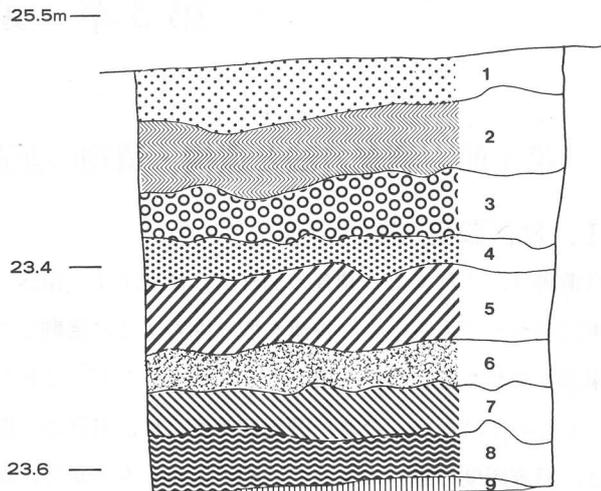
遺跡はほぼ平坦な台地上に立地しているので、II区もIII区も基本的な層序に差はない。

第4図は、平成5年度調査時、旧石器時代文化層確認のためにローム層への試掘を行った際に、D6h6区に入れた試掘坑において採図したものである。D6h6区はII(H5)区の北端に近い位置である。表土は除去しており、図には表れない。ソフトロームはなく、表土直下からロームはすべてハードロームである。

1層 明黄褐色ローム土層。厚さは20~25cm。

2層 黄褐色ローム土層。厚さは20~30cm。

3層 オリーブ褐色ローム土層。厚さは20~30cm。



第4図 基本土層図

粘性が強い。上下の層序から見て、武蔵野台地等という第I黒色帯に相当するものと考えられる。

4層 明黄褐色ローム土層。厚さは10~20cm。粘性が強い。火山ガラス粒子が肉眼で認められ、断面を鎌で削るとわずかながらシャリシャリする感じである。こうした特性や上下の層序から見て、^{あいら}始良Tn火山灰(AT)層と考えられる。

5層 3層よりも色調の暗いオリーブ褐色ローム土層。厚さは25~35cm。粘性が強い。上下の層序から見て、武蔵野台地等という第II黒色帯に相当すると考えられる。なお、この層はIII区ではII区よりも色調が暗く、黒褐色土層になっている。

6層 にぶい黄色のローム土層。厚さは15~20cm。粘性は3~5層よりもさらに強い。

7層 浅黄色のローム土層。厚さは15~20cm。粘性は3~5層よりも強く、粘土がかっている。

8層 にぶい黄色の粘土層。部分的にはやや赤みが強いところもある。厚さは15~25cm。2~8mmの黒色スコリアを含む。

9層 灰白色粘土層。部分的には青灰色を示す。上部には2~11mmの黒色スコリアを含む。この層は、水が滲出してくるためわずかしか掘り込んでいないが、ほかの試掘坑での所見では、20cmほど掘り込むとスコリアを含まなくなり、色調は純粋な灰白色を示すようになる。この灰白色粘土は50cm以上堆積している。

3 遺構・遺物の記載方法

本書における遺構・遺物の記載方法は、以下の通りである。

(1) 遺構の呼称

昭和62年度以降の調査の過程において、遺構の呼称が繁雑化している。調査区と調査年次によって、すなわちI・II-1・II・III区の各調査区において、各種遺構にそれぞれ第1号から番号を付しているが、平成元年度のIII区の調査の際には、竪穴住居跡については調査区に関係なく昭和63年度のII区からの連続番号を付している。

平成4年度調査においてはこれを踏襲し、竪穴住居跡については平成元年度調査からの連続番号を付し、その他の遺構については第1号からの番号を付した。平成5年度調査においては、調査報告が平成4年度調査と一括でなされることを考慮し、すべての遺構について平成4年度調査からの連続番号を付した。以前の調査遺構と連続する遺構については以前の番号を使用した。調査が進んでから連続の事実が判明した場合には、混乱を避けるためそのままの遺構番号を使用した場合もあり、その場合は文中に明記した。

本書では調査時の呼称をできるだけ使用した。

(2) 使用記号

(遺構) 住居跡—SI 掘立柱建物—SB 炉穴—FP 土坑—SK 溝—SD 道路—SF
ピット—P 攪乱—K

(遺物) 土器—P 拓本土器—TP 土製品—DP 瓦—T 石器・石製品—Q 金属製品—M

(3) 遺構・遺物の実測図中の表示



● 土器 ○ 土製品 ☆ 瓦 □ 石器・石製品 △ 金属製品

(4) 遺構・遺物実測図の作成方法

- ① 各遺構の実測図は、原則として60分の1の縮尺で掲載した。ただし、竈は30分の1、溝・道路は200分の1とした。
- ② 遺物は原則として3分の1の縮尺にした。ただし、石器・石製品は3分の2、土製品は（支脚を除く）2分の1とした。

(5) 遺構・遺物の一覧表・観察表

- ① 住居跡の「主軸方向」は、竈を通る軸線を主軸とし、その主軸が座標北からみて、何度、どの方向にふれているかを、例えば「N-10°-E」のように表示した。竈を持たない住居跡は入口ピット等で判断し、手掛かりがない場合は南北に近い軸線を主軸と見なした。住居跡以外については長軸を主軸と見なした。
- ② 土器の計測値は、以下の記号で示した。単位はcmである。
口径—A 器高—B 底径—C 脚部径・高台径—D 脚部高・高台高—E つまみ径—F
つまみ高—G
- ③ 現存値は (), 推定値は [] を付して示した。

(6) 土層説明

現地での調査では、土層観察における色調の判定は『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著、日本色研事業株式会社、1967年）によっており、色相・明度・彩度も記録しているが、本書においては色調に関しては土色名のみを示した。したがって、隣接した土層が同一の土色名になることもある。

第2節 遺跡の概要

柴崎遺跡は、前述したように、すでに昭和62年度から平成元年度にかけて調査が実施され、報告もされているが、ここでは今回報告する平成4年度、及び平成5年度調査分について、簡単に概要を記しておく。

各年度毎の調査面積、及び発見・調査された遺構数は、次のとおりである。

調査年度		平成4年度		平成5年度		合計	備考
調査区		II区	III区	II区	III区		
調査面積 (㎡)		902	280	1,914	1,776	4,872	竪穴住居跡と溝は合計が合わないが、1遺構を2年度にわたって調査しているためである。
〃 (小計) (㎡)		1,182		3,690			
遺構	竪穴住居跡 (軒)	4	2	31	3	39	
	炉穴 (基)	—	—	5	—	6	
	土坑 (基)	3	1	9	3	16	
	溝 (条)	5	5	6	6	19	
	道路 (条)	—	—	2	1	3	

竪穴住居跡は、古墳時代から中世のものである。うち6～7世紀が8軒、8世紀が12軒、9～10世紀が12軒、12世紀以降が4軒、時期不明のものが3軒である。

炉穴は、おそらく縄文早期のもので、今回調査した遺構の中では最も古いものである。ただ、遺構は発見できなかったものの、ナイフ形石器をはじめ旧石器時代の遺物が表土等から出土している。

土坑・溝・道路は、時期が不明である。III区の溝の一部は中世のものと推定できる。

第3節 遺構と遺物

1 II(H4)区の遺構と遺物 (第17図, PL2)

II(H4)区は、当遺跡の西端部に位置している。遺跡全体としては花室川から入る谷津の周辺に立地していることは前述したが、本項で扱うII(H4)区は、むしろ花室川の低地を望む台地縁辺部に位置する。

II(H4)区では、竪穴住居跡4軒、炉穴1基、土坑3基、溝5条を調査した。

(1) 竪穴住居跡

第137号住居跡 (第5・6図, PL2)

位置 II(H4)区の北端近く、F4_{g1}区に位置する。

規模と平面形 南西コーナー付近が攪乱されているが、平面形等の推定復元はできる。主軸長・中央部幅とも5.13mでほぼ方形であるが、北西壁4.80mに対し、南東壁〔5.50〕mと台形に近い形である。

主軸方向 N-35°-W

壁 壁高は6~10cmである。ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 認められない。

床 ほぼ平坦である。中央部は踏み固められ、堅緻である。

ピット 5か所(P₁~P₅)。P₁~P₄は、径50~75cm、深さ35~50cm程の円形ないし不整形円形ピットで、2.65m程の柱間で正方形に並ぶ。位置や配置状況から見て、支柱穴である。P₅は円形で、径50cm、深さ40cmで、南東壁側立ち上がりやや緩やかである。形状や南東壁近くの中央部という位置から、出入口施設に伴うピット(以下、「入口ピット」と略称する)と考えられる。

竈 北西壁中央部に砂まじりの粘土で構築している。掘り方は、壁を1mにわたり、三角形に、奥行き45cm程掘り込んでいる。左右の袖の下部が残存している。火床は、手前半分が攪乱を受け確認できないが、奥半分が焼けて赤変・硬化している。煙道の傾斜は極めて緩やかである。

竈土層解説

- 1 にぶい赤褐色 焼土小ブロック微量・粒子少量, 粘土粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土小ブロック少量・粒子中量, 粘土粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土小ブロック・粒子中量, 炭化粒子微量

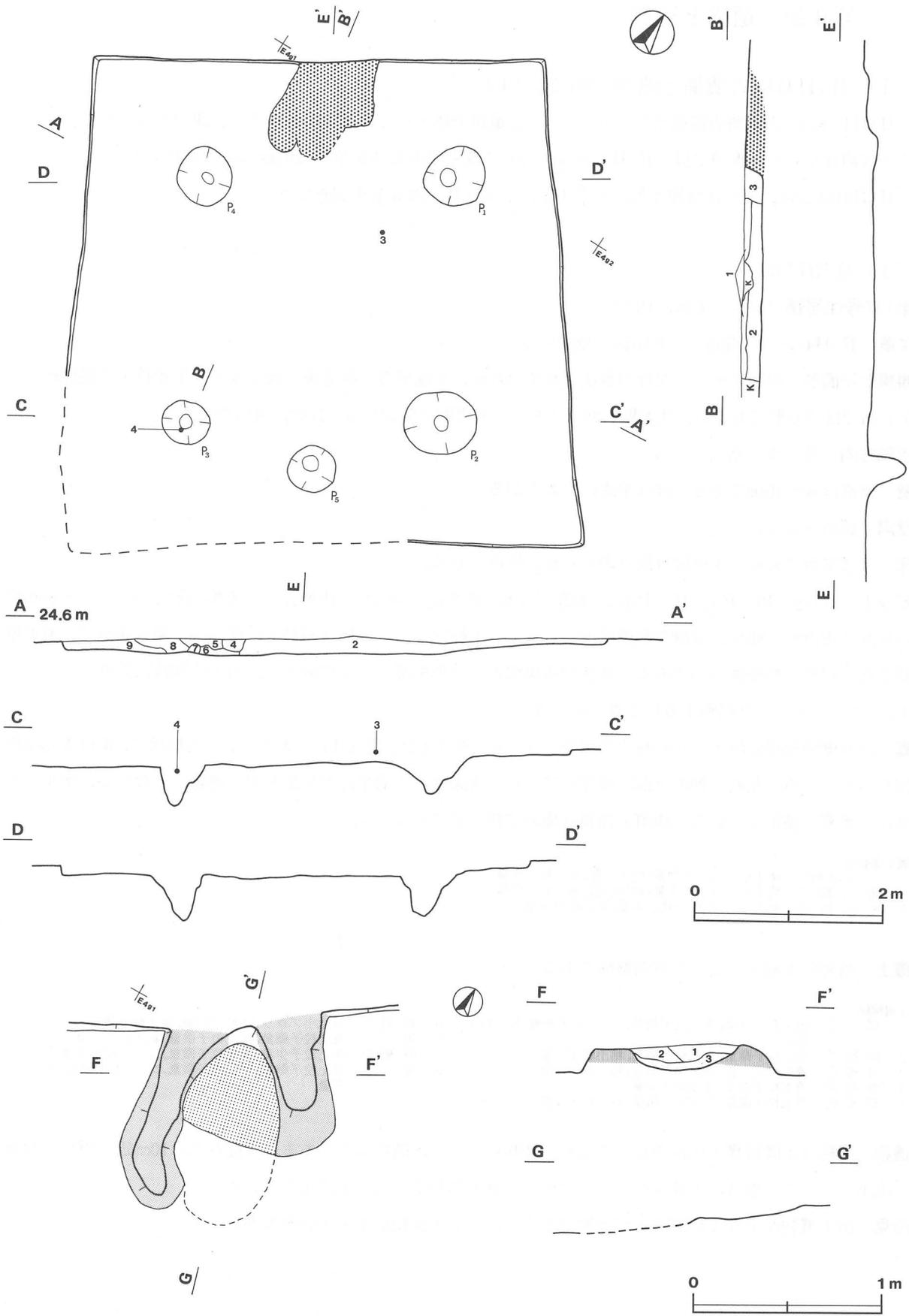
覆土 暗褐色土層を主とした自然堆積である。

土層解説

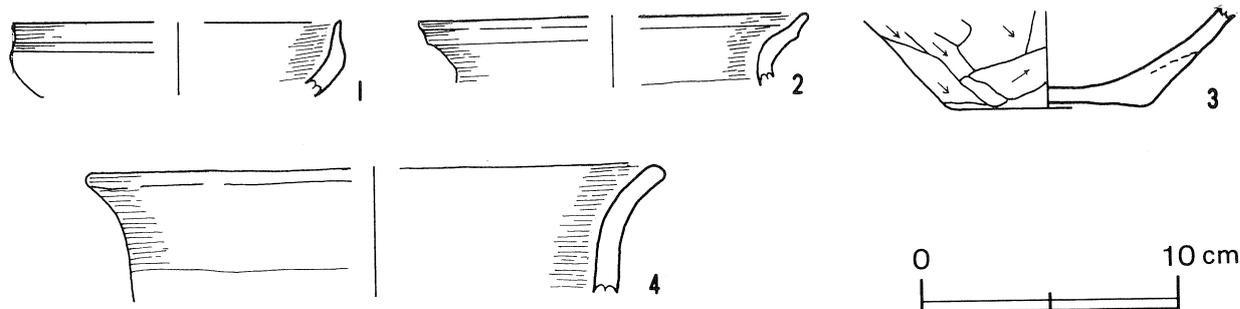
- | | |
|--------------------------------------|--------------------------------------|
| 1 褐色 焼土粒子少量, 炭化粒子微量, ローム粒子多量, 粘土粒子微量 | 6 暗褐色 焼土小ブロック・粒子微量, 炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 焼土粒子微量, 炭化粒子微量, 粘土粒子少量 | 7 褐色 焼土粒子微量, 炭化粒子微量, 粘土粒子中量 |
| 3 暗褐色 焼土粒子少量, 炭化粒子微量, 粘土粒子中量 | 8 暗褐色 焼土粒子少量, 炭化粒子微量, ローム粒子少量 |
| 4 暗褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子少量 | 9 褐色 焼土粒子微量, 炭化粒子微量, ローム粒子多量, 粘土粒子微量 |
| 5 暗褐色 焼土粒子微量, 炭化粒子微量, 粘土粒子少量 | |

遺物 遺物は土師器甕・坏が中心であるが、極端に少なく、破片のみである。床面からは10cm近く浮いた状態で出土している。甕は、大破片がピット(P₃)に落ち込むようにして出土している。

所見 出土遺物が少なく時期決定が困難であるが、一応7世紀前半の住居跡と考えておく。



第5図 第137号住居跡・竈実測図



第6図 第137号住居跡出土遺物実測図

第137号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土, 色調, 焼成	備考
第6図 1	坏 土師器	A [12.6] B (2.9)	体部と口縁部の間に稜を持つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面ヘラ削り。	砂粒・スコリア 明赤褐色 普通	P9 5% 覆土中
2	甕 土師器	A [15.0] B (2.9)	口縁部破片。頸部はくびれ、口縁部は外反する。口唇部は外上方へつまみ上げる。	口縁部内・外面ヨコナデ。	砂粒・雲母・スコリア、にぶい黄橙色、普通	P11 5% 覆土中
3	甕 土師器	B (3.8) C 7.2	底部破片。やや上げ底状の平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部・体部外面ヘラ削り。内面ナデ	砂粒・長石・石英・雲母、橙色 普通	P12 10% 中央部覆土中層
4	甗 土師器	A [22.5] B (5.0)	口縁部破片。体部はやや外傾する。口縁部は外反する。	口縁部内・外面ヨコナデ。調整雑。	砂粒・雲母・スコリア、橙色 普通	P10 5% ピット(P3)中

第233号住居跡 (第7・8図, PL3・41)

位置 II (H4) 区の北端近く, E3f9区に位置する。

規模と平面形 主軸長3.51m, 幅3.64mで, わずかに横長の不整形である。

主軸方向 N-3°-W

壁 壁高は4~8cmである。残存部分がわずかなため明確ではないが, ほぼ垂直に立ち上がるようである。

壁溝 認められない。

床 ほぼ平坦で, 中央部分は踏み固められ, 堅緻である。

ピット 1か所(P1)。径15~18cmの不整形円で深さは8cm程である。小さいが, 南壁近くの中央部という位置から見て, 入口ピットであろう。

竈 北壁中央部に砂まじりの粘土を使用して構築している。掘り方は, 壁を幅95cmにわたり, 奥行き65cm程掘り込んでいる。西袖の一部のみが残存している。火床部の凹みは極めて緩やかである。火床は焼けて赤変・硬化している。赤変の部位は, 壁の線から2/3程外に出ている。煙道の立ち上がりは極めて緩やかである。

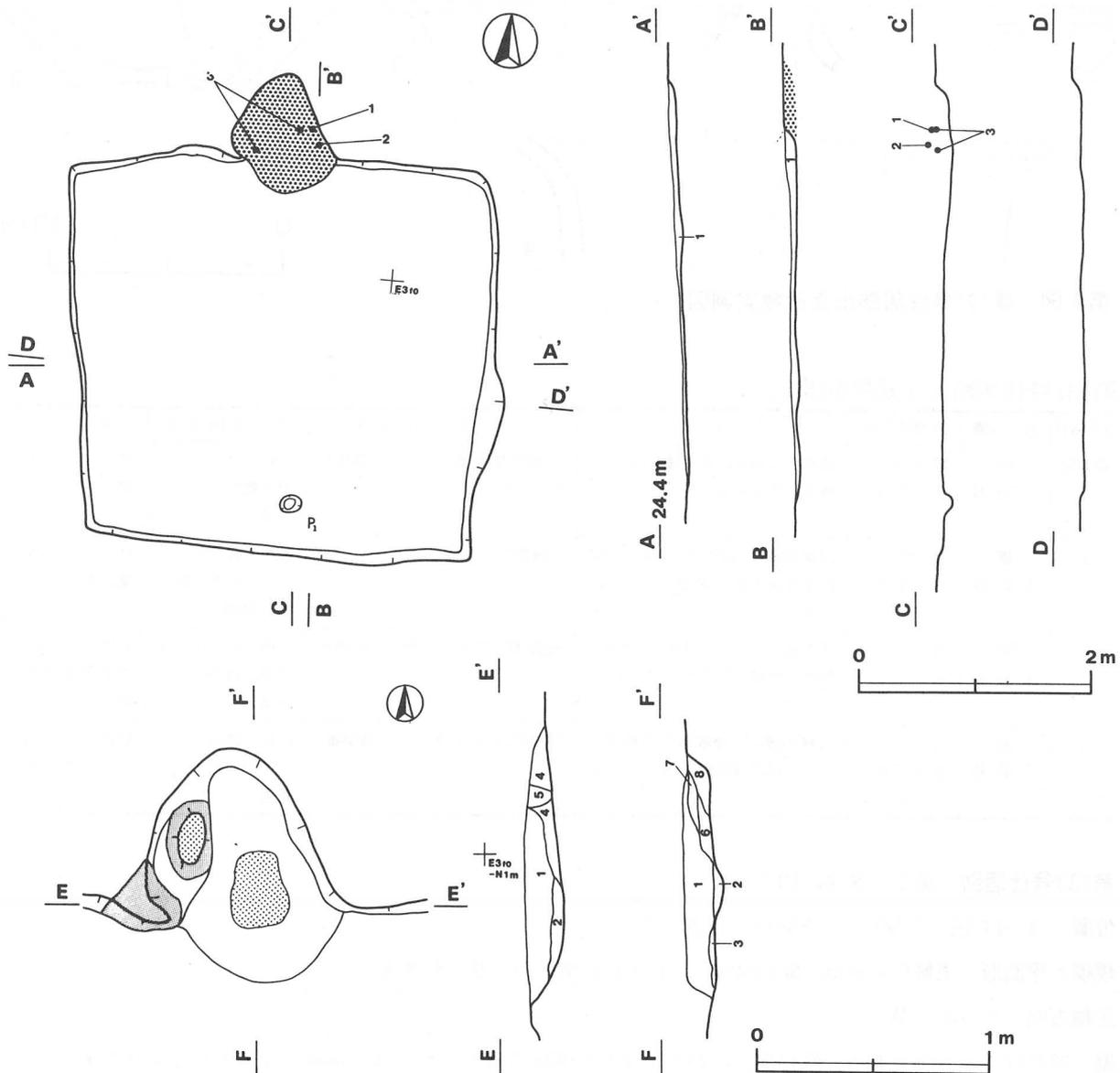
竈土層解説

1 暗赤褐色	焼土小ブロック微量・粒子少量, 炭化物少量・粒子中量	5 褐色	焼土粒子微量, 炭化粒子微量, ローム粒子多量, 粘土粒子微量
2 暗赤褐色	焼土粒子中量, 炭化粒子中量, 粘土粒子微量	6 にぶい赤褐色	焼土小ブロック微量・粒子少量
3 暗赤褐色	焼土小ブロック微量・粒子少量, 炭化粒子少量	7 にぶい赤褐色	焼土小ブロック微量・粒子少量, 炭化物中量・粒子少量
4 にぶい赤褐色	焼土小ブロック微量・粒子中量, 炭化粒子中量, 粘土粒子少量	8 暗赤褐色	焼土中ブロック微量・小ブロック少量・粒子中量, 炭化粒子微量

覆土 暗褐色土層1層で, 自然堆積である。

土層解説

1 暗褐色	焼土粒子少量, 炭化粒子微量, 粘土粒子微量
-------	------------------------



第7図 第233号住居跡・竈実測図

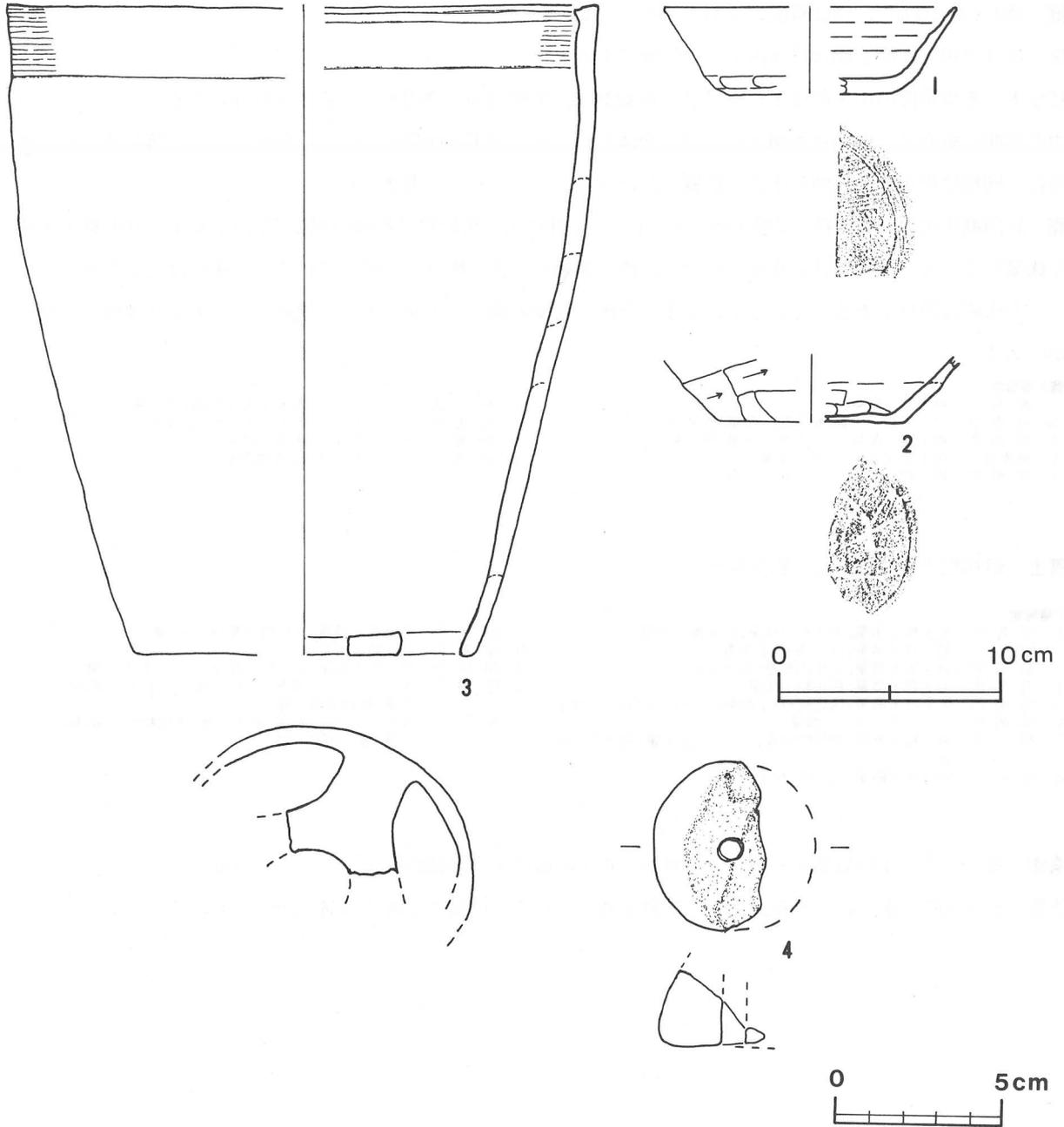
遺物 竈内から比較的多くの土器片（土師器甕・須恵器坏ほか）が出土した。その他からの出土は極めて少ない。覆土中から、紡錘車の破片が出土している。

所見 出土遺物等から、9世紀前葉の住居跡と考えられる。

第233号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土,色調,焼成	備考
第8図 1	坏 須恵器	A [13.0] B 4.0 C [7.2]	平底。体部～口縁部は外傾してほぼ直線的に立ち上がる。	口縁部～体部内・外面ヨコナデ。体部下位外面ヘラ削り。底部ヘラ削り。	砂粒・スコリアにぶい黄橙色普通	PL41-1 P26 20% 竈内
2	甕 土師器	B (3.1) C [8.4]	平底。体部は大きく外傾して立ち上がる。	体部下位外面ヘラ削り。内面雑な指ナデ。底部木葉痕。	砂粒・スコリア・石英,にぶい橙色普通	P28 5% 竈内
3	甕 須恵器	A [26.6] B 29.6 C [15.2]	平底に円形と半円形の開孔部5か所(推定)を持つ。体部下位～中位はほぼ直線的,上位でわずかに内彎する。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・スコリア 橙色 土師器的	P29 30% 竈内

図版番号	器種	計測値				出土状況	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
4	紡錘車	(径)5.1	—	(2.3)	(28.1)	覆土中	PL41-2, DP 1, 土製



第 8 図 第233号住居跡出土遺物実測図

第234号住居跡 (第9・10区, PL3・41)

位置 調査区の北東部, E3h9区に位置する。南西側に第2号溝が重複する。

規模と平面形 溝の重複により, 全体が明らかではないが, 平面形は方形を示すと推定される。主軸長3.34m, 幅は現存長2.71mで, 3.3mは越えない規模である。

主軸方向 N-44°-W

壁溝 幅約20cm, 深さ約5cmで全周する。

壁 壁高10~15cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

床 ほぼ平坦で, 中心部は踏み固められ堅緻である。

ピット 南東壁際の中央部に1か所(P1)。長軸30cm, 短軸22cmの楕円形で, 深さは17cmである。立ち上がりは中心部側が垂直で, 壁側は外傾するので, 全体として南東壁側に傾斜している。底面は2段に落ち込むが, 2段目も同様に南東壁側に傾斜する。位置・形状から, 入口ピットと考えられる。

竈 北西壁中央部に竈を持つ。壁を幅1mにわたり, 外側へ三角形に約50cm程掘り込み, 砂まじりの粘土で竈を構築している。両袖だけが残存しており, 特に西袖の内面が焼けて赤変している。火床はほとんど凹みがない。火床面は焼けて赤変しているが, 赤変した部位は壁の線より内側である。煙道の立ち上がりは極めて緩やかである。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|----------------------|-------|----------------------|
| 1 暗褐色 | 焼土粒子微量 | 6 褐色 | ローム粒子多量, 粘土粒子微量, 礫少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量, 粘土粒子微量, 礫微量 | 7 暗褐色 | ローム粒子中量, 粘土粒子微量, 礫微量 |
| 3 暗褐色 | 焼土粒子微量, ローム粒子中量, 礫微量 | 8 暗褐色 | ローム粒子中量, 礫微量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土小ブロック・粒子中量 | 9 暗褐色 | ローム粒子中量, 礫極微量 |
| 5 暗褐色 | 焼土粒子微量, ローム粒子中量 | | |

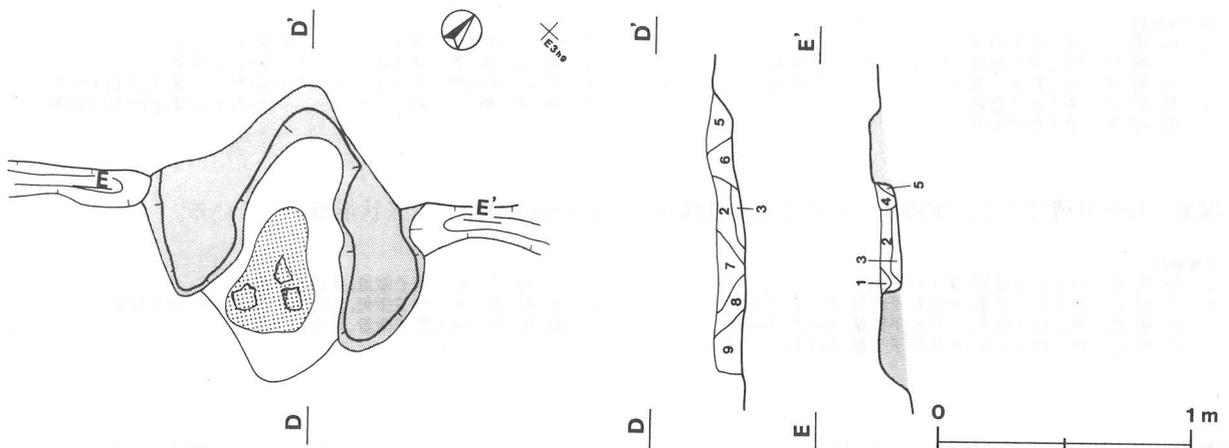
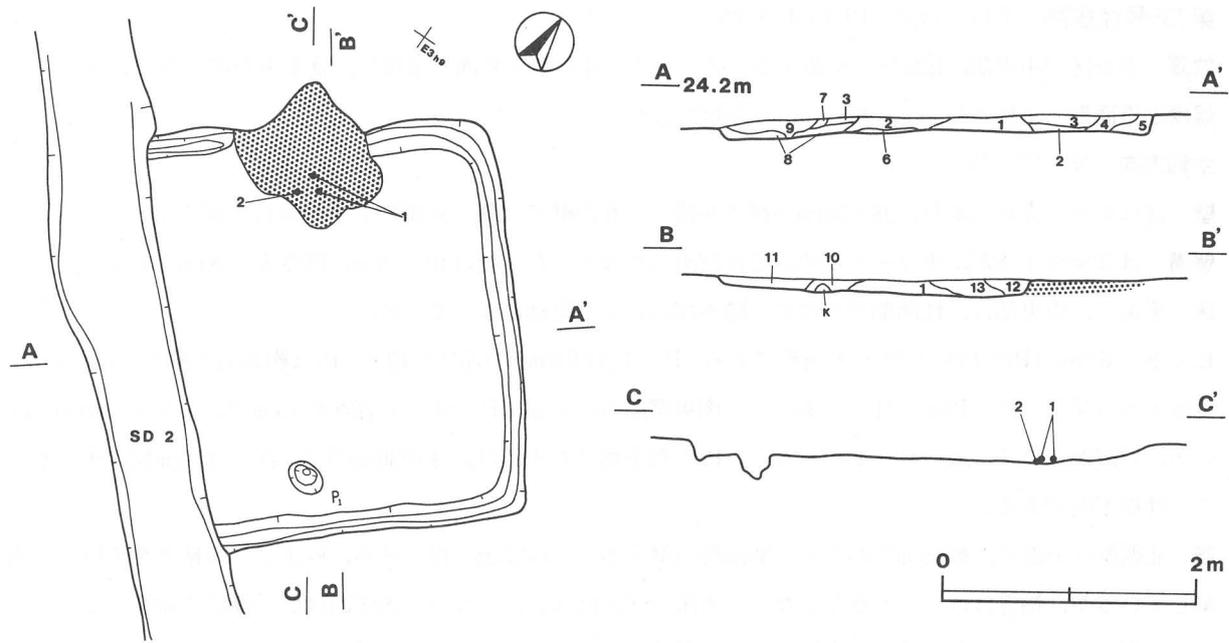
覆土 暗褐色土層を主とした自然堆積である。

土層解説

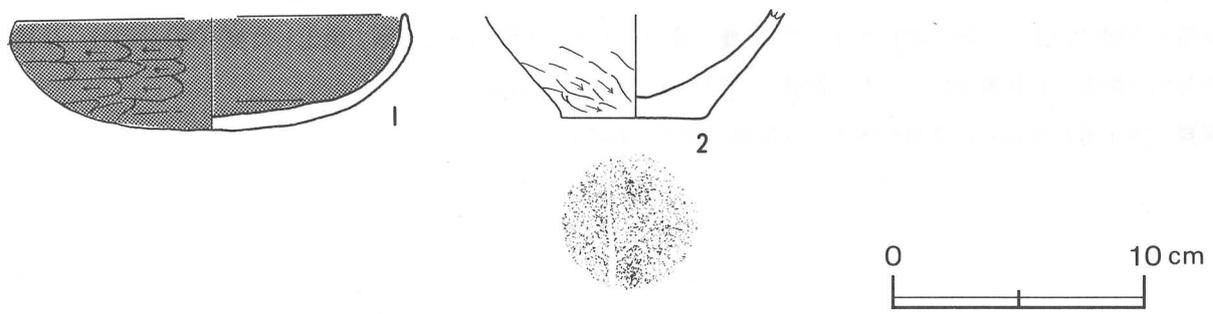
- | | | | |
|-------|--------------------------------|--------|--|
| 1 暗褐色 | 焼土粒子微量, 炭化粒子微量, 粘土粒子少量 | 9 暗褐色 | 焼土粒子微量, 炭化物少量・粒子微量 |
| 2 暗褐色 | 焼土粒子微量, 炭化物・粒子微量 | 10 暗褐色 | 焼土粒子微量 |
| 3 暗褐色 | 焼土粒子微量, 炭化物微量・粒子少量 | 11 暗褐色 | 焼土粒子微量, 炭化粒子微量, ローム粒子中量 |
| 4 暗褐色 | 焼土粒子微量, 炭化粒子微量 | 12 暗褐色 | 焼土小ブロック微量・粒子少量, 炭化粒子少量, 粘土粒子多量, 竈材崩壊土層 |
| 5 暗褐色 | 焼土粒子微量, 炭化物・粒子微量, ローム小ブロック微量 | 13 暗褐色 | 焼土小ブロック微量・粒子少量, 炭化粒子少量, 粘土粒子少量, 竈材崩壊土層 |
| 6 暗褐色 | ローム小ブロック微量 | | |
| 7 褐色 | 焼土粒子微量, 炭化物微量, ローム粒子中量, 粘土粒子微量 | | |
| 8 暗褐色 | 焼土粒子微量, 炭化物・粒子微量 | | |

遺物 覆土中から土師器甕片が若干と, 竈内から土師器坏・小形甕の破片が出土している。

所見 出土遺物等から, 7世紀前半の住居跡と考えられる。重複する第2号溝は後世のものである。



第9図 第234号住居跡・竈実測図



第10図 第234号住居跡出土遺物実測図

第234号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土, 色調, 焼成	備考
第10図 1	坏 土師器	A [15.4] B 4.5	丸底。体部は内轡して立ち上がり, 鈍い稜を持って口縁部に移行する。口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部～底部外面ヘラ削り。内・外面黒色処理。	砂粒・スコリア・雲母, 灰褐色 普通	PL41-3 P30 40% 竈内
2	小形甕 土師器	B (4.3) C 5.6	平底。体部は内轡気味に外傾して立ち上がる。	体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ調整。底部に木葉痕。	砂粒・雲母・長石・石英, 橙色 普通	P31 5% 竈内

第235号住居跡 (第11～14図, PL4・41・42)

位置 調査区の中央部, E3f6区に位置する。北コーナー部に第3号溝が重複し, 壁上半が切られている。

規模と平面形 主軸長6.36m, 幅6.16mの方形である。

主軸方向 N-45°-W

壁 ほぼ垂直に立ち上がり, 38～56cmの高さを持つ。北西壁では竈の両側で上半の傾斜が緩くなっている。

壁溝 ほぼ全周するが, 東コーナー部分では認められなかった。幅は10～20cm, 深さ5～8cmである。

床 平坦で, 中央部は, 柱間部分を含め, 踏み固めにより堅緻になっている。

ピット 6か所(P₁～P₆)。いずれも円形である。P₂～P₄は約40cmの深さを持ち, P₁は約20cmの深さしかないが, 位置等から見て, P₁～P₄が支柱穴であろう。南東壁際の中央部にP₅がある。径が約45cmで, 深さは約20cmと浅いが, 位置から見て, 入口ピットであろう。P₅の右手奥にあるP₆は, 径が30cm弱で, 深さは10cm程の浅いもので, 性格不明である。

竈 北西壁中央部に, 幅65cmにわたり, 30cm程(壁下半からは55cm)掘り込み, 砂まじりの粘土を使用して構築しているが, 袖等はほとんど残存しない。火床の凹みはほとんどない。火床面は広く焼けて赤変している。その位置は, ほとんど壁の線より内側である。煙道の立ち上がりは48°である。

竈土層解説

1 暗褐色 焼土粒子微量	6 におい赤褐色 焼土小ブロック微量・粒子中量
2 暗褐色 焼土粒子微量, ローム小ブロック微量	7 暗赤褐色 焼土中ブロック少量・粒子微量
3 暗褐色 焼土粒子少量, ローム小ブロック微量	8 におい赤褐色 焼土小ブロック微量・粒子少量, 粘土粒子微量
4 黒褐色 焼土粒子微量	9 暗赤褐色 焼土小ブロック少量・粒子中量, 粘土粒子微量
5 暗褐色 焼土粒子微量	

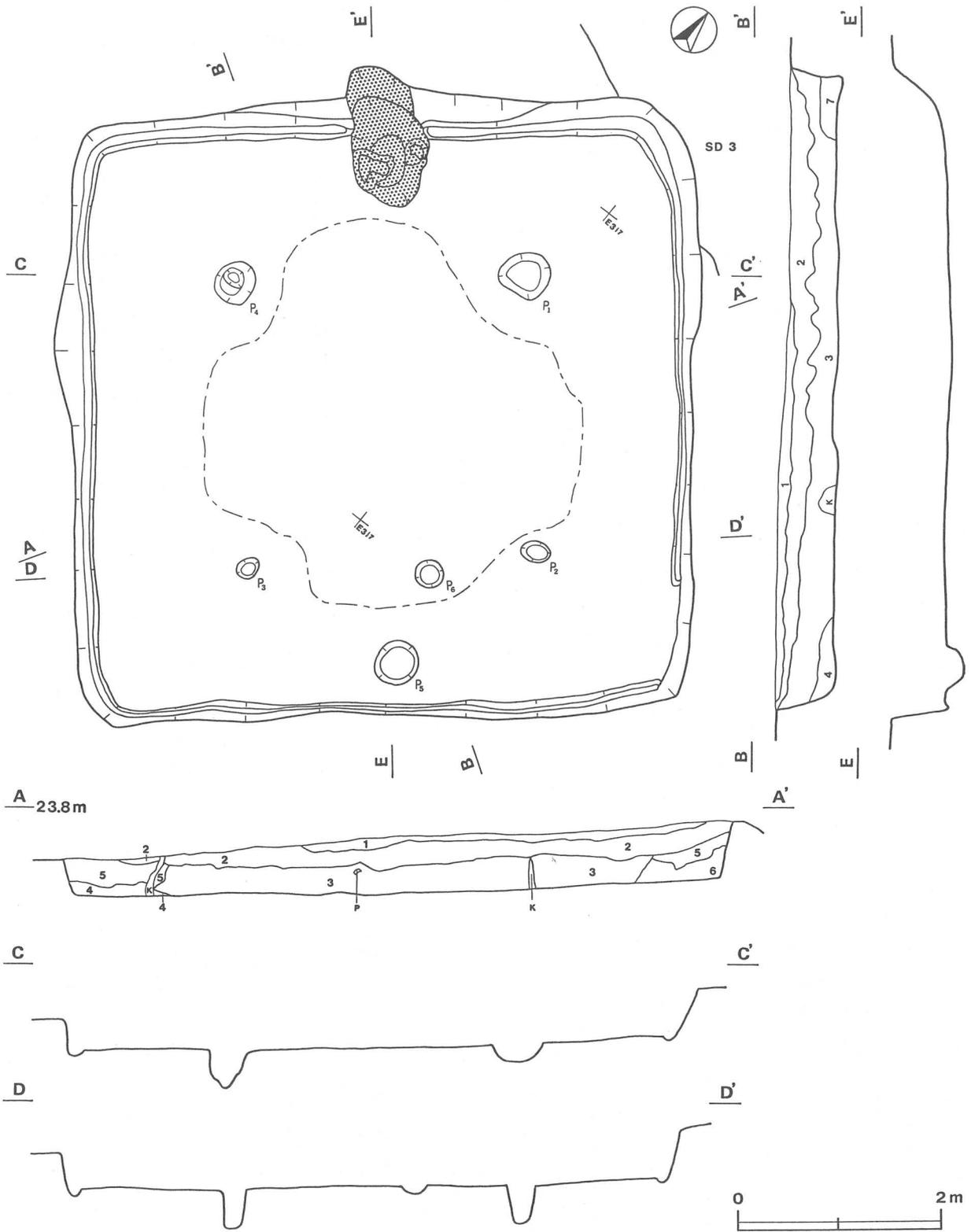
覆土 自然堆積である。壁際にいわゆる三角堆積をし, その後全体にレンズ状堆積をしている。

土層解説

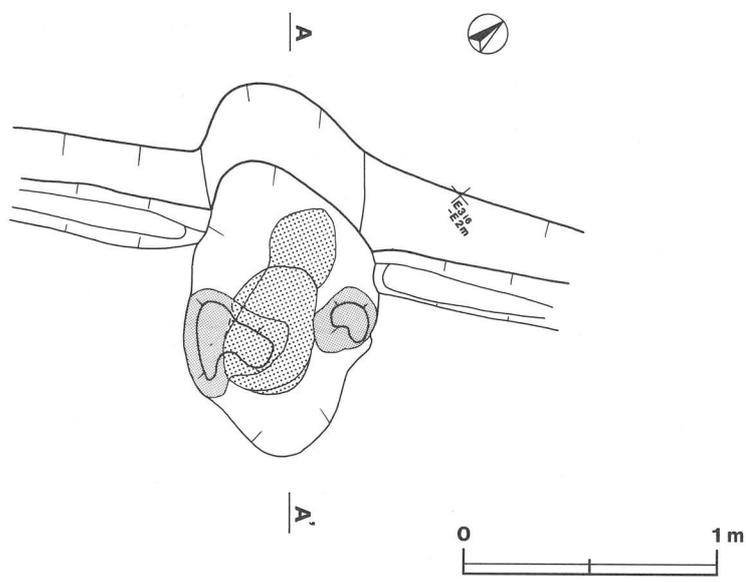
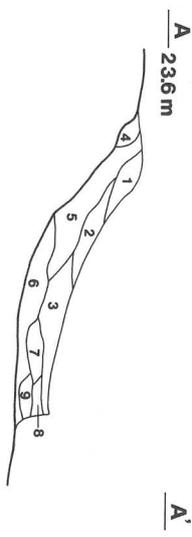
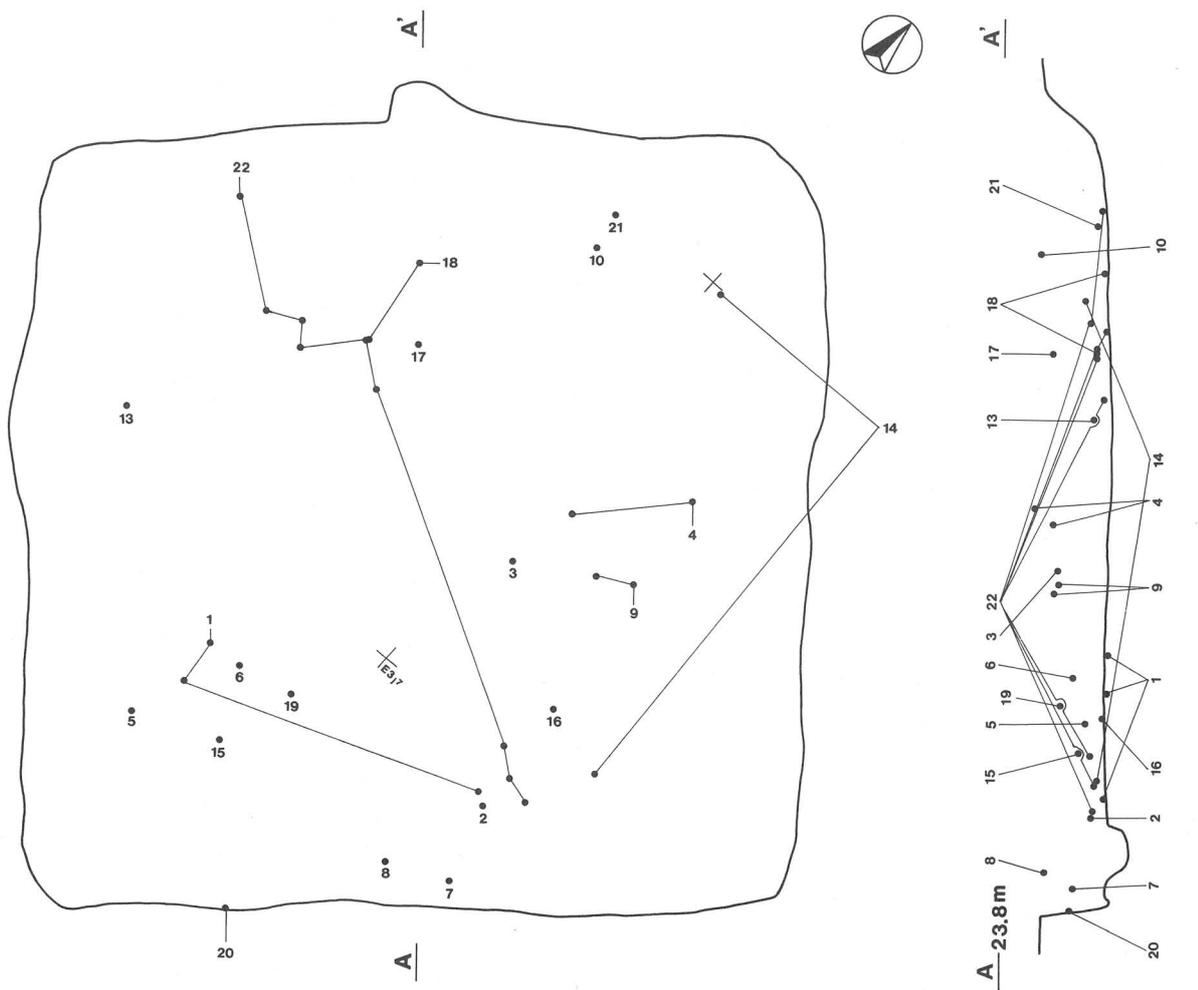
1 暗褐色 焼土粒子微量, 炭化粒子微量	5 暗褐色 焼土粒子微量, 炭化粒子微量
2 黒褐色 焼土粒子微量, 炭化粒子微量, 粘土粒子微量	6 暗褐色 焼土粒子微量, 炭化粒子微量, 粘土粒子微量
3 暗褐色 焼土粒子微量, 炭化粒子微量, 粘土粒子微量	7 暗褐色 焼土粒子微量, 炭化粒子微量
4 暗褐色 焼土粒子少量, 炭化粒子少量, 粘土粒子中量	

遺物 住居跡全体から多量の土器片が出土している。しかし混入と考えられる遺物も多く, 覆土上層からのものはもとより, 床面直上でも混入と考えざるをえない遺物もある。本住居跡に伴う遺物としては, 南部・南西部覆土下層で出土した坏(第13図1・2), 竈と北コーナーの中間の覆土下層で出土した甕(第14図21), 住居内各所に散乱した状態で出土した小形甕(同22)などが考えられる。

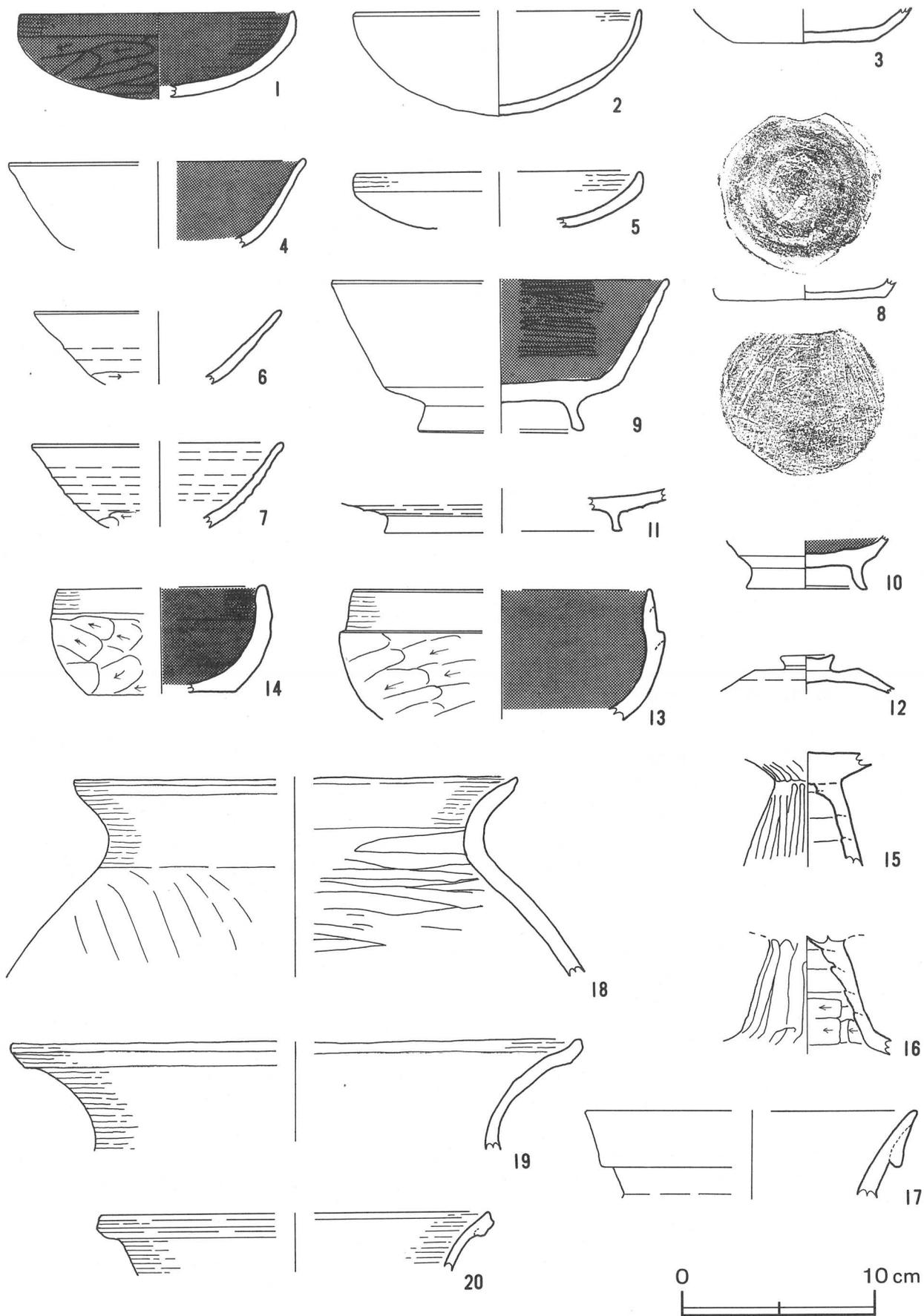
所見 出土遺物等から, 7世紀後半の住居跡と考えられる。



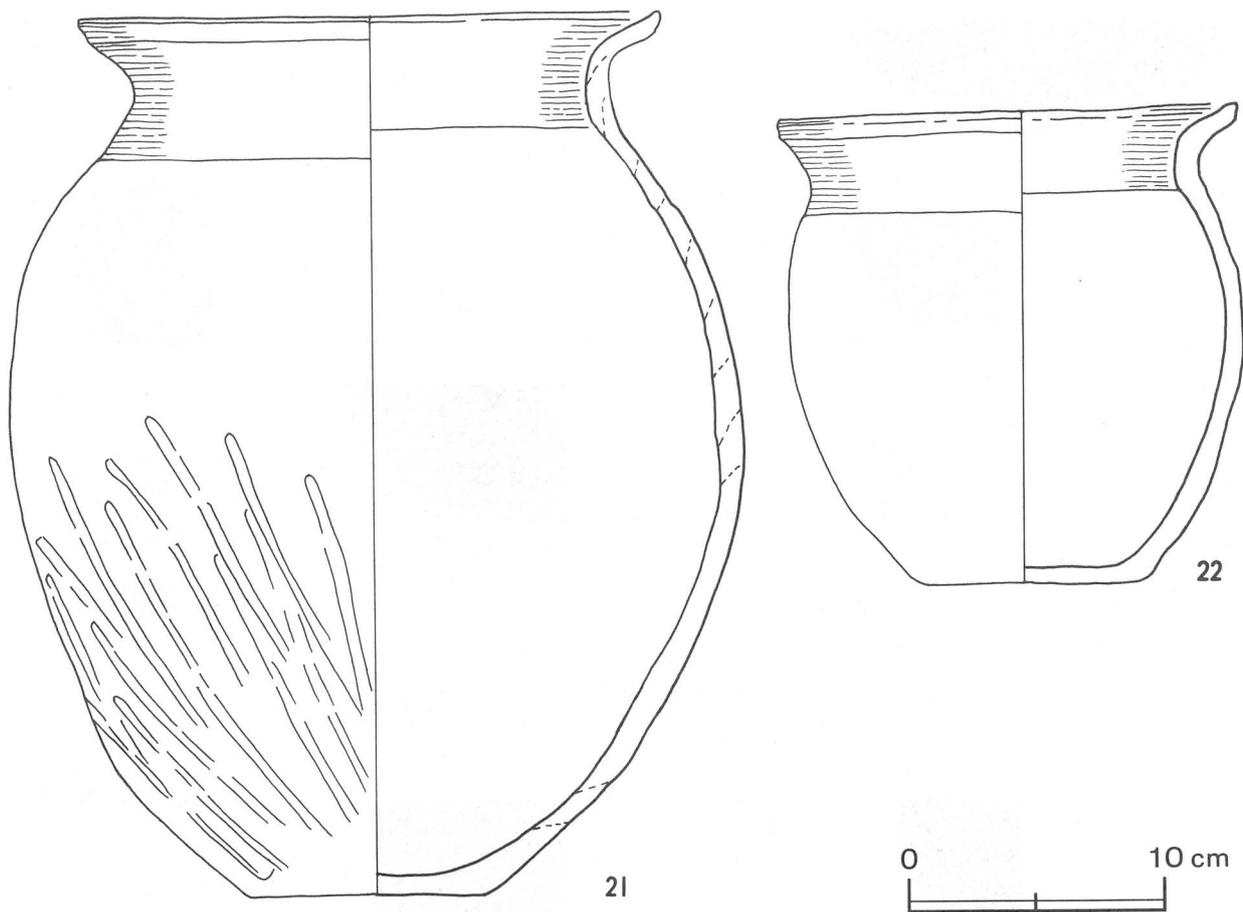
第11图 第235号住居跡実测图



第12图 第235号住居跡出土遺物位置図・竈実測図



第13图 第235号住居跡出土遺物実測図(1)



第14図 第235号住居跡出土遺物実測図(2)

第235号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土,色調,焼成	備考
第13図 1	坏 土師器	A 14.5 B 3.5	丸底。体部は内彎して立ち上がり,鈍い稜を持って口縁部に移行する。口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面底部ヘラ削り。体部～底部内面ナデ調整。内・外面雑な黒色処理。	砂粒・スコリア・石英・雲母, 灰褐色, 普通	PL41-4 P33 60% 南西部覆土下層
2	坏 土師器	A [15.0] B (5.6)	丸底。体部は内彎して立ち上がり,稜を持たずに口縁部へ移行する。	口縁部内面にヨコナデの痕跡あり。体部外面～底部ヘラ削り。体部～底部内面ナデ調整。	砂粒・スコリア・長石, にぶい橙色 普通	P34 15% 南部覆土中層
3	坏 土師器	B (1.8) C 7.2	平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部～底部内面ヘラ磨き。底面回転ヘラ切り, のち静止ヘラ削り。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P37 40% 中央部覆土上層
4	坏 土師器	A [15.6] B (4.6)	体部は内彎しながら立ち上がり,口縁部はわずかに外反する。	内面ヘラ磨き・黒色処理。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	P35 25% 東部覆土上層
5	坏 土師器	A [15.0] B (3.0)	体部は内彎しながら緩やかに立ち上がり,にぶい稜を持って口縁部に移行する。口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部内面ナデ調整。	砂粒・スコリア・雲母, 灰黄褐色 普通, 須恵質	P39 10% 南西部覆土中層
6	坏 土師器	A [12.8] B (3.9)	体部は外傾してほぼ直線的に立ち上がり,口縁部に移行する。	口縁部～体部内・外面ヨコナデ。体部下位外面ヘラ削り。	砂粒・スコリア にぶい黄褐色 普通	P40 10% 南西部覆土中層
7	坏 須恵器	A [13.2] B (4.5)	体部は内彎しながら,外傾して立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部～体部内・外面ヨコナデ。体部下位外面ヘラ削り。	砂粒・雲母・長石・石英, 灰白色 普通	P38 20% 南壁際覆土中層

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土,色調,焼成	備 考
8	坏 須恵器	B (1.0) C 8.7	底部破片。平底。	底面ヘラ削り。	砂粒・スコリア 灰黄褐色 普通	PL42-1 P42 40% 南壁際上層 内・外面にヘラ書き「子方」?
9	高台付坏 土師器	A [17.6] B 8.1 D [8.8] E 1.5	平底で「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は外傾して直線的に立ち上がる。	内面黒色処理・ヘラ磨き。	砂粒・スコリア 内面黒褐色 外面浅黄橙色 普通	P43 25% 東部覆土上層
10	高台付坏 土師器	B (2.8) D 6.4 E 1.3	平底で「ハ」の字状に開く高台が付く。やや小形。	内面黒色処理。	砂粒・雲母・石英 橙色・内面黒褐色 普通	P45 25% 北東部覆土上層
11	高台付盤 須恵器	B (2.2) D [12.5] E 0.9	平底に直立に近い高台が付く。体部は大きく外傾する	内・外面ヨコナデ。高台貼り付け。	砂粒・雲母 灰黄褐色 普通	P47 10% 覆土中
12	蓋 須恵器	A [9.0] B (2.1) F 2.9 G 0.9	天井部に平坦面を持つ。偏平なつまみが付く。	天井部平坦面～体部上半回転ヘラ削り。体部下半・内面ヨコナデ。	砂粒・石英 灰黄褐色 普通	P48 10% 覆土中
13	碗 土師器	A [15.4] B (6.9)	体部は内彎して立ち上がり,明瞭な稜を持って口縁部に移行する。口縁部は直立する。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面ヘラ削り。内面黒色処理	砂粒・スコリア・ 雲母,にぶい橙色・ 内面黒褐色,普通	P49 5% 西部覆土中層
14	小形鉢 土師器	A [11.0] B 5.7 C [7.8]	平底。体部は内彎して立ち上がる。口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面雑なヘラ削り。内面黒色処理。	砂粒・スコリア・ 石英,浅黄橙色・ 内面黒色,普通	PL41-5 P50 50% 東部覆土中層
15	高 坏 土師器	B (6.1) E (4.6)	丸底に脚が付く。脚部上半残存。やや内彎しながら下方に広がる。	坏部内面ナデ調整。坏～脚部外面ヘラナデ。脚部内面には粘土紐積み上げ痕を残す。	砂粒・スコリア・ 石英・雲母,橙色 普通	PL41-7 P51 30% 南西部覆土中層
16	高 坏 土師器	B (6.5)	脚部破片。上～中位でわずかに内彎気味に下方に広がり,下位でラッパ状に大きく開く。	上～中位外面ヘラ削り。下位外面ヘラナデ。上位内面には粘土紐積み上げ痕を残す。中位内面ヘラ削り。	砂粒・スコリア・ 石英,橙色 普通	PL41-8 P52 30% 南東部床面直上
17	壺 土師器	A [17.4] B (4.7)	口縁部破片。やや外反しながら外傾して立ち上がる。複合口縁。	調整不明。	砂粒・スコリア・ 雲母,橙色 やや不良	P54 5% 中央部覆土上層
18	甕 土師器	A [23.2] B (10.5)	体部上位は内傾し,口縁部はくびれた頸部から丸みを持って外反。口唇部は僅かに外上方につまみ上げる。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面ヘラナデ。体部内面指ナデ。	砂粒・石英・雲母 にぶい黄橙色 普通	P56 10% 竈前方覆土下層
19	甕 須恵器	A [30.0] B (5.7)	口縁部破片。口縁部は大きく外反する。口唇部は外側に肥厚し,端部を外上方につまみ上げる。	外面～口唇部内面ヨコナデ。	砂粒・雲母 灰白色 普通	P61 5% 南西部覆土上層
20	甕 須恵器	A [20.4] B (3.2)	口縁部破片。口縁部は外反する。口唇部を外側に肥厚させ,端部は上方につまみ上げる。	内・外面ヨコナデ。	砂粒・石英・雲母 明褐色 普通,土師器的	P62 5% 南壁際覆土中層
第14図 21	甕 土師器	A 22.7 B 35.0 C 9.1	平底。体部中位に最大径を持つ。頸部～口縁部は丸みを持って外反。口縁端部は外上方につまみ上げる。	口縁部～頸部内・外面ヨコナデ。体部内・外面ナデ調整。体部中～下位ヘラナデ。	砂粒・スコリア・ 雲母,にぶい褐色 普通	PL42-2 P55 80% 北東部覆土下層
22	小形甕 土師器	A 17.7 B 19.1 C 9.0	平底。体部中位やや上に最大径を持つ。頸部～口縁部は丸みを持って外反。口縁端部外上方につまみ上げ。	口縁部～頸部内・外面ヨコナデ。体部内・外面ナデ調整。体部下位外面ヘラナデ。	砂粒・石英・雲母 にぶい橙色 普通	PL41-6 P58 75% 各所覆土下層

(2) 炉穴

第6号炉穴 (第15図, PL5)

位置 II (H4) 区の中央部, E3c7区に位置する。

規模と平面形 径1.02～1.08mの円形で, 深さは10cmである。

底面と壁 底面は緩やかな皿状をなし, 壁は底面から湾曲しながら (内稜を持たず) 立ち上がる。

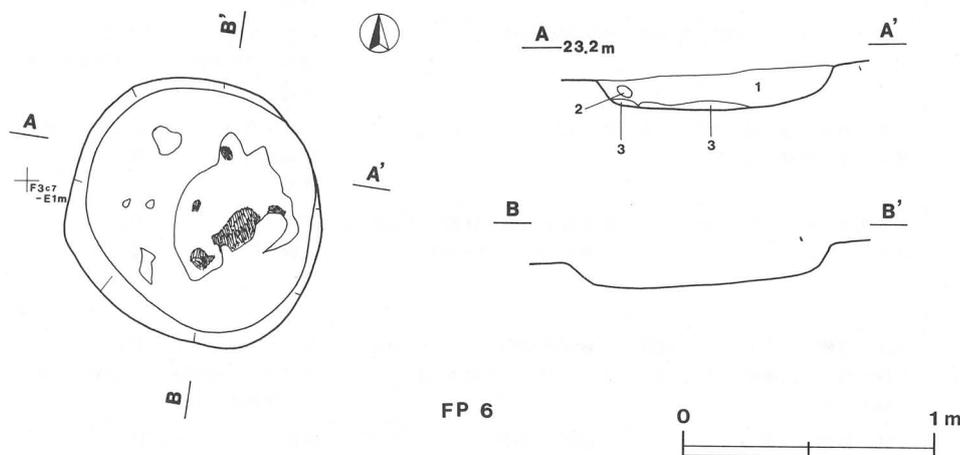
覆土 底面には焼土層が堆積し、その上に灰褐色土層が自然堆積する。

土層解説

- 1 灰褐色 焼土小ブロック少量・粒子多量,炭化物少量・粒子中量,粘土粒子中量
- 2 にぶい黄褐色 焼土粒子微量,炭化粒子微量,粘土粒子多量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子多量,炭化粒子少量

遺物 出土していない。

性格 覆土の状況・形状・類例等から、縄文時代早期の炉穴と考えられる。



第15図 第6号炉穴実測図

(3) 土坑

第1号土坑 (第16図, PL5)

II (H4) 区の北部, E3g9区に位置する。径0.69~0.75mの円形で、深さは0.25mである。底面はほぼ平坦であるが、中央部にわずかな凹みがある。壁は約70°で立ち上がる。覆土は、褐色ないし暗褐色土の自然堆積で、しまっている。遺物は出土していない。時期・性格等は不明である。

土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子微量,炭化粒子微量,粘土粒子微量
- 2 明黄褐色 ローム粒子多量
- 3 褐色 炭化粒子微量,ローム粒子多量

遺物 出土していない。

所見 時期・性格等は不明である。

第3号土坑 (第16図, PL5)

II (H4) 区の南西部, F3c4区に位置する。径約0.65mの円形で、深さは22cmである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は、褐色ないし暗褐色土の自然堆積で、しまっている。遺物は出土していない。時期・性格等は不明である。

土層解説

- 1 褐色 焼土粒子微量,ローム粒子多量,粘土小ブロック少量・粒子中量
- 2 暗褐色 焼土粒子微量,ローム粒子多量,粘土粒子少量

遺物 出土していない。

所見 時期・性格等は不明である。

第4号土坑 (第16図)

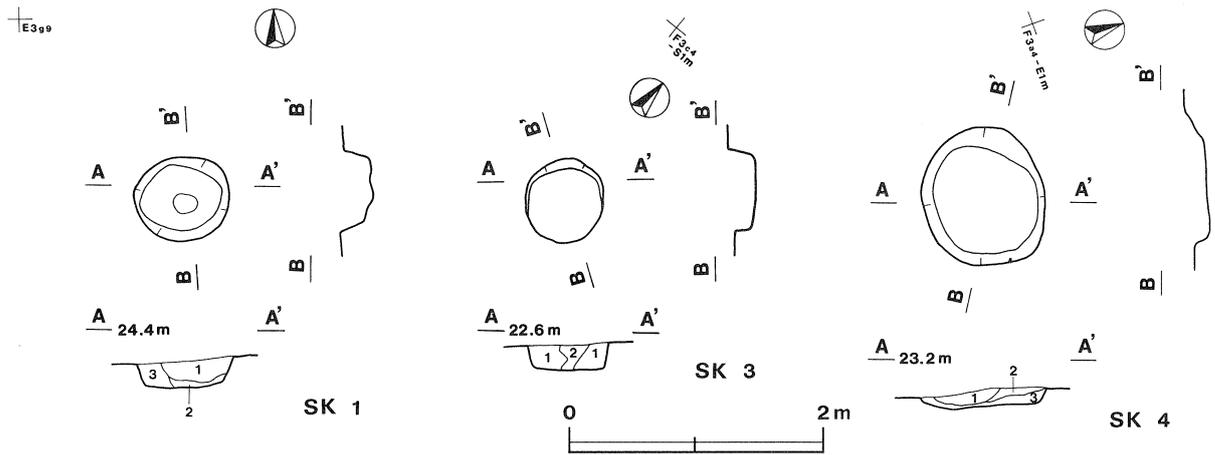
II (H4) 区の中央部西寄り, F3a4区に位置する。長径1.11m, 短径0.96mの楕円形で, 主軸方向はN-75°-W, 深さは13cmである。底面は平坦で, 壁は外傾する。部分的には緩やかな立ち上りを示す。覆土は, 暗褐色ないし黒褐色土の自然堆積である。遺物は出土していない。明期・性格等は不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 焼土粒子微量, ローム粒子少量

遺物 出土していない。

所見 時期・性格等は不明である。



第16図 第1・3・4号土坑実測図

(4) 溝

第1号溝 (第17~19図)

調査区の北東端を北西から南東方向に走る (E3c7~E3f2区, N-68°-W)。長さは21m, 上幅1.05~1.70m, 下幅0.45~0.55m, 深さ35~47cmであるが, 一部幅が広がる。底面は2段になっている。覆土は自然堆積と考えられるが, しまっておらず, 近現代をさかのぼらないように思われる。出土遺物としては須恵器蓋があるが混入と考えられる。性格は, 地境と平行しており, その関係の溝と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------|--------|-------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量, 粘土小ブロック微量 | 7 暗褐色 | 炭化粒子微量, ローム粒子微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子少量, 粘土小ブロック微量 | 8 暗褐色 | 炭化物・粒子微量, ローム粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量, 粘土小ブロック微量 | 9 暗褐色 | ローム粒子少量, 粘土粒子少量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子微量, 粘土小ブロック微量 | 10 暗褐色 | 炭化粒子微量, ローム粒子少量 |
| 5 黒褐色 | 炭化粒子微量, ローム粒子微量 | | |
| 6 黒褐色 | 炭化粒子微量, ローム粒子微量 | | |

第2号溝 (第17・18図)

調査区の北部を北西～南東方向に、長さ19.0mにわたって走る(E3f6～E4f0区, N-45°-W)。第234号住居跡を切っている。上幅0.88m, 下幅0.65m, 深さ15cmで、平坦な底面と緩やかに立ち上がる壁を持ち、断面は浅い皿状である。時期・性格は不明である。

第3号溝 (第17・18図)

調査区の中央北寄りを北西～南東方向に走る(E3h5～E3j9区, N-56°-W)。17.0m程走って調査区を横断し、西側で昭和63年度調査時の第7号溝に連続する。第235号住居跡を切っている。上幅1.00～1.62m, 下幅0.53～0.78m, 深さ70cmで、平坦な底面と緩やかに立ち上がる壁を持ち、断面は皿状である。覆土は自然堆積である。時期・性格は不明である。

土層解説

- 1 暗褐色 焼土小ブロック微量, 炭化粒子微量, ローム粒子少量
- 2 褐色 焼土粒子微量, 炭化物・粒子微量, ローム粒子中量, 粘土粒子微量
- 3 暗褐色 焼土粒子少量, 炭化粒子微量, ローム粒子少量
- 4 暗褐色 焼土粒子微量, 炭化粒子微量, ローム小ブロック微量・粒子中量

第4号溝 (第17～19図, PL42)

調査区の南端近くを、北西～南東方向に(F3e2～F3g5区, N-60°-W)横断する。花室川に沿う台地縁辺を走る。南側に第5号溝が平行して走る。長さは12.5mである。上幅0.74～1.80m, 下幅(下段)0.25～0.36m, 深さ約80cmで、底面は2段に掘り込まれている。壁は緩やかに立ち上がる。覆土は自然堆積である。覆土中から土師質土器小皿・須恵器転用砥石が出土している。本遺構は台地縁及び地境に平行し、その関係の溝と考えられる。時期は中世以降と考えられる。

土層解説

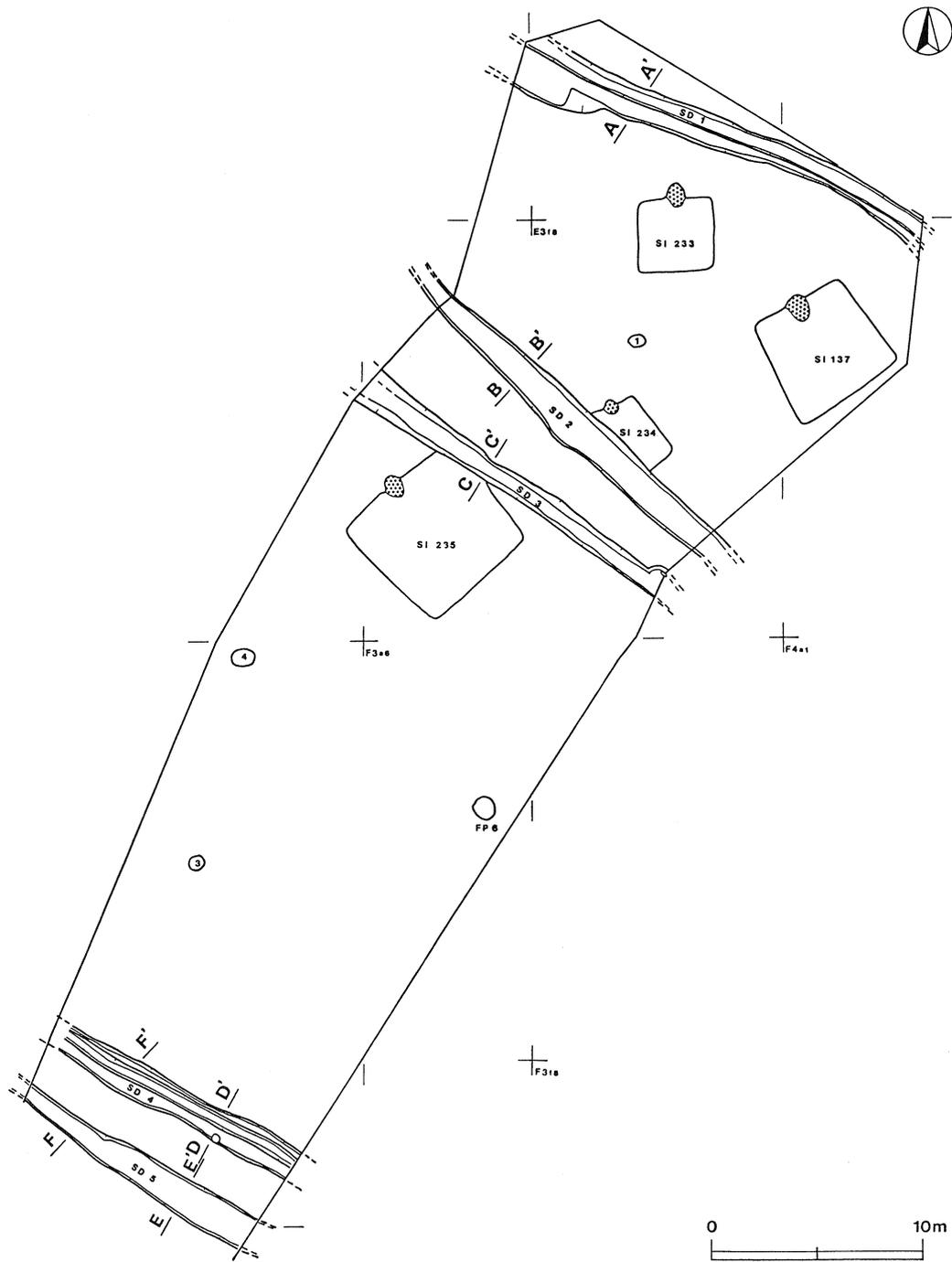
- 1 暗褐色 焼土粒子微量, 炭化粒子微量, ローム小ブロック微量・粒子中量, 粘土小ブロック微量
- 2 暗褐色 炭化粒子微量, ローム小ブロック微量・粒子少量, 粘土粒子少量

第5号溝 (第17～19図, PL42)

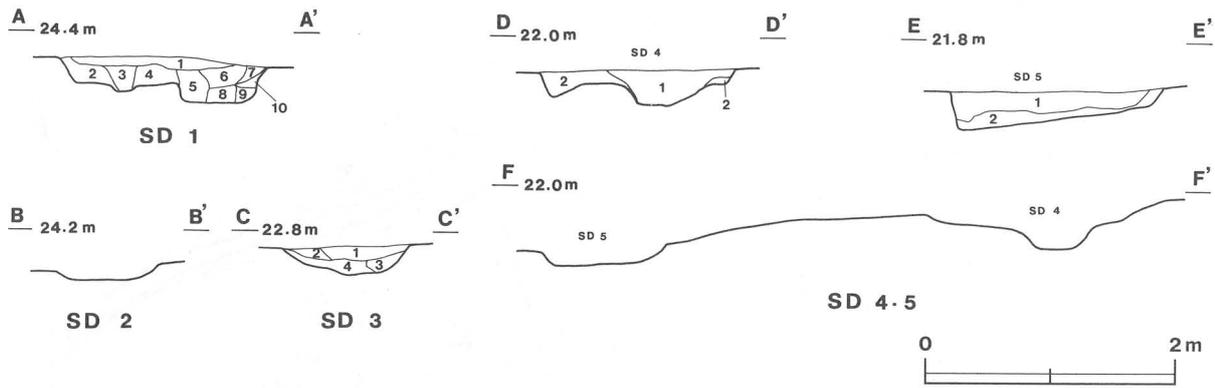
調査区の南端近くを、北西～南東方向に(F3f1～F3h4区, N-59°-W)横断する。花室川に沿う台地縁の斜面にかかった部分を走る。北側に第4号溝が平行して走る。長さは12.5mである。上幅0.78～1.78m, 下幅0.55～1.68m, 深さ約70cmで、底面は花室川方向に傾斜し、壁は外傾する。覆土は自然堆積である。覆土中からは管状土錘1点が出土している。本遺構は台地縁及び地境に平行し、その関係の溝と考えられる。時期は不明である。

土層解説

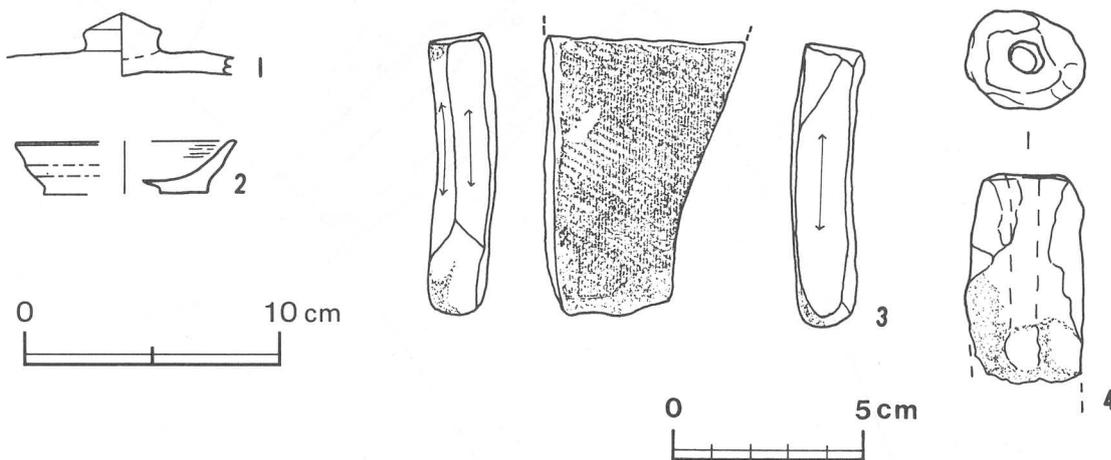
- 1 褐色 焼土粒子微量, 炭化粒子微量, ローム粒子少量, 粘土粒子少量
- 2 黄褐色 焼土粒子微量, ローム粒子多量



第17図 第1・2・3・4・5号溝実測図(1)



第18図 第1・2・3・4・5号溝実測図(2)



第19図 第1・4・5号溝出土遺物実測図

第1号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土,色調,焼成	備考
第19図 1	蓋 須恵器	B (2.4)	天井部につぶれた擬宝珠形つまみが付く。	天井部外面回転ヘラ削り。他はヨコナデ。つまみは貼り付け。	砂粒・長石 黄灰色 普通	P357 5% 覆土中
		F 3.0				
		G 1.4				

第4号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土,色調,焼成	備考
第19図 2	小皿 土師質 土器	A [8.6]	平底。体部は外傾して内彎気味に短く立ち上がり,口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面~体部外面ヨコナデ。内面指ナデ。底部回転糸切り,のち無調整。	砂粒・スコリア 黄橙色 普通	PL42-3 P356 35% 覆土中
		B 2.1				
		C [5.6]				

図版番号	器種	計測値				出土状況	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
3	転用砥石	(7.5)	(5.3)	(1.9)	(76.3)	覆土中	PL42-4, DP13, 須恵器片を転用

第5号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値				出土状況	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第19図4	管状土錘	(5.5)	3.2	2.6	(39.8)	覆土中	PL42-5, DP14

2 II (H5) 区の遺構と遺物 (第86図, PL6)

II (H5) 区は、II 区の中央部南寄りに位置する。地形的には、花室川の低地から入る谷津の入口近くの北側台地縁辺、及び谷津に向かう南東向きの斜面に立地する。

II (H5) 区では、竪穴住居跡31軒、炉穴5基、土坑9基 (報告分)、溝6条 (同)、道路2条を調査した。

(1) 竪穴住居跡

第47号住居跡 (第20・21図, PL6・43)

位置 II (H5) 区の中央部東端, E7a3区に位置する。昭和63年度の調査区との境界線上に位置するため、東半部は昭和63年度に調査しており、平成5年度は西半部の調査を行った。(なお、平成5年度の調査により、以前に報告したデータ等に若干の変更がある。)

規模と平面形 主軸長3.61m, 幅4.08mの、やや幅広の不整形である。

主軸方向 N-26°-W

壁 壁高31cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 竈部分を除き、全周する。幅10~15cm, 深さ5~8cmで、断面は逆台形ないしU字形である。

床 平坦で、中心部は踏み固められ、堅緻である。

ピット 2か所 (P₅~P₆)。昭和63年度調査で4か所 (P₁~P₄) 認められており、都合6か所となる。P₅は径15cm, 深さ46cmの円形ピットで、南コーナー近くにある。P₆は径20cm, 深さ30cmの円形ピットで、西コーナー近くにある。位置や深さからは柱穴と考えられるが、径や他の柱穴との組み合わせからは、主柱穴かどうか不明である。

竈 北西壁の中心から東に寄った位置に構築されていた。昭和63年度調査部分にあり、既に調査・報告済みである。

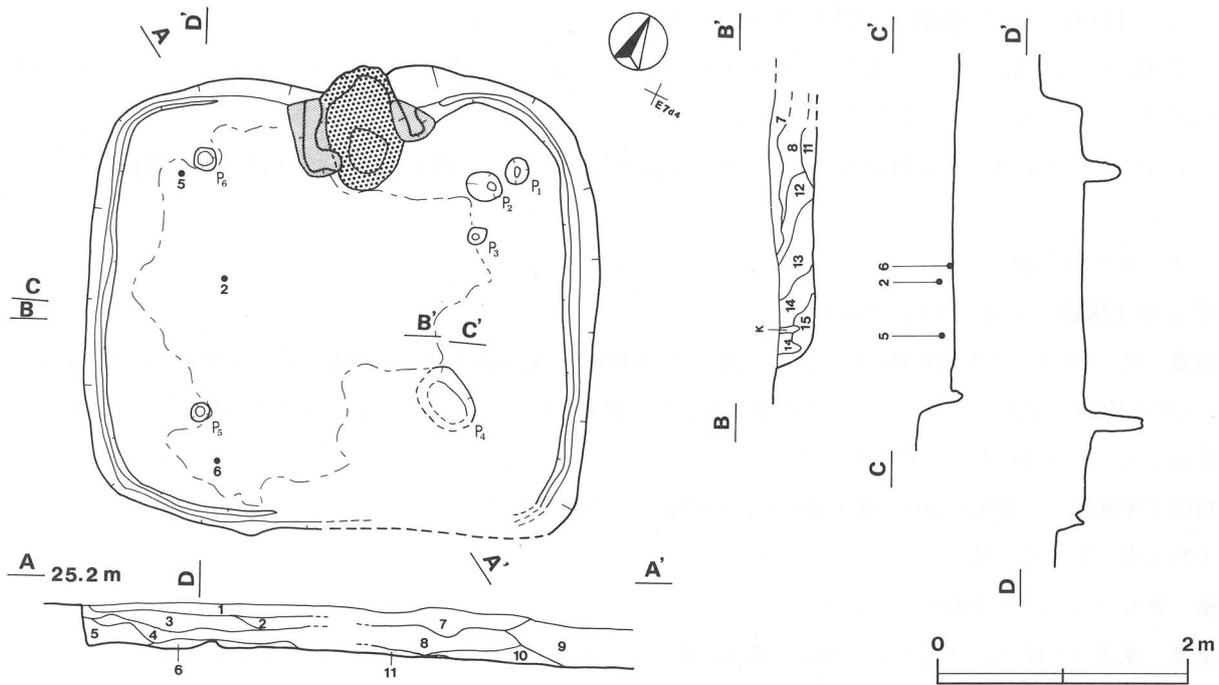
覆土 褐色、ないし暗褐色土主体の自然堆積土層である。壁際ではいわゆる三角堆積をし、中央部ではレンズ状堆積をしている。土層の傾斜は西側からの流れ込みが顕著であったことを示している。ただ、4層等、一部にロームブロックが多く含まれる層が見られ、部分的には人為的に埋め戻された可能性がある。

土層解説

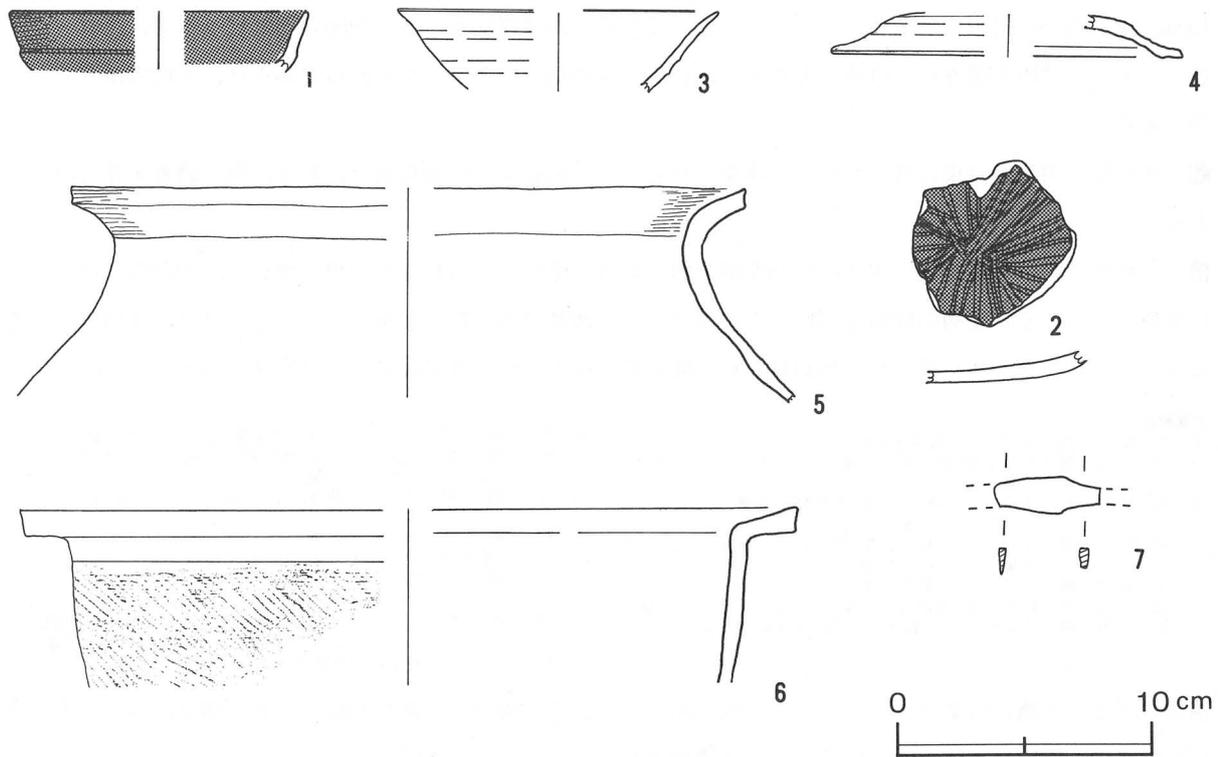
1 暗褐色	焼土小ブロック微量・粒子少量	8 明褐色	ローム中ブロック少量・小ブロック中量
2 褐色	焼土粒子少量, 炭化粒子少量, ローム中ブロック・小ブロック中量	9 暗褐色	焼土粒子少量, 炭化粒子中量, ローム中ブロック・小ブロック少量
3 褐色	焼土小ブロック・粒子少量, 炭化粒子少量, ローム中ブロック・小ブロック中量	10 暗褐色	焼土粒子微量, ローム中ブロック少量・小ブロック中量
4 暗褐色	焼土小ブロック・粒子少量, 炭化粒子中量, ローム大ブロック少量・中ブロック中量	11 暗褐色	焼土粒子中量
5 暗褐色	焼土小ブロック・粒子中量, 炭化粒子少量	12 にぶい黄褐色	焼土粒子少量, 炭化粒子微量
6 褐色	焼土粒子少量, 炭化粒子少量, ローム中ブロック少量	13 暗褐色	焼土小ブロック微量・粒子少量, ローム中ブロック・小ブロック少量
7 褐色	焼土小ブロック微量・粒子少量, 炭化粒子少量	14 暗褐色	焼土小ブロック少量・粒子中量, 炭化粒子少量, ローム中ブロック中量・小ブロック少量・粒子中量
		15 褐色	焼土粒子中量, 炭化粒子少量, ローム小ブロック中量

遺物 出土した遺物の量は少ない。また、細片がほとんどで、図示した遺物も復元による部分が多い。出土状況は散漫で、確実に本住居跡に伴うといえる遺物はない。

所見 上述したように、遺物が少なく、本住居跡に伴うことが確実な遺物がないが、須恵器蓋等から年代を決定するならば、8世紀前葉の住居跡と考えられる。



第20図 第47号住居跡実測図



第21図 第47号住居跡出土遺物実測図

第47号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土, 色調, 焼成	備考
第21図 1	坏 土師器	A (11.6) B (2.4)	体部と口縁部との境に稜を持つ。 口縁部は外傾する。	口縁部内・外面ヨコナデ。内・外面黒色処理。	砂粒 褐灰色 普通	P 1 5% 覆土中

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土,色調,焼成	備 考
2	坏 土 師 器	B (0.8)	底部破片。丸底。	体部下位外面へラ削り。内面黒色 処理・放射状暗文。	雲母・パミス 褐灰色, 黒褐色 普通	P 3 5% 中央部覆土中
3	坏 須 恵 器	A [12.5] B (3.2)	体部は内彎気味に外傾して立ち あがり,口縁部はわずかに外反す る。	内外面ヨコナデ。	雲母・長石・石英 にぶい黄橙色 普通	PL43-1 P 4 5% 覆土中
4	蓋 須 恵 器	A [14.0] B (1.7)	口縁部破片。口縁部内面にかえり の痕跡を残す。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外 面回転へラ削り。	砂粒・雲母 灰白色 普通	P 5 5% 覆土中
5	甕 土 師 器	A [26.8] B (8.7)	頸部はくびれ,口縁部は外反する。 口唇部をわずかに上方につまみ上 げる。	体部外面ナデ調整。口縁部内・外 面ヨコナデ。	砂粒・雲母・スコ リア,にぶい黄橙 色, 普通	P 6 5% 北西隅覆土中
6	鉢 須 恵 器	A [30.8] B (7.8)	頸部はほとんどくびれず,口縁部 は大きく外に開く。口唇部をわず かに上方につまみ上げる。	体部外面叩き。口縁部ヨコナデ。 内面は指ナデ(右下がり)。	砂粒・雲母 灰白色 普通	P 8 5% 南西隅覆土下層

図版番号	器 種	計 測 値				出 土 状 況	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
7	刀 子	(4.2)	1.5	0.3	(6.3)	覆土中	PL43-2, M1, 区付近破片

第238A号住居跡 (第22~25・27図, PL7・43)

位置 II (H5)区の北西端で何軒も重複する住居跡を確認したが,当初は何軒がどのように重複するのか判断がつかなかったため,とりあえず一括して第238号住居跡とし,調査の進展によって把握できた段階でアルファベットによって分離していくことにした。このようにしてA~Gまで命名したが,Eは,その後,昭和63年度に調査された第94号住居跡と同一であることが判明した。Aはこの一連の住居跡の中では南東端,E6a6区に位置する。西側にBが重複している。

規模と平面形 主軸長3.57m,幅(3.14)mで,竈の位置からみて方形と推定される。

主軸方向 N-40°-W

壁 壁高は25cm程で,ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 ほぼ全周するが,竈部分と東コーナーでは認められない。北東壁沿いでは,北コーナーから中央へ向かうに従い,壁から離れて内側に入る。幅13~20cm,深さ5~8cmで,断面は逆台形ないし半円形である。

床 平坦で,中央部は踏み固められ,堅緻である。

ピット 2か所(P₁~P₂)。P₁は,東コーナー近くに位置する,径24~30cm,深さ50cmの楕円形ピットである。位置や規模からは柱穴のように思われるが,対応するピットは確認されなかった。P₂は,径25cm,深さ25cmの円形ピットで,竈の反対側の南東壁際にあり,位置的に入口ピットと考えられる。

竈 北西壁中央部を,幅(35)[80]cm,奥行き(15)cm程,平面半月形に掘り込み,砂まじりの粘土で竈を構築している。西部に攪乱を受け,西袖はほとんど残存しない。火床はあまり掘り込まれておらず,最大でも8cm程である。火床面はほとんど焼けていない。煙道は約60°程の角度で立ち上がる。なお,わずかに残存した西袖先端の基部の上から土製支脚が出土している。

竈土層解説

1	にぶい黄褐色	焼土小ブロック微量・粒子少量,炭化粒子微量,粘土小ブロック微量・粒子中量	4	暗褐色	焼土小ブロック微量・粒子少量,炭化粒子微量,ローム中ブロック少量,粘土小ブロック・粒子微量
2	暗褐色	焼土小ブロック微量・粒子少量,炭化粒子微量,粘土小ブロック微量・粒子少量	5	にぶい赤褐色	焼土小ブロック微量・粒子少量,粘土粒子微量
3	暗赤褐色	焼土小ブロック・粒子少量,粘土小ブロック・粒子微量	6	にぶい黄褐色	焼土粒子少量,粘土小ブロック少量・粒子中量

- | | | | |
|---------|--------------------------------|-----------|----------------------|
| 7 黒褐色 | 焼土粒子微量, 粘土粒子微量 | 11 褐色 | 焼土粒子微量, 粘土粒子微量 |
| 8 赤褐色 | 焼土中ブロック少量・粒子中量, 粘土粒子少量 | 12 にぶい黄褐色 | 焼土粒子微量, 粘土粒子微量 |
| 9 暗褐色 | 焼土小ブロック微量・粒子少量, 炭化粒子少量, 粘土粒子微量 | 13 黄褐色 | 焼土粒子微量, 粘土粒子中量 |
| 10 明黄褐色 | ロームブロック | 14 黄褐色 | 焼土粒子微量, 粘土粒子微量, 袖の基部 |

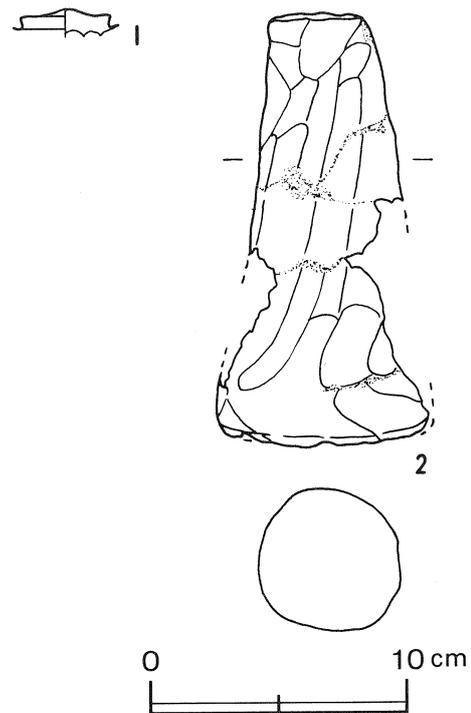
覆土 土層断面図中, 第1~6層, 及び第16~18層が本住居跡の覆土である。ローム大ブロック等を多量に含む層が多く, これらは人為的堆積によるものと考えられる。土層断面AA'では本住居跡の覆土が第238B号住居跡によって切られている状況が捉えられた。

土層解説

- | | | | |
|----------|------------|-----------|------------|
| 1 暗褐色 | ローム大ブロック多量 | 6 にぶい黄色 | |
| 2 にぶい黄褐色 | | 16 暗灰黄色 | |
| 3 にぶい黄褐色 | ローム中ブロック中量 | 17 オリーブ褐色 | ローム小ブロック中量 |
| 4 黄褐色 | ローム大ブロック多量 | 18 オリーブ褐色 | ローム中ブロック中量 |
| 5 明黄褐色 | ローム大ブロック多量 | | |

遺物 出土遺物は極めて少なく, 細片がほとんどである。本住居跡に伴うと思われる遺物としては, 竈内から出土した須恵器蓋のつまみ, 竈付近で出土した土製支脚がある。

所見 切り合い関係から見て, 第238B住居跡より古い。年代決定は出土遺物が少ないため困難であるが, 蓋のつまみから見れば, 8世紀前葉の住居跡である可能性がもっとも高いと考えられる。



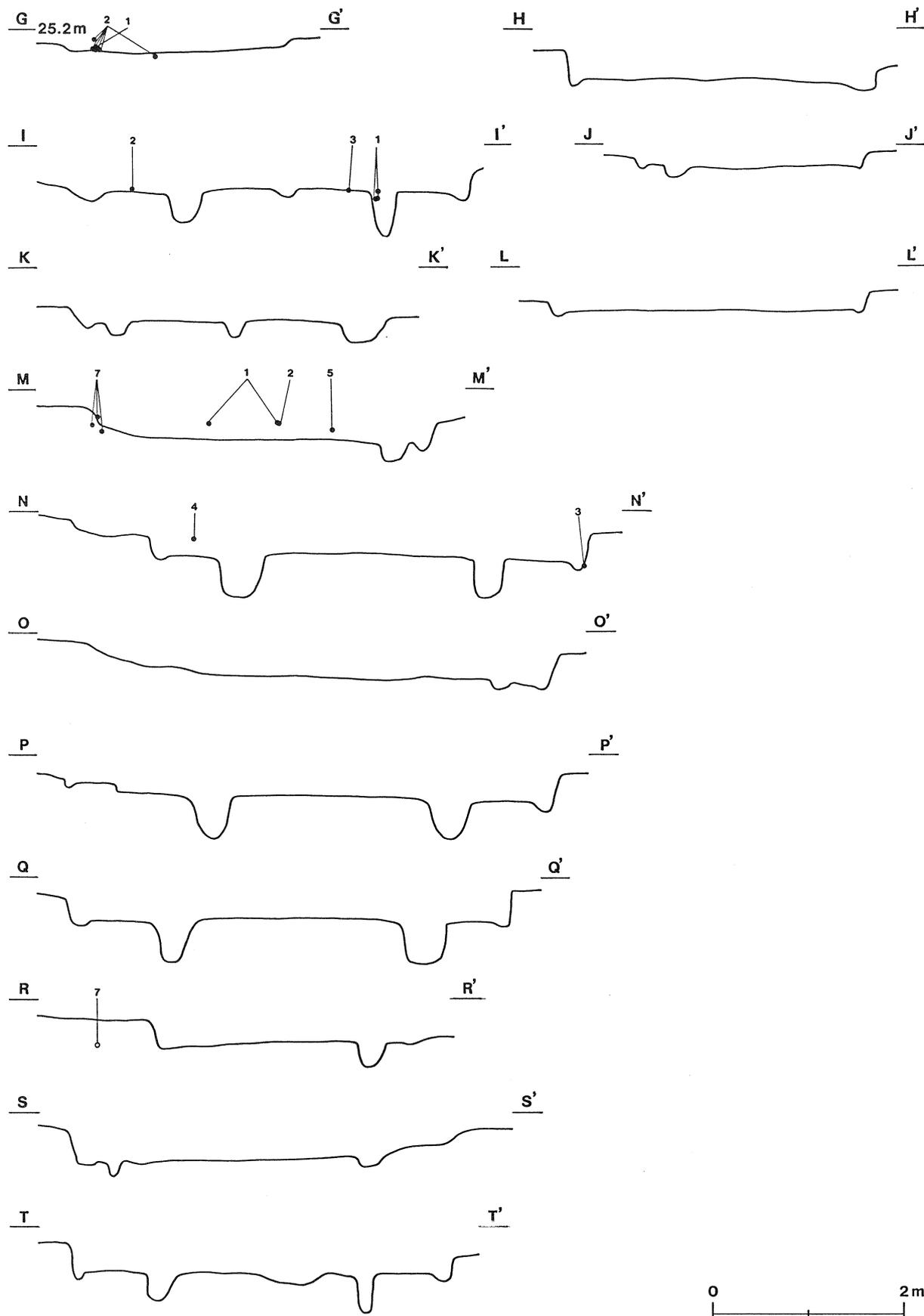
第22図 第238A号住居跡出土遺物実測図

第238A住居跡出土遺物観察表

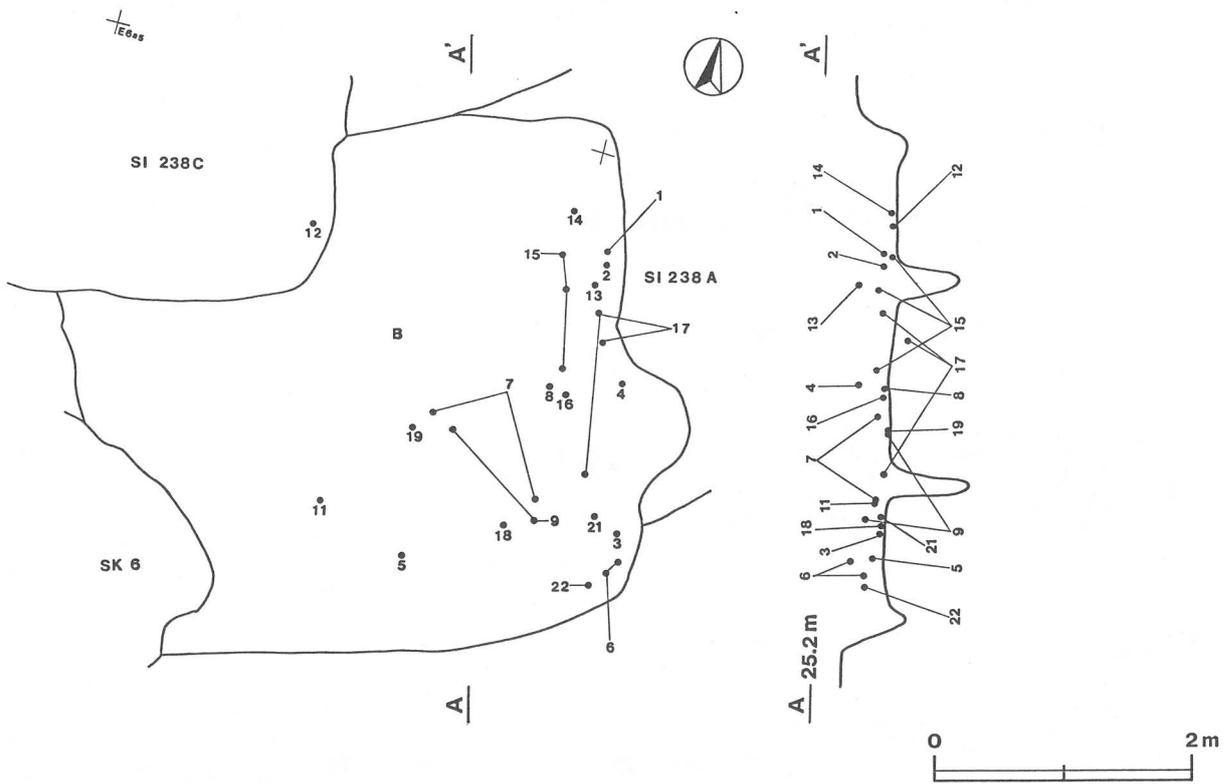
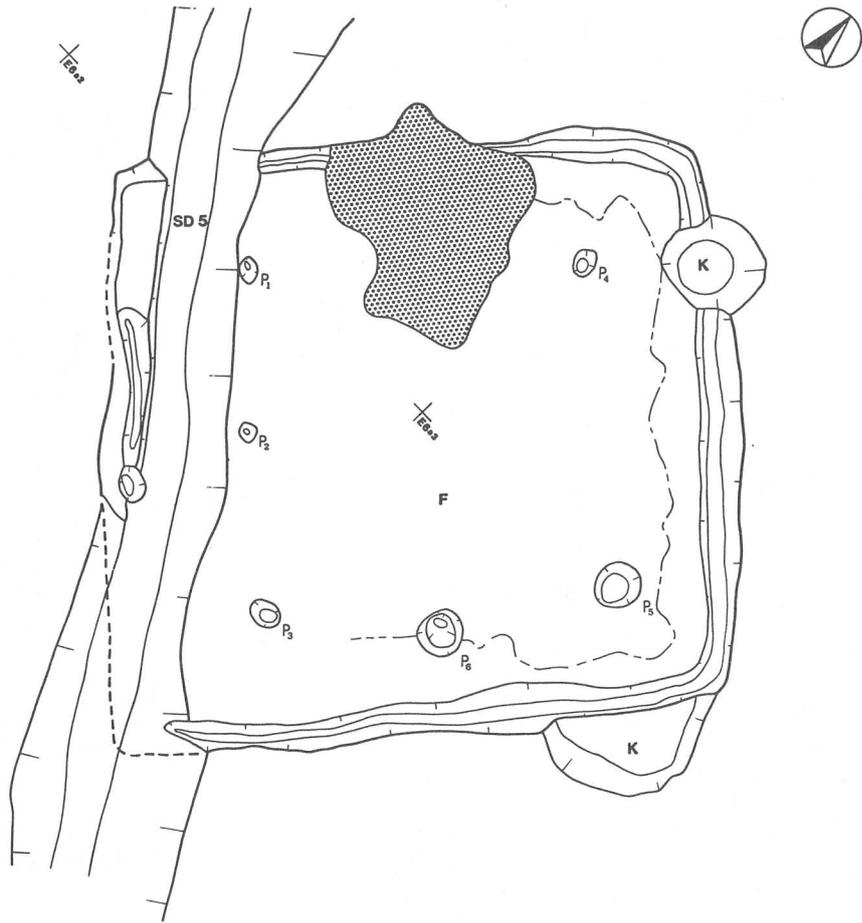
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土, 色調, 焼成	備考	
第22図 1	蓋 須恵器	B (1.1) F 3.4 G 0.8	坏蓋のつまみ。つぶれた擬宝珠形。	天井部に貼り付け, ヨコナデ。	砂粒・雲母 にぶい黄褐色 普通	P79 5% 竈内	
図版番号	器種	計測値				出土状況	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
2	土製支脚	17.2	(8.3)	—	(334.0)	竈西袖前方床面直上	PL43-3, DP 2



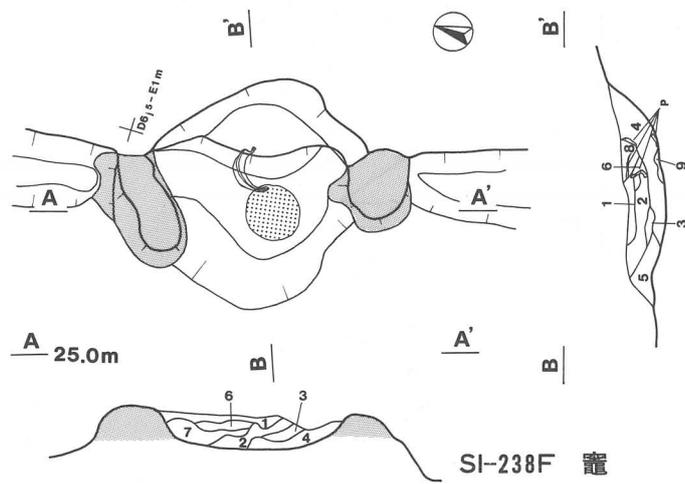
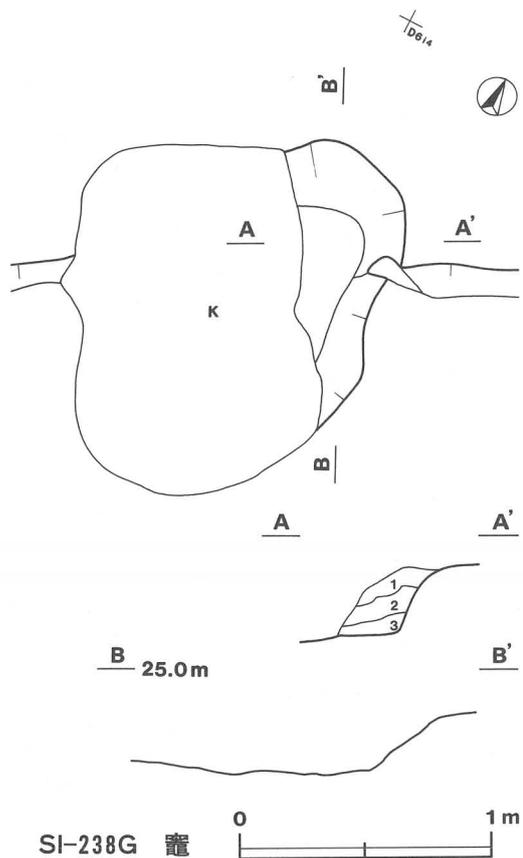
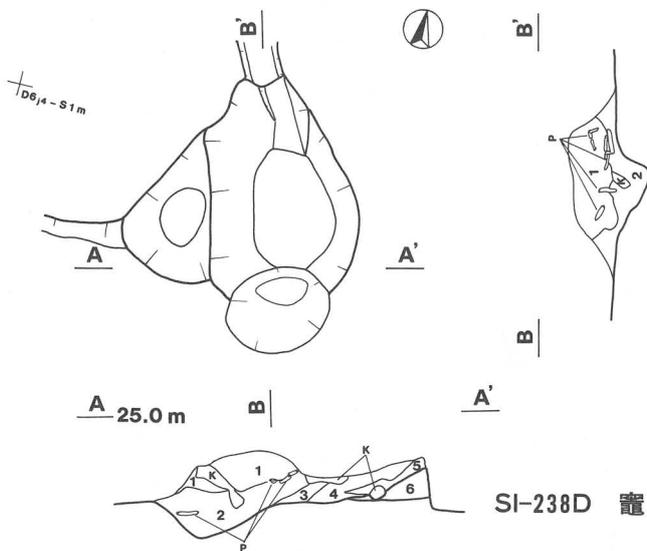
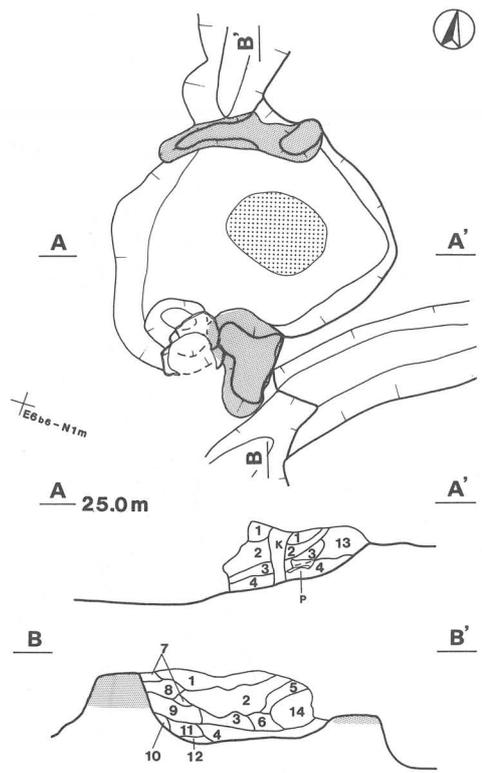
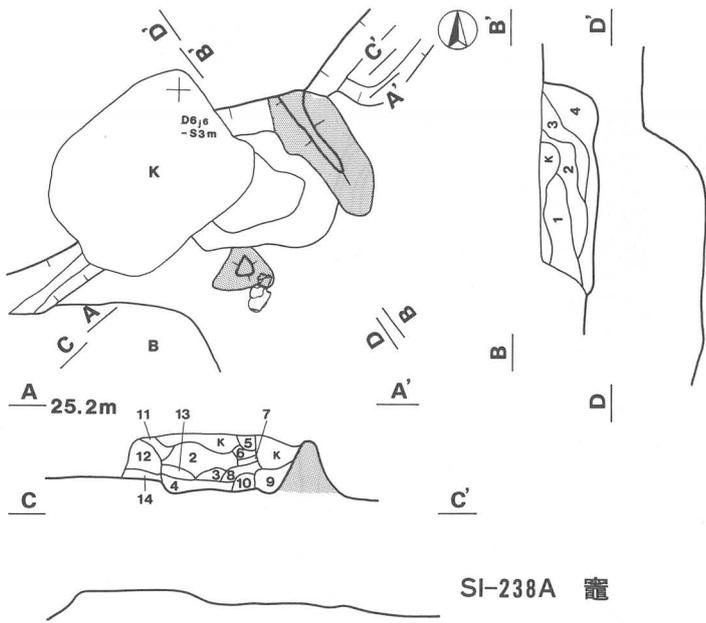
第23图 第238 A·B·C·D·E·F·G号住居跡実測图(1)



第25图 第238 A · B · C · D · E · F · G号住居迹実测图(3)



第26图 第238E号住居跡実測図・第238B号住居跡出土遺物位置図



第27図 第238A・B・D・F・G号住居跡竈実測図

第238B号住居跡（第23～29図，PL 7・8・43・44）

位置 II (H5) 区の北西部に7軒重複して確認されたうちの1軒で，E6a5区に位置する。北東に第238A号住居跡，北西に第238C号住居跡，南西に第6号土坑が重複する。

規模と平面形 主軸長4.42m，幅4.25mの方形である。

主軸方向 N-69°-E

壁 ほぼ垂直に立ち上がる。壁高は約30cmである。

壁溝 全周する。幅は20～30cm，深さは10cm前後で，断面は逆台形である。

床 平坦で，中央部は踏み固められ，堅緻である。踏み固めの範囲はやや広く，支柱穴の外側にまで広がるが，その範囲はわずかに南側に寄っており，北側，すなわち入口から竈に向かって左側の壁際には，右側の壁際より広い踏み固められていない部分が認められる。

ピット 5か所(P₁～P₅)。P₁～P₄は，径30～35cmの円形ないし楕円形のピットで，深さは60～72cmである。位置的には，それぞれコーナーに近く，配置は歪みはあるものの方形になるので，支柱穴と考えられる。P₅は径25～30cmの不整円形で，深さは15cmである。竈に対応する西壁の中央部寄りにあり，入口ピットと考えられる。

竈 東壁の中央から南に寄った位置に，壁を掘り込み，砂まじりの粘土で構築している。掘り方は幅95cm，奥行き50cmで，平面三角形状をしている。両袖の残存状況は良くない。火床は，一度深く掘った後ロームまじりの土を入れて作っており，ほとんど凹みがなく，ほぼ平坦な面が煙道に向かって緩く（約10°）傾斜している。中央やや奥寄りが焼けて赤変・硬化している。南袖手前にピットがあり，その上から土師器甕の口縁から肩部が倒立した状態で出土している。煙道は35°程で緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

1 褐 色	焼土粒子少量，炭化粒子微量，粘土小ブロック・粒子微量	7 黄 褐色	焼土粒子微量，粘土小ブロック・粒子微量
2 暗 褐色	焼土小ブロック微量・粒子少量，粘土小ブロック・粒子微量	8 褐 色	焼土小ブロック・粒子微量，粘土粒子微量
3 灰 褐色	焼土小ブロック・粒子微量，炭化粒子微量，粘土小ブロック微量・粒子少量	9 にぶい黄色	焼土小ブロック微量・粒子少量，粘土小ブロック微量・粒子中量
4 暗 赤 褐色	焼土小ブロック少量・粒子中量，炭化粒子微量，粘土小ブロック・粒子微量	10 暗 褐色	焼土粒子微量，粘土小ブロック・粒子微量
5 にぶい黄褐色	焼土小ブロック・粒子微量，粘土中ブロック微量・小ブロック微量・粒子少量，しまり極強	11 暗 赤 褐色	焼土粒子中量，粘土粒子微量
6 灰 黄 色	焼土粒子微量，炭化粒子微量，粘土小ブロック・粒子中量，しまり極強	12 暗 褐色	焼土粒子微量
		13 黒 褐色	焼土小ブロック微量・粒子少量，粘土小ブロック・粒子微量
		14 黄 褐色	焼土小ブロック・粒子微量，粘土小ブロック少量・粒子多量，しまり極強

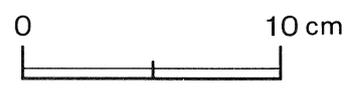
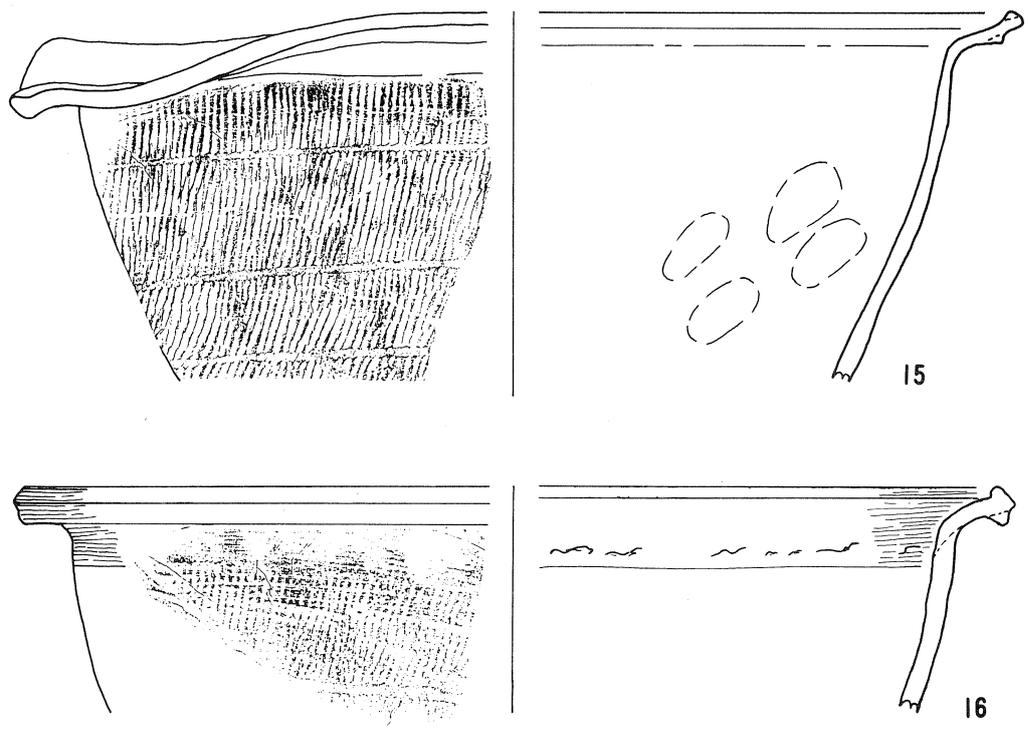
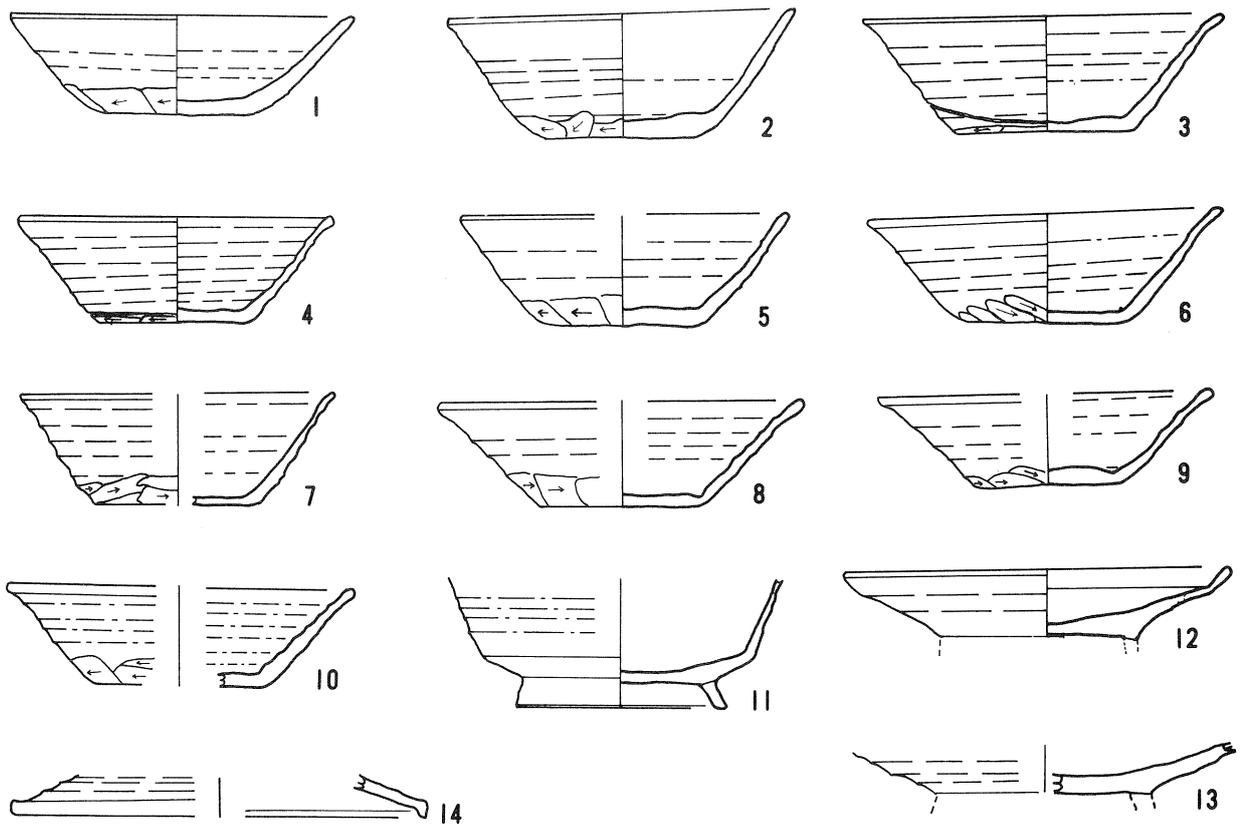
覆土 土層断面図中，第7～15層，及び第33～40層が本住居跡の覆土である。第238A号住居跡，及び第238C号住居跡の覆土を切っており，第6号土坑によって切られている。

土層解説

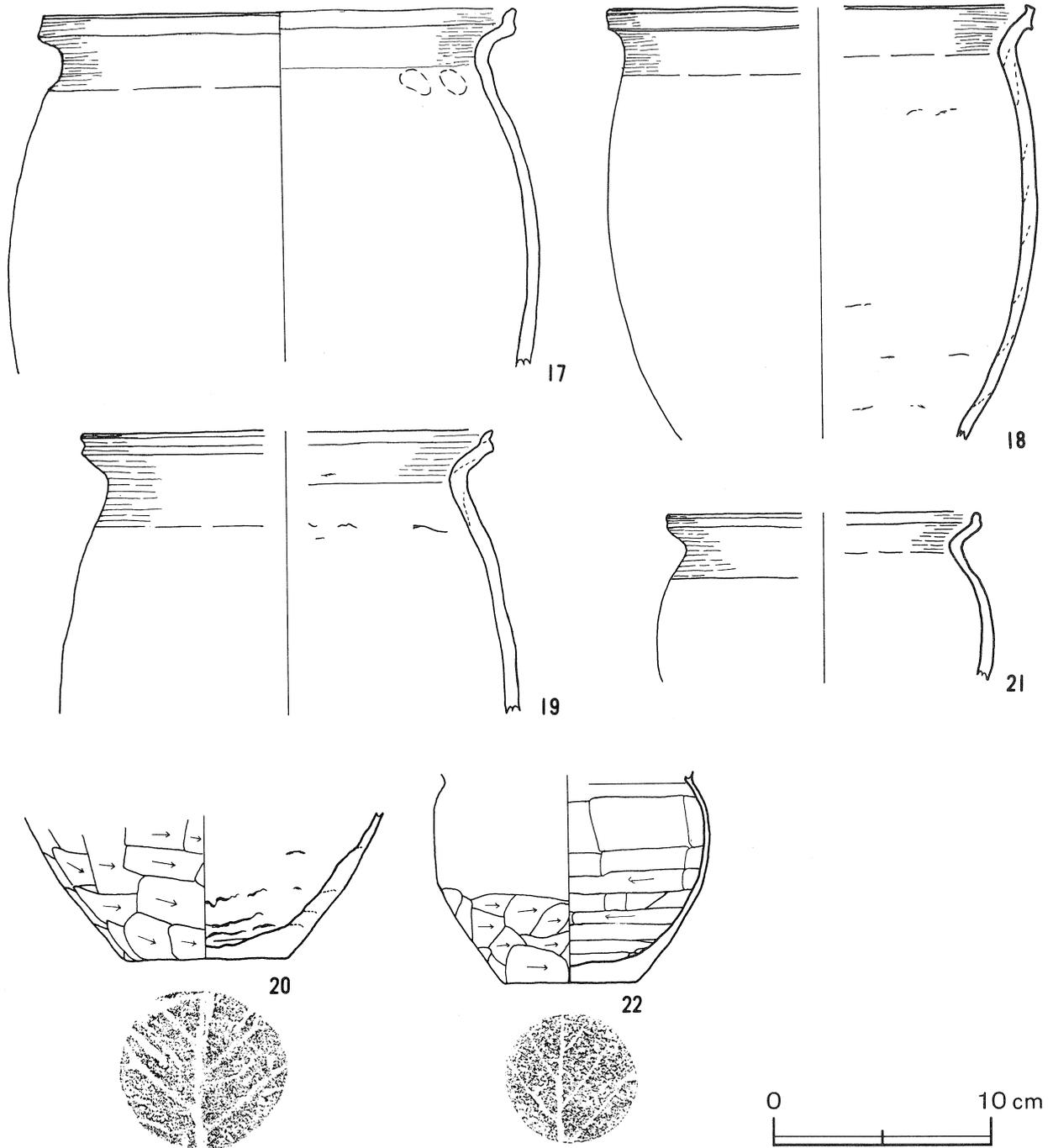
7 暗灰黄色		33 暗 褐色	焼土粒子少量
8 黒 褐色		34 暗 褐色	焼土中ブロック少量
9 黒 褐色	焼土小ブロック・粒子少量	35 褐 色	焼土粒子少量
10 暗灰黄色	焼土中ブロック中量	36 褐 色	焼土粒子少量
11 黒 褐色		37 褐 色	ローム小ブロック多量
12 暗 褐色	焼土粒子微量	38 暗 褐色	焼土粒子微量
13 褐 色	焼土粒子微量	39 暗 褐色	
14 黒 褐色		40 褐 色	焼土粒子少量
15 黄 灰色			

遺物 本住居跡からは多量の土器片が出土している。そのほとんどは本住居跡に伴うものと考えられる状況である。特に竈周辺からは須恵器坏を中心とした多くの土器が出土しており，第28図1・2の坏等は竈脇の壁の上からずり落ちたような状況を示している。

所見 切り合い等から第238A号・第238C号住居跡より新しく，第6号土坑より古い。出土遺物から，9世紀前葉の住居跡と考えられる。



第28图 第238B号住居跡出土遺物実測図(1)



第29図 第238B号住居跡出土遺物実測図(2)

第238B住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土, 色調, 焼成	備考
第28図 1	坏 須恵器	A 13.3 B 3.9 C 5.8	平底。体部は外傾して直線的に立ち上がる。	内面～体部中位外面ヨコナデ。体部下位外面～底部ヘラ削り。	砂粒・石英・雲母 暗灰黄色 普通	PL43-4 P80 100% 竈北側壁際覆土
2	坏 須恵器	A 13.4 B 5.1 C 5.8	平底。体部は外傾して直線的に立ち上がる。	内面～体部中位外面ヨコナデ。体部下位外面～底部ヘラ削り。底部のヘラ削りは一定方向。	砂粒・スコリア・ 石英・雲母 灰黄褐色, 普通	PL43-5 P81 95% 竈北側壁際覆土
3	坏 須恵器	A 14.0 B 5.1 C 6.7	平底。体部は外傾して直線的に立ち上がり, 口縁部はわずかに外反する。	内・外面ヨコナデ。体部下位外面ヘラ削り・ヘラ先痕。底部回転ヘラ切り, のち静止ヘラ削り調整。	砂粒・石英・雲母 にぶい黄橙色 普通	PL43-6 P82 80% 竈南側壁際床上

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土, 色調, 焼成	備 考
第28図 4	坏 須 恵 器	A 12.0	平底。体部は外傾してほぼ直線的に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	内・外面ヨコナデ。体部下位外面ヘラ削り・ヘラ先痕。底部回転ヘラ切り、のち一定方向の静止ヘラ削り。	砂粒・石英・雲母 灰黄色 普通	PL43-7 P83 80% 甕上覆土中
		B 4.2				
		C 5.8				
5	坏 須 恵 器	A [12.7]	平底。体部は外傾してわずかに内彎しながら立ち上がる。	内・外面ヨコナデ。体部下位外面ヘリ。底部回転ヘラ切り、のち静止ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 灰白色 普通	PL43-8 P84 70% 中央南寄り下層
		B 3.7				
		C 6.0				
6	坏 須 恵 器	A 13.7	平底。体部は外傾して直線的に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	内・外面ヨコナデ。体部下位外面ヘラ削り。底部回転ヘラ切り、のち一定方向の静止ヘラ削り。	砂粒・石英・雲母 褐灰色 普通	PL43-9 P85 70% 南東隅付近覆土
		B 4.6				
7	坏 須 恵 器	A [12.2]	平底。体部は外傾してわずかに内彎気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	内・外面ヨコナデ。体部下位外面ヘラ削り。底部回転ヘラ切り、のち静止ヘラ削り。	砂粒・石英・雲母 灰色 良好	PL43-10 P87 50% 中央部南東寄り
		B 4.4				
		C [6.4]				
8	坏 須 恵 器	A [14.4]	平底。体部は外傾して直線的に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	内・外面ヨコナデ。体部下位外面ヘラ削り。底部ヘラ削り。	砂粒・石英・雲母 灰黄色 普通	P86 40% 甕前方覆土下層
		B 4.2				
		C [6.4]				
9	坏 須 恵 器	A [13.0]	平底。体部は外傾して直線的に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	内・外面ヨコナデ。体部下位外面ヘラ削り。底部は回転ヘラ切り、のち雑な一定方向のヘラ削り。	砂粒・石英・雲母 にぶい黄橙色 普通	P88 30% 南東部床面直上
		B 3.6				
		C 5.6				
10	坏 須 恵 器	A [13.6]	平底。体部は外傾して直線的に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	内・外面ヨコナデ。体部下位外面ヘラ削り。底部は調整不明。	砂粒・スコリア・ 石英・雲母、にぶ い赤褐色、普通	P89 20% 覆土中
		B 3.9				
		C [6.6]				
11	高台付坏 須 恵 器	B (5.2)	平底に「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は外傾して直線的に立ち上がる。	内・外面ヨコナデ。高台内底部は回転ヘラ削り。高台は貼り付け。	砂粒・石英・長石・ 雲母、黒褐色 普通	PL43-11 P90 60% 中央南寄り覆土
		D 8.3				
		E 1.2				
12	高台付盤 土 師 器	A 15.1	平底に高台が付く。体部は大きく開く。口縁部は体部からにぶい稜を持って立ち上がる。	内・外面ヨコナデ。底部は回転ヘラ切り、のち回転ヘラ削り。高台は貼り付け。	砂粒・スコリア・ 長石・雲母 灰褐色 普通	PL43-12 P91 70% 北西部覆土 底部に墨痕
		B (2.8)				
13	高台付盤 須 恵 器	B (1.9)	平底に高台が付く。体部は大きく開く。	内・外面ヨコナデ。底部は回転ヘラ削り。高台は貼り付け。	砂粒・雲母 灰黄色 普通	P92 20% 甕北側壁際覆土
14	蓋 須 恵 器	A [16.0]	体部は大きく開き、下方に屈曲して口縁部に移行する。	内・外面ヨコナデ。	砂粒・スコリア・ 雲母、明赤褐色 土師質	P93 10% 北東隅付近下層
		B (11.6)				
15	鉢 須 恵 器	A [38.8]	体部は内彎気味に外傾して立ち上がる。口縁部は外反し、外面に凸線。口唇部内側に凸線。口縁部歪み。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面平行叩き目、のち横位の条線。体部内面指押え。	砂粒・石英 灰色 良好	PL44-1 P94 15% 甕北側覆土下層
		B (14.5)				
16	鉢 須 恵 器	A [39.0]	体部は内彎気味に外傾して立ち上がる。口縁部は外反し、口唇部内・外面に凸線を持つ。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面平行叩き目、のち横位の条線。体部内面指押え。	砂粒・長石・雲母 暗灰黄色 普通	P95 5% 甕前床上
		B (9.0)				
第29図 17	甕 土 師 器	A 21.6	体部は内彎して立ち上がる。口縁部は丸みを帯びて外反し、口唇部は上方につまみ上げる。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・スコリア・ 石英・雲母 灰褐色、普通	PL44-2 P97 40% 甕周辺床面直上
		B (17.1)				
18	甕 土 師 器	A [19.8]	体部中位やや上に最大径。口縁部は頸部から丸みを持って短く外反。口唇部外面に凸線。端部つまみ上げ。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面上位はナデ、中位以下はヘラナデ。体部内面横位の指ナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	PL44-3 P98 30% 南東部覆土下層
		B (20.5)				
19	甕 土 師 器	A [19.0]	頸部から丸みを持って口縁部に移行する。口唇部は外上方につまみ上げる。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面ナデ。体部内面横位の指ナデ。	砂粒・長石・石英 雲母、明赤褐色 普通	PL44-6 P99 10% 中央部床面直上
		B (13.4)				
20	甕 土 師 器	B (6.8)	平底。体部はやや内彎しながら外傾して立ち上がる。	体部外面ヘラ削り。内面は雑な指ナデ。底部に木葉痕。	砂粒・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P100 15% 覆土中
		C 7.6				
21	小形甕 土 師 器	A [14.4]	丸みを持った体部から屈曲して口縁部に移行する。口縁部は外傾し、口唇部は上方につまみ上げる。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面調整不明。体部内面横位の指ナデ。	砂粒・雲母 赤褐色・赤黒色 普通	PL44-4 P102 20% 甕付近覆土下層
		B (8.0)				

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土,色調,焼成	備 考
22	小形甕 土師器	B (9.9) C 6.2	平底。体部上位に最大径を持つ。	体部外面上半はナデ。下半はヘラ 削り。内面は横位のヘラナデ。	砂粒・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	PL44-5 P103 70% 南東隅覆土中

第238C号住居跡 (第23～25・30図, PL 7・9・44)

位置 II (H5) 区の北西部の 7 軒の重複のうちの 1 軒で, E6a4区に位置する。南東に第238B号住居跡, 北西に第238D号住居跡, 北に第238F号住居跡が重複する。

規模と平面形 主軸長4.18m, 幅4.72mの, やや横長の方形である。

主軸方向 N-13°-W

壁 ほぼ垂直に立ち上がる。壁高は50cmである。

壁溝 ほぼ全周する。北東コーナー部と北壁際の一部がよくわからなかったが, 北西コーナー部と竈部分を除いて回っていたものと思われる。幅は約20cm, 深さは約10cmである。

床 平坦で, 中央部分は踏み固められ, 堅緻である。踏み固められている範囲は広く, コーナー部分を除いて, ほぼ全体に及ぶ。

ピット 6か所(P₁~P₆)。P₁~P₄は径18~25cm, 深さ25~40cmの円形ピットで, 位置等から支柱穴と考えられる。P₅は長径43cmの楕円形のピットで, 深さは約25cmである。南壁に接している。南壁の中央部という位置から, 入口ピットと考えられる。P₆は, 長径37cmの平面楕円形で, 深さは37cmである。竈火床部に掘り込んでいた形であるが, 住居跡に伴うかどうかも含め, 性格は不明である。

竈 北壁中央部に構築されていたが, 第238D号および第238F号住居跡の重複する部分であり, これらの住居跡によって破壊され, 火床部のみしか残存していない。火床は, 北壁の内側部分を深さ4cmほど皿状に掘り込んでいる。あまり焼けた痕跡はない。なお, 竈の手前の部分には竈材の崩壊した粘土塊が残存している。

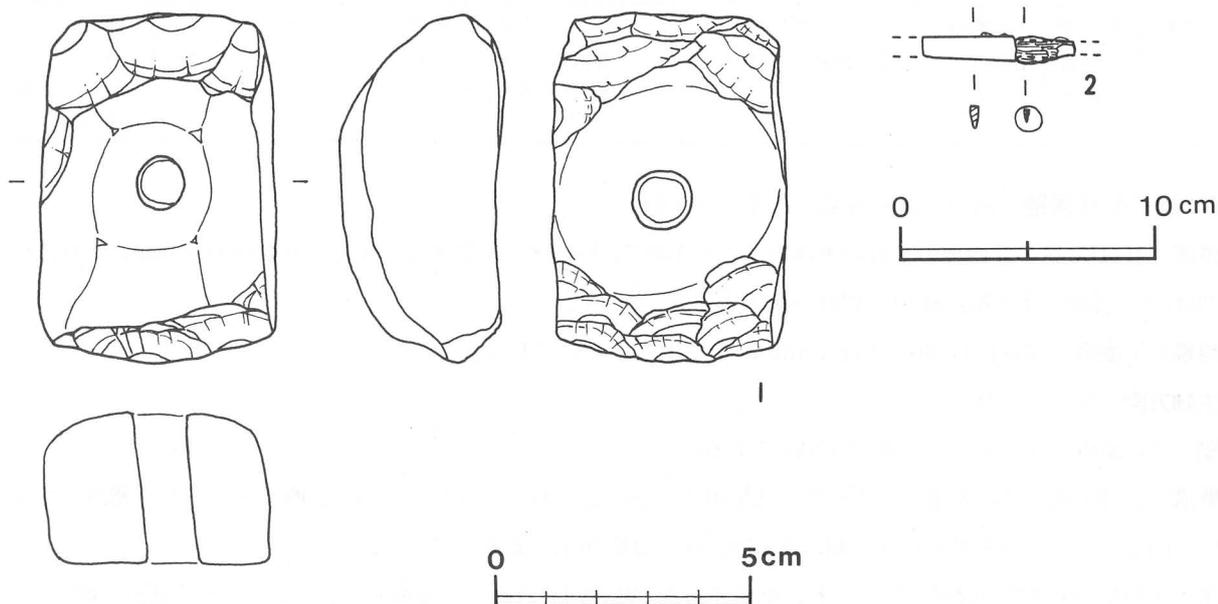
覆土 土層断面図中, 第29層, 第31・32層, 第41~44層, 第46~50層, 及び第52~53層が本住居跡の覆土で, 自然堆積の様相を示す。第238D号住居跡, 及び第238B号住居跡によって切られている。

土層解説

29	暗赤褐色	焼土粒子中量, 炭化粒子少量	46	黒褐色	焼土小ブロック中量, 炭化粒子微量
31	暗褐色	焼土大ブロック・中ブロック・粒子多量, 炭化粒子少量	47	暗赤褐色	焼土粒子中量, ローム中ブロック中量
32	褐色	焼土中ブロック微量・粒子中量	48	暗褐色	焼土中ブロック・粒子微量
41	暗オリーブ褐色	焼土粒子少量, ローム大ブロック・中ブロック・小ブロック中量	49	褐色	焼土粒子微量
42	褐色	焼土中ブロック微量, ローム小ブロック微量	50	黄褐色	焼土粒子中量, ローム大ブロック・中ブロック中量
43	暗褐色	ローム中ブロック微量	51	明黄褐色	ロームブロック
44	褐色	焼土粒子微量	52	黄褐色	焼土粒子少量
45	黒褐色	焼土小ブロック微量	53	オリーブ褐色	焼土粒子微量
			54	黄色	ローム中ブロック・小ブロック多量

遺物 土器の出土は少なく, ほとんどが細片である。重複する第238D号住居跡の貼床下から砥石を転用した紡錘車が, 南壁際からは刀子の破片が出土している。

所見 切り合い関係から見て, 重複する第238B号・第238D号・第238F号住居跡よりも古い。竈の付設と重複する住居跡の年代から, 6世紀以降, 9世紀前葉以前というごく大まかな年代幅には入るが, 出土遺物からの細かい年代決定は不可能である。



第30図 第238C号住居跡出土遺物実測図

第238C号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値				出土状況	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第30図1	紡錘車	6.9	4.6	3.3	139.3	竈～北西コーナー間の壁際	PL44-8, Q 3, 砂岩, 砥石を転用
2	刀子	(7.0)	1.2	0.3	(5.9)	南壁東半の壁際覆土下層	PL44-7, M 2, 茎に木質錆着

第238D号住居跡 (第23～25・27・31・32図, PL7・10・44～46)

位置 D6j4区に位置する。第238C号・第238F号住居跡と重複している。

規模と平面形 東側半分は住居跡との重複, 西側は第238E号住居跡との間の攪乱により全体が明らかではないが, 平面形はおおよそ推定復元することができ, 規模は残存部分によって計測できる。それによれば, 主軸長4.12m, 幅3.95mの方形である。

主軸方向 N-15°-W

壁 壁高10cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 南壁際の中央西寄りにのみ, 壁溝が認められる。幅15～20cm, 深さ5～8cmで, 断面は逆台形である。

床 南東部で第238C号住居跡の覆土を掘り込んで作っているが, 第238C号住居跡の床面が15cmほど深いため, その部分は貼床をしている。貼床部分は傾斜しているが, ほかは平坦である。中央部分は踏み固められ, 堅緻である。

ピット 4か所(P₁～P₄)。P₁は, 南壁際の, 竈に対応する位置にあり, 径約30cmの円形で, 深さは約20cmある。これは入口ピットであろう。P₂～P₄は, 位置等から本住居跡に伴うかどうか疑問である。

竈 北壁中央部を三角形に掘り込み, 構築している。この部分は第238F号住居跡の西壁に重複する部分で, 第238F号住居跡の西壁と覆土を切る形でこの竈が構築されている。砂まじりの粘土で構築していたようで, 竈材は散在していたが, 袖は残存していない。火床部は, 床面から15cmほど掘り凹めてつくる。火床面は, 主として壁の線より外側が焼けて赤変している。火床部の手前部分にはピットを持つ。煙道は, 第238F号住居跡の覆土上を, 30°程で緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 暗褐色 焼土小ブロック・粒子微量,炭化物・炭化粒子微量,粘土粒子微量
- 2 黒褐色 焼土小ブロック・粒子微量,炭化粒子微量,粘土小ブロック・粒子微量
- 3 褐色 焼土粒子微量,粘土粒子微量
- 4 褐色 焼土小ブロック・粒子微量,炭化物微量,粘土粒子微量
- 5 におい黄褐色 焼土小ブロック・粒子微量,粘土中ブロック・小ブロック・粒子微量
- 6 オリーブ褐色 焼土粒子微量,ローム粒子多量

覆土 土層断面図中,第25~28層,第30層,及び第55~60層が本住居跡の覆土である。自然堆積の様相を示す層が多いが,一部ロームブロックを多く含むなど人為的に埋め戻されたと思われる層がある。第238C号,及び第238F号住居跡の覆土を切っている。

土層解説

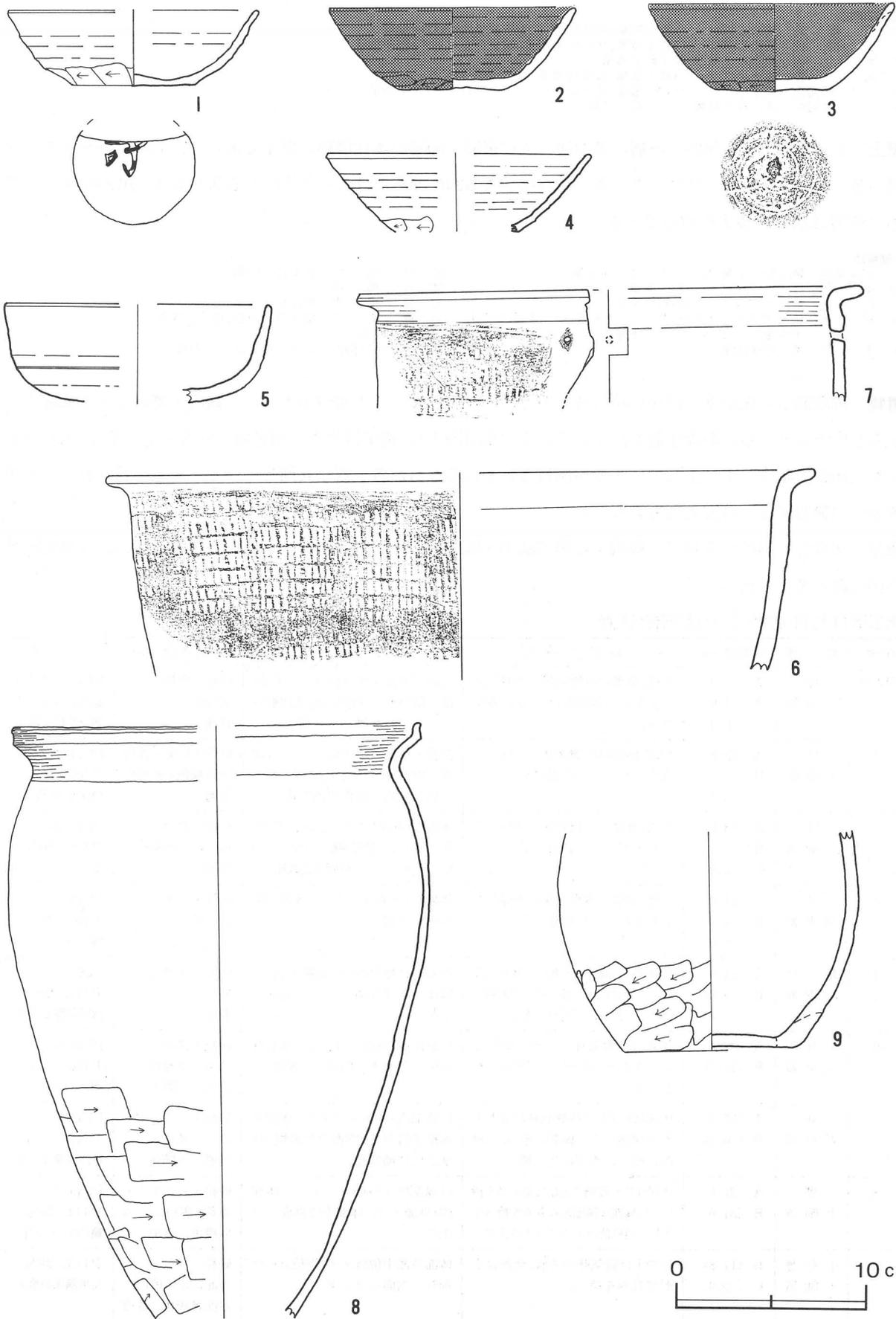
- 25 暗赤褐色 焼土粒子少量,ローム小ブロック多量
- 26 褐色 ローム中ブロック・粒子多量
- 27 暗褐色 焼土小ブロック少量・粒子中量
- 28 褐色 焼土大ブロック中量・中ブロック多量・粒子多量,炭化粒子中量,ローム大ブロック多量・小ブロック中量
- 30 黒褐色 焼土粒子微量
- 55 黒褐色 焼土粒子中量
- 56 黄褐色
- 57 黄褐色 焼土粒子微量
- 58 黄褐色 焼土粒子少量,炭化物少量
- 59 暗灰黄色
- 60 オリーブ褐色 ローム中ブロック中量

遺物 確認面から床面までが浅い住居跡であるが,比較的多くの土器が出土した。竈内・竈付近・床面直上等からも出土している。墨書土器が出土している(第31図1)。格子目叩きの須恵器(同6・7・第32図11・12)が本住居跡で集中して出土しているのが注目される。叩き目が各土器に共通していることも注目される。須恵器高坏(第31図5)は混入と考えられる。

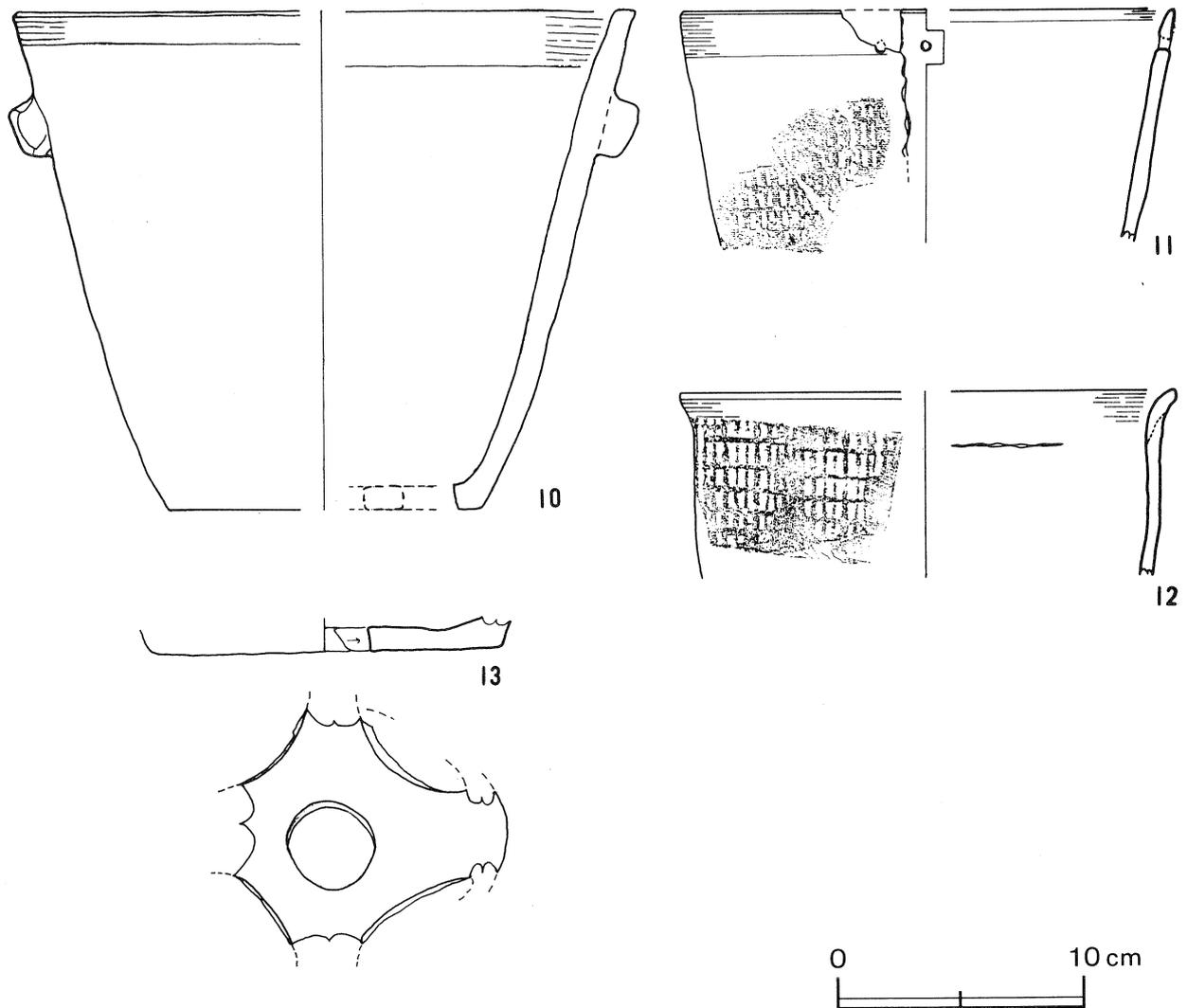
所見 切り合い関係から見て,重複する第238C号・第238F号住居跡より新しい。出土遺物からは,9世紀後葉の住居跡と考えられる。

第238D号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土,色調,焼成	備考
第31図 1	坏 土師器	A [13.0]	平底。体部は内彎気味に外傾して立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	内面~体部中位外面ヨコナデ。体部下位外面ヘラ削り。底部回転ヘラ削り,のち静止ヘラ削り。	砂粒・雲母 灰白色 普通	PL45-1, P104 45%,中央部下層,底部に墨痕
		B 4.0				
		C 6.4				
2	坏 土師器	A 12.8	平底。体部は内彎気味に外傾して立ち上がり,口唇部に至る。	内面~体部下位外面ヨコナデ。体部下位外面ヘラ削り。底部回転ヘラ削り。内・外面黒色処理。	砂粒・石英・雲母 灰黄褐色・黒褐色 普通	PL44-9 P107, 70% 竈東側壁際
		B 4.4				
		C 5.6				
3	坏 土師器	A 13.0	平底。体部は内彎気味に外傾して立ち上がり,口唇部に至る。	体部内・外面ヨコナデ。体部下位外面ヘラ削り。底部回転ヘラ削り,のちヘラ削り。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 褐灰色・黒褐色 普通	PL44-10 P108, 50% 覆土中
		B 4.7				
		C 5.9				
4	坏 須恵器	A [14.0]	平底。体部は内彎気味に外傾して立ち上がり,口唇部に至る。	体部内・外面ヨコナデ。体部下位外面ヘラ削り。	砂粒・石英 灰白色 普通	PL45-3 P109, 40% 覆土中
		B 4.2				
		C [6.0]				
5	高坏 須恵器	A [14.0]	坏部破片。底部は内彎し,体部は底部との間ににおい稜を持って直線的に立ち上がり,口唇部に至る。	内面自然釉等のため調整不明。口縁部~体部外面ヨコナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・長石 黒色 普通	PL45-4 P111, 20% 西壁際覆土下層
		B (5.2)				
6	鉢 須恵器	A [37.4]	体部は内彎気味にやや外傾して立ち上がり,屈曲して口縁部に移行する。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面格子目叩き。内面ナデ調整。	砂粒・雲母 におい黄橙色 普通,土師質	PL45-5 P116, 5% 竈内ほか
		B (10.7)				
7	鉢 須恵器	A [26.4]	体部はわずかに内彎気味に立ち上がり屈曲して口縁部に至る。口縁部は短く,水平に近く開く。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面格子目叩き。内面ナデ調整。体部上位に補修孔。	砂粒・スコリア におい黄橙色 普通,土師質	PL45-6 P117, 5% 竈南側覆土下層
		B (6.1)				
8	甕 土師器	A [21.6]	体部はやや長胴で上位に最大径を持つ。口縁部は頸部から丸みを持って外反。口唇部は上方につまみ上げ。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部内・外面ナデ。体部下位外面ヘラ削り。	砂粒・スコリア・石英・雲母,におい橙色,普通	PL45-2 P112, 30% 竈内ピット中
		B (31.6)				
9	小形甕 土師器	B (11.8)	やや上げ底気味の平底。体部は小形で丸みを持つ。	体部外面中位はナデ,下位はヘラ削り。内面ヘラナデ。	砂粒 外面におい橙色,内面黄灰色,普通	P113, 20% 北東隅床面直上
		C [9.0]				
第32図 10	甕 須恵器	A [25.4]	平底に5個の開孔部を持つタイプと推定。体部から口縁部まで外傾して直線的に立ち上がる。瘤状の把手。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面ナデ,一部にハケ目残存。内面横位のヘラナデ。	砂粒・石英 浅黄色 普通,土師質	PL45-7 P115, 45% 竈内
		B 20.9				
		C [13.0]				



第31图 第238D号住居跡出土遺物実測図(1)



第32図 第238D号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土、色調、焼成	備考
第32図 11	甑 須恵器	A〔20.0〕 B〔9.9〕	体部から口縁部まで外傾して直線的に立ち上がる。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面格子目叩き。内面ナデ調整。口縁部に補修孔2か所。	砂粒 にぶい橙色 普通，土師質	PL46-1 P118，5% 竈内
12	甑 須恵器	A〔20.4〕 B〔7.8〕	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は短く外反する。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面格子目叩き。内面ナデ調整。	砂粒・スコリア・ 雲母，にぶい黄橙色，土師質	PL46-2 P119，5% 竈内
13	甑 須恵器	B〔1.4〕 C〔14.4〕	底部破片。平底に円孔と柳葉形の開孔部計5か所を持つ。	底部内・外面ナデ。ヘラ状工具で開孔する。	砂粒・雲母 浅黄橙色 普通，土師質	PL46-3 P125，5% 竈上層

第238E号住居跡（第23～26・33図，PL7・10・46）

位置 第238D号住居跡の西側，D6₃区に位置する。前述のとおり，調査の進捗により昭和63年度に調査された第94号住居跡と同一の住居跡であることが判明した。すでに第94号住居跡として報告もされているが，今回調査関係については図面・遺物注記等すべて第238E号住居跡となっているので，ここでは調査時の呼称のみで報告しておく。なお，当初第238D号住居跡と重複するものと考えられ，そのため第238E号と呼称したが，第238D号住居跡とは攪乱によってつながっているのみで，重複はしていなかった。

規模と平面形 昭和63年度調査の成果も含めて記す。主軸長4.78m, 幅5.08mの方形である。

主軸方向 N-47°-W

壁 壁高75cm程で, 垂直に立ち上がる。

壁溝 西コーナー部を除いて, 全周している。幅20~30cm, 深さ8~20cmで, 断面はU字形である。

床 平坦で, 周辺部を除いて, 広く踏み固められ, 堅緻である。

ピット 前回調査で3か所(P₁~P₃)確認されている。平成5年度調査でさらに3か所(P₄~P₆)確認された。平面形はいずれも円形, または楕円形である。P₄は径約20cm, 深さ65cmである。P₅は径35cm, 深さ57cmである。P₁・P₂・P₄・P₅は, 規模に差はあるものの, 位置から見て支柱穴と考えられる。P₆は径36cm, 深さ20cmで, 底面は平坦ではなく, 住居跡の中心部側が低くなっている。位置から見て, 入口ピットと考えられる。

竈 北西壁中央部に構築されている。昭和63年度に調査され, すでに報告済みである。

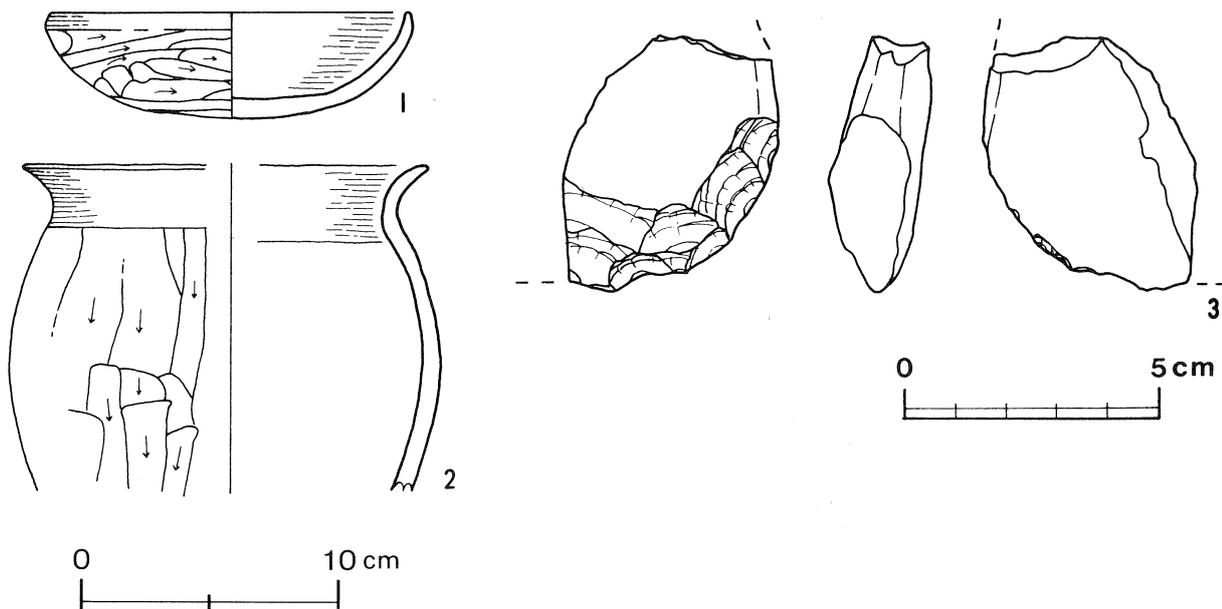
覆土 土層断面図中, 第61~65層が本住居跡の覆土である。自然堆積の様相を示している。

土層解説

- 61 明黄褐色 ローム大ブロック多量
- 62 褐色
- 63 暗褐色 ローム中ブロック中量
- 64 明黄褐色 ローム中ブロック中量
- 65 黒褐色 炭化粒子微量
- 66 明黄褐色 ローム中ブロック中量, ローム粒子多量

遺物 今回の調査区域では出土遺物は少ないが, 図示した土器は深い住居跡の覆土下層から出土しており, 本住居跡に伴う遺物と考えられる。打製石斧(第33図3)は混入である。

所見 出土遺物が少なく時期決定が困難であるが, 一応6世紀後半の住居跡と考えておく。



第33図 第238E号住居跡出土遺物実測図

第238E号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土,色調,焼成	備考	
第33図 1	坏 土師器	A 14.0 B 4.2	丸底。体部は内彎して立ち上がり,にぶい稜を持って短く内傾気味の口縁部に移行する。	口縁部内外面・体部内面ヨコナデ。体部～底部外面ヘラ削り。底部内面ナデ。	砂粒・スコリア・雲母,にぶい赤褐色,普通	PL46-4 P127 80% 南東壁際下層	
2	小形甕 土師器	A [15.7] B (12.9)	体部は内彎して立ち上がる。最大径は中～上位の境界付近。口縁部は頸部から丸みを持って外反する。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面ヘラ削り。内面ナデ調整。	砂粒・石英・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P128 10% 北隅床面直上	
図版番号	器種	計測値				出土状況	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
3	打製石斧	(5.1)	(5.3)	2.0	(40.8)	覆土中	PL46-5, Q4, 粘板岩

第238F号住居跡 (第23～25・27・34図, PL7・11・46)

位置 II (H5) 区の北西部, D6₄区に位置し, 第238C号・第238D号・第238G号住居跡と重複して確認されている。規模と平面形 主軸長4.27m, 幅4.45mのやや幅広の方形である。

主軸方向 N-69°-E

壁 壁高20cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 竈部分を除き, 壁が残存した部分では壁溝も認められた。幅は部位により差があり, 15～40cm, 深さは10cm程で, 断面はU字形である。

床 平坦で, 中央部は踏み固められ, 堅緻である。

ピット 5か所 (P₁～P₅)。P₁はピットが2つ連結したものと思われ, 平面は長軸55cm, 短軸35cmの楕円形で, 深さは約40cmある。P₂・P₃・P₄は径25～35cm, 深さ40～45cmの円形ピットである。P₁～P₄が, 全体に中央に寄っている感があるが, 位置から見て支柱穴であろう。P₅は径35cmの円形のピットで, 深さは約30cmある。位置的に, 壁からやや離れ過ぎ, 竈に正しく対応してはいないが, 入口ピットと推定しておく。

竈 東壁の中央部に, 砂まじりの粘土で構築している。掘り方は, 東壁を幅85cmにわたり, 30cm程掘り込んでいる。火床部は緩やかに凹み, 火床面は中央部が径22cm程の円形に焼けて赤変・硬化している。赤変している部分は壁の線より内側である。煙道は, 段を持って, 緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

1	にぶい赤褐色	焼土中ブロック微量・小ブロック少量・粒子少量,炭化粒子微量,粘土粒子微量	5	黒褐色	焼土粒子少量,炭化粒子微量,粘土粒子微量
2	暗褐色	焼土小ブロック微量・粒子少量,炭化物微量,粘土中ブロック微量・小ブロック微量・粒子少量	6	黄褐色	焼土小ブロック微量・粒子少量,粘土中ブロック微量・粒子中量
3	灰褐色	焼土小ブロック微量・粒子少量,粘土粒子微量,灰中量	7	黒褐色	焼土小ブロック・粒子微量,粘土粒子微量,灰微量
4	褐色	焼土小ブロック・粒子微量,炭化粒子微量,粘土粒子微量	8	にぶい黄色	焼土小ブロック・粒子微量,粘土小ブロック中量・粒子多量
			9	暗赤褐色	焼土中ブロック微量・小ブロック微量・粒子多量,粘土粒子微量

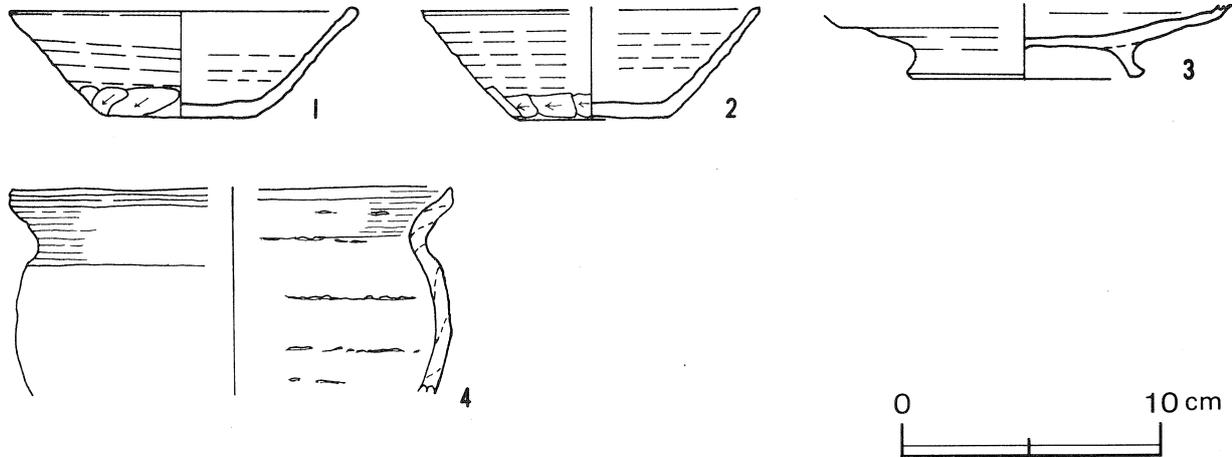
覆土 土層断面図中, 第22～24層, 及び第75～81層が本住居跡の覆土で, 多くは自然堆積と考えられるが, 一部人為的に埋め戻しと考えられる層がある。第238C号住居跡の覆土を切っている。第238G号住居跡との関係は, 攪乱により不明である。第238D号住居跡との関係は, 図化していないが, CC'のセクションバルトの裏側で第238D号住居跡が本住居跡の覆土を切っているのが観察されており, 第238D号住居跡のほうが新しい。

土層解説

22	褐色	炭化物少量,ローム大ブロック多量・中ブロック少量・小ブロック少量	77	灰黄色	焼土粒子微量
23	暗赤褐色	焼土粒子中量,炭化粒子少量	78	明黄褐色	
24	暗赤褐色	焼土粒子少量,ローム小ブロック多量	79	オリーブ褐色	
75	黄褐色	焼土粒子微量,ローム小ブロック中量	80	明黄褐色	ローム粒子多量
76	明灰黄色		81	黄褐色	焼土粒子少量

遺物 出土した遺物は多くないが、図示した遺物はいずれも竈内、または竈付近の覆土下層からの出土で、本住居跡に伴うものと考えられる。

所見 切り合い関係から、第238C号住居跡より新しく、第238D号住居跡より古い。遺物から見て、本住居跡は9世紀中葉のものと考えられる。第238G号住居跡との新旧関係は、切り合い関係からは不明であるが、遺物からは本住居跡がやや古いように思われる。



第34図 第238F号住居跡出土遺物実測図

第238F号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土、色調、焼成	備考
第34図 1	坏 土師器	A 13.4 B 4.0 C 5.4	平底。体部は外傾してわずかに内彎気味に立ち上がり、口縁部はやや外反気味となる。	内面～体部中位外面ヨコナデ。下位外面ヘラ削り。底部は一定方向の静止ヘラ削り。	砂粒・スコリア・石英、橙色 普通	PL46-6 P130 60% 竈付近覆土下層
2	坏 須恵器	A [13.0] B 4.3 C 5.6	平底。体部から口縁部まで外傾してほぼ直線的に立ち上がる。	内・外面ヨコナデ。体部下位外面ヘラ削り。底部は回転ヘラ削り、のち雑な一定方向の静止ヘラ削り。	砂粒・石英・雲母 灰オリーブ色 普通	P131 60% 竈付近覆土下層
3	高台付盤 須恵器	B (2.9) D 8.6 E 1.1	平底に「ハ」の字状の高台が付く。体部は大きく開き、口縁部はにぶい稜を持って体部から立ち上がる。	内・外面・高台ヨコナデ。底部(高台内部)回転ヘラ削り。高台は貼り付け。	砂粒・スコリア・石英・雲母、鈍い黄褐色、土師質	PL46-7 P132 60% 竈付近覆土下層
4	小形甕 土師器	A [17.0] B (8.2)	体部はやや強く内彎しながら立ち上がる。頸部はやや強く屈曲。口縁部は外反し、端部はつまみ上げる。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部内・外面ナデ調整。	砂粒・石英・雲母 にぶい黄橙色 普通	PL46-8 P135 30% 竈内

第238G号住居跡 (第23～25・27・35図, PL7・11・46)

位置 調査区の北西部, D6₁₄区に位置する。第238F号住居跡と重複する。

規模と平面形 東南部が不明であるが、残存部から復元すると、主軸長3.06m、幅3.28mの方形である。

主軸方向 N-26°-W

壁 壁高20cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 認められない。

床 中央部が細長く踏み固められている。

ピット 5か所(P₁~P₅)。P₁~P₄は、径20~30cm、深さ38~52cmの円形ピットであるが、位置から見て、本住居跡に伴うかどうかは疑問である。P₅は、径27~30cm、深さ18cmの不整形のピットである。位置から見て、入口ピットの可能性が高いと思われる。

竈 北西壁中央部に、北西壁を45cm程掘り込んで、砂まじりの粘土で構築していたようである。ただ、調査時

には袖は残存せず、竈材が周囲にわずかに散っていた程度である。また、西袖部分に攪乱が入っている。火床部は7cm程掘り凹めている。覆土には焼土・炭化物が交じっているが、火床面はほとんど焼けていない。煙道は、約40°で緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 褐色 焼土小ブロック, 粒子微量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 焼土小ブロック・粒子少量, 炭化粒子微量
- 3 褐色 焼土粒子微量

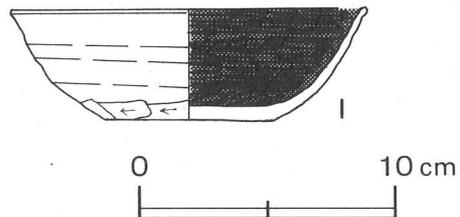
覆土 土層断面図中、第19～21層、及び第66～74層が本住居跡の覆土である。自然堆積と考えられる。第238F号住居跡とは重複しているが、攪乱により、土層断面では新旧関係は捉えられない。

土層解説

- 19 褐色 ローム小ブロック多量
- 20 褐色 ローム小ブロック多量
- 21 暗褐色 褐色
- 66 褐色 炭化粒子多量, ローム中ブロック多量
- 67 褐色 焼土粒子微量, ローム中ブロック多量
- 68 褐色 ローム中ブロック中量
- 69 明黄褐色 ローム大ブロック多量
- 70 暗褐色 焼土粒子少量
- 71 褐色 焼土粒子少量
- 72 明黄灰色
- 73 明黄褐色 ローム中ブロック中量
- 74 オリーブ褐色 ローム小ブロック中量

遺物 出土遺物は少ない。図示できた遺物は1点にとどまるが、覆土下層からの出土であり、本住居跡に伴うものと考えられる。

なお、第238号住居跡一括出土遺物について、観察表により解説しておく(第36図, PL46・47)。



第35図 第238G号住居跡出土遺物実測図

所見 切り合い関係からは第238F号住居跡との新旧関係は不明である。遺物から時期を決定するのは困難であるが、一応9世紀後葉と考えておく。この時期決定を前提にすれば、第238G号住居跡が新しいことになる。

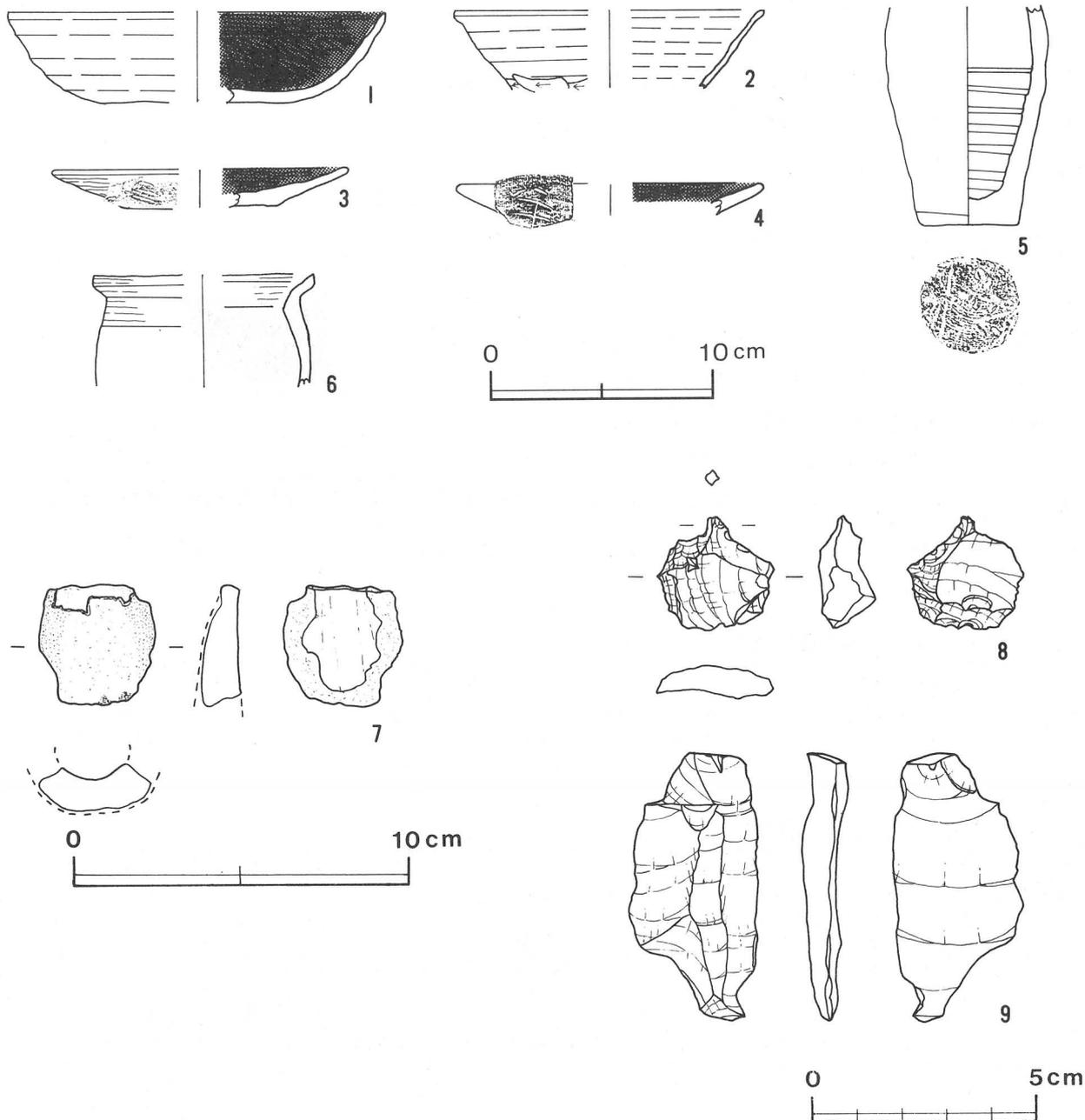
第238G号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土, 色調, 焼成	備考
第35図 1	坏 土師器	A 13.8	平底。体部は内彎しながら外傾して立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	内面磨き・黒色処理。体部上～中位外面ヨコナデ, 下位ヘラ削り。底部一定方向のヘラ削り。	砂粒・スコリア・石英, 橙色 普通	PL46-9 P141 70% 中央部覆土下層
		B 4.5				
		C 6.5				

第238号住居跡(一括)出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土, 色調, 焼成	備考
第36図 1	坏 土師器	A [16.8]	平底。体部は内彎しながら外傾して立ち上がり, 直線的に口縁部に移行する。	内面磨き・黒色処理。体部上～中位外面ヨコナデ・下位ヘラ削り。底部回転ヘラ削り。	砂粒・スコリア・雲母, 橙色 普通	P142 20% 覆土中
		B 4.2				
		C [7.6]				
2	坏 須恵器	A [14.0]	体部は大きく外傾して直線的に立ち上がり, 口縁部はわずかに外反する。	内・外面ヨコナデ。体部下位外面ヘラ削り。	砂粒・石英・雲母 内面灰色・外面黒色, 普通	PL46-10 P143 40% 覆土中
		B (3.6)				
3	皿 土師器	A [13.2]	平底。体部～口縁部はほぼ直線的に大きく開く。	内面磨き・黒色処理。体部外面ヨコナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・石英・雲母 にぶい橙色 普通	PL46-11 P144 20% 覆土中 体部外面にヘラ書き「三」?
		B 1.7				
		C [7.0]				
4	皿 土師器	A [14.0]	体部～口縁部破片。外反気味に大きく開く。	内面磨き。体部外面ヨコナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・スコリア・雲母 褐灰色 普通	PL47-1 P145 5%, 覆土中 体部外面にヘラ書き文字「主」
		B (1.4)				
5	浄 須恵器	B (10.0)	平底。体部はわずかに外傾して直線的に立ち上がり, 中位で内彎する。最大径は体部中～上位の境界付近。	体部内・外面ヨコナデ, のち外面ナデ。底部回転糸切り, のちヘラ削り。	砂粒・礫・長石 灰色 良好	PL47-2 P151 20% 覆土中
		C 4.5				
6	小形 土師器	A [9.8]	肩部は緩やかにすぼまり, 頸部は強く屈曲して短い口縁部に移行する。口唇部は上方につまみ上げる。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・石英・雲母 灰褐色 普通	P149 5% 覆土中
		B (5.2)				

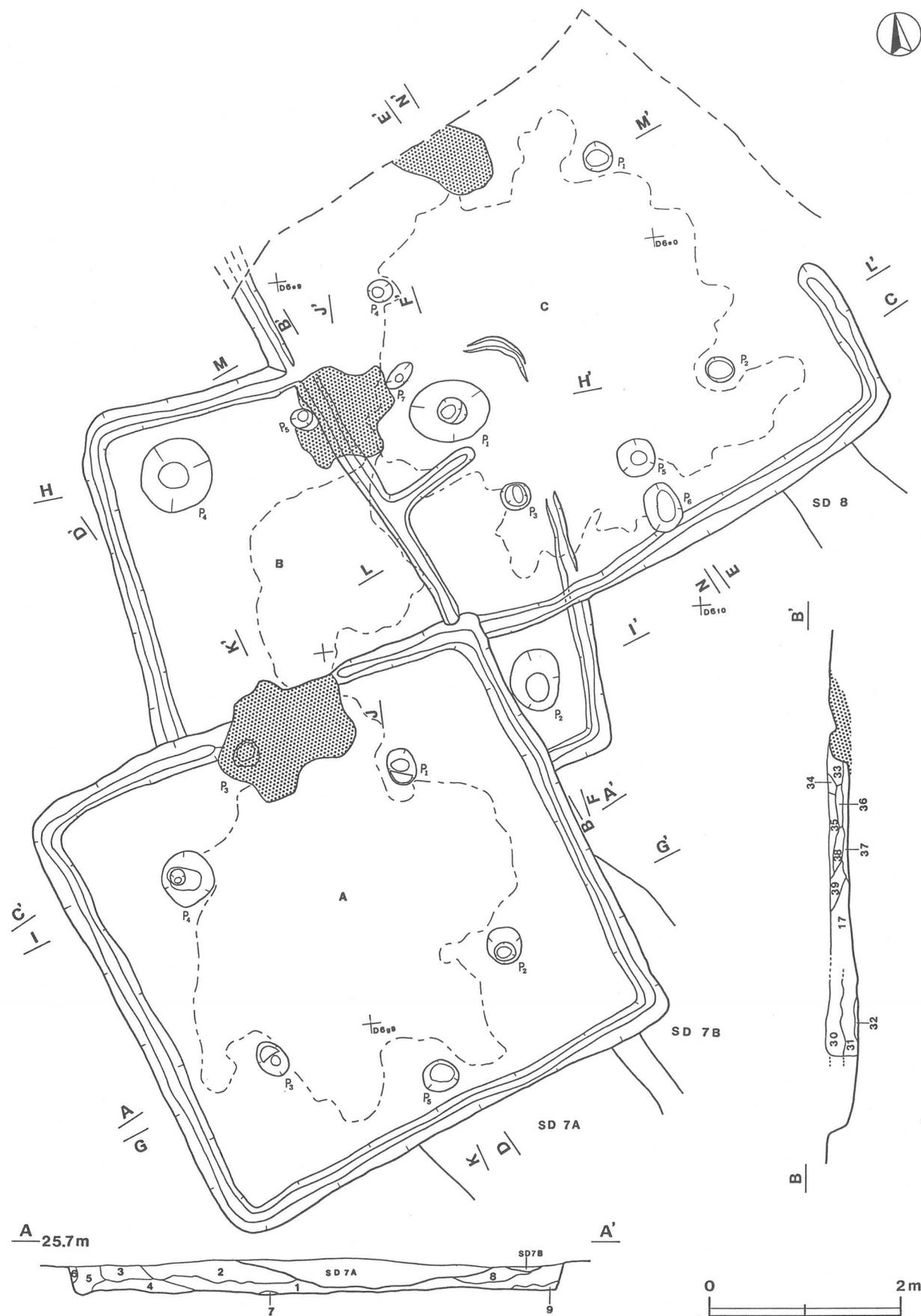
図版番号	器種	計測値				出土状況	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第36図1	羽口	(3.7)	(3.0)	(1.3)	(17.0)	覆土中	PL47-3, DP 3
2	石錐	2.7	2.7	1.3	4.9	覆土中	PL47-4, Q 6, 黒耀石
3	剝片	6.2	2.9	0.9	12.9	覆土中	PL47-5, Q 5, 安山岩?



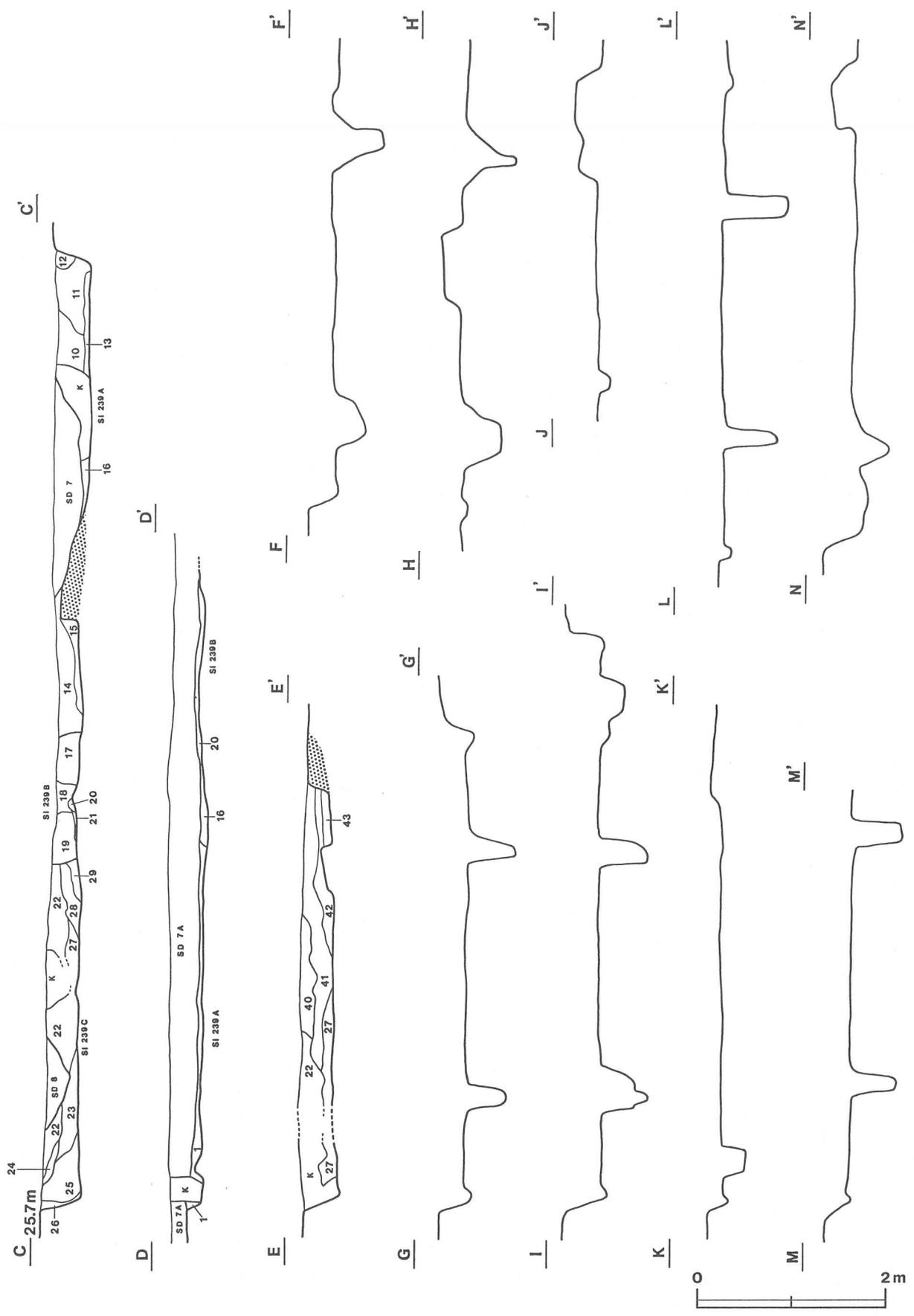
第36図 第238号住居跡（一括）出土遺物実測図

第239A号住居跡（第37～42図，PL12・13・47・48）

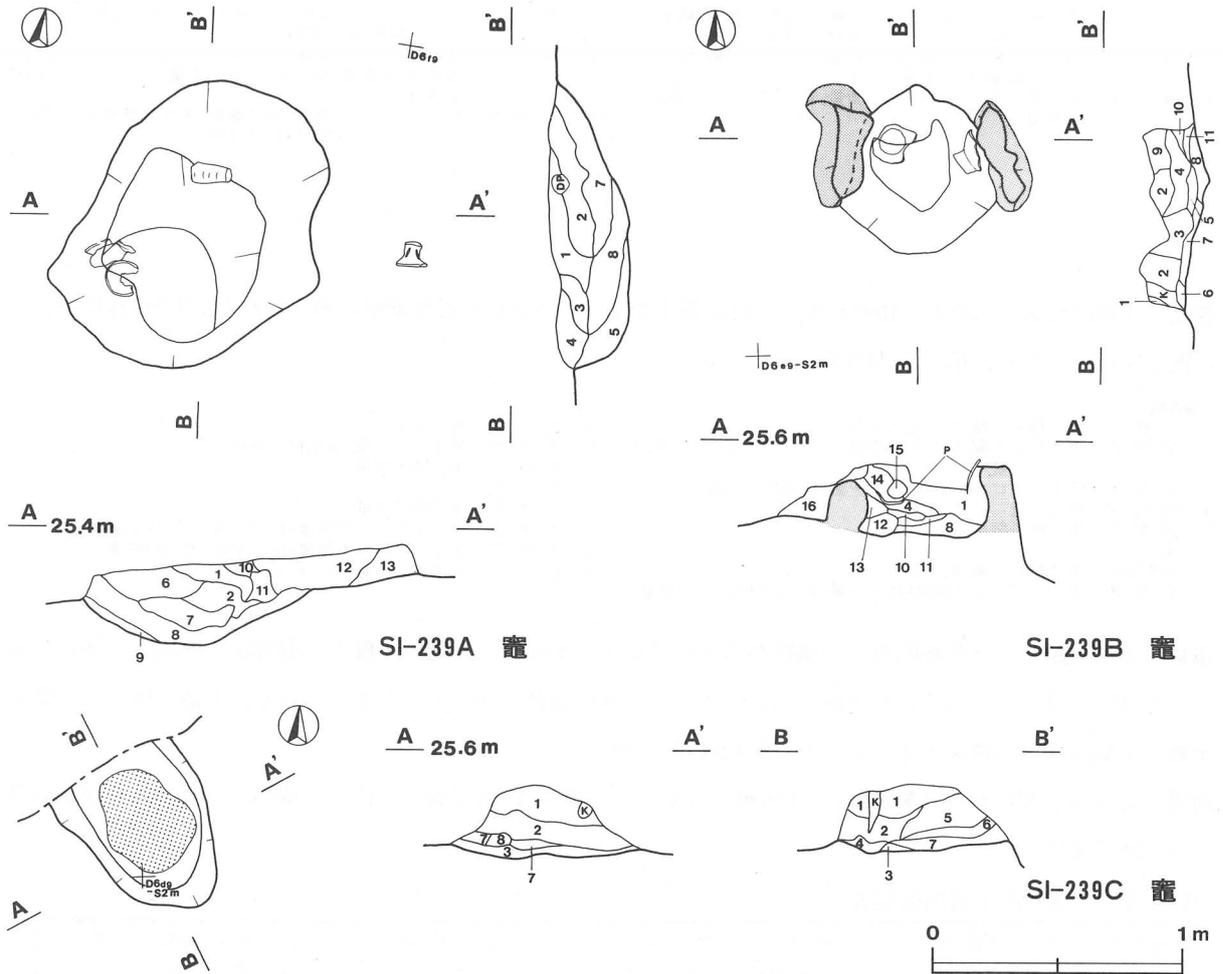
位置 II (H5) 区の北東端に3軒の住居跡が重複して位置していた。溝も重複しており、当初は住居跡の軒数や平面形が把握できなかったため、一括して第239号住居跡とし、確認順に南西のものをA、中央をB、北東をCとした。第239A号住居跡は、D6f8区に位置する。第239B号住居跡・第239C号住居跡・第7A・B号溝と重複している。



第37图 第239A·B·C号住居跡実測图(1)



第38图 第239A·B·C号住居跡実測图(2)



第39図 第239A・B・C号住居跡竈実測図

規模と平面形 主軸長5.00m，幅5.37mの方形である。

主軸方向 N-18°-W

壁 壁高は45cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦で，中央部は踏み固められ，堅緻である。

ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁~P₄は，径30~60cm，深さ43~50cmの円形ないし不整形円のピットである。コーナーに近い位置，および配置から見て，支柱穴と考えられる。P₅は径35cmの円形のピットで，深さは25cmである。やや南壁の方に傾斜している。位置・形状から入口ピットと考えられる。

竈 北壁中央部 (第238B号住居跡覆土) を掘り込んで構築している。両袖とも残存しないが，火床部上，及び周辺に砂まじりの粘土が散在しており，砂まじりの粘土で構築されていたものと考えられる。火床部は最大でも7cm程しか掘り凹めていない。火床面 (図中，第5・7・8層上面) は，ほとんど焼けていない。煙道の立ち上がりは25°程で，極めて緩やかである。遺物は，火床面から少し浮いた状態で土製支脚が出土し，西に寄った位置からは甕が出土している。なお，この甕の下から，第239B号住居跡の支柱穴の1つが確認されている。

竈土層解説

- | | | | | | |
|---|--------|--------------------------------------|---|-----|--|
| 1 | にぶい赤褐色 | 焼土小ブロック少量・粒子中量，炭化粒子微量，粘土小ブロック微量・粒子微量 | 4 | 黒褐色 | 焼土小ブロック微量・粒子微量，炭化物微量・粒子微量，粘土粒子微量 |
| 2 | にぶい黄褐色 | 焼土小ブロック微量・粒子微量，粘土小ブロック微量・粒子微量 | 5 | 褐色 | 焼土小ブロック少量・粒子微量，炭化粒子微量，粘土粒子微量 |
| 3 | にぶい黄褐色 | 焼土小ブロック微量・粒子微量，粘土小ブロック微量・粒子微量 | 6 | 暗褐色 | 焼土中ブロック微量・小ブロック微量・粒子少量，粘土小ブロック微量・粒子微量 |
| | | | 7 | 暗褐色 | 焼土大ブロック微量・中ブロック微量・小ブロック少量・粒子微量，炭化物微量・粒子微量，粘土粒子微量 |

8	褐灰色	焼土中ブロック微量・粒子微量,炭化粒子微量,粘土中ブロック微量・小ブロック中量・粒子多量	11	褐色	焼土小ブロック微量・粒子微量,炭化粒子微量,粘土小ブロック微量・粒子微量
9	黒褐色	焼土小ブロック微量・粒子少量,炭化粒子微量,粘土小ブロック微量・粒子中量	12	褐灰色	焼土中ブロック微量・小ブロック少量・粒子中量,炭化物微量・粒子微量,粘土中ブロック微量・小ブロック少量・粒子中量
10	褐灰色	焼土小ブロック微量・粒子微量,粘土小ブロック微量・粒子微量	13	暗褐色	焼土中ブロック微量・粒子微量,炭化物微量・粒子微量,粘土小ブロック微量・粒子微量

覆土 土層断面図中,第1~16層が本住居跡の覆土である。いずれも自然堆積と考えられる。第239B号住居跡の覆土を切っており,第7A・B号溝によって切られている。

土層解説

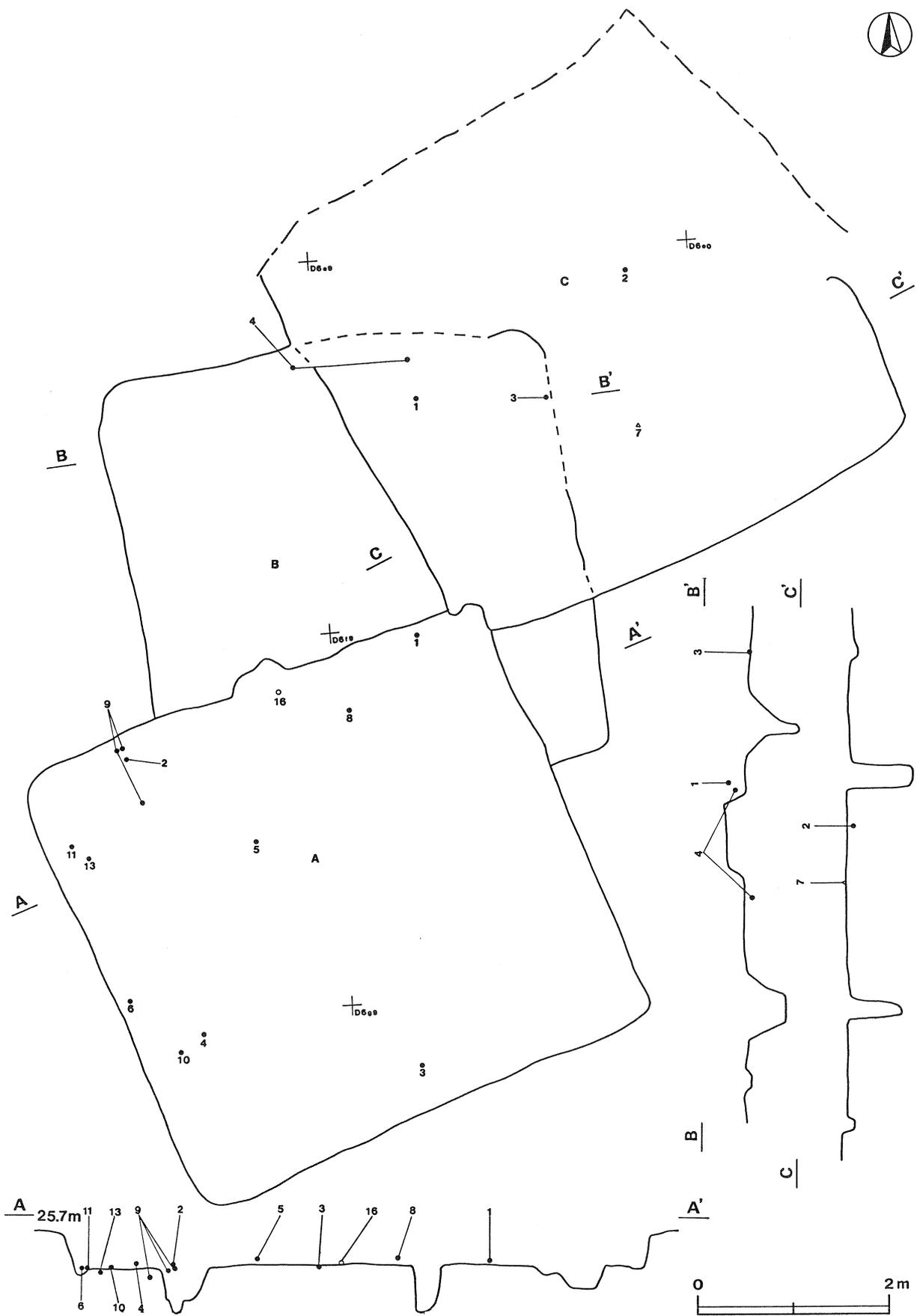
1	暗褐色	焼土粒子中量,炭化粒子少量	9	褐色	焼土少量
2	暗褐色	焼土粒子少量,炭化粒子微量,ローム小ブロック少量,粘土粒子少量	10	黒褐色	焼土粒子少量,炭化粒子微量
3	暗褐色	焼土小ブロック微量・粒子少量,炭化粒子少量	11	暗褐色	焼土粒子少量
4	暗褐色	焼土少量	12	褐色	
5	黒褐色	焼土粒子微量	13	暗褐色	焼土粒子微量
6	褐色		14	黒褐色	焼土小ブロック少量・粒子少量,炭化粒子微量
7	暗赤褐色	焼土粒子中量,粘土粒子少量	15	黒褐色	焼土小ブロック微量・粒子微量,炭化物微量
8	暗褐色	焼土小ブロック微量・粒子少量,炭化物微量・粒子微量	16	暗赤褐色	焼土粒子少量,粘土粒子少量

遺物 本住居跡からは比較的多くの遺物が出土しており,床面直上・竈内・覆土下層等からの出土も多い。凶化した遺物はほとんどこうした状況で出土しており,本住居跡に伴うものと考えられる。土器以外では,管状土錘・土製支脚・鉄鏃が出土している(第42図15~18)。

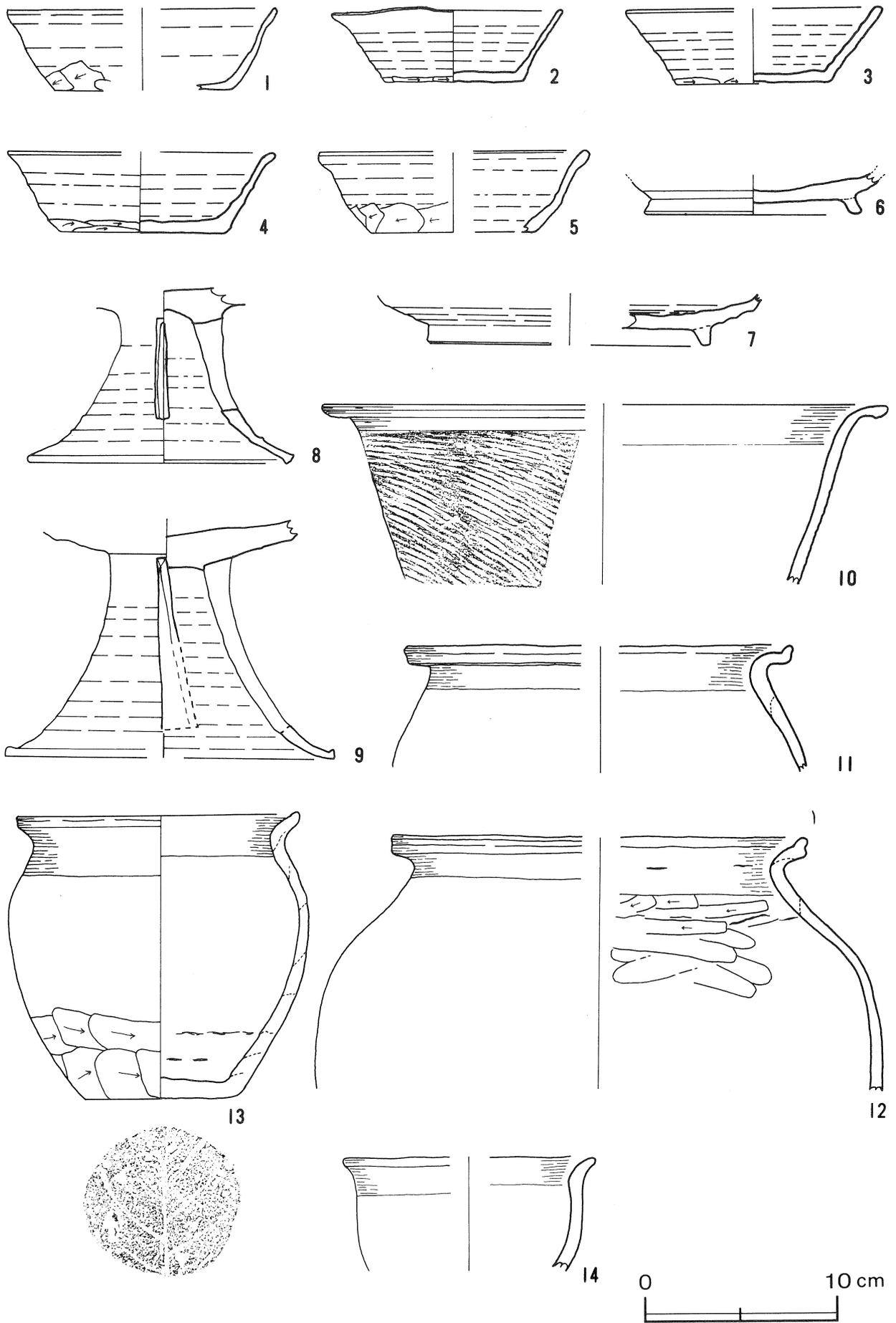
所見 切り合い関係からは第239B号住居跡より新しく,第7A・B号溝より古い。遺物から見て,9世紀前葉の住居跡である。

第239A号住居跡出土遺物観察表

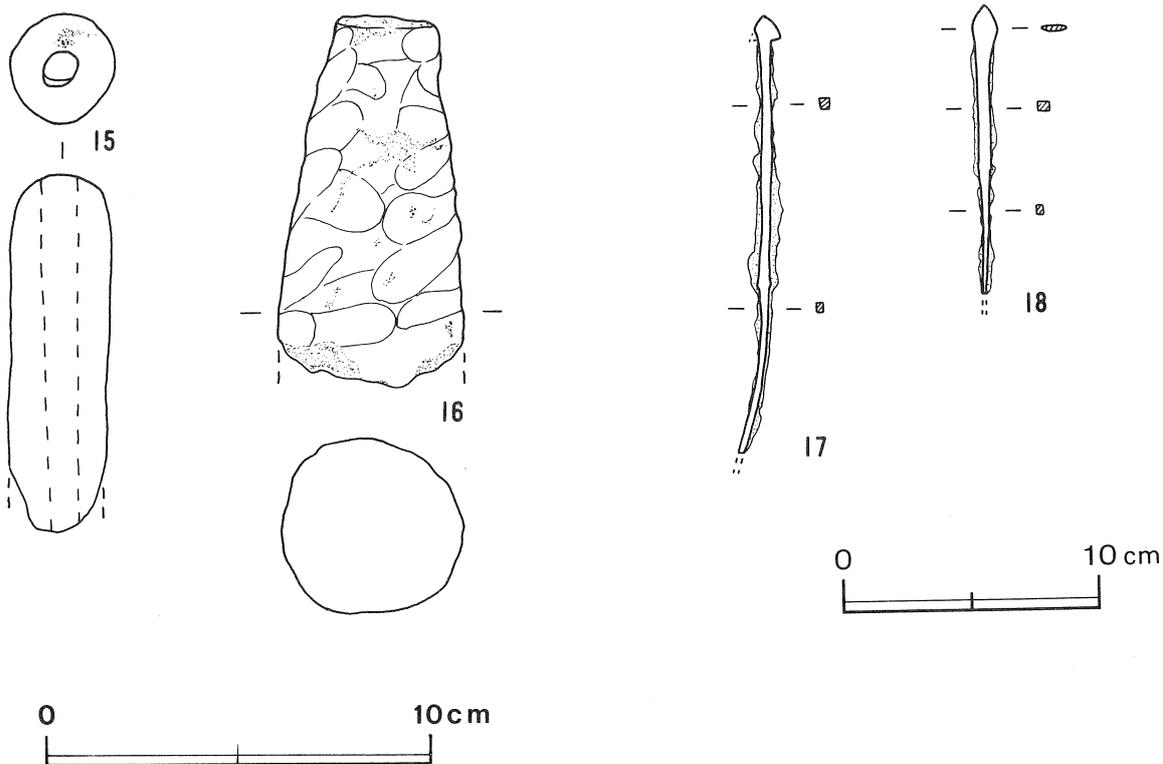
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土,色調,焼成	備考
第42図 1	坏 須恵器	A [14.0] B 4.2 C [9.1]	平底。体部は内彎気味に外傾して立ち上がり,口縁部はわずかに外反する。	内・外面ヨコナデ。体部下位外面へら削り。底部回転へら切り,のち一定方向の静止へら削り。	砂粒・スコリア・雲母,にぶい橙褐色土師質	P152 20% 北東隅床面直上
2	坏 須恵器	A 12.0 B 3.8 C 7.2	平底。体部~口縁部は外傾して直線的に立ち上がる。器厚が薄い。口縁部に歪み。	内・外面ヨコナデ。体部外面最下部へら削り。底部回転へら切り,のち丁寧な静止へら削り。	砂粒・長石 灰色 普通	PL47-9 P153 80% 北西部覆土下層
3	坏 須恵器	A [13.4] B 4.0 C 8.0	平底。体部~口縁部は外傾して直線的に立ち上がる。	内・外面ヨコナデ。体部外面最下部へら削り。底部回転へら切り,のち一定方向の静止へら削り(雑)。	砂粒・長石・雲母 灰黄色 普通	P154 60% 入口ピット付近 覆土下層
4	坏 須恵器	A [13.8] B 4.3 C 8.7	平底。体部は外傾して直線的に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	内・外面ヨコナデ。体部下位外面へら削り。底部回転へら切り,のち静止へら削り(縦横2方向)。	砂粒・石英・長石 灰黄色 普通	P155 60% 南西部覆土下層
5	坏 須恵器	A [13.8] B 4.3 C [8.4]	平底。体部は内彎しながら外傾して立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	内・外面ヨコナデ。体部下位外面へら削り。底部へら削り。	砂粒・スコリア・石英・雲母 灰白色,普通	P158 30% 覆土中
6	高台付盤 須恵器	B (2.1) D 11.2 E 0.8	平底に「ハ」の字状に開く高台が付く。体部はほとんどを欠失して不明である。	内面ヨコナデ。体部下位外面へら削り。高台は貼り付けてヨコナデ。底部(高台内側)は回転へら削り。	砂粒・雲母 にぶい黄褐色 普通	P161 50% 西壁際壁溝中
7	高台付盤 須恵器	B (2.8) D 14.6 E 1.0	平底に「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は大きく開く。口縁部は稜を持って体部から立ち上がる。	内・外面ヨコナデ。高台は貼り付けてヨコナデ。底部(高台内部)は回転へら削り。	砂粒・石英・雲母 灰白色 普通	P162 20% 覆土中
8	高盤 須恵器	B (9.3) D [13.8] E 7.7	盤部は欠失。脚部は下方に向かってラッパ状に開き,端部は下方に突出。透かしは縦長1段3孔。	内・外面ヨコナデ。	砂粒 灰白色 普通	PL47-6 P164 35% 甕付近覆土下層
9	高盤 須恵器	B (12.8) D [17.2] E 10.8	盤部は水平に近く開く。脚部は下方に向かってラッパ状に開き,端部は上方に突出。透かしは縦長1段3孔。	内・外面ヨコナデ。脚部は貼り付け。	砂粒・長石・雲母 灰白色 普通	PL47-10 P165 20% 北西部覆土下層



第40图 第239 A·B·C号住居迹出土遗物位置图



第41图 第239A号住居跡出土遺物実測図(1)



第42図 第239 A号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土,色調,焼成	備考
第41図 10	鉢 須恵器	A [29.4] B (9.6)	体部は外傾してほぼ直線的に立ち上がる。口縁部は外反し,外側に肥厚する。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面平行叩き。内面右下がりの指ナデ。	砂粒・石英・雲母 灰白色 普通	P166 10% 西北部覆土下層
11	甕 土師器	A [20.0] B (6.8)	体部上位は緩やかに内傾し,頸部で強く屈曲して,短く水平に開く口縁に至る。口縁端部はつまみ上げる。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・スコリア・ 石英 浅黄橙色 普通	PL47-7 P168 20% 西北部覆土下層
12	甕 土師器	A [21.4] B (13.4)	体部は上位でわずかに外反気味に内傾する。口縁部は外反し,端部はつまみ上げる。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面ナデ。内面指ナデ。肩部内面にはヘラ削り痕が残る。	砂粒・スコリア・ 石英, におい橙色 普通	P169 20% 竈内
13	小形甕 土師器	A 14.5 B 15.2 C 7.9	平底。体部最大径は中～上位の境界付近。口縁部は頸部から丸みを持って外反し,端部はつまみ上げる。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部内面・上～中位外面ナデ。体部下位外面ヘラ削り。底部木葉痕。	砂粒・石英・雲母 におい橙色 普通	PL47-8 P170 95% 西北部覆土下層
14	小形甕 土師器	A [13.1] B (6.1)	体部は内彎しながら立ち上がる。頸部のくびれは弱い。口縁部は短く外反する。口縁部の器厚はやや厚い。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部内面ナデ。外面は器表の荒れで調整不明。	砂粒・スコリア・ 礫 赤褐色 やや不良	P171 10% 竈内

図版番号	器種	計測値				出土状況	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第42図15	管状土錘	(9.5)	2.8	—	(63.0)	ピット内	PL47-12, DP 4
16	土製支脚	(14.7)	(7.3)	—	(540.7)	竈内	PL47-11, DP 5
17	鉄 鍬	17.4	(1.1)	0.5	(14.8)	覆土中	PL48-1, M 3
18	鉄 鍬	(11.5)	1.0	0.4	(9.3)	覆土中	PL48-2, M 4

第239B号住居跡（第37～40・43図，PL12・13・48）

位置 D6e8区に位置する。第239A号住居跡の北側，及び第239C号住居跡の南西側に重複している。

規模と平面形 重複により一部に不明の部分があるが，復元はできる。主軸長〔4.72〕m，幅4.80mの方形である。

主軸方向 N－5°－W

壁 壁高約30cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 竈と重複部分以外は全周する。幅約20cm，深さ5～8cmで，断面は逆台形である。

床 中央部分は踏み固められ，堅緻である。なお，第239C号住居跡との重複部分では，本住居跡の床の下で第239C号住居跡の床が確認された。

ピット 5か所（P₁～P₅）。P₃は，第239A号住居跡の竈の調査の際，火床面下で確認されている。P₁・P₂・P₄は径65～75cmの円形ないし不整形で，深さは35～50cmである。P₃は，確認面が低いので径は28cmと小さいが，床からの深さは60cmある。形状・位置等から見て，P₁～P₄は支柱穴と考えられる。P₅は本住居跡に伴うかどうか疑問である。入口ピットは確認されていない。

竈 北壁中央部に砂まじりの粘土を使用して構築している。両袖は残存しているが，この部分の北壁は第239C号住居跡の覆土であり，掘り方や煙道部の形状は確認できなかった。火床部の凹みは最大5cmで，ほとんど凹んでいない。また，火床面はあまり焼けておらず，著しく赤化した部分は認められない。

竈土層解説

1 灰褐色	焼土粒子微量，粘土粒子多量	10 にぶい黄褐色	焼土小ブロック微量・粒子微量，粘土小ブロック微量・粒子少量，灰中量
2 黄褐色	焼土小ブロック微量・粒子微量，粘土大ブロック多量・粒子少量	11 黒褐色	焼土小ブロック微量・粒子微量，炭化粒子微量，粘土粒子微量
3 暗褐色	焼土粒子微量，粘土粒子微量	12 黒褐色	焼土小ブロック微量・粒子微量，炭化粒子微量，粘土小ブロック微量・粒子微量
4 暗赤褐色	焼土小ブロック微量・粒子多量，粘土小ブロック微量・粒子微量	13 暗褐色	焼土粒子微量，炭化粒子微量，粘土粒子微量
5 赤褐色	焼土小ブロック多量・粒子多量	14 赤褐色	焼土中ブロック微量・小ブロック多量・粒子多量，粘土小ブロック微量・粒子微量
6 暗赤褐色	焼土粒子多量，炭化粒子微量，粘土粒子微量	15 にぶい黄褐色	焼土粒子少量，粘土小ブロック多量・粒子微量
7 暗褐色	焼土粒子少量，炭化粒子微量，粘土粒子微量	16 暗褐色	焼土中ブロック微量・小ブロック微量・粒子少量，炭化物微量・粒子微量，粘土粒子微量
8 極暗赤褐色	焼土小ブロック微量・粒子少量，炭化粒子微量，粘土粒子微量		
9 黒褐色	焼土粒子微量，粘土小ブロック微量・粒子微量		

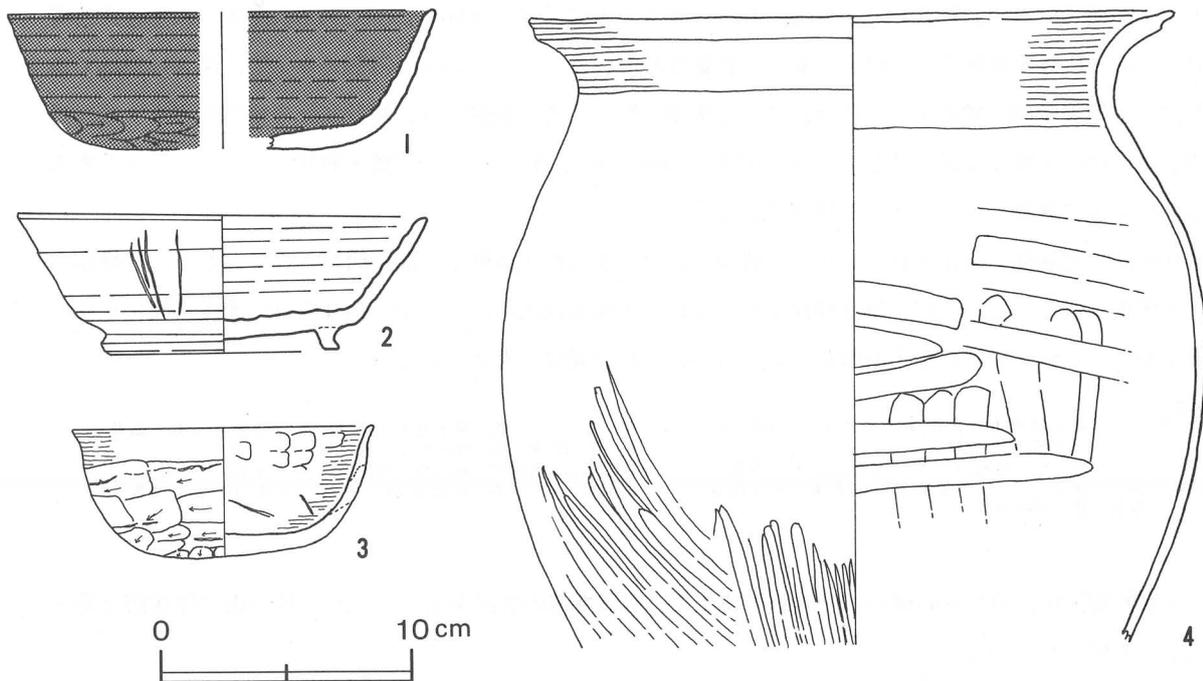
覆土 土層断面図中，第17～21層が本住居跡の覆土である。いずれも自然堆積と考えられる。第239C号住居跡の覆土を切り，第239A号住居跡，及び第7A・B号溝によって切られている。

土層解説

17 暗褐色	焼土粒子微量
18 極暗褐色	焼土粒子少量，炭化粒子微量
19 黒褐色	焼土粒子少量，炭化粒子微量
20 暗褐色	焼土粒子少量
21 黒褐色	焼土粒子微量

遺物 出土遺物は多くないが，竈内・竈付近で土師器坏・須恵器高台付坏・土師器甕等が出土しており，これらは本住居跡に伴う遺物と考えられる。須恵器高台付坏（第43図2）には刻線が認められる。

所見 切り合い関係からは，第239A号住居跡・第7A・B号溝より古く，第239C号住居跡より新しい。遺物から見て，8世紀後葉の可能性がもっとも高いと考えられる。



第43図 第239B号住居跡出土遺物実測図

第239B号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土,色調,焼成	備考
第43図 1	坏 土師器	A [17.0] B 5.6	平底。体部は、底部から稜を持たずに、口縁部まで外傾して直線的に立ち上がる。	内面と体部上～中位外面ヨコナデ。体部下位外面・底部ヘラ削り。内・外面黒色処理。	砂粒・石英・雲母 黒褐色 普通	P177 40% 竈周辺覆土中
2	高台付坏 須恵器	A 16.3 B 5.3 D 9.0 E 0.7	平底に「ハ」の字状に開く高台が付く。体部～口縁部は外傾して直線的に立ち上がる。	内・外面ヨコナデ。底部(高台内部)回転ヘラ削り。高台は貼り付け。	砂粒・長石・礫 灰白色 普通	PL48-4 P180 70% 竈内 体部外面に刻線
3	碗 土師器	A 12.0 B 5.2	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	内面及び口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面・底部ヘラ削り。体部各所に粘土紐巻き上げ痕を残す。	砂粒・石英・長石 橙色 普通	PL48-3 P179 95% 北西隅覆土下層
4	甕 土師器	A 25.6 B (25.4)	体部は最大径を中位に持つ。口縁部は丸みを持って外反し、端部は外上へつまみ上げる。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部上半外面ナデ。下半ヘラ磨き。内面指ナデ。	砂粒・スコリア・ 長石・雲母、にぶ い黄橙色、普通	PL48-5 P181 50% 竈周辺覆土中

第239C号住居跡 (第37～40・44図, PL12・14・48)

位置 II (H5)区の東北端, D6e区に位置する。第239B号住居跡・第239A号住居跡と重複している。

規模と平面形 北西壁の全部と北東壁の一部を削平されている。主軸長 (5.15) m, 幅5.32mの方形である。

主軸方向 N-30°-W

壁 上述のように北西壁の全部と北東壁の一部を削平されていた。また、南部は第239B号住居によって切られている。残存している部分は、壁高38cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 削平部分以外では、全周している。第239B号住居跡が重複している部分では、第239B号住居跡の床下で、床・壁溝、及びいわゆる間仕切溝が確認されている。幅は17～28cm, 深さは8cm程で、断面は逆台形である。間仕切溝は、南コーナーの北西1.50mの南西壁際の壁溝から、北東に1.00m程伸びている。幅約20cm, 深さ8cm程で、断面は逆台形を示す。溝の際まで、床は踏み固められている。

床 平坦で、中央部は踏み固められ、堅緻である。

ピット 7か所(P₁~P₇)。P₁~P₄は径30cm前後の円形ピットで、深さは50~75cmである。配置から支柱穴と考えられる。P₅・P₆は南東壁際で主軸上に並んで確認されている。P₅は径40cmの円形ピットで、深さは38cmである。わずかに南東壁側に傾斜する。P₆は、P₅と南東壁の間にある。長軸50cm、短軸36cmの楕円形ピットで、長軸方向は住居跡の主軸とほぼ一致している。深さは10cmと浅い。P₅・P₆は、位置・形状から入口ピットと考えられる。P₇は本住居跡に伴うかどうか疑問である。

竈 本住居跡の北端部で確認された。その位置から、削平された北西壁中央部に構築されていたものと推定される。火床部は残存しているが、袖は残存していない。火床部は浅く凹み、中央部は焼けて赤変・硬化している。火床部上には砂まじりの粘土が散乱しているが、これは竈材と考えられる。

竈土層解説

1	黄褐色	焼土微量・粒子微量, 粘土中ブロック微量・小ブロック少量, 粒子中量	5	褐色	焼土粒子少量, 炭化粒子微量, 粘土粒子微量
2	褐色	焼土粒子微量, 炭化粒子微量, 粘土粒子微量	6	明黄褐色	焼土粒子少量
3	極暗赤褐色	焼土小ブロック微量・粒子中量, 粘土粒子微量	7	にぶい黄褐色	焼土粒子微量, 粘土粒子多量
4	オリーブ褐色	炭化物微量	8	黄褐色	焼土小ブロック・粒子微量, 粘土粒子多量

覆土 土層断面図中、第22~43層が本住居跡の覆土で、自然堆積の状況を示している。第239B号住居跡と第8号溝によって切られている。

土層解説

22	暗褐色	焼土粒子微量	33	暗赤褐色	焼土中ブロック微量・粒子少量, 粘土中ブロック多量
23	黒褐色	焼土粒子少量, 炭化粒子微量	34	暗褐色	焼土小ブロック微量・粒子微量, 粘土小ブロック微量
24	暗褐色	焼土粒子少量	35	極暗褐色	焼土粒子微量, 炭化粒子微量
25	暗褐色	焼土粒子少量	36	暗赤褐色	焼土粒子少量, 炭化物少量
26	暗褐色	焼土粒子少量	37	暗褐色	焼土粒子微量, 炭化粒子微量
27	黒褐色	焼土粒子少量, 粘土粒子微量	38	暗褐色	
28	黒褐色	焼土粒子微量	39	黒褐色	焼土粒子微量
29	暗褐色	焼土粒子微量	40	黒褐色	焼土粒子微量
30	暗褐色	焼土粒子少量	41	暗褐色	焼土粒子中量, 炭化粒子微量
31	暗褐色	焼土粒子少量	42	暗赤褐色	焼土粒子少量, 粘土粒子中量
32	暗褐色	焼土粒子微量	43	暗褐色	焼土粒子少量, 炭化粒子微量

遺物 出土遺物は少なく、土器は細片が多い。鉄鎌(第44図7)が入口ピット付近の覆土下層で出土している。竈内・床面直上など本住居跡に確実に伴うと考えられる遺物はない。本住居跡を切っている第239B号住居跡の貼床下部から小形甕(同6)が出土しているが、細片である上に、第239B号住居跡の床下への混入の可能性も否定できない。

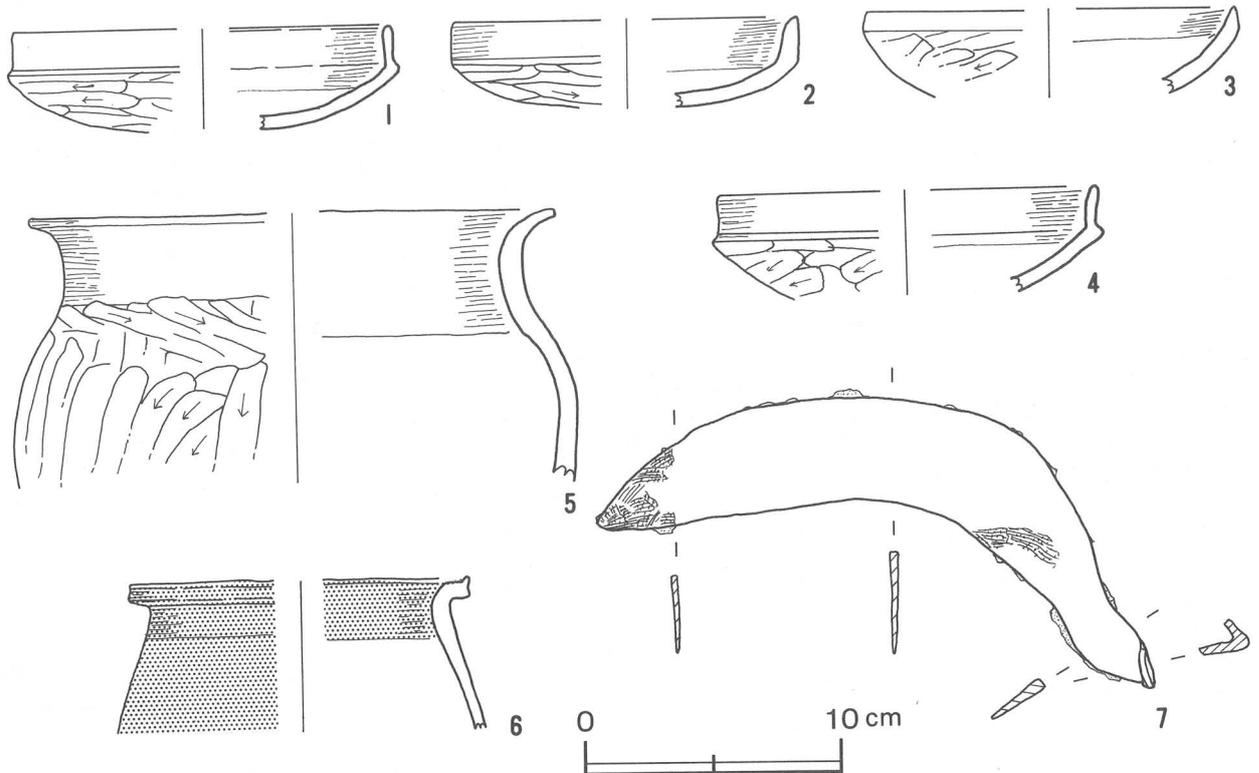
所見 切り合い関係から見て、第239B号住居跡・第8号溝より古い。出土遺物による年代決定は、上述のとおり本住居跡に確実に伴う遺物はなく、困難である。ただ、本住居跡と年代的に最も近いと考えられる鉄鎌の年代観から見て8世紀を溯ることはないと考えられ、切り合い関係も考え合わせて、8世紀の中葉を中心とした年代を考えておきたい。

第239C号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土, 色調, 焼成	備考
第44図 1	坏土師器	A [14.6] B (4.0)	丸底。体部は内彎しながら緩やかに立ち上がる。口縁部は体部との間に稜を持って垂直に立ち上がる。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部~底部外面へラ削り。内面ナデ。	砂粒・スコリア・雲母, にぶい赤褐色, 普通	P184 30% 覆土中
2	坏土師器	A [13.3] B 3.5	丸底。体部は内彎しながら緩やかに立ち上がる。口縁部は体部との間に稜を持って垂直に立ち上がる。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部~底部外面へラ削り。内面ナデ。	砂粒・雲母 褐灰色 普通	PL48-7 P185 30% 中央部覆土下層
3	坏土師器	A [14.6] B (3.4)	丸底。体部は内彎しながら緩やかに立ち上がる。口縁部は体部との間ににぶい稜を持って立ち上がる。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部~底部へラ削り。内面ナデ。	砂粒・雲母 明褐灰色 普通	P187 10% 覆土中
4	坏土師器	A [14.7] B (4.1)	丸底。体部は内彎しながら緩やかに立ち上がる。口縁部は体部との間に明瞭な稜を持って立ち上がる。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部~底部へラ削り。内面ナデ。	砂粒・雲母 灰黄褐色 普通	P186 10% 覆土中
5	甕土師器	A [20.4] B (10.9)	球形を思わせる体部から丸みを持って外反する。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面へラ削り。内面ナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 にぶい橙色, 普通	P188 10% 覆土中

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土,色調,焼成	備考
第44図 6	小形 甕 土師器	A [13.6] B (6.0)	肩部は緩やかにすぼまり,頸部は強く屈曲する。口縁部は短く水平に開き,端部を外上方へつまみ上げる。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部内・外面ナデ。口縁部内・外面から体部外面赤彩。	砂粒・長石・雲母 明赤褐色 普通	P189 5% SI239C貼床下部

図版番号	器種	計測値				出土状況	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
7	鉄 鎌	21.4	4.2	0.4	107.2	入口ピット付近覆土下層	PL48-6, M5, 表裏に布錆着



第44図 第239C号住居跡出土遺物実測図

第240号住居跡 (第45・46図, PL15・48)

位置 II (H5) 区の北部, D6_{is}区に位置する。すぐ北には第241号住居跡が隣接する。

規模と平面形 主軸長・幅とも4.00mの方形である。

主軸方向 N-35°-W

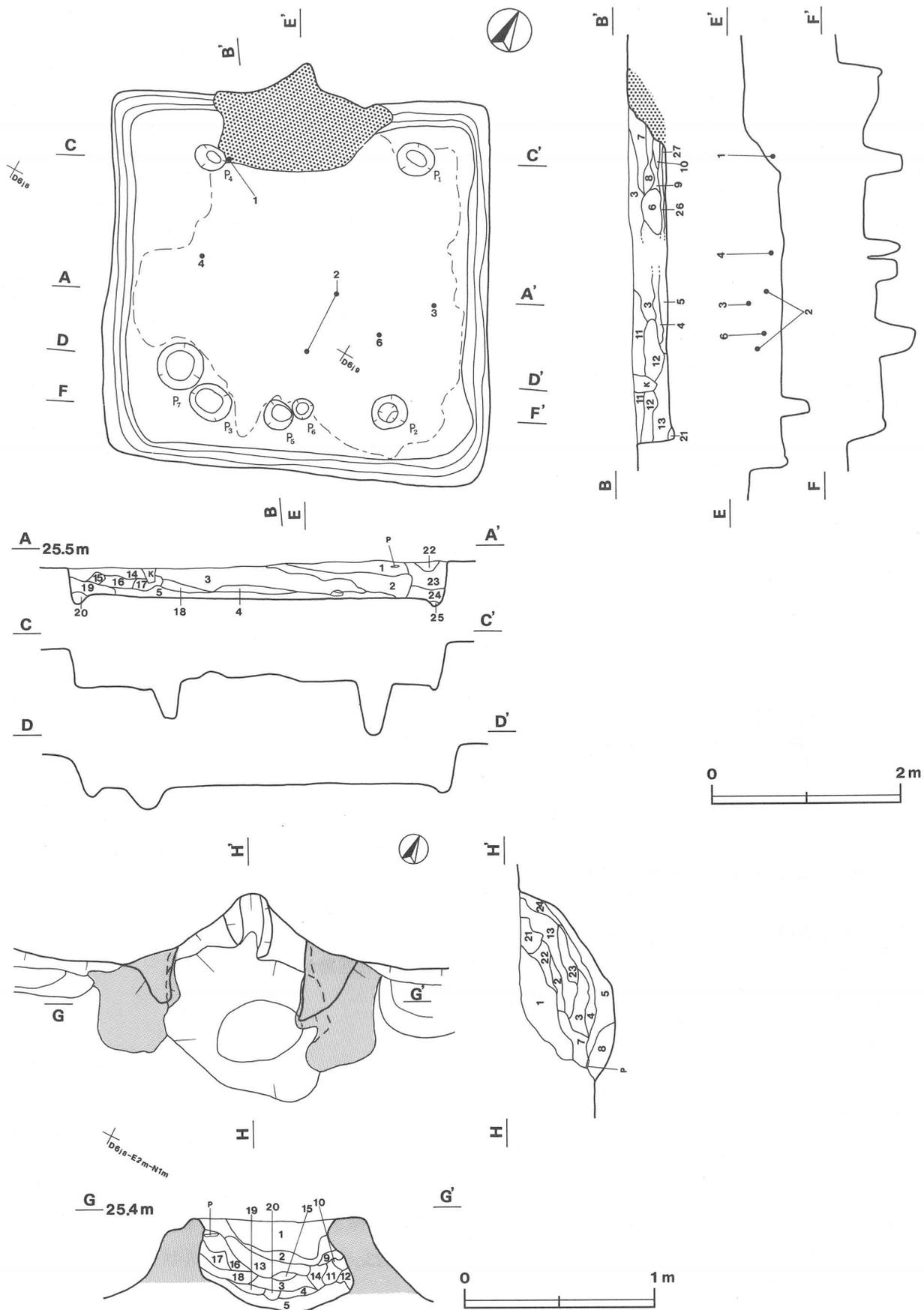
壁 壁高48cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 竈部分を除いて全周する。幅15~20cm, 深さ5~8cmで, 断面は逆台形をしている。

床 平坦で, 中央部は広い範囲が踏み固められており, 堅緻である。

ピット 7か所(P₁~P₇)。いずれも円形ないし不整形である。P₁~P₄は, 径が37~45cm, 深さが40~55cmあり, 支柱穴と考えられる。P₅は径32cm, 深さ32cm, P₆は径22cm, 深さ37cmで, いずれも入口ピットと考えられる。P₇は, P₃に隣接して南コーナー近くにあり, 径52cm, 深さ23cm程で, 形状はボウル状である。性格は不明である。

竈 北西壁中央に竈を構築している。掘り方平面は幅1.20m, 奥行37cm程で三角形を示している。煙道部は三角形の頂点部分を楕状に掘り凹めている。竈は砂まじりの粘土で構築しており, 袖部分が残存している。火床



第45図 第240号住居跡・竈実測図

部は横長の不整楕円形をしており、凹みは10cmである。特に焼けている部分は認められない。煙道の傾斜は下半では35°、上半では60°である。

竈土層解説

1	暗 褐 色	焼土粒子中量,炭化粒子微量,粘土粒子少量	15	暗 赤 褐 色	焼土小ブロック,粒子中量,炭化粒子微量,粘土粒子多量
2	明 黄 褐 色	焼土小ブロック微量,炭化粒子微量	16	黄 褐 色	焼土中ブロック・小ブロック・粒子微量,粘土中ブロック微量・小ブロック微量・粒子少量
3	暗 赤 褐 色	焼土中ブロック中量,炭化粒子微量	17	暗 赤 褐 色	焼土小ブロック中量・粒子多量,粘土中ブロック微量・小ブロック微量・粒子少量
4	褐 色	焼土中ブロック中量,炭化粒子微量	18	暗 赤 灰 色	焼土中ブロック微量・粒子中量,灰多量
5	暗 褐 色	焼土粒子中量,炭化物微量	19	灰 褐 色	焼土小ブロック微量・粒子少量,粘土粒子少量
7	褐 色	焼土小ブロック中量,炭化粒子微量,粘土粒子多量	20	黄 褐 色	ローム大ブロック
8	にぶい赤褐色	焼土粒子多量,炭化粒子微量	21	にぶい黄褐色	焼けた竈材大ブロック
9	赤 褐 色	焼土小ブロック少量・粒子多量,炭化粒子微量	22	暗 赤 褐 色	焼土中ブロック微量・小ブロック多量・粒子中量,粘土小ブロック微量・粒子少量
10	褐 色	焼土粒子中量,炭化粒子微量	23	極暗赤褐色	焼土中ブロック微量・小ブロック少量・粒子少量,炭化物微量,粘土小ブロック微量・粒子微量
11	暗 赤 褐 色	焼土中ブロック中量,炭化粒子微量	24	極 暗 褐 色	焼土小ブロック少量・粒子中量,炭化粒子微量,粘土粒子微量
12	明 黄 褐 色	焼土小ブロック少量,炭化粒子微量			
13	暗 赤 褐 色	焼土中ブロック・粒子中量,炭化粒子微量			
14	暗 褐 色	焼土小ブロック・粒子少量,炭化粒子微量,粘土小ブロック微量・粒子少量			

覆土 自然堆積である。竈前方では粘土の大ブロックが床上に置かれたような状態で確認されている。竈材等として使用していないものである。なおこの下の第26層は床面のように、床の補修があった可能性がある。

土層解説

1	暗 褐 色	炭化粒子微量	14	暗 褐 色	炭化粒子微量
2	暗 褐 色	炭化粒子微量	15	黒 褐 色	焼土粒子微量,炭化粒子微量
3	暗 褐 色	炭化粒子微量,ローム大ブロック微量・中ブロック微量・小ブロック少量	16	暗赤褐色	焼土粒子微量,炭化粒子微量
4	暗 褐 色	炭化粒子微量	17	暗 褐 色	焼土粒子微量,炭化粒子微量,粘土粒子少量
5	暗赤褐色	炭化粒子微量	18	暗赤褐色	少量粒子微量,炭化粒子微量
6	黄 褐 色	粘土ブロック	19	暗赤褐色	炭化粒子微量,ローム大ブロック微量
7	暗赤褐色	焼土粒子微量,粘土粒子微量	20	暗赤褐色	
8	暗赤褐色	焼土粒子微量,炭化粒子微量,粘土粒子微量	21	暗赤褐色	
9	暗 褐 色	焼土粒子微量,粘土粒子微量	22	暗 褐 色	
10	暗赤褐色	焼土粒子微量,炭化粒子微量,粘土粒子微量	23	暗赤褐色	
11	黒 褐 色	炭化粒子微量	24	暗赤褐色	
12	暗 褐 色	焼土粒子微量,炭化物微量・粒子微量	25	暗赤褐色	
13	暗 褐 色	焼土粒子微量	26	暗 褐 色	少量粒子微量,粘土小ブロック微量,粘性・しまり強
			27	暗 褐 色	焼土粒子少量,炭化粒子微量

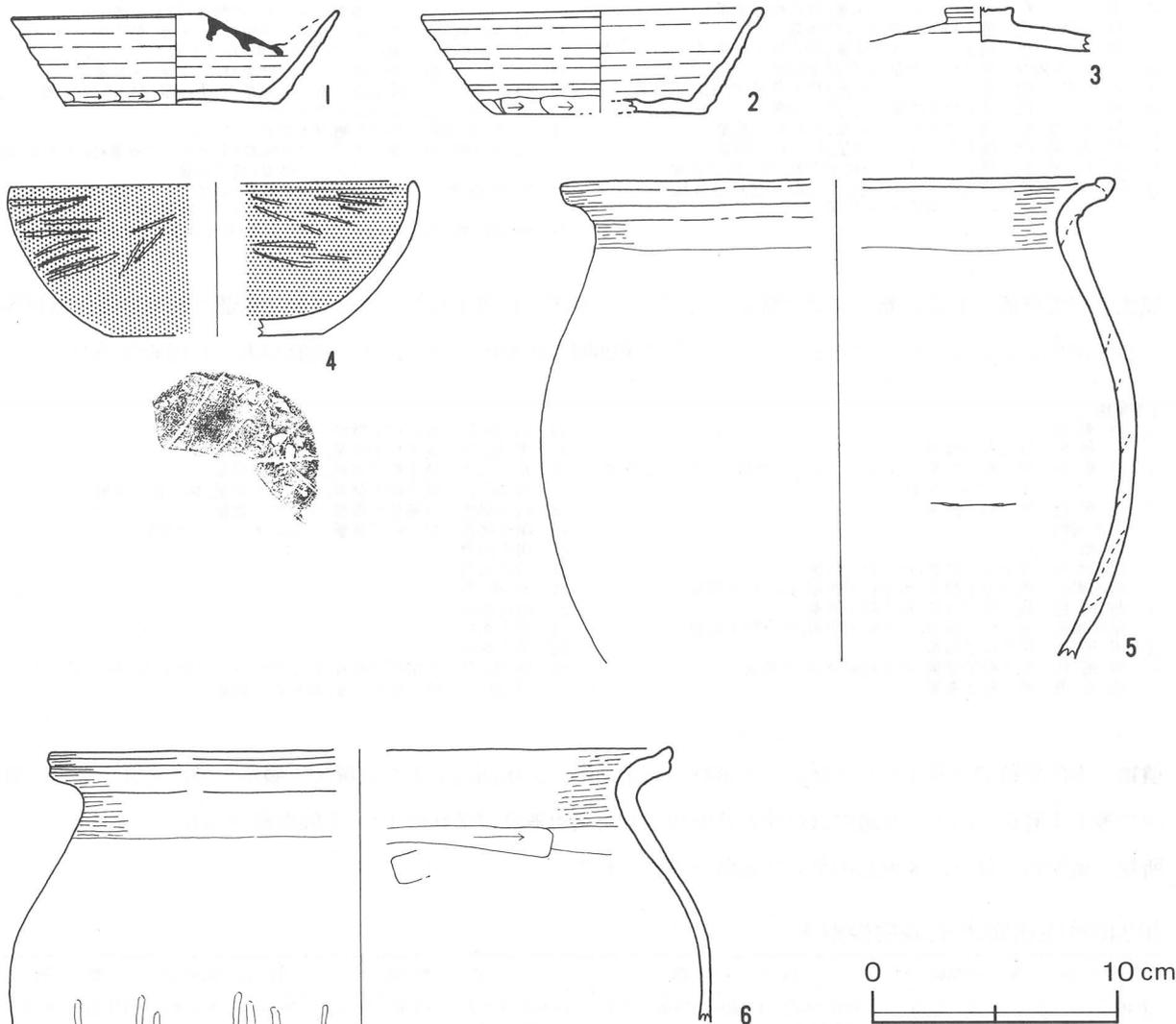
遺物 本住居跡では覆土中～上層からの遺物の出土が多く、床面直上または覆土下層からの出土は少ない。竈内や覆土下層から出土した遺物は灯明皿に転用された須恵器坏(第46図1)・土師器甕(同6)がある。

所見 遺物から見て、8世紀中葉の住居跡と考えられる。

第240号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土,色調,焼成	備 考
第46図 1	坏 須恵器	A 13.5	平底。体部～口縁部は外傾してほぼ直線的に立ち上がる。	内・外面ヨコナデ。体部下位外面ヘラ削り。底部回転ヘラ削り,のち静止ヘラ削り。	砂粒・石英・雲母 にぶい黄橙色 普通	PL48-8, P192 80%,竈周辺覆 下層,タール付 着,転用灯明皿
		B 3.9				
		C 8.8				
2	坏 須恵器	A 14.0	平底。体部～口縁部は外傾してほぼ直線的に立ち上がる。	内・外面ヨコナデ。体部下位外面ヘラ削り。底部回転ヘラ削り,のち静止ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 灰色 普通	PL48-9 P193 50% 中央部覆土上層
		B 4.4				
		C 8.5				
3	蓋 須恵器	B (2.0)	平たくつぶれた擬宝珠形つまみを持つ坏蓋。	つまみ・天井周辺部・内面ヨコナデ。天井部回転ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 黄灰色 普通	P195 20% 東部覆土上層
		F 2.8				
		G 0.7				
4	鉢 土師器	A [16.4]	平底。体部は内彎しながら外傾して立ち上がる。口縁部は体部よりやや強く内彎し,わずかに内傾する。	体部外面ヘラ削り,のちやや雑な磨き。内面丁寧な磨き。底部木葉痕・極めて雑な磨き。全面赤彩。	砂粒・長石・雲母 赤色 良好	PL48-10 P196 30% 中央部覆土中層
		B 6.4				
		C [8.4]				
5	甕 土師器	A [22.5]	体部は最大径を中位に持つ。口縁部は丸みを持って外反し,端部は上方につまみ上げる。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面ナデ。内面指ナデ。	砂粒・石英・長石・雲母,明褐色 普通	PL48-11 P197 20% 覆土中
		B (19.9)				

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土,色調,焼成	備考
第46図 6	甕 土師器	A (25.2) B (11.4)	体部は中～上位の境界で内彎し,肩部は直線的に内傾。口縁部は丸みを持って外反し,端部はつまみ上げる。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面ナデ。中位以下へラ磨き。口縁部直下へラナデ,それ以下はナデ。	砂粒・スコリア・長石・雲母 橙色,普通	P198 20% 甕内・中央部覆 土中層



第46図 第240号住居跡出土遺物実測図

第241号住居跡 (第47～49図, PL16・49)

位置 II (H5)区の北部, D6h8区に位置する。

規模と平面形 主軸長4.85m, 幅4.78mの方形である。

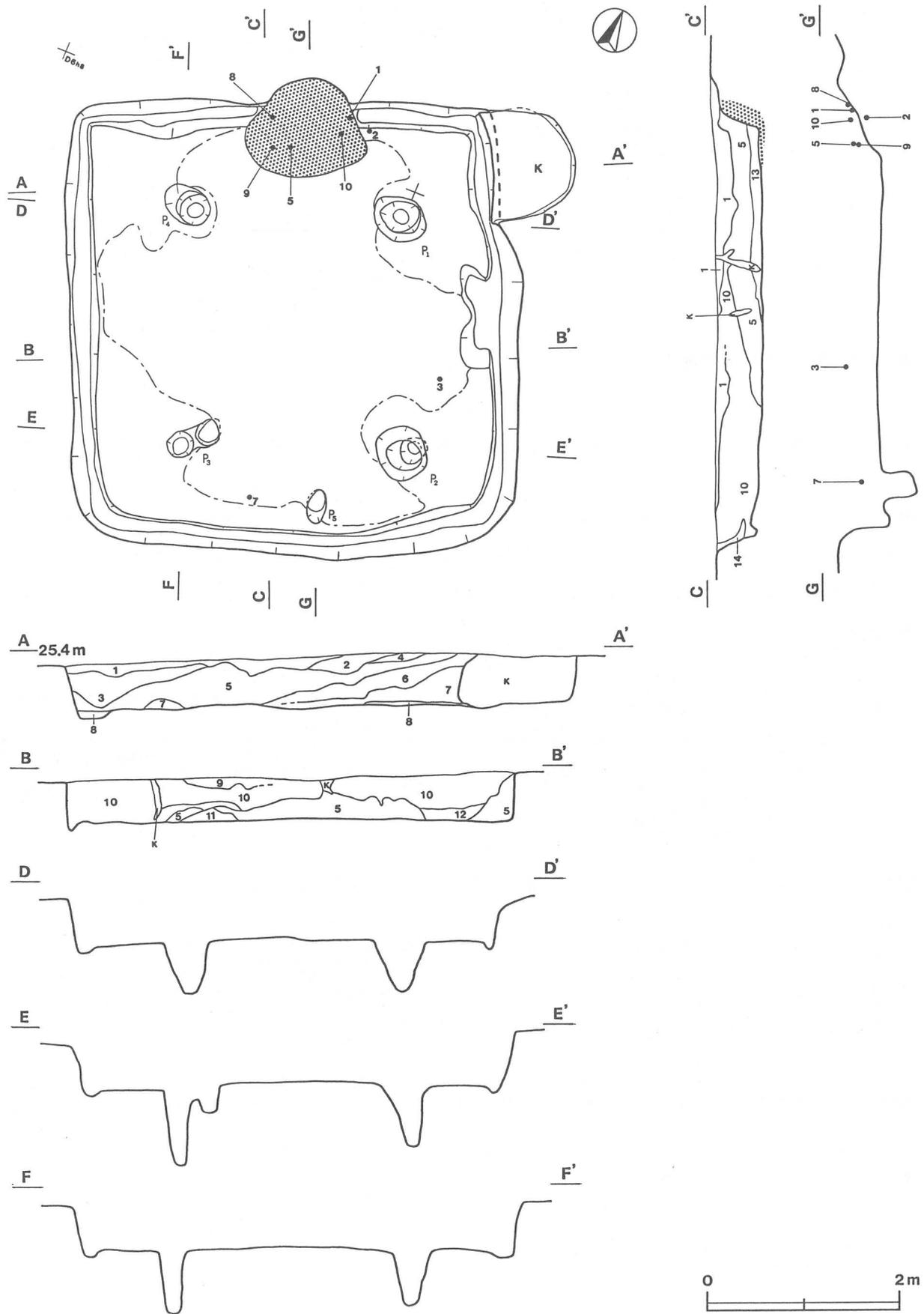
主軸方向 N-36°-W

壁 壁高59cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

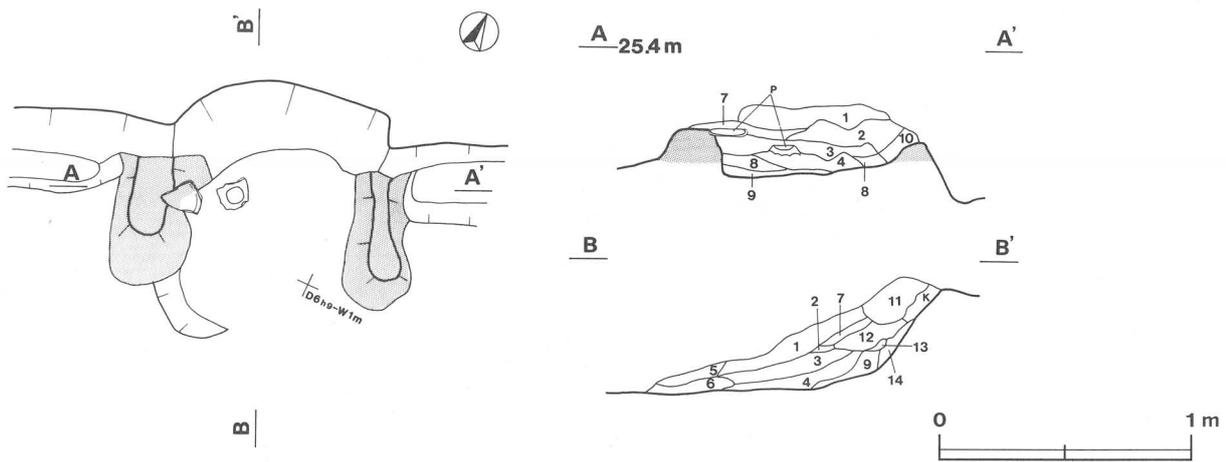
壁溝 甕部分を除いて全周する。部分によって差があり, 幅15～30cm, 深さ5～8cmで, 断面は逆台形である。

床 平坦で, 中央部は踏み固められ, 堅緻である。

ピット 5か所 (P₁～P₅)。P₁・P₂・P₄は径が50～60cmの円形のピットで, 深さは56～68cmである。P₃は径25cmのピットが2つ連結した形である。そのうち外側のものは深さが65cmである。以上4か所のピットは各コーナーに近い位置にあり, 主柱穴と考えられる。P₅は南東壁中央近くに位置する。長軸36cm, 幅19cmで住居跡の主



第47图 第241号住居跡実測図



第48図 第241号住居跡竈実測図

軸方向に長い楕円形を示し、深さは35cmである。南東壁側に傾斜している。位置・形状から入口ピットと考えられる。

竈 北西壁中央に、砂まじりの粘土で構築されている。掘り方は幅85cm、奥行き22cmで、平面形は弧状をしている。両袖下半が残存している。火床部は西側で若干の段差を持つが、全体としては全く凹みを持たない。また、特に焼けて赤化した部分はない。煙道の傾斜は約50°で、ややきつい。

竈土層解説

1	にぶい黄褐色	焼土中ブロック・小ブロック・粒子微量、炭化物微量、粘土中ブロック微量・小ブロック少量・粒子少量	8	にぶい黄褐色	焼土小ブロック微量・粒子少量、炭化粒子微量、粘土小ブロック微量・粒子中量
2	黒褐色	焼土小ブロック・粒子少量、炭化粒子微量、粘土中ブロック・小ブロック・粒子微量	9	黄褐色	焼土粒子微量、粘土粒子少量
3	灰黄褐色	焼土小ブロック微量・粒子中量、炭化粒子微量、灰多量	10	暗褐色	焼土小ブロック微量・粒子少量、炭化粒子微量、粘土小ブロック・粒子微量
4	にぶい赤褐色	焼土小ブロック微量・粒子多量、炭化粒子微量、灰多量、粘土粒子微量	11	灰黄褐色	竈材大ブロック
5	にぶい黄色	焼土中ブロック・小ブロック・粒子微量、炭化粒子微量、粘土中ブロック少量・小ブロック多量	12	暗赤褐色	焼土中ブロック微量・小ブロック少量・粒子少量、炭化粒子微量、粘土小ブロック微量・粒子中量、灰少量
6	黒色	焼土粒子少量、炭化粒子微量、粘土粒子微量	13	暗褐色	焼土粒子微量、粘土粒子微量
7	褐色	焼土小ブロック・粒子少量、炭化粒子微量、粘土小ブロック微量・粒子少量	14	にぶい黄色	焼土小ブロック・粒子微量、粘土小ブロック微量・粒子多量

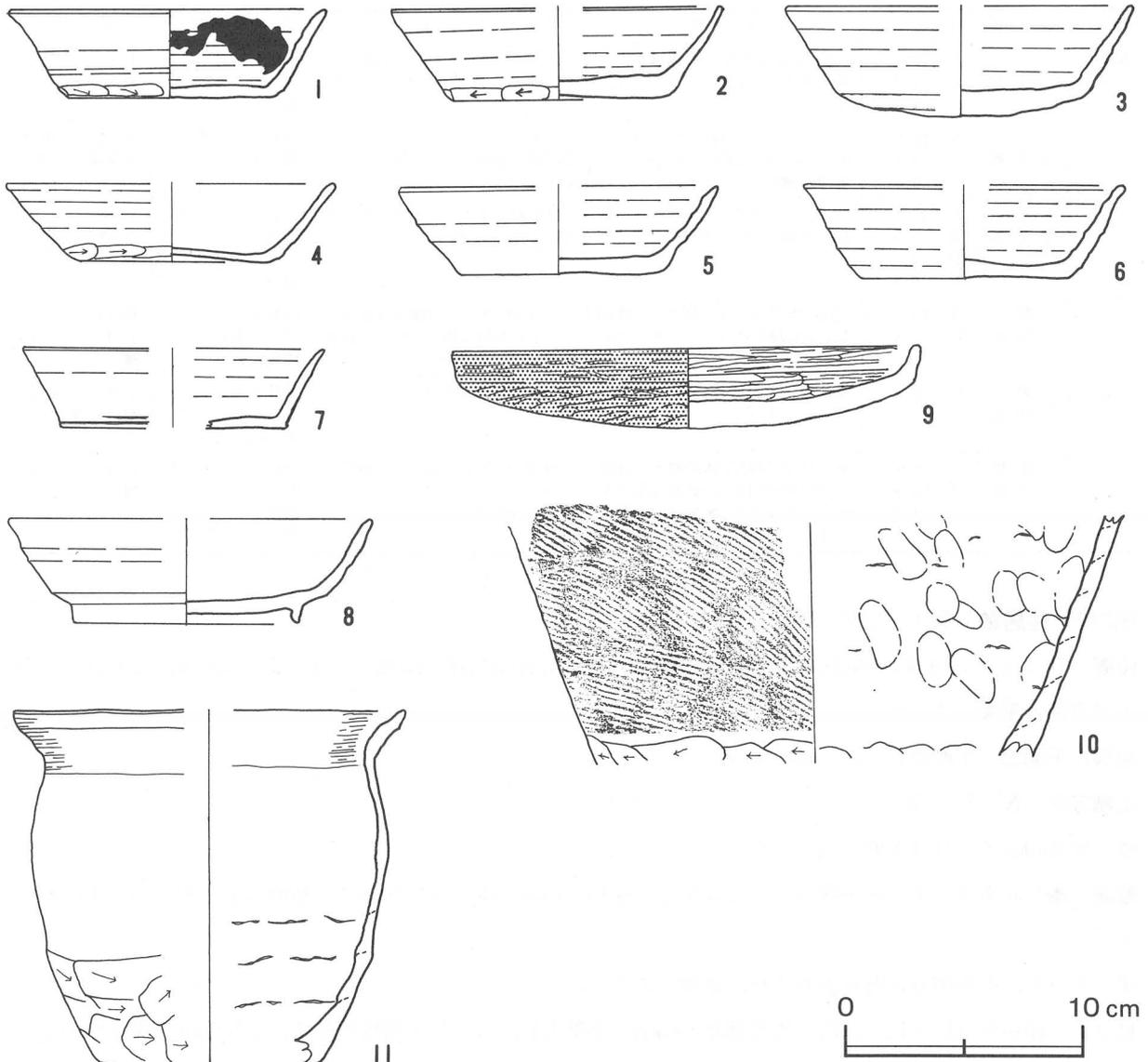
覆土 いずれも自然堆積である。北コーナー部で、新しい土坑によって切られている。

土層解説

1	暗赤褐色	焼土粒子微量、炭化粒子多量	8	褐色	ローム小ブロック・粒子中量
2	褐色	ローム小ブロック中量・粒子多量	9	褐色	焼土粒子少量、炭化粒子少量
3	褐色	焼土粒子少量	10	暗褐色	焼土粒子中量、炭化粒子中量
4	褐色	炭化粒子少量	11	暗褐色	焼土粒子少量、炭化粒子少量、ローム小ブロック中量
5	褐色	ローム中ブロック多量	12	暗褐色	焼土粒子少量、炭化粒子少量、ローム小ブロック中量
6	暗褐色	炭化粒子少量	13	褐色	ローム中ブロック・小ブロック中量
7	暗褐色	焼土小ブロック・粒子少量	14	褐色	ローム中ブロック・小ブロック中量

遺物 出土遺物は特に多くはないが、竈内・竈付近・覆土下層等本住居跡に伴うと見られる遺物がほとんどである。

所見 出土遺物から見て、8世紀中葉の住居跡と考えられる。



第49図 第241号住居跡出土遺物実測図

第241号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土, 色調, 焼成	備考
第49図 1	坏 須恵器	A 13.4 B 3.8 C 8.3	平底。体部は外傾してほぼ直線的に立ち上がり, 口縁部でわずかに外反する。	内・外面ヨコナデ。体部下位外面ヘラ削り。底部ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 灰白色 普通	PL49-1, P200 60%, 電付近 内面タール付着
2	坏 須恵器	A [14.0] B 4.0 C 8.6	平底。体部は外傾してほぼ直線的に立ち上がり, 口縁部でわずかに内彎気味になる。	内・外面ヨコナデ。体部下位外面ヘラ削り。底部1方向の丁寧なヘラ削り。	砂粒・スコリア・ 雲母 浅黄色, 普通	P201 60% 電付近覆土中層
3	坏 須恵器	A [14.7] B 4.8 C 10.6	丸底気味の平底。体部から口縁部まで, 外傾してほぼ直線的に立ち上がる。	内・外面ヨコナデ。底部回転ヘラ切り, のち雑な静止ヘラ削り。底部周縁部ヨコナデ。	砂粒・長石・雲母 灰白色 普通	P202 60% 東部覆土中層
4	坏 須恵器	A [13.8] B 3.4 C 7.8	上げ底気味の平底。体部から口縁部まで, 外傾してほぼ直線的に立ち上がる。	内・外面ヨコナデ。体部下位外面ヘラ削り。底部回転ヘラ切り, のち丁寧な1方向のヘラ削り。器厚薄い。	砂粒・長石・雲母 灰褐色 やや不良	P203 60% 竈内
5	坏 須恵器	A [13.4] B 3.8 C 8.4	平底。体部は外傾してわずかに内彎気味に立ち上がる。	内・外面ヨコナデ。底部回転ヘラ切り, のち雑な静止ヘラ削り。	砂粒・石英・長石 (多量) 灰色, 普通	P204 30% 竈内・覆土中

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土,色調,焼成	備考
第49図 6	坏 須恵器	A [13.6] B 4.0 C 8.6	平底。体部は外傾して直線的に立ち上がり,口縁部はわずかに外反する。	内・外面ヨコナデ。底部回転ヘラ切り,のち静止ヘラ削り。	砂粒・石英・長石 灰白色 普通	P205 25% 竈内
7	坏 須恵器	A [12.6] B 3.4 C [9.5]	平底。体部から口縁部は外傾してわずかに外反気味に立ち上がる。器厚が薄い。	内・外面ヨコナデ。底部ヘラ削り。体部最下部外面に,回転中の器体にあたったヘラの痕跡。	砂粒・長石・雲母・ 礫,黄灰色 普通	P207 30% 南部覆土下層
8	高台付坏 須恵器	A [15.8] B 4.5 D 9.6 E 0.8	平底に高台が付く。体部から口縁部は外傾してほぼ直線的に立ち上がる	内・外面ヨコナデ。底部(高台内部) 回転ヘラ削り。	砂粒・スコリア・ 雲母 にぶい黄橙色 普通	PL49-2 P209 45% 竈上
9	盤 土師器	A 19.8 B 3.5	丸底。体部は大きく開き,口縁部はにぶい稜を持って外上方に立ち上がる。	内面丁寧な磨き。口縁部外面ヨコナデ,のち雑な磨き。体部～底部ヘラ削り,のち雑な磨き。赤彩。	砂粒・スコリア・ 長石・雲母 橙色,普通	PL49-3 P210 70% 竈内
10	鉢 須恵器	B (10.2)	体部中～下位破片。外傾して直線的に立ち上がる。	外面平行叩き。内面ナデ・指オサエ。	砂粒・スコリア・ 長石・雲母 灰白色,普通	P211 10% 竈付近覆土中
11	小形甕 土師器	A [16.6] B 15.0 C [9.2]	最大径は口縁部。体部最大径は中～上位境界付近。口縁部は丸みを持って外反する。端部は外上方へつまみ上げる。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部上～中位外面ナデ。下位外面ヘラ削り。内面ナデ・ヘラナデ。	砂粒・スコリア・ 石英 橙色 普通	P213 20% 竈内

第242号住居跡 (第50～52図, PL17・49・50)

位置 II (H5)区の北部, D6j0区に位置する。竈付近には第7A・B号溝が重複し, 南西部から北東部にかけては第1号道路が重複している。

規模と平面形 主軸長4.47m, 幅4.50mの方形を示す。

主軸方向 N-5°-W

壁 壁高40cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 竈と北東コーナー部を除いて, 全周する。幅15～25cm, 深さ6～10cmで, 断面は逆台形ないし半円形である。

床 平坦で, 中央部分は踏み固められ, 堅緻である。

ピット 10か所 (P₁～P₁₀)。P₁～P₄は径35～65cmの不整円形, ないし不整楕円形で, 35～50cmの深さがある。

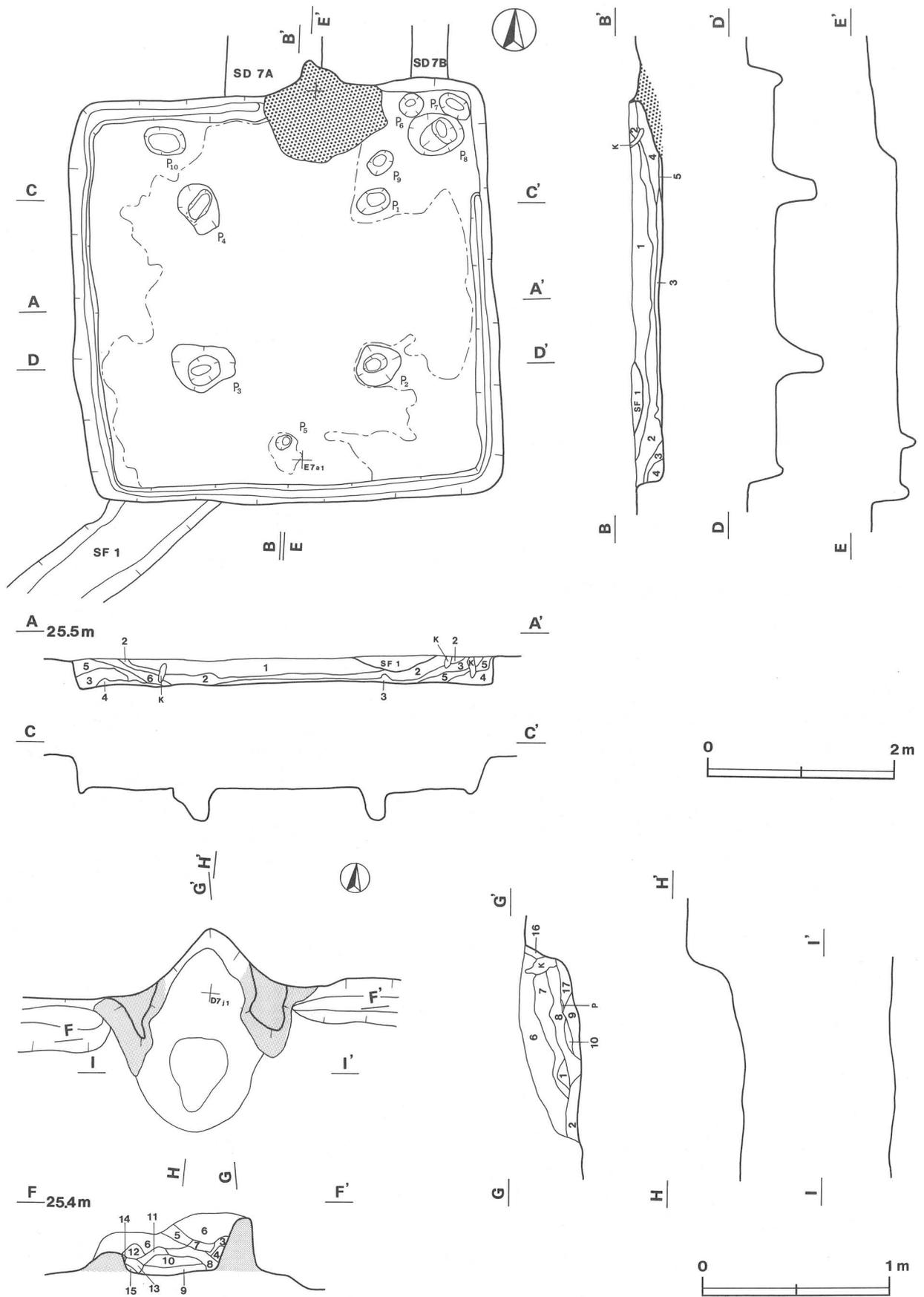
この4か所が位置等から支柱穴と考えられるが, 住居跡の規模に対して柱穴間の距離は1.80mと狭く, 住居跡の中央に寄っている。P₅は長径16cm程の不整楕円形で, 深さは15cmである。南壁中央寄りの位置にあり, 入口ピットと考えられる。P₆～P₁₀は北東コーナー部と北西コーナー近くにあり, 深さは20～35cmあるが, 平面形は不整で, 性格は不明である。形状から貯蔵穴とは考えられない。

竈 北壁の中央やや東寄りの位置に, 砂まじりの粘土で構築している。掘り方は幅85cmにわたり, 奥行き35cm程, 平面三角形に掘り込み, さらに西袖が取り付く部分はコーナー状に掘り込んでおり, 凸字の左半分のような形状をしている。火床部の凹みはごくわずかである。特に激しく焼けた部分は認められない。煙道の傾斜は約60°と急である。

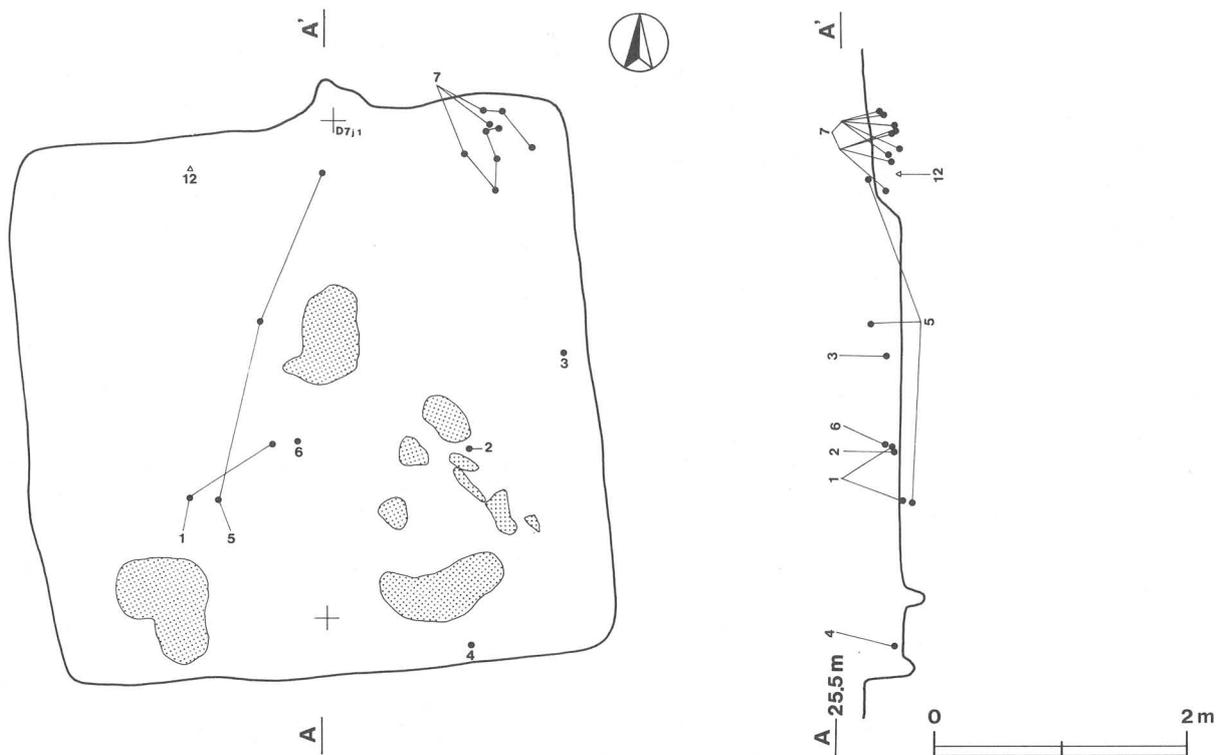
覆土 すべて自然堆積である。第1号道路(下部は溝状)が重複し, 一部が切られている。

遺物 遺物は竈付近から北コーナー部で比較的多く出土している。層位的にも覆土下層が多く, ほとんどが本住居跡に伴う遺物と考えられる。第52図1に示した土師器坏と同4に示した須恵器蓋は出土位置が異なるが壁際にずり落ちたような状態で出土している。土器以外では線刻のある石製紡錘車・砥石・鉄鏃等が出土している。

所見 出土遺物から考えて, 8世紀前葉の住居跡と考えられる。重複する第1号道路は, 切り合い関係から見て, 本住居跡より新しい。



第50图 第242号住居跡・竈実測図



第51図 第242号住居跡出土遺物位置図

竈土層解説

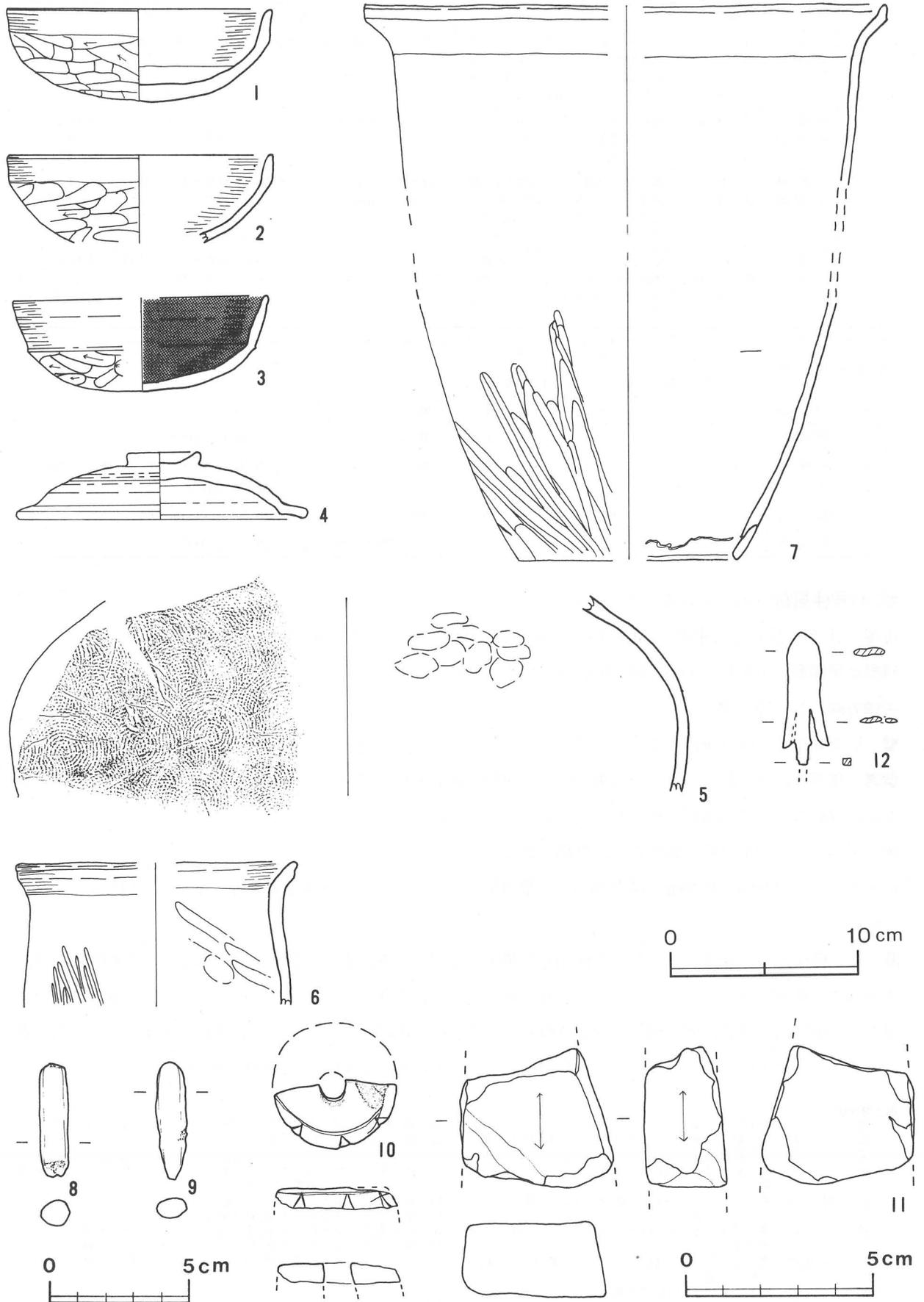
- | | | | |
|---------|---|-----------|---|
| 1 暗赤褐色 | 焼土粒子少量,炭化粒子少量,粘土粒子微量 | 10 におい黄褐色 | 焼土小ブロック・粒子微量,炭化粒子微量,粘土中ブロック微量・小ブロック微量・粒子微量,黄白色パミス微量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土小ブロック微量・粒子中量,炭化粒子少量,粘土粒子中量 | 11 暗赤褐色 | 焼土粒子多量,炭化粒子微量,粘土小ブロック微量・粒子微量 |
| 3 赤褐色 | 焼土小ブロック・粒子微量,粘土粒子微量 | 12 暗褐色 | 焼土粒子微量,黄白色パミス微量 |
| 4 赤褐色 | 焼土粒子少量,炭化粒子微量 | 13 におい赤褐色 | 焼土小ブロック微量・粒子少量,炭化粒子微量,粘土小ブロック・粒子微量 |
| 5 暗赤褐色 | 焼土粒子中量,炭化粒子少量,粘土粒子中量 | 14 灰黄褐色 | 焼土粒子少量,炭化粒子微量,粘土粒子多量 |
| 6 褐色 | 焼土小ブロック・粒子少量,炭化粒子微量,粘土小ブロック少量・粒子中量,黄白色パミス少量 | 15 におい黄褐色 | 焼土粒子微量,粘土粒子少量 |
| 7 暗褐色 | 焼土粒子中量,炭化粒子少量,粘土粒子中量 | 16 暗褐色 | 焼土粒子微量,炭化粒子微量,粘土粒子微量 |
| 8 極暗赤褐色 | 焼土大ブロック微量・粒子中量 | 17 暗褐色 | 焼土小ブロック・粒子微量,粘土小ブロック・粒子微量 |
| 9 暗赤褐色 | 焼土粒子多量,炭化粒子少量 | | |

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|--------------------------|
| 1 暗褐色 | 焼土粒子少量,炭化粒子少量 | 4 褐色 | 焼土粒子中量,炭化粒子少量,ローム小ブロック中量 |
| 2 暗褐色 | 焼土粒子少量,炭化粒子少量 | 5 暗褐色 | 焼土粒子少量,炭化粒子少量 |
| 3 暗褐色 | 焼土小ブロック少量・粒子中量,炭化粒子中量 | 6 暗褐色 | 焼土粒子少量,炭化物・粒子少量 |

第242号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土,色調,焼成	備考
第52図 1	坏土師器	A 14.1	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり,におい稜を持って口縁部に移行する。やや腰高。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部～底部外面へラ削り。底部内面ナデ。	砂粒・スコリア 橙色 普通	PL49-4 P215 80% 中央部覆土下層
		B 5.0				
2	坏土師器	A 14.1 B (4.8)	推定丸底。体部は内彎しながら立ち上がり,におい稜を持って口縁部に移行する。やや腰高。	内面～口縁部外面ヨコナデ。体部～底部外面へラ削り。	砂粒・長石・雲母 におい橙色 普通	PL49-5 P216 40% 中央部覆土下層
3	坏土師器	A [13.6] B 5.1	丸底。体部は内彎しながら緩やかに立ち上がり,稜を持って口縁部に移行する。やや腰高。	内面～口縁部外面ヨコナデ。体部～底部外面へラ削り。内面黒色処理。	砂粒・スコリア・長石 におい橙色,普通	PL49-6 P217 40% 北東壁際覆土下層



第52图 第242号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土,色調,焼成	備考
第52図 4	蓋 須恵器	A 15.5 B 3.7 F 3.9 G 0.7	天井部に扁平なつまみが付く。天井部は内彎しながら大きく開き、口縁部は段を持って水平に近く開く。段の部分にかえりの痕跡を持つ。	天井部上位外面回転ヘラ削り。他はヨコナデ。	砂粒・長石・礫・雲母 灰色 普通	PL49-8 P220 98% 南東壁際覆土下層
5	短頸壺 須恵器	B (10.6)	体部中位のみ。最大径(36.3)cm。肩部は頸部に向かって急にすぼまる。	外面同心円文叩き。内面ナデ・指押え。	砂粒・長石 灰色 普通	PL49-7 P229 10% 中央部床直上
6	小形甕 土師器	A (15.4) B (7.8)	体部上位は緩やかに内傾し、口縁部はくびれの弱い頸部から短く外反する。端部は外上方につまみ上げる。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面ナデ。内面指ナデ。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P224 5% 中央部覆土中層
7	甗 土師器	A (25.3) B (30.0) C (35.1)	同一個体と推定される口縁部と体部下半の破片。無底式。口縁部は外反し、端部は上方へつまみ上げる。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面ナデ。下半ヘラ磨き。内面ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	PL49-9 P222 30% 北東隅覆土中層

図版番号	器種	計測値				出土状況	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
8	不明土製品	4.1	1.0	0.9	4.3	竈内	PL49-10, DP 6
9	不明土製品	4.2	1.1	0.7	2.9	竈内	PL49-11, DP 7
10	紡錘車	(径3.2)	—	(5.5)	(3.8)	竈内	PL50-1, Q 9, 粘板岩, 側面に鋸歯状と横方向の線刻
11	砥石	(3.8)	(4.1)	2.1	(39.6)	覆土中	PL49-12, Q10, 砂岩
12	鉄鏃	(4.1)	2.5	0.3	(13.6)	北西部覆土下層	PL50-2, M 6

第243号住居跡 (第53・54図, PL18・19・50)

位置 II (H5)区の中央東寄り, E7a2区に位置する。南から北にかけて第11号溝が重複する。

規模と平面形 主軸長2.95m, 幅3.60mの長方形である。

主軸方向 N-55°-W

壁 壁高40cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 竈部分, 及び北コーナーから東コーナー付近を除いて廻っている。幅は8~15cm, 深さは5cm程で, 断面は逆台形ないし逆三角形に近い形をしている。

床 平坦で, 中央部は踏み固められ, 堅緻である。

ピット 1か所(P1)。径16cm, 深さ20cmの不整形のピットである。南東壁際中央にあり, 入口ピットと考えられる。

竈 北西壁中央に, 砂まじりの粘土を使用して構築している。掘り方は, 図化していないが, 幅約70cm, 奥行き50cmで, 両袖が取り付く部分がコーナー状に掘り込まれ, 全体として凸字状の平面形を示す。竈本体は, 両袖のほか掛け口と煙道間の構造部分が残存していた。火床部は凹みがわずかで, 奥行きがある。特に強く焼けて赤化した部分は認められなかった。煙道の立ち上がりは80°と, ほとんど垂直に近い。

竈土層解説

1 褐色	焼土粒子少量	10 明褐色	焼土中ブロック少量・小ブロック中量・粒子多量,
2 褐色	焼土粒子少量, ローム小ブロック中量・粒子多量	11 褐色	焼土粒子少量
3 褐色	焼土粒子少量, ローム小ブロック少量	12 赤褐色	焼土中ブロック中量・小ブロック中量・粒子多量
4 褐色	焼土粒子少量, 炭化粒子少量, ローム小ブロック少量	13 赤褐色	焼土大ブロック中量・中ブロック多量・小ブロック多量・粒子多量
5 黄褐色	焼土小ブロック・粒子少量, 炭化粒子少量, ローム小ブロック中量	14 暗赤褐色	焼土小ブロック中量・粒子少量
6 褐色	焼土粒子少量, 炭化粒子少量, ローム小ブロック・粒子多量	15 暗赤褐色	焼土粒子少量, 粘土粒子中量
7 にぶい黄褐色	焼土中ブロック少量・小ブロック中量・粒子中量, 炭化粒子少量	16 暗赤褐色	焼土粒子少量, 炭化粒子中量, 粘土粒子多量
8 褐色	焼土小ブロック・粒子中量	17 褐色	焼土粒子微量, 炭化粒子少量, 粘土粒子少量
9 褐色	焼土小ブロック中量・粒子少量, ローム中ブロック・小ブロック少量	18 赤褐色	焼土粒子微量, 炭化粒子少量, 粘土粒子微量

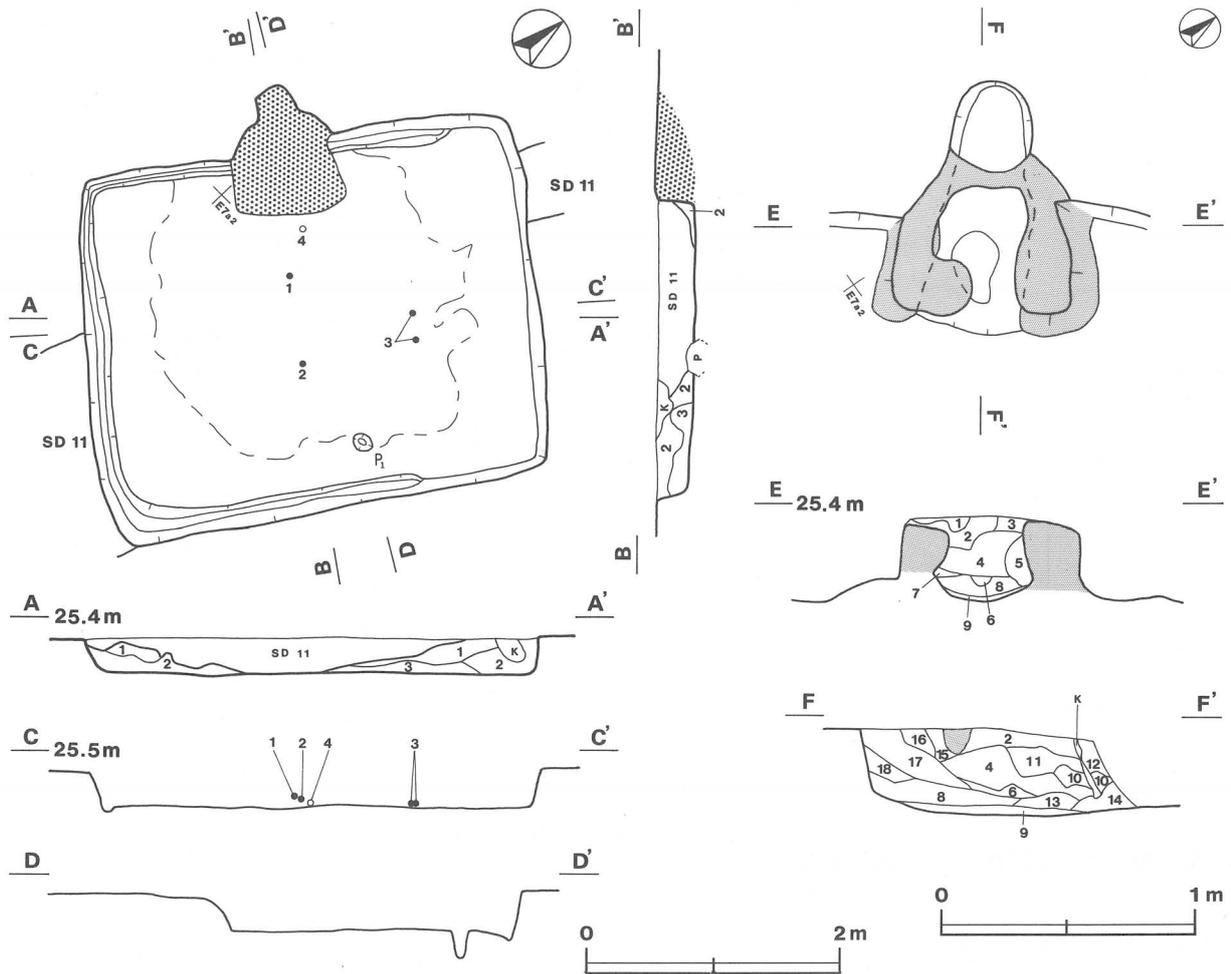
覆土 自然堆積である。第11号溝によって切られている。

土層解説

- 1 暗褐色
- 2 褐色 ローム小ブロック・粒子中量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック少量・粒子中量

遺物 土器が住居跡中央部の覆土下層から集中して出土している。竈前方の覆土下層からは土製支脚が出土している。これらの遺物は、出土状況から本住居跡に伴うものと考えられる。

所見 出土遺物から、8世紀前葉の住居跡と考えられる。重複する第11A・B号溝は、切り合い関係から見て後世のものである。



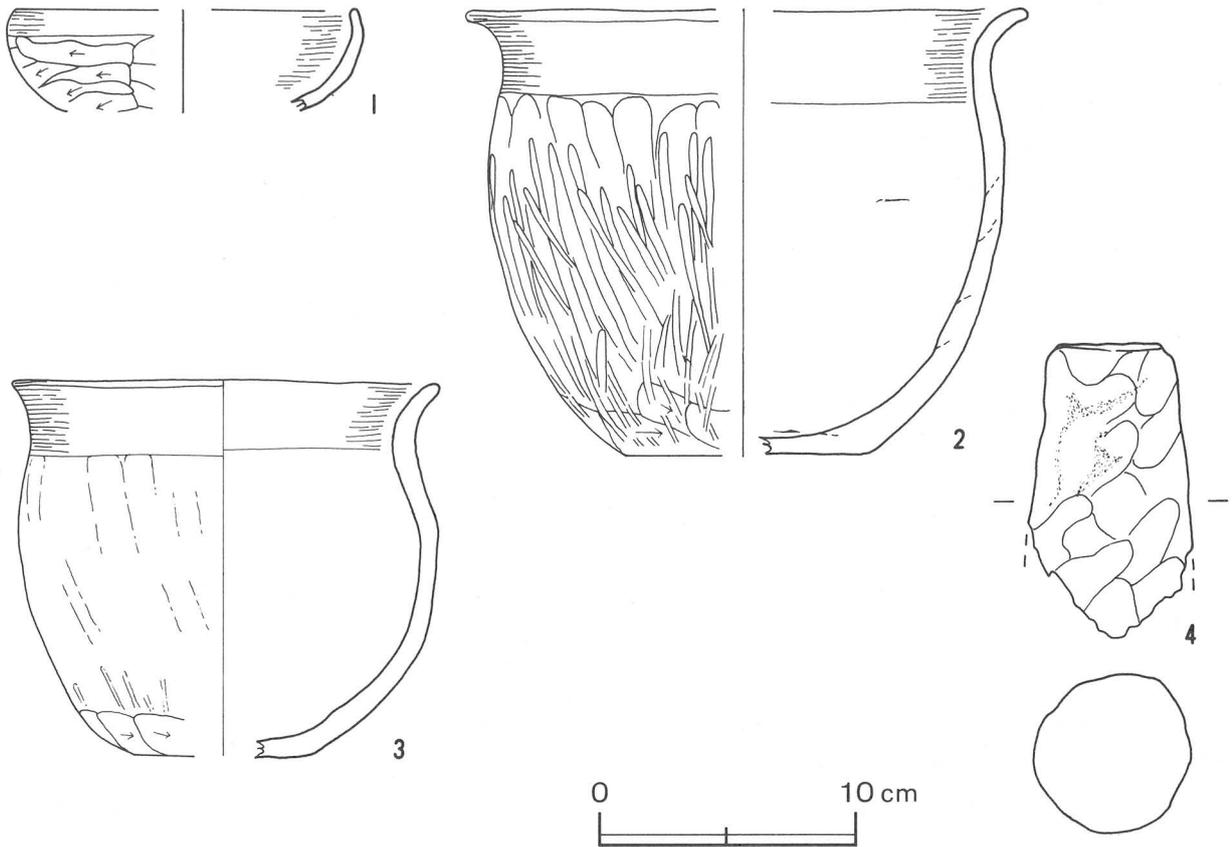
第53図 第243号住居跡・竈実測図

第243号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土, 色調, 焼成	備考
第54図 1	坏 土師器	A [13.4] B (4.0)	体部は内彎して立ち上がり, におい稜を持って口縁部に移行する。口縁部は短く内傾する。やや腰高。	内面〜口縁部外面ヨコナデ。体部外面へラ削り。	砂粒・雲母 におい褐色 普通	P230 10% 中央部覆土下層
2	小形甕 土師器	A [21.8] B 17.8 C [9.0]	平底。体部はやや強く内彎しながら立ち上がる。体部最大径は上位。口縁部は丸みを持って外反する。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面上〜中位縦方向・下位横方向のへラ削り, のちへラ磨き。内面ナデ。	砂粒・スコリア・ 長石・雲母 におい褐色 普通	PL50-4 P233 35% 中央部覆土下層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土,色調,焼成	備考
第54図 3	小形甕 土師器	A 16.7 B 15.0 C [7.0]	平底。体部はやや強く内彎しながら立ち上がる。最大径は上～中位境界付近。口縁部は丸みを持って外反。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面へラ削り,のちナデ。下位外面へラ磨き。内面ナデ。	砂粒。スコリア・長石・雲母にふい黄橙色普通	PL50-3 P232 70% 中央部覆土下層

図版番号	器種	計測値				出土状況	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
4	土製支脚	(11.7)	(6.4)	—	(318.9)	竈前方覆土下層	PL50-5, DP 8



第54図 第243号住居跡出土遺物実測図

第244号住居跡 (第55図, PL20)

位置 II (H5) 区の中央西寄り, E6c5区に位置する。

規模と平面形 南北2.79m, 東西2.65mのやや不整な方形である。

主軸方向 N-3°-E

壁 壁高は最大でも8cmで, 立ち上がりは垂直に近いようであるが, それ以上は不明である。

壁溝 認められない。

床 全体に軟弱であるが, 中央部には踏み固められた部分が認められた。床はローム地山をそのまま利用している。

ピット 4か所 (P₁~P₄)。いずれも円形で, 径・深さとも20cm前後である。位置からみて本住居跡に伴うものかどうか疑問である。

竈・炉 竈・炉とも認められない。

覆土 自然堆積である。

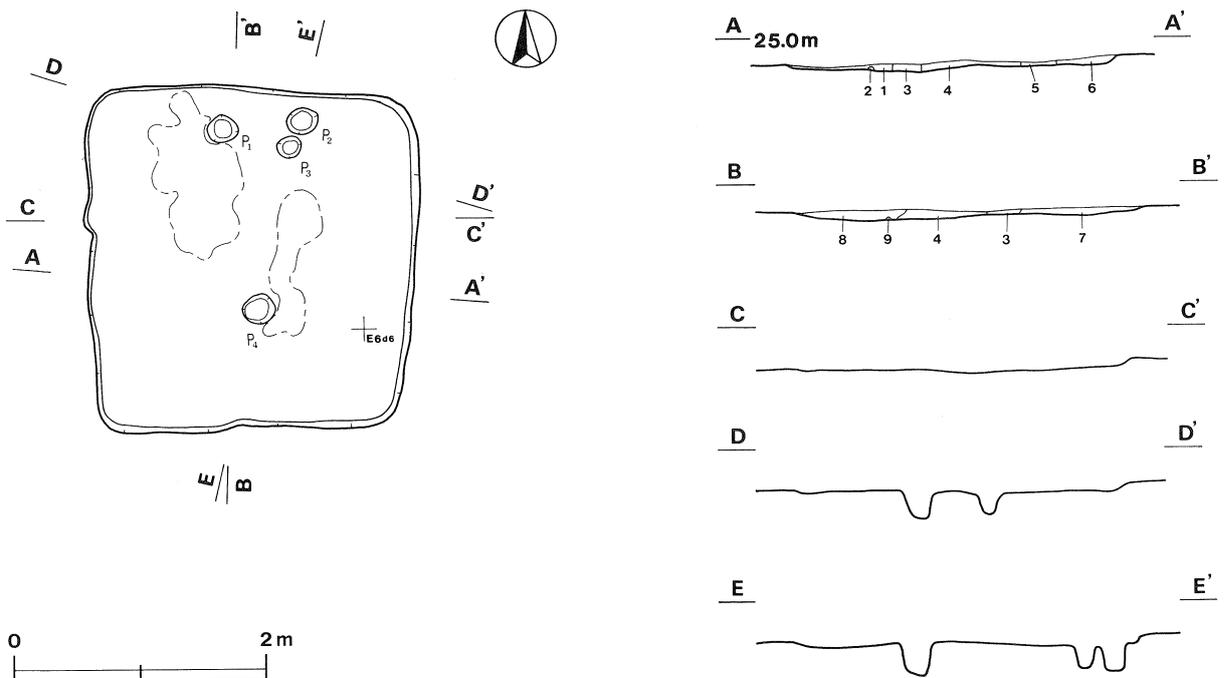
土層解説

- 1 暗褐色
- 2 黒褐色
- 3 黒褐色 ローム小ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック少量
- 5 暗褐色 焼土粒子微量

- 6 黒褐色 焼土粒子微量
- 7 黒褐色 焼土粒子微量,炭化粒子微量
- 8 暗褐色 炭化粒子微量
- 9 褐色

遺物 本住居跡に伴う遺物は出土していない。若干の土師器の細片は出土したが、本住居跡に伴うものとは考えられない。

所見 本遺構は、形状や類例から見ていわゆる竪穴遺構で、12世紀以降の住居跡と考えられる。



第55図 第244号住居跡実測図

第245号住居跡 (第56・57図, PL20)

位置 II (H5) 区の中央やや北西寄り, E6_{b6}区に位置する。第246号住居跡の北西部に重複していた。なお, 類似した遺構である第244号住居跡の北に隣接している。

規模と平面形 南北2.95m, 東西2.75mの不整形である。

主軸方向 N-5°-E

壁 壁高は最大10cmであるが, ほぼ垂直に立ち上がるようである。

壁溝 認められない。

床 ほぼ平坦である。中央部に踏み固められた部分がある。床はローム地山をそのまま利用している。

ピット 確認されていない。

竈・炉 竈・炉とも確認されていない。

覆土 土層断面図中, 第1~5層が本住居跡の覆土で, 自然堆積である。第246号住居跡の覆土を切っている。

土層解説

- | | |
|--------|-------------------------|
| 1 暗赤褐色 | 焼土粒子微量, ローム粒子少量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土粒子微量, ローム粒子中量 |
| 3 褐色 | ローム中ブロック少量・小ブロック少量・粒子多量 |
| 4 極暗褐色 | 焼土粒子微量, ローム粒子中量 |
| 5 極暗褐色 | 焼土粒子微量, ローム粒子少量 |

遺物 本住居跡に伴う遺物は出土していない。若干の土師器細片は出土しているが、本住居跡に伴うものとは考えられない。

所見 切り合い関係からは、重複する第246号住居跡が新しい。本遺構は、形状や類例から見てわゆる竪穴遺構で、12世紀以降の住居跡と考えられる。

第246号住居跡 (第56～58図, PL21・50)

位置 II (H5) 区の中央やや北西寄り, E6b7区に位置する。第245号住居跡が西コーナーに、第1号道路が南部に重複している。

規模と平面形 南東壁は、第1号道路に切られていて、全く残存しない。主軸現存長6.20m, 幅6.90mである。主軸長は7mまで伸びることはなく、方形になる。

主軸方向 N-27°-W

壁 壁高20cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 壁が残存する部分は全周する。竈部分では、火床部を除いて、両袖下部にも廻る。幅25cm前後、深さ10cm程で、断面逆台形である。

床 平坦で、中央部分は踏み固められ、堅緻である。

ピット 5か所 (P1～P5)。いずれも円形ないし不整形円形である。P1・P3・P4は径が80cm前後、深さが45cm前後である。P2は径が55cmでやや小さいが、深さはやはり45cmである。以上4か所が位置等から見て支柱穴と考えられる。P5は最大径52cmの不整形円形ピットで、深さは23cmである。残存しない南東壁の中央部の際にあったものと考えられ、位置から見て入口ピットと考えられる。

竈 北西壁中央部に、砂まじりの粘土を使用して構築している。掘り方は、壁を幅約1mにわたり、奥行き33cmほど、弧状に掘り込んでいる。両袖が残存している。火床部はわずかに凹むだけである。火床部の中心部がかなり広く焼け、赤変・硬化している。赤変した部位は壁の線より完全に手前である。煙道の立ち上がりは約15°と極めて緩やかである。

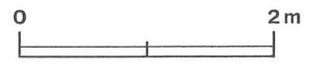
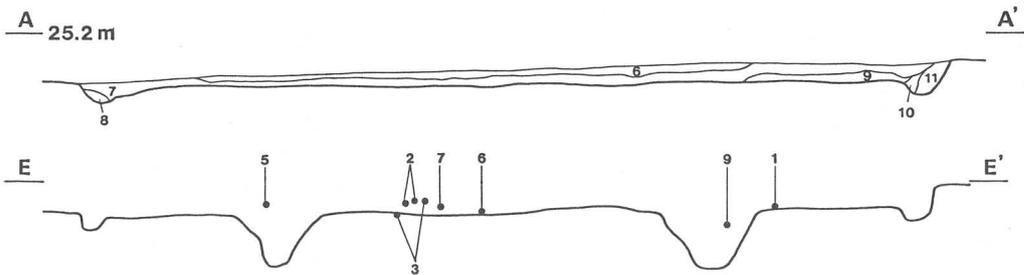
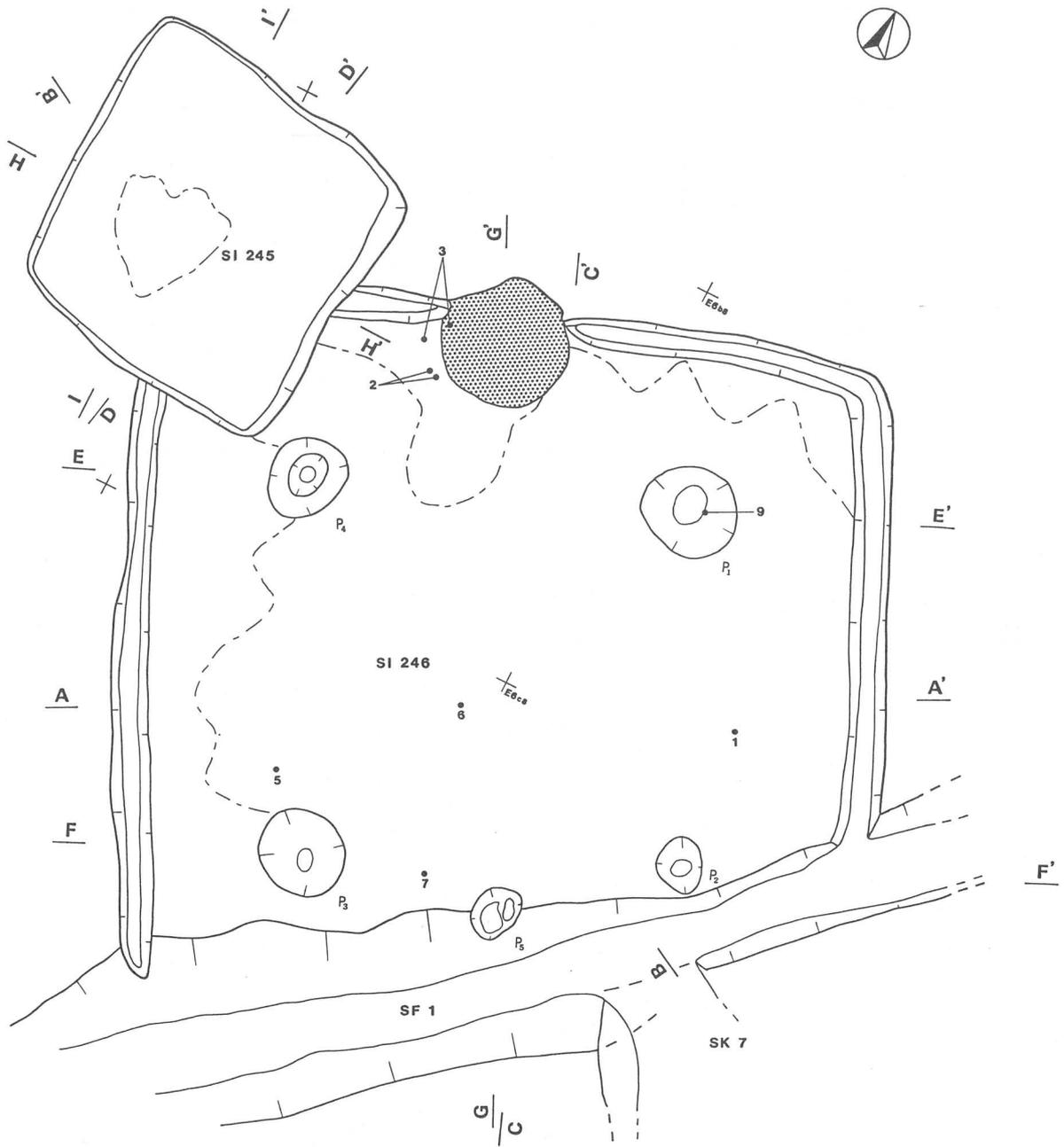
竈土層解説

- | | | | |
|--------|----------------------------------|--------|------------------------|
| 1 赤褐色 | 焼土粒子少量, 粘土粒子中量 | 5 赤褐色 | 焼土粒子少量, 炭化粒子少量, 粘土粒子微量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土粒子中量, 粘土粒子微量 | 6 暗赤褐色 | 焼土粒子中量, 粘土粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土粒子多量, 炭化粒子少量, 粘土粒子中量, 黄白色パミス微量 | 7 暗赤褐色 | 焼土粒子多量, 粘土粒子微量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土粒子少量 | 8 暗赤褐色 | 焼土粒子少量, 粘土粒子微量 |
| | | 9 暗赤褐色 | 焼土小ブロック微量・粒子少量, 粘土粒子微量 |

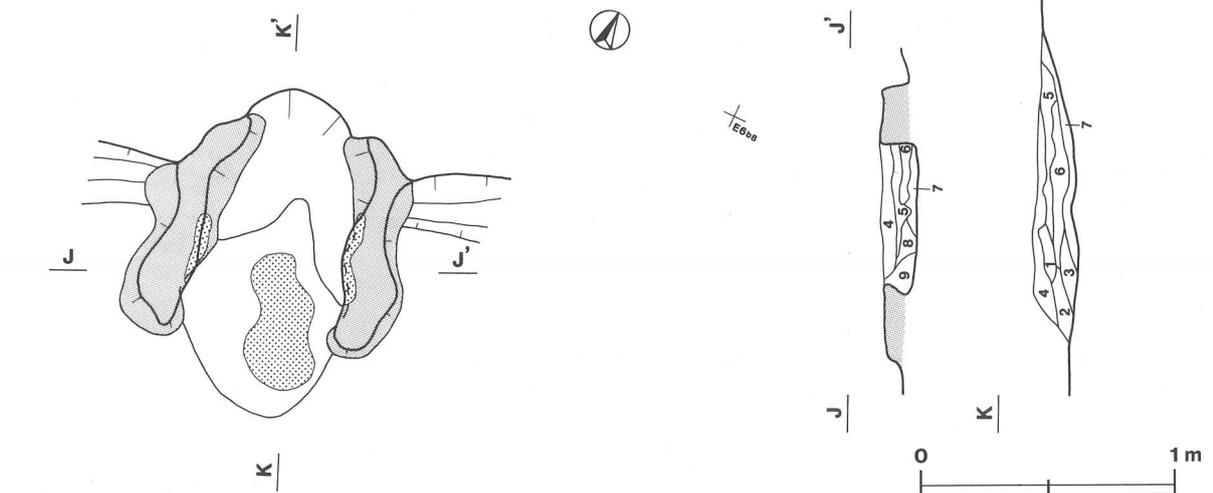
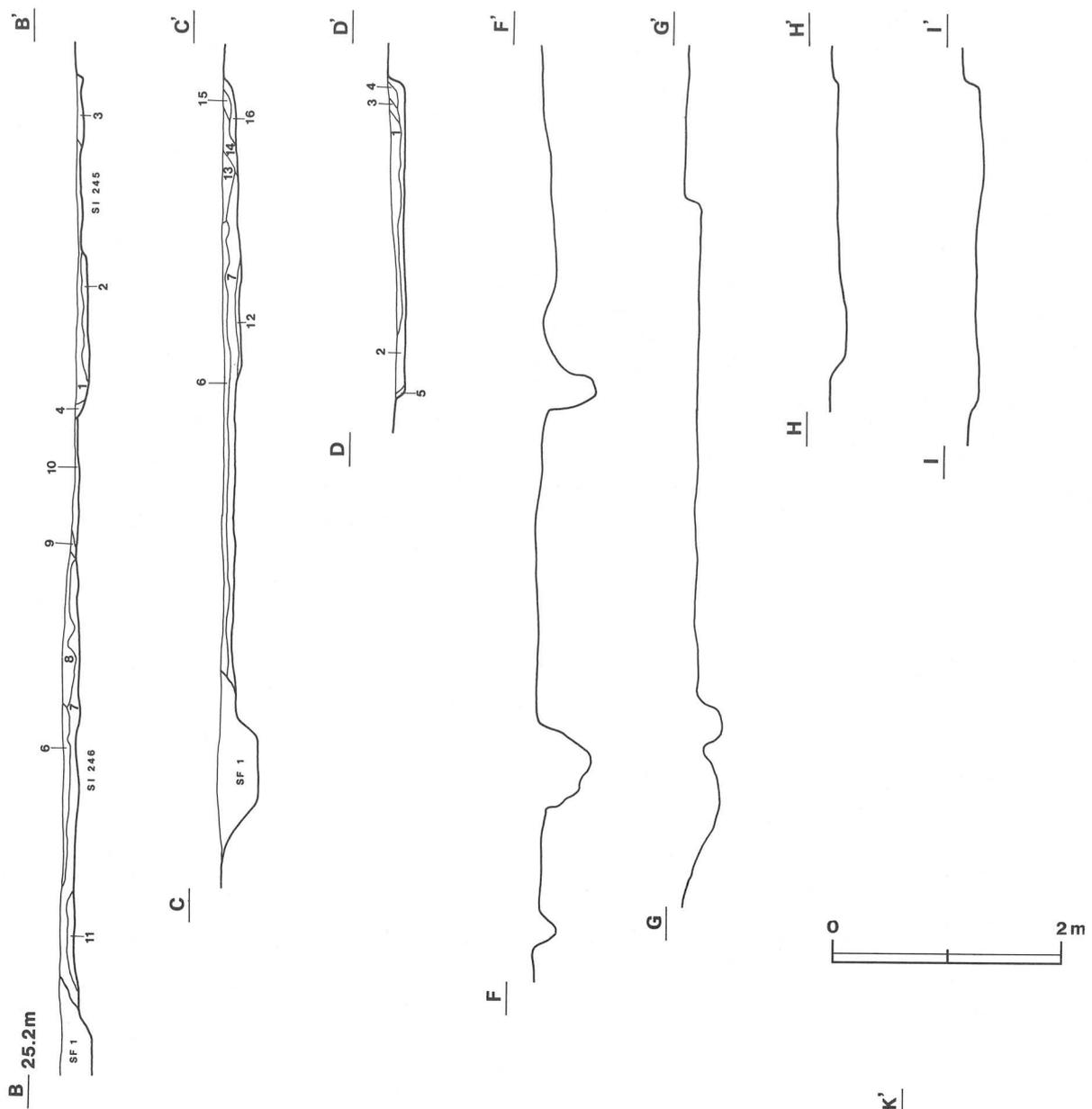
覆土 土層断面図中、第6～16層が本住居跡の覆土で、自然堆積である。第245号住居跡、及び第1号道路に切られている。

土層解説

- | | | | |
|----------|---------------------------------|---------|---------------------------------|
| 6 黒褐色 | 焼土粒子微量, ローム中ブロック少量・小ブロック少量・粒子中量 | 12 暗赤褐色 | 焼土粒子微量, 炭化粒子微量, ローム粒子少量 |
| 7 暗赤褐色 | 焼土粒子微量, ローム小ブロック微量・粒子中量 | 13 極暗褐色 | 焼土小ブロック微量・粒子少量, ローム粒子中量, 粘土粒子少量 |
| 8 暗赤褐色 | 焼土粒子少量, ローム小ブロック少量・粒子中量 | 14 暗赤褐色 | 焼土粒子少量, ローム粒子中量, 粘土粒子中量 |
| 9 暗赤褐色 | 焼土粒子微量, ローム小ブロック少量・粒子中量 | 15 暗赤褐色 | 焼土粒子少量, ローム粒子少量, 粘土中ブロック微量・粒子少量 |
| 10 暗赤褐色 | 焼土粒子微量, ローム粒子少量 | 16 暗赤褐色 | 焼土粒子中量, 炭化粒子少量, ローム粒子中量 |
| 11 極暗赤褐色 | 焼土粒子微量, 炭化粒子少量, ローム小ブロック少量・粒子多量 | | |



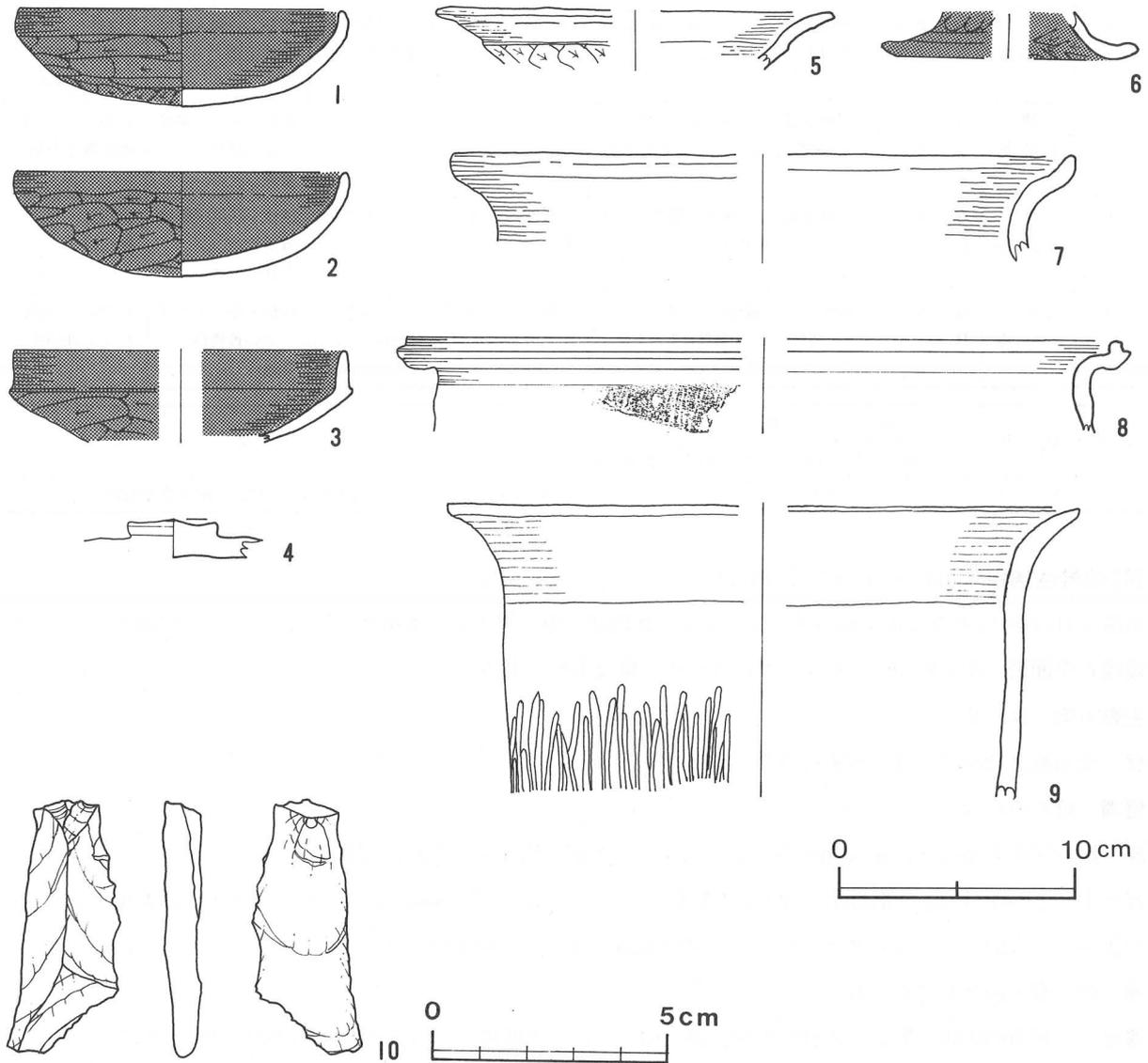
第56图 第245・246号住居跡実測图(1)



第57图 第245・246号住居跡実測图(2)・竈実测图

遺物 出土遺物は少なく、散漫な出土状況である。須恵器蓋（第58図4）・甕（同8）・剥片（同10）は混入と考えられる。

所見 本遺構は、重複する第245号住居跡・第1号道路より古く、出土遺物からは見て6世紀後半の住居跡と考えられる。



第58図 第246号住居跡出土遺物実測図

第246号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土, 色調, 焼成	備考
第58図 1	坏 土師器	A 13.7 B 4.2	丸底。体部は内彎して緩やかに立ち上がり, にぶい稜を持って短い口縁部に移行する。	内面~口縁部外面ヨコナデ。体部外面~底部ヘラ削り。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 灰褐色 普通	PL50-6 P239 80% 東部床面直上
2	坏 土師器	A 14.0 B 4.6	丸底。体部は内彎して緩やかに立ち上がり, にぶい稜を持って短い口縁部に移行する。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面~底部ヘラ削り。内面ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・スコリア・雲母, 極暗赤褐色 普通	PL50-9 P240 75% 竈付近覆土下層
3	坏 土師器	A [14.0] B (4.0)	体部は内彎しながら緩やかに立ち上がり, 明瞭な稜を持って口縁部に移行する。口縁部は直立する。	内面~口縁部外面ヨコナデ。体部外面ヘラ削り。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	P241 20% 竈付近覆土下層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土,色調,焼成	備考
第58図 4	蓋 須恵器	F 3.8 G 0.6	天井部につぶれたつまみが付く。	内・外面ヨコナデ。内面中央部ナデ。	砂粒・スコリア・長石 灰黄色, 普通	P246 10% 覆土中
5	高坏 土師器	A [16.8] B (2.4)	坏部破片。口縁部は体部から稜を持って立ち上がり,大きく外反する。	内面～口縁部外面ヨコナデ。体部外面ヘラ削り。	精良, 砂粒・雲母 にぶい黄橙色 普通	PL50-8 P247 10% 南西部覆土下層
6	高坏 土師器	D [10.8] E (1.9)	脚裾部破片。ラップ状に開き,端部付近は肥厚する。	中位内・外面ヘラ削り。裾部内・外面ヨコナデ。内・外面黒色処理。	精良, 砂粒・雲母 灰黄褐色 普通	P248 5% 中央部床面直上 5と同一個体か
7	甕 土師器	A [26.5] B (4.5)	口縁部破片。丸みを持って外反する。端部は外上方につまみ上げる。	内・外面ヨコナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P251 5% 南部覆土下層
8	甕 須恵器	A [30.2] B (4.0)	口縁部破片。口縁部は頸部から強く外反し,端部は上方につまみ上げる。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面平行叩き。内面ナデ。	砂粒・石英・雲母 暗灰黄色 普通	P253 5% 覆土中
9	甗 土師器	A [26.7] B (12.5)	体部上位～口縁部破片。体部はわずかに外傾する。口縁部は丸みを持って外反し,端部はつまみ上げる。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面ナデ・ヘラ磨き。内面ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄橙色 普通	P249 10% ピット(P ₁)中

図版番号	器種	計測値				出土状況	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
10	剥片	5.5	2.4	0.8	7.1	覆土中	PL50-7, Q11, 緻密質安山岩

第248号住居跡 (第59・60・62図, PL22)

位置 II (H5) 区の中央部, E6c9区に位置する。北西部に第7号土坑, 南東部に第249号住居跡が重複している。

規模と平面形 南北2.42m, 東西2.40mのやや不整な方形である。

主軸方向 N-0°

壁 壁高最大13cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 認められない。

床 概ね平坦であるが, 中央部がわずかに凹む。中央部は踏み固められ, 堅緻である。

ピット 1か所(P₁)。一部攪乱が入り, 不整形になっているが, 径25cm前後の円形ピット2つの重複であろう。

位置からは入口ピットとも考えられるが, 本住居跡に伴わない可能性もある。

竈・炉 竈・炉とも認められない。

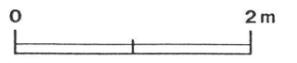
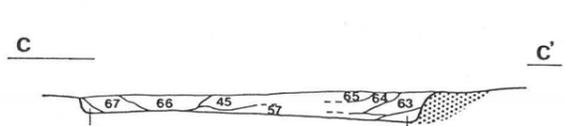
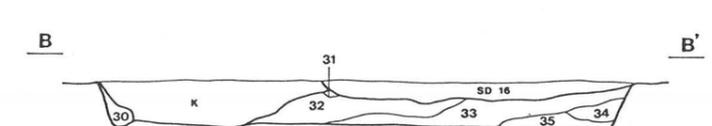
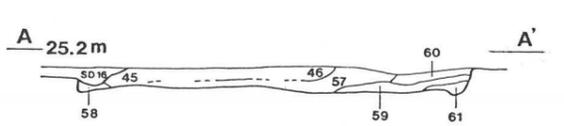
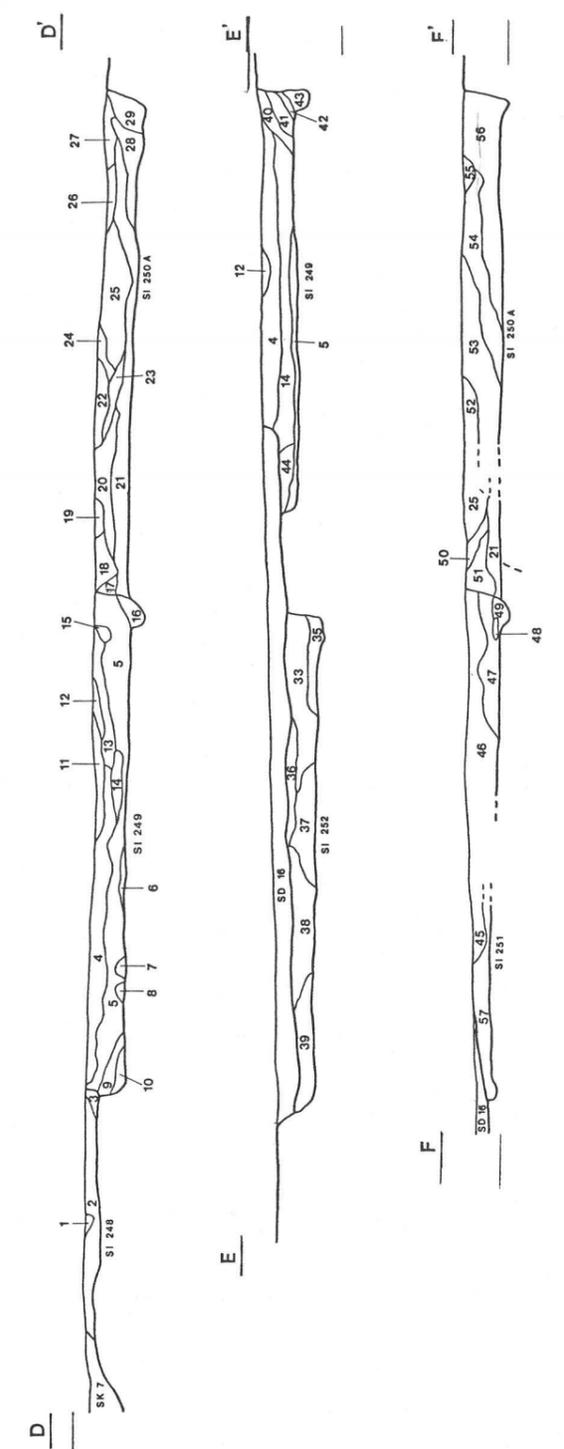
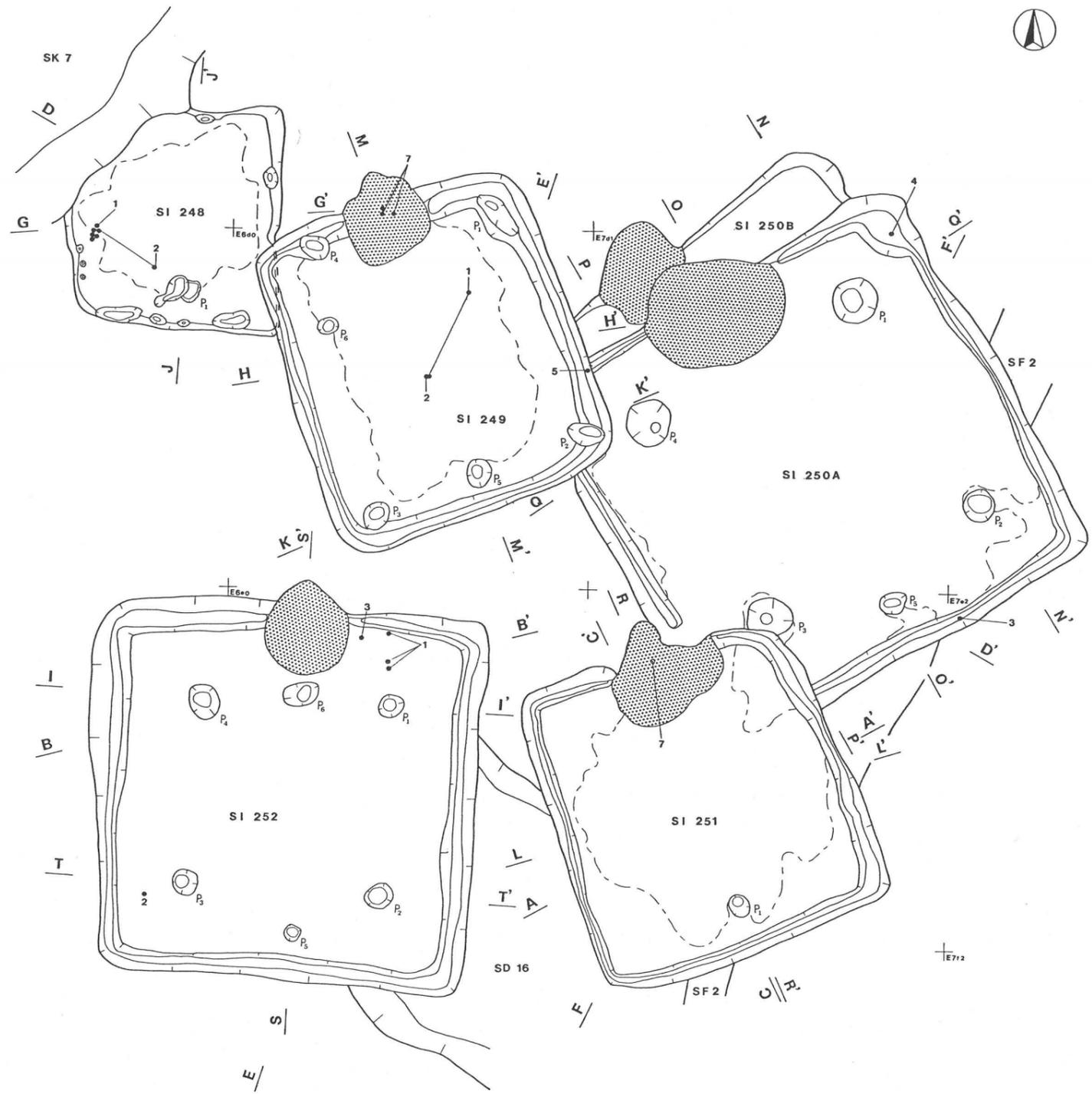
覆土 土層断面図中, 第1～3層が本住居跡の覆土で, 自然堆積である。第249号住居跡の覆土を切り, 第7号土坑によって切られている。

土層解説

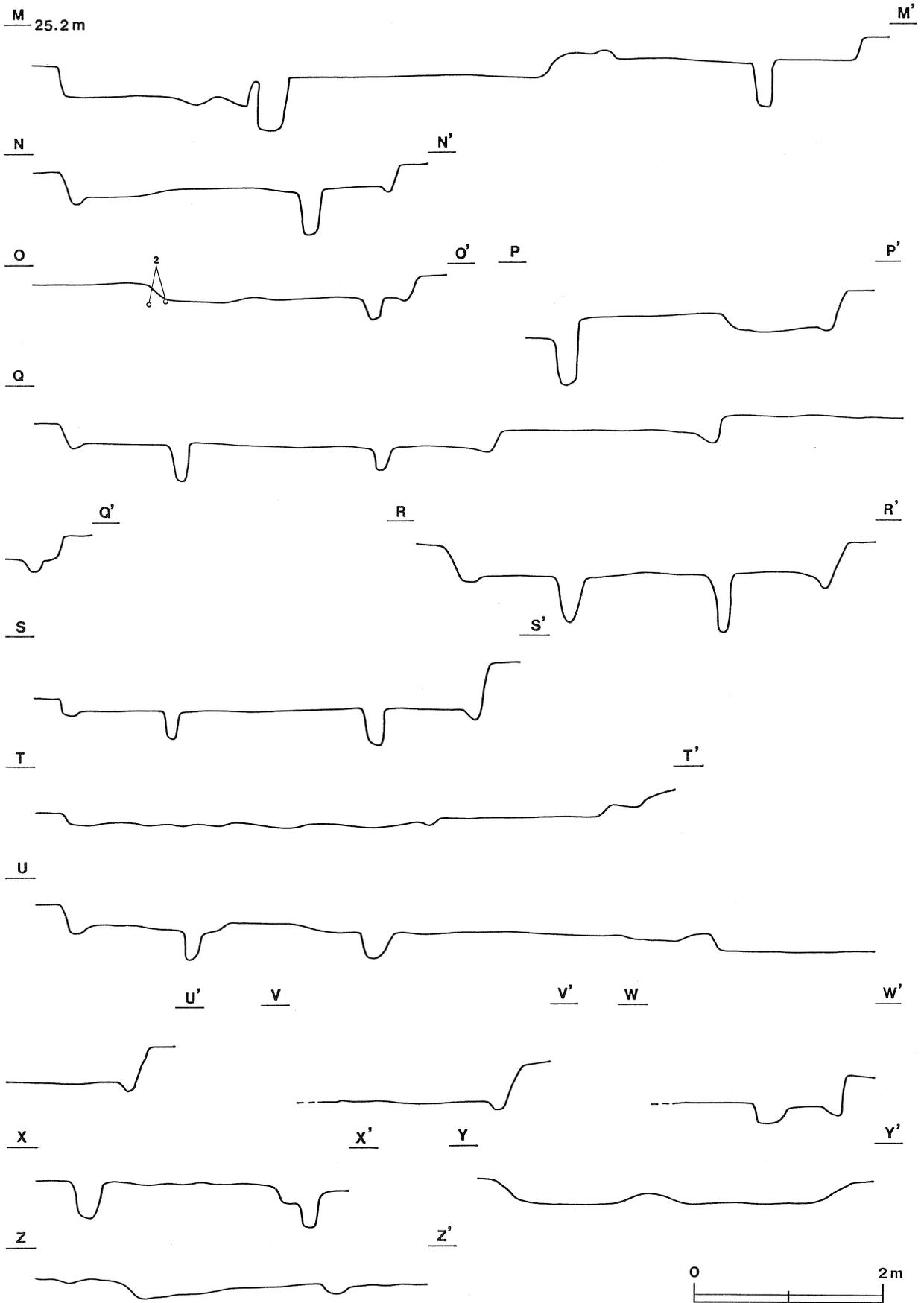
- 1 暗赤褐色 焼土粒子微量, ローム粒子少量
- 2 暗褐色 焼土粒子少量, 炭化物中量・粒子少量, ローム粒子中量, 粘土粒子微量
- 3 黒褐色 焼土粒子微量, 炭化粒子微量, ローム粒子少量

遺物 本遺構に伴う遺物は出土していない。図示したような遺物が若干出土しているが, 細片であり, 本遺構に伴うものとは考えられない。

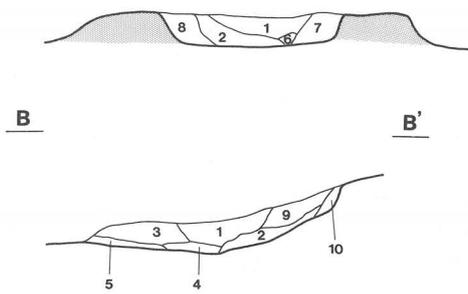
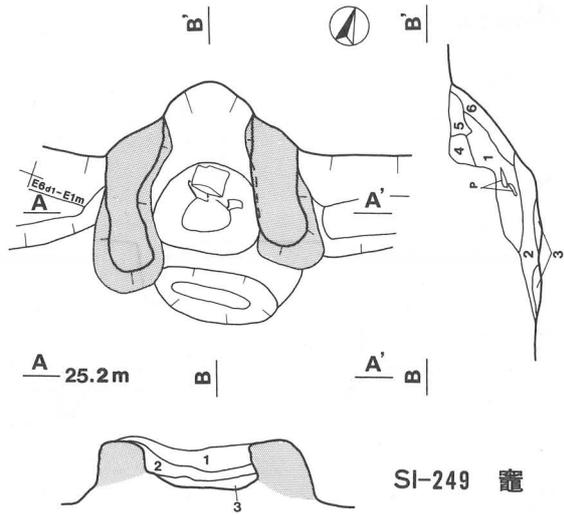
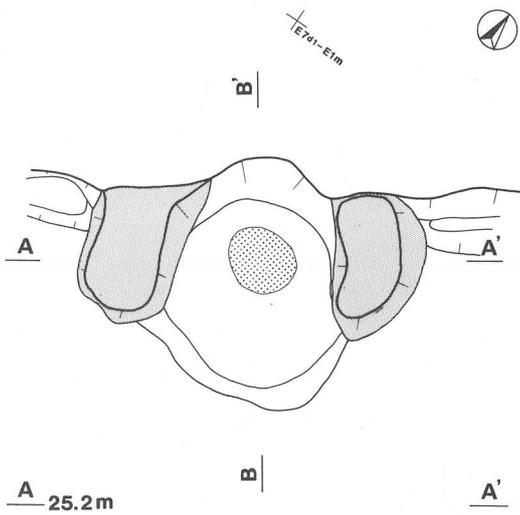
所見 本遺構は, 形状や類例から見ていわゆる竪穴遺構で, 12世紀以降の住居跡と考えられる。



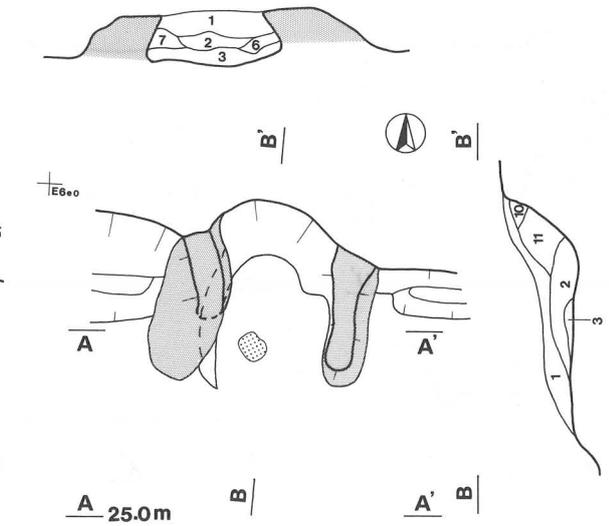
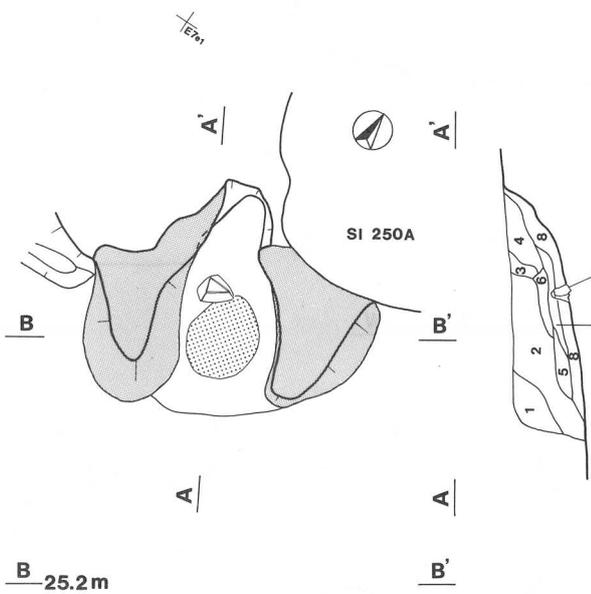
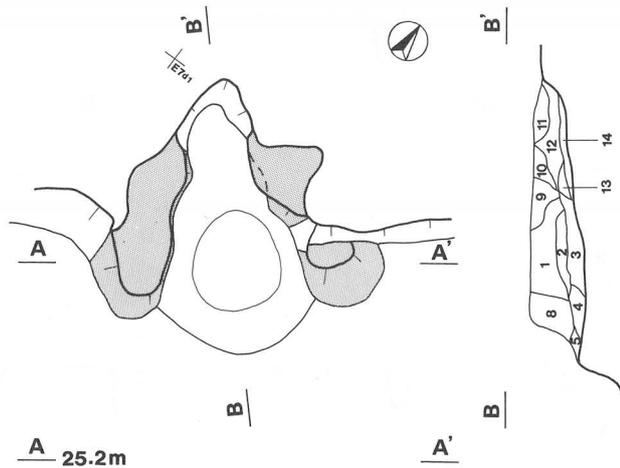
第59图 第248・249・250A・250B・251・252号住居跡実測图(1)



第60图 第248·249·250A·250B·251·252号住居跡実測图(2)



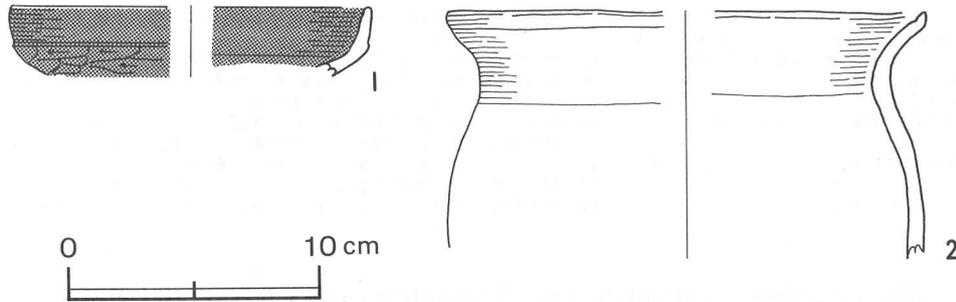
SI-250A 竈



SI-251 竈



第61図 第249・250A・250B・251・252号住居跡竈実測図



第62図 第248号住居跡出土遺物実測図

第248号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土,色調,焼成	備考
第62図 1	坏 土師器	A [14.2] B (2.8)	体部は内彎しながら緩やかに立ち上がり,明瞭な稜を持って口縁部に移行する。口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面へラ削り。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	P254 5% 覆土中
2	小形甕 土師器	A [19.0] B (10.0)	口縁部は丸みを持って外反し,端部はわずかにつまみ上げる。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色,普通 二次焼成顕著	P255 10% 覆土中

第249号住居跡 (第59~61・63図, PL22・50・51)

位置 II (H5)区の中央部, E6_{do}区に位置する。北西部に第248号住居跡, 南東部に第250A・250B号住居跡が重複する。

規模と平面形 主軸長3.65m, 幅3.25mの長方形である。

主軸方向 N-18°-W

壁 壁高35cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 竈部分を除き全周する。幅15~20cm, 深さ5~8cmで, 断面は逆台形ないし逆三角形である。

床 平坦で, 中央部分は踏み固められ, 堅緻である。

ピット 6か所(P₁~P₆)。P₁~P₄はいずれも短径が25cm前後の不整形円形または不整形楕円形で, 深さは15~20cmである。各コーナーまたは壁際にあるが, 支柱穴の可能性もある。P₅は径30cmの円形のピットで, 深さは18cmある。南壁中央の壁際にあり, 入口ピットと考えられる。P₆は, 西壁に寄った位置にある, 径20cmの円形ピットで, 深さは25cmである。性格は, この住居跡に伴うかどうかも含め, 不明である。

竈 北壁中央部に, 砂まじりの粘土で構築している。掘り方は, 幅78cmにわたり, 奥行き30cmほど, 北壁を掘り込んでいる。平面形は煙道部分が半円形で, 両袖の取り付け部分はコーナー状に掘り込んでいる。両袖が残存している。火床部は, 前後2か所に分かれたわずかな凹みを持つ。煙道の立ち上がりは40°である。

竈土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------------------|----------|-------------------------------|
| 1 黄褐色 | 焼土粒子少量,炭化物・粒子微量,粘土小ブロック微量・粒子中量 | 4 オリーブ褐色 | 焼土粒子微量,粘土粒子微量 |
| 2 褐色 | 焼土小ブロック少量・粒子中量,炭化粒子微量,粘土小ブロック・粒子微量 | 5 黄褐色 | 焼土粒子微量,粘土中ブロック微量・小ブロック微量・粒子少量 |
| 3 黒褐色 | 焼土小ブロック微量,粒子少量,炭化粒子少量,粘土小ブロック・粒子微量 | 6 暗褐色 | 焼土粒子微量,粘土粒子微量 |

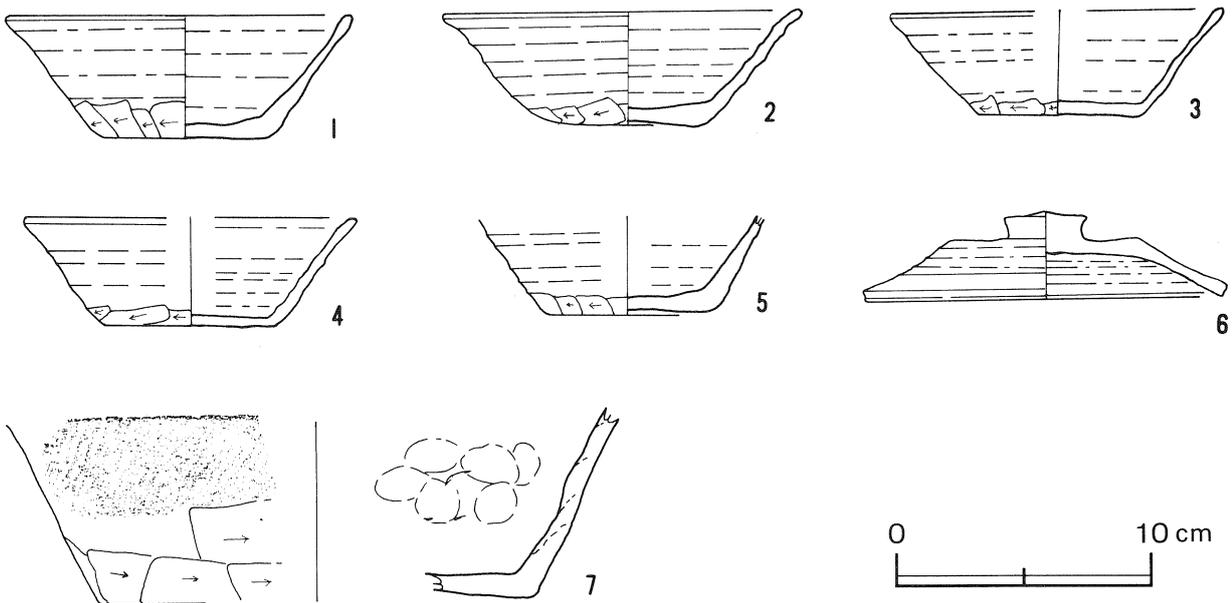
覆土 土層断面図中, 第4~16層, 及び第40~44層が本住居跡の覆土で, 自然堆積である。第248号, 第250A号, 及び第250B号住居跡に切られている。

遺物 出土遺物は少なく, 出土状況は散漫である。図示した遺物は竈内・覆土下層等出土のものが多く, 本住居跡に伴うものと考えられる。

土層解説

- | | | | |
|--------|----------------------------|---------|---|
| 4 暗赤褐色 | 焼土粒子微量, ローム小ブロック・粒子微量 | 14 暗赤褐色 | 焼土粒子中量, 炭化粒子少量, ローム粒子少量, 粘土粒子多量 |
| 5 暗赤褐色 | 焼土小ブロック微量, ローム小ブロック少量・粒子中量 | 15 黒褐色 | 焼土粒子微量, 粘土粒子少量 |
| 6 暗赤褐色 | 焼土粒子微量, ローム大ブロック少量・粒子中量 | 16 暗褐色 | 焼土小ブロック微量・粒子微量, ローム中ブロック少量・小ブロック少量・粒子中量 |
| 7 赤褐色 | 焼土粒子微量, 粘土粒子微量 | 40 暗褐色 | 焼土粒子微量, 炭化粒子微量, ローム粒子少量 |
| 8 褐色 | 焼土粒子少量, 粘土小ブロック少量 | 41 暗赤褐色 | 焼土粒子微量, 炭化物微量, ローム粒子少量 |
| 9 暗褐色 | 焼土粒子少量, 炭化粒子微量, ローム粒子中量 | 42 赤褐色 | 焼土粒子少量, ローム粒子少量, 粘土小ブロック多量 |
| 10 褐色 | 炭化物微量 | 43 褐色 | 炭化粒子微量, ローム小ブロック・粒子少量 |
| 11 黒褐色 | 焼土粒子微量, 炭化粒子微量, ローム小ブロック少量 | 44 暗赤褐色 | 焼土小ブロック・粒子微量, ローム小ブロック微量・粒子少量 |
| 12 暗褐色 | 焼土粒子微量 | | |
| 13 暗褐色 | 焼土粒子微量, ローム粒子多量 | | |

所見 本遺構は、切り合い関係からは重複する第248号住居跡、第250A・B号住居跡より古い。出土遺物からは9世紀中葉の住居跡と考えられる。



第63図 第249号住居跡出土遺物実測図

第249号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土, 色調, 焼成	備考
第63図 1	須恵器 坏	A 13.6	平底。体部～口縁部は外傾して直線的に立ち上がる。	内・外面ヨコナデ。体部下位外面ヘラ削り。底部回転ヘラ切り, のち一定方向の静止ヘラ削り調整。	砂粒・石英・長石 灰色 普通	PL50-10 P257 90% 中央部覆土下層
		B 4.9				
		C 6.4				
2	須恵器 坏	A 14.1	平底。体部は外傾して直線的に立ち上がり, 口縁部はわずかに外反する。	内・外面ヨコナデ。体部下位外面ヘラ削り。底部ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 黄灰色 普通	PL50-11 P258 90% 中央部覆土下層
		B 4.7				
		C 5.8				
3	須恵器 坏	A [13.0]	平底。体部～口縁部は外傾してほぼ直線的に立ち上がる。	内・外面ヨコナデ。体部下位外面ヘラ削り。底部回転ヘラ切り, のち縦横の静止ヘラ削り調整。	砂粒・長石・雲母 灰色 普通	PL51-1 P259 35% 覆土中
		B 4.4				
		C 6.4				
4	須恵器 坏	A [13.0]	平底。体部は外傾して直線的に立ち上がり, 口縁部はわずかに外反気味になる。	内・外面ヨコナデ。体部下位外面ヘラ削り。底部回転ヘラ切り, のち縦横の静止ヘラ削り調整。	砂粒・長石・雲母 黄灰色 普通	P260 25% 覆土中
		B 4.3				
		C 6.8				
5	須恵器 坏	B (4.0)	平底。体部は外傾して直線的に立ち上がる。口縁部欠失。	内・外面ヨコナデ。体部下位外面ヘラ削り。底部回転ヘラ切り, のち静止ヘラ削り調整。	砂粒・長石・雲母 灰黄色 普通	P262 60% 南東部壁際下層
		C 6.0				
6	須恵器 蓋	A 14.3	つまみはつぶれた擬宝珠形。天井部は水平。中位以下では外下方へ大きく開く。その境界では外面に稜。端部はわずかに下方へ張り出す。	天井部外面回転ヘラ削り。他はヨコナデ。	砂粒・雲母 黄灰色 普通	PL51-2 P264 70% 覆土中
		B 3.5				
		F 3.2				
		G 1.1				

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土、色調、焼成	備 考
7	鉢 須恵器	B (7.6) C [17.0]	やや上げ底気味の平底。体部は外傾して直線的に立ち上がる。	体部外面平行叩き。体部下位外面へう削り。内面ナデ・指押え。	砂粒・スコリア・長石・雲母、灰黄色、内面土師質	P265 15% 竈内

第250A号住居跡 (第59～61・64図, PL23・24)

位置 II (H5) 区の中央部, E7_{d1}区に位置する。当初1軒の住居跡と見ていたが, 調査の過程で2軒の住居跡の重複と確認されたため, A・Bに分けた。南東側で住居跡のほぼ全体が確認されたものをAとし, Aによって切られ, わずかに北壁と竈の付近を残していたものをBとした。北西部に第249号住居跡, 南西部に第251号住居跡, 南部に第2号道路が重複している。

規模と平面形 主軸長4.65m, 幅4.76mの方形である。

主軸方向 N-29°-W

壁 壁高41cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 残存する部分は, 竈部分を除いて, 全周する。幅は差が大きく10～30cm, 深さは4～11cmで, 断面は逆台形ないし半円形である。

床 平坦で, ほとんど全面踏み固められている。特に支柱穴と入口ピットに囲まれた範囲内は強く踏み固められ, 極めて堅緻である。

ピット 5か所(P₁～P₅)。P₁～P₄はいずれも径35～50cmの円形ピットで, 深さは40～45cmである。各コーナー近くに位置し, 支柱穴と考えられる。P₅は長径35cmの楕円形ピットで, 深さは10cmである。南東壁中央の壁際にあり, 入口ピットと考えられる。

竈 北西壁中央に, 黒色土と砂まじりの粘土で構築している。掘り方は幅約70cmにわたり, 奥行き17cm程, 弧状に掘り込んでいる。両袖が残存している。竈材としては黒色土を混入しているところに特徴があり, 極めてしまった袖となっている。火床部はわずかに凹む。両袖間の幅が広く, 火床面が広い。このことは袖の堅緻さと関係がある。火床部はやや奥(壁の線よりは手前)が焼けて赤変・硬化している。煙道の立ち上がりは約30°と比較的緩やかである。なお, 本住居跡の竈は, Bの竈の崩壊土層を切って構築されている。

竈土層解説

1	にぶい赤褐色	焼土中ブロック微量・小ブロック少量・粒子多量, 炭化粒子微量, 粘土中ブロック微量・小ブロック微量・粒子少量	6	暗赤褐色	焼土小ブロック微量・粒子少量, 粘土粒子微量
2	灰褐色	焼土小ブロック微量・粒子中量, 粘土粒子中量, 灰中量	7	褐色	焼土粒子中量, 粘土粒子中量
3	褐色	焼土小ブロック微量・粒子少量, 炭化物・粒子微量, 粘土中ブロック・小ブロック・粒子微量	8	暗赤褐色	焼土小ブロック微量・粒子中量, 炭化粒子少量, 粘土粒子中量
4	にぶい赤褐色	焼土微量・粒子中量, 炭化粒子微量, 粘土小ブロック・粒子微量	9	暗赤褐色	焼土小ブロック少量・粒子中量, 炭化粒子少量, 粘土小ブロック・粒子少量
5	黒褐色	焼土小ブロック・粒子微量, 炭化粒子微量	10	暗褐色	焼土粒子少量, 粘土粒子多量

覆土 土層断面図中, 第17～29層, 及び第50～56層が本住居跡の覆土である。ロームブロックを多く含む層があり, 人為的に埋め戻されたようである。第249号住居跡, 及び第251号住居跡に切られている。なお, 覆土上を第2号道路が走る。

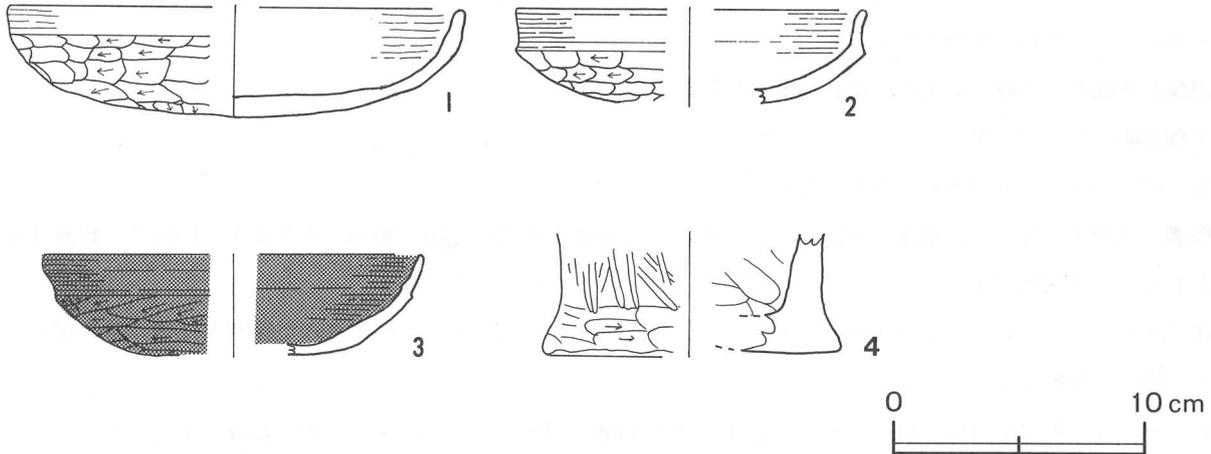
土層解説

17	暗褐色	焼土粒子微量, ローム粒子少量	25	褐色	焼土粒子少量, 炭化粒子少量, ローム小ブロック少量・粒子中量
18	褐色	焼土粒子微量	26	暗褐色	焼土粒子少量, 炭化粒子微量, ローム大ブロック微量・粒子中量
19	赤褐色	焼土粒子微量, ローム粒子中量	27	暗褐色	焼土粒子微量, ローム粒子中量, 粘土粒子微量
20	暗褐色	焼土粒子少量, 炭化粒子微量, ローム小ブロック少量・粒子多量	28	黒褐色	焼土粒子少量, 炭化粒子微量, ローム小ブロック少量・粒子中量, 粘土粒子微量
21	黄褐色	焼土小ブロック微量・粒子少量, 炭化物・粒子微量, ローム中ブロック中量・小ブロック多量・粒子多量	29	暗褐色	焼土粒子微量, ローム粒子少量
22	暗褐色	焼土粒子微量, 炭化粒子微量, ローム粒子中量	50	暗褐色	焼土粒子微量, 炭化粒子少量, ローム中ブロック中量・小ブロック中量・粒子少量
23	暗赤褐色	焼土粒子微量, 炭化粒子微量, ローム粒子中量			
24	暗褐色	焼土粒子微量, 炭化粒子微量, ローム粒子中量			

- 51 褐色 焼土粒子少量,炭化粒子少量,ローム中ブロック多量・小ブロック中量・粒子少量
 52 暗褐色 焼土小ブロック微量・粒子少量,ローム小ブロック微量
 53 暗褐色 焼土小ブロック・粒子少量,炭化粒子少量,ローム中ブロック少量・小ブロック中量・粒子中量
 54 暗褐色 焼土小ブロック・粒子少量,炭化粒子少量,ローム小ブロック・粒子少量
 55 黒褐色 焼土粒子少量,ローム小ブロック・粒子少量
 56 暗褐色 焼土粒子少量,炭化粒子少量,ローム中ブロック少量・小ブロック中量

遺物 出土遺物は少なく、細片がほとんどである。しかし竈内や壁溝内からの遺物の出土があり、これらは本住居跡に伴うものと考えられる。

所見 切り合い関係から、重複する第249号・第251号住居跡・第2号道路より古く、第250B号住居跡より新しい。出土遺物からは7世紀後半の住居跡と考えられる。



第64図 第250A号住居跡出土遺物実測図

第250A号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土,色調,焼成	備考
第64図 1	坏 土師器	A [18.0] B (4.4)	丸底。体部は内彎しながら緩やかに立ち上がり,にぶい稜を持って口縁部に移行する。口縁部は短く直立。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面～底部ヘラ削り。内面ナデ調整。	砂粒・スコリア・石英・雲母 橙色,普通	P269 20% 竈内
2	坏 土師器	A [13.8] B (3.8)	丸底。体部は内彎しながら緩やかに立ち上がり,稜を持って口縁部に移行。口縁部は外反しながら直立。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面～底部ヘラ削り。内面ナデ調整。	砂粒・スコリア 灰黄褐色 普通	P270 5% 竈内
3	坏 土師器	A [15.0] B 4.1	丸底。体部は内彎しながら緩やかに立ち上がり,稜を持って口縁部に移行。口縁部は内彎しながら外傾。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面～底部ヘラ削り。内面ナデ調整。全面黒色処理(漆使用か)。	砂粒・雲母 黒色 普通	P271 5% 南壁際壁溝内
4	鉢 土師器	B (4.9) C [11.8]	平底。底部は器厚が厚く,体部より外に張り出す。体部はやや外反しながらわずかに外傾して立ち上がる。	体部ヘラ磨き調整。体部下位～底部ヘラ削り。	砂粒・スコリア・雲母,にぶい橙色 普通	P272 10% 北西隅覆土下層

第250B号住居跡 (第59～61・65図, PL23・24・51)

位置 II(H5)区の中央部, E7d1区に位置する。確認状況等は第250A号住居跡の項を参照されたい。

規模と平面形 北西壁に竈を持ち,現存幅3.38mである。主軸長は不明である。第250A号住居跡の北東・南東・南西の各壁から外側には広がらないので,主軸長・幅とも4～5mの規模の方形,またはそれに近い形状の住居跡であったと推定できる。

主軸方向 N-30°-W

壁 壁高12cm程で,現状ではかなり外傾して立ち上がるが,本来の壁の状況は不明である。

壁溝 認められない。

床 北西壁際しか残存していないが,残存部は軟弱である。

ピット 認められない。

竈 北西壁に、砂まじりの粘土で構築している。掘り方は幅約80cmにわたり、奥行き65cm程、三角形に壁を掘り込み、両袖の取り付く部分はさらにコーナー状に掘り込んでいる。そのため全体としては凸字状になっている。両袖が残存している。火床部は僅かに凹み、中央部が焼けて赤変・硬化している。煙道の立ち上がりは最奥部では急であるが、全体としては約15°と極めて緩やかである。

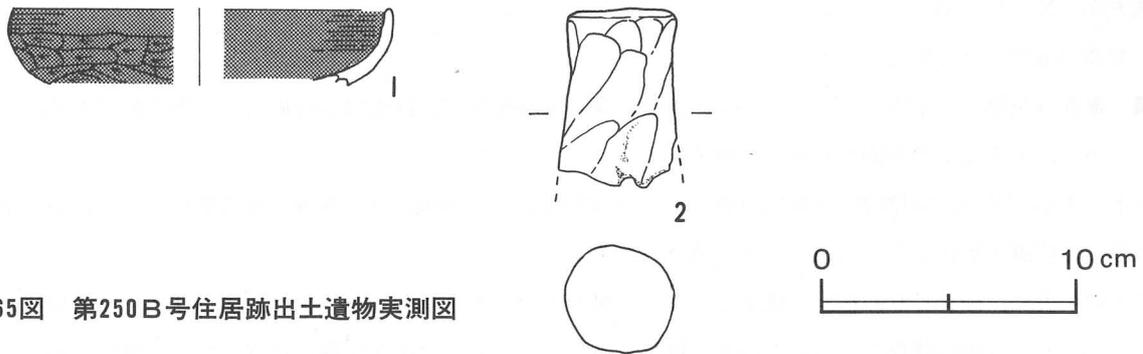
竈土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------------|---------|-----------------------|
| 1 暗赤褐色 | 焼土粒子少量,炭化粒子少量,粘土粒子少量 | 8 暗赤褐色 | 焼土粒子少量,粘土粒子中量 |
| 2 赤褐色 | 焼土粒子少量,粘土粒子多量 | 9 暗赤褐色 | 焼土小ブロック微量・粒子少量,粘土粒子中量 |
| 3 赤褐色 | 焼土小ブロック少量・粒子多量,炭化粒子少量 | 10 暗赤褐色 | 焼土中ブロック中量・粒子多量,粘土粒子少量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土粒子少量,炭化粒子微量,粘土粒子少量 | 11 暗褐色 | 焼土粒子中量,炭化粒子少量,粘土粒子微量 |
| 5 暗赤褐色 | 焼土粒子少量,炭化粒子微量,粘土粒子多量 | 12 暗赤褐色 | 焼土小ブロック少量・粒子中量,炭化物少量 |
| 6 暗赤褐色 | 焼土小ブロック微量・粒子中量,粘土粒子少量 | 13 暗赤褐色 | 焼土粒子微量,貝殻小片中量 |
| 7 暗赤褐色 | 焼土小ブロック少量・粒子中量,炭化粒子少量,粘土粒子少量 | 14 赤褐色 | 焼土粒子多量,炭化粒子少量 |

覆土 調査の過程で確認したので、土層堆積状況の把握は特にしていない。人為的堆積の状況は認められなかった。第250A号住居跡の竈の残存状況、第250A号住居跡の床より本住居跡の床が高いにもかかわらず貼床がないことから、本住居跡は第250A号住居跡に切られていたことは明らかである。なお、第250A号住居跡は第249号住居跡に切られているので、本住居跡は第249号住居跡にも切られていたことになる。

遺物 竈周辺からの土師器坏と土製支脚のみである。

所見 切り合い関係から見て、重複する第249号・第250A号・第251号住居跡、第2号道路より古い。出土遺物からは7世紀前半の住居跡と考えられる。

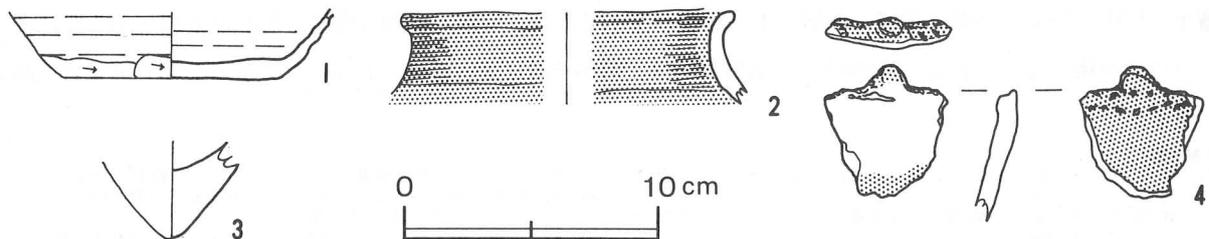


第65図 第250B号住居跡出土遺物実測図

第250B号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土,色調,焼成	備考
第65図 1	坏 土師器	A〔14.8〕 B〔3.1〕	体部は内彎しながら緩やかに立ち上がり、にぶい稜を持って口縁部に移行する。口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面ヘラ削り。内面ナデ調整。全面黒色処理。	砂粒・スコリア・長石 褐灰色,普通	P278 15% 竈周辺

図版番号	器種	計測値				出土状況	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
2	土製支脚	(7.3)	(4.8)	—	(107.5)	竈南西側床面直上	PL51-3, DP 9



第66図 第250号住居跡(一括)出土遺物実測図

第250号住居跡(一括)出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土、色調、焼成	備考
第66図 1	坏 須恵器	B (2.9) C (8.4)	平底。体部は内彎気味に外傾して立ち上がる。	体部内・外面ヨコナデ。体部下位外面へラ削り。底部回転へラ削り、のちほぼ一定方向のへラ削り調整。	砂粒・長石・雲母 灰黄色 普通	P 287 10% 北東部覆土中
2	甕 土師器	A (12.8) B (3.7)	口縁部破片。口縁部は丸みを持って短く外反し、端部付近で外側に屈曲する。	口縁部内・外面ヨコナデ。外面・口縁端部内面赤彩。	砂粒・スコリア・ 石英・長石・雲母 明赤褐色、普通	P 291 5% 南東部覆土中
3	深鉢 縄文土器	B (4.0)	尖底。	調整不明。	砂粒・スコリア・ 長石・雲母、にぶ い黄橙色、普通	PL55-7 P 294 5% 北西部覆土中
4	深鉢 縄文土器	B (5.3)	やや外傾する口縁部破片。	口唇部に突起。突起の端部に凹み。口唇部に刻み。口縁部内面に細い棒状施工具で刺突。外面磨き。内面・一部外面赤彩。	砂粒・雲母 にぶい黄褐色 普通	PL57-2 P 293 5% 南東部覆土中

第251号住居跡 (第59～61・67図, PL25・51)

位置 II (H5)区の中央部, E7₁区に位置する。北東部に第250A号住居跡, 南東部に第2号道路, 南西部に第16号溝が重複している。西側には第252号住居跡が隣接する。その他, 隣接する住居跡は多い。この付近は, 南側の低地を望む台地のまきに縁辺部にあたる。

規模と平面形 主軸長3.58m, 幅3.26mのやや不整な方形である。

主軸方向 N-24°-W

壁 壁高22cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 竈部分を除いて全周している。幅7～20cm, 深さ5cm前後で, 断面は逆台形ないし半円形である。

床 平坦で, 中央部は踏み固められ, 堅緻である。

ピット 1か所(P₁)。南壁際中央部に位置する。長径25cm, 短径20cm, 深さ26cmの楕円形ピットで, やや南壁側に傾く。位置・形状から, 入口ピットと考えられる。

竈 北壁中央に, 砂まじりの粘土で構築している。掘り方は, 壁を幅約70cm, 奥行き75cmほど, 三角形に掘り込んでいる。両袖が残存している。内面は焼けて赤変している。火床部は掘り込みがなく, 奥に向かって緩やかに高まっている。火床面は全体に焼けているが, 特に中央部から手前にかけて焼け方が激しく, 赤変・硬化している。火床中央部では, 須恵器片を貼り付けた土製の支脚が, 原位置を保ち, 正立した状態で出土している。煙道の立ち上がりは全体としては45°, 最奥部は60°程である。

竈土層解説

1 褐色	焼土粒子微量, 炭化粒子微量	5 暗赤褐色	焼土粒子中量, 炭化粒子少量, 粘土粒子多量
2 赤褐色	焼土粒子中量, 炭化粒子少量	6 暗赤褐色	焼土粒子少量, 炭化物微量, 粘土粒子少量
3 赤褐色	焼土粒子少量, 粘土小ブロック少量・粒子中量	7 暗赤褐色	焼土粒子中量, 炭化物少量, 粘土粒子微量
4 暗赤褐色	焼土粒子中量, 炭化物中量, 粘土粒子少量	8 暗赤褐色	焼土小ブロック中量・粒子中量, 炭化物中量

覆土 図中, 第45～49層, 第57～68層が本住居跡の覆土である。一部人為的な堆積と思われる層があるが, 多くは自然堆積と考えられる。第250A号住居跡を切り, 第16号溝によって切られる。なお覆土上面を第2号道路が走る。

土層解説

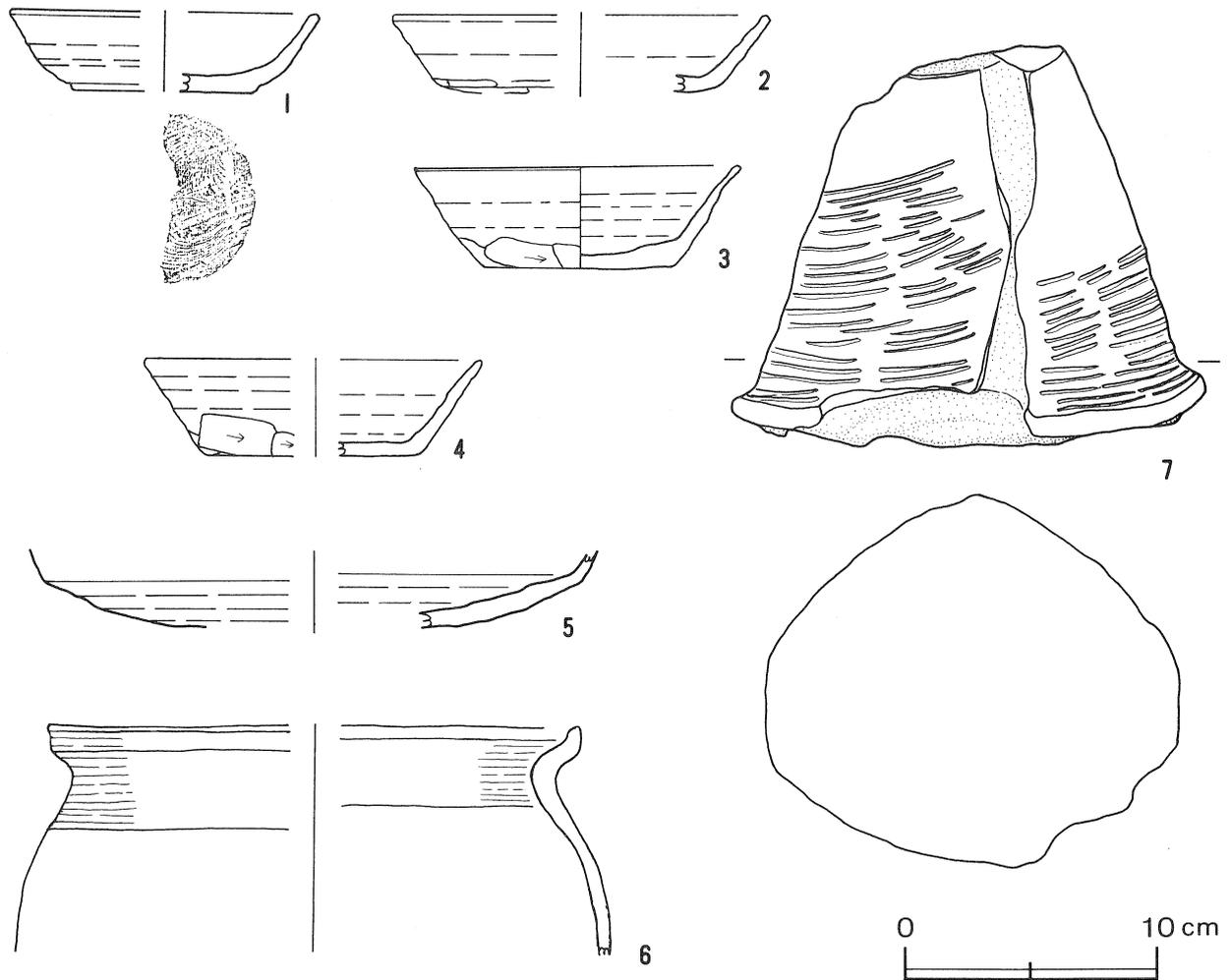
45 褐色	焼土粒子少量, 炭化粒子微量, ローム小ブロック少量・粒子中量	58 褐色	焼土粒子微量, ローム小ブロック中量・粒子多量
46 暗褐色	焼土粒子少量, 炭化粒子微量, ローム小ブロック少量・粒子中量	59 黄褐色	焼土小ブロック・粒子少量, 炭化粒子少量, ローム小ブロック少量・粒子中量
47 暗褐色	焼土粒子少量, ローム小ブロック少量・粒子中量	60 褐色	焼土小ブロック少量, ローム小ブロック・粒子少量
48 赤褐色	焼土粒子中量, 粘土粒子多量	61 褐色	ローム粒子多量
49 褐色	焼土粒子微量, 炭化粒子微量, ローム小ブロック・粒子中量	62 褐色	炭化物微量, ローム小ブロック少量・粒子中量, 小礫微量
57 黄褐色	焼土粒子少量, ローム大ブロック中量・中ブロック多量・小ブロック多量・粒子多量		

63 褐色 焼土粒子少量,炭化粒子少量,ローム粒子中量,粘土小ブロック微量,小礫微量
 64 褐色 焼土粒子少量,炭化粒子少量,ローム粒子少量
 65 黄褐色 焼土粒子少量,炭化粒子微量,ローム粒子中量,粘土小ブロック多量

66 黄褐色 焼土粒子少量,炭化粒子少量,ローム粒子中量
 67 褐色 焼土粒子微量,炭化粒子微量,ローム粒子少量
 68 褐色 炭化粒子少量,ローム中ブロック少量・小ブロック多量・粒子多量

遺物 出土遺物は少なく、竈内出土の須恵器坏（第67図3・4）・土師器甕（同6）・支脚（同7）以外は、覆土中で散漫な出土状態を示している。支脚は、中心部は土製であるが須恵器鉢の大破片を3枚張り付けている特殊なものである。竈中央部に正立して出土しており、周囲の火床面が焼けているにもかかわらず、支脚の下部は焼けておらず、竈内で使用されていた状況を保ったままと考えられる出土状況である。

所見 切り合い関係から見て、重複する第250A号住居跡より新しく、第16号溝・第2号道路より古い。出土遺物からは8世紀後葉の住居跡と考えられる。



第67図 第251号住居跡出土遺物実測図

第251号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土,色調,焼成	備考
第67図 1	土師質土器	A [12.2]	平底。体部は外傾し,下半では内彎しながら,上半〜口縁部では直線的に立ち上がる。	口縁部〜体部内・外面ヨコナデ。底部内面指ナデ。底部回転糸切り(無調整)。	砂粒・スコリア・雲母, 橙色普通	P295 30% 覆土中
		B 3.2				
		C [7.0]				
2	土師器	A [14.9]	平底。体部〜口縁部は外傾してほぼ直線的に立ち上がる。やや浅い坏。	口縁部〜体部内・外面ヨコナデ。体部最下位ヘラ削り。底部ヘラ削り。	砂粒・雲母にぶい橙色普通, 二次焼成痕	P297 10% 覆土中
		B 3.1				
		C [11.3]				
3	須恵器	A 13.0	平底。体部は外傾して直線的に立ち上がり,口縁部はわずかに外反する。	内・外面ヨコナデ。体部下位外面ヘラ削り。底部回転ヘラ切り,のち静止ヘラ削り(ほとんど一定方向)。	砂粒・雲母灰黄色普通	PL51-4 P298 60% 竈内
		B 4.2				
		C 7.4				

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土,色調,焼成	備 考
第67図 4	坏 須恵器	A [13.2] B 3.9 C [8.2]	平底。体部～口縁部は外傾してほぼ直線的に立ち上がる。	口縁部～体部内・外面ヨコナデ。体部下位外面へラ削り。底部へラ削り。底部内面ナデ。	砂粒・スコリア・長石・雲母 淡黄色, 普通	P299 30% 竈内
5	盤 須恵器	B (3.2)	体部は大きく開き,稜を持って口縁部に移行する。口縁部は外傾して立ち上がる。	内面・口縁部～体部上半外面ヨコナデ。体部下半～底部回転へラ削り。	砂粒・長石・雲母 灰色 普通	P300 20% 覆土中
6	甕 土師器	A [21.0] B (9.3)	体部上位は内彎しながら内傾する。口縁部は丸みを持って外反し, 端部は上方へつまみ上げる。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面ナデ。内面は剝離激しく調整不明。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P301 5% 竈内

図版番号	器 種	計 測 値				出 土 状 況	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
7	支 脚	16.2	18.9	15.0	2635.8	竈内中央部に正立。原状保持。	PL51-5, DP10。中心は土製, 周囲に須恵器鉢大破片3枚を張り付ける。

第252号住居跡 (第59～61・68図, PL26・51)

位置 II (H5)区の中央部, E6e0区に位置する。東側には第251号住居跡, 南側には第253号住居跡などが隣接する。第16号溝が重複する。

規模と平面形 主軸長4.15m, 幅4.25mの方形である。

主軸方向 N-5°-W

壁 壁高36cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 竈部分を除いて, 全周する。幅15～20cm, 深さ4～8cmで, 断面は逆台形ないし半円形をしている。

床 平坦で, 中央部は踏み固められ, 堅緻である。踏み固めの範囲は, 東西はほぼ支柱穴の間で, 南北は南壁際から竈までである。

ピット 6か所 (P1～P6)。P1～P4は径25～40cmの円形ピットで, 深さは28～48cmである。各コーナーに近く, 支柱穴と考えられる。P5は, 径18cmの円形ピットで, 深さは15cmである。南壁際中央部にあり, 入口ピットと考えられる。P6は竈前にある長軸40cmの不整形ピットである。性格は不明である。

竈 北壁中央に, 砂まじりの粘土・黒色土まじりの粘土を使用して構築している。掘り方は, 北壁を, 幅85cmにわたって奥行き40cm程, 弧状に掘り込んでいる。両袖が残存している。袖の下半は砂まじりの粘土, 上半は黒色土まじりの粘土を使用している。黒色土まじりの粘土は砂まじりの粘土と同様の堅緻さを持っている。袖の内面は焼けて赤変している。火床部は平坦で, 中央部やや左手前の部分が焼けて赤変・硬化している。煙道の立ち上がりは45°で, かなり急である。

竈土層解説

1	褐 色	焼土小ブロック微量・粒子中量, 炭化粒子微量, 粘土中ブロック微量・粒子微量	6	褐 色	焼土小ブロック微量・粒子少量, 粘土粒子微量
2	暗 褐 色	焼土小ブロック微量・粒子中量, 炭化粒子微量, 粘土粒子少量	7	暗 褐 色	焼土小ブロック微量・粒子少量, 炭化粒子微量, 粘土粒子少量
3	黒 褐 色	焼土小ブロック微量・粒子少量, 炭化粒子微量, 粘土粒子微量	8	にぶい褐色	焼土小ブロック微量・粒子少量, 粘土粒子多量
4	明 赤 褐色	焼土中ブロック中量・小ブロック少量・粒子微量, 炭化粒子微量, 粘土小ブロック・粒子微量	9	褐 色	焼土粒子微量, ローム粒子多量, 粘土粒子微量
5	にぶい黄褐色	焼土粒子微量, ローム粒子多量, 粘土粒子微量	10	黄 褐色	焼土粒子微量, ローム粒子多量
			11	暗 褐色	焼土小ブロック微量・粒子少量, 粘土中ブロック微量・粒子中量

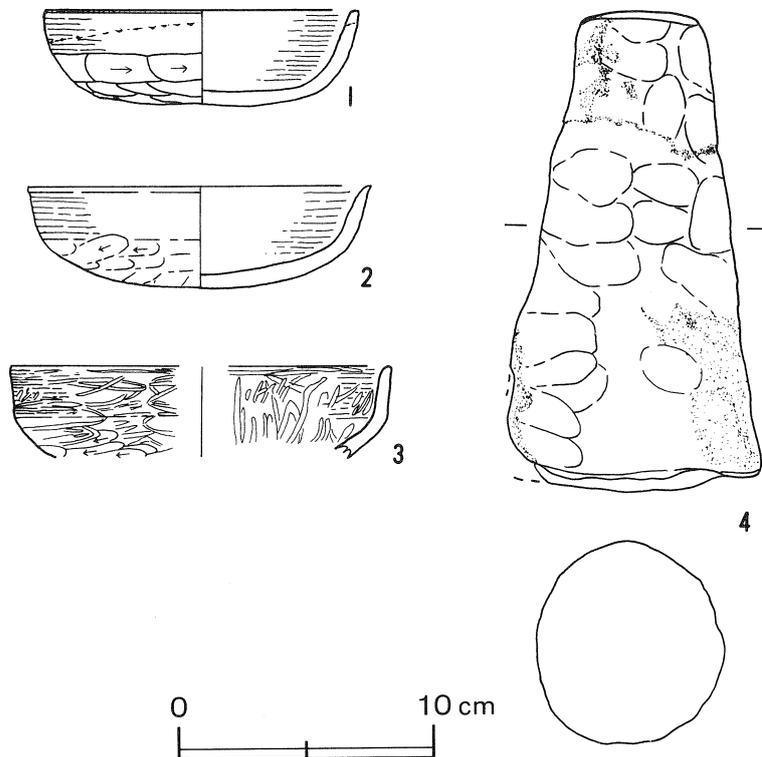
覆土 土層断面図中, 第30～39層が本住居跡の覆土で, 自然堆積と考えられる。第16号溝によって切られている。

土層解説

- | | | | |
|----------|-------------------------------------|----------|---------------------------------------|
| 30 暗赤褐色 | 焼土粒子微量, ローム小ブロック微量・粒子中量 | 35 暗赤褐色 | 焼土粒子微量, ローム粒子多量 |
| 31 極暗褐色 | 焼土粒子微量, ローム粒子少量 | 36 暗赤褐色 | 焼土粒子微量, ローム小ブロック微量・粒子中量 |
| 32 極暗赤褐色 | 焼土小ブロック・粒子微量, 炭化粒子微量, ローム小ブロック・粒子中量 | 37 暗赤褐色 | 焼土小ブロック・粒子少量, 炭化粒子微量, ローム小ブロック少量・粒子中量 |
| 33 暗赤褐色 | 焼土粒子微量, 炭化粒子微量, ローム小ブロック少量・粒子中量 | 38 極暗赤褐色 | 焼土粒子微量, ローム小ブロック微量・粒子少量 |
| 34 極暗赤褐色 | 焼土粒子微量, 炭化粒子微量, ローム小ブロック少量・粒子多量 | 39 暗赤褐色 | 焼土粒子微量, ローム粒子中量 |

遺物 出土遺物は少ない。竈周辺と南西部の床面直上, または覆土下層で土師器坏・土製支脚が出土しており, これらは本住居跡に伴うものと考えられる。

所見 出土遺物から見て, 8世紀前葉の住居跡と考えられる。重複する第16号溝は後世のものである。



第68図 第252号住居跡出土遺物実測図

第252号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土, 色調, 焼成	備考	
第68図 1	坏 土師器	A 12.1	平底気味の丸底。体部は内彎しながら外傾して立ち上がり, 稜を持たずに口縁部に移行する。	口縁部内外面・体部内面ヨコナデ。体部～底部外面ヘラ削り。底部内面ヘラ削り(押え?), のちナデ。	砂粒・スコリア・雲母, にぶい橙色普通	PL51-6 P302 80% 竈東側覆土下層	
		B 3.8					
2	坏 土師器	A 13.4	丸底。体部は内彎しながら外傾して立ち上がり, 稜を持たずに口縁部に移行する。口縁部は短く外反する。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部～底部ヘラ削り。底部内面ナデ。	砂粒・スコリア・雲母, 橙色普通	P303 70% 南西部覆土下層	
		B 4.1					
3	坏 土師器	A [14.4]	体部は内彎して立ち上がり, 極にぶい稜を持って口縁部に移行する。口縁部は直立に近く, わずかに外反。	口縁部内・外面ヨコナデ, 体部～底部ヘラ削り, のち全面に粗いヘラ磨き。	砂粒 明赤褐色 普通	PL51-7 P304 10% 竈東側覆土下層	
		B (3.7)					
図版番号	器種	計測値				出土状況	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
4	土製支脚	19.0	(9.9)	—	(960.8)	南西部床面直上	PL51-8, DP11

第253号住居跡 (第69～71図, PL27・51・52)

位置 II (H5) 区の中央部, E7f区に位置する。北東側に第251号住居跡が隣接し, 南東側に第254号住居跡, 東半に第16号溝が重複する。

規模と平面形 主軸長3.51m, 幅3.77mの方形である。

主軸方向 N-20°-W

壁 壁高29cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 西壁と南壁に沿って、部分的に廻る。幅15~20cm、深さ3~5cmで断面は半円形である。

床 平坦で、中央部分は踏み固められ、堅緻である。踏み固めの範囲は、住居跡の中心線より西側に寄っている。

ピット 4か所(P₁~P₄)。P₁・P₃は径25~28cmの円形ピットで、深さは20~30cmある。P₂は長径22cm、短径14cmの楕円形ピットで、深さは8cm程である。以上3か所のピットについては性格不明である。P₄は長径50cm、短径35cmの楕円形ピットで、深さは33cmである。南壁際中央にあり、入口ピットと考えられる。

竈 北壁中央部に、砂まじりの粘土を使用して構築している。掘り方は、第16号溝による削平で壁高がこの部分では15cm程しかないためか、幅60cm、奥行き5cmの極めて緩い弧状の掘り込みが認められるだけである。両袖が残存している。火床部は床からは一段上がったところにあり、極めて緩やかな凹みを持つ。火床部の中央から手前部分が焼けて赤変している。煙道は30°程で緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

1 暗赤褐色	焼土小ブロック少量・粒子中量,炭化粒子微量,粘土粒子少量	4 暗赤褐色	焼土粒子少量,炭化粒子少量
2 極暗赤褐色	焼土粒子少量,炭化粒子微量,粘土粒子少量	5 暗赤褐色	焼土粒子少量
3 赤褐色	焼土粒子多量	6 暗褐色	焼土粒子中量,炭化粒子少量

覆土 土層断面図中、第1~8層が本住居跡の覆土で、自然堆積である。第254号住居跡と第16号溝によって切られている。

土層解説

1 褐色	焼土小ブロック微量・粒子多量	5 褐色	ローム粒子少量
2 褐色	焼土小ブロック少量・粒子中量	6 褐色	焼土粒子少量,炭化粒子少量,ローム中ブロック中量・小ブロック多量,粒子多量
3 暗褐色	焼土粒子少量,炭化粒子少量,ローム中ブロック・小ブロック少量	7 におい黄褐色	焼土粒子微量,ローム小ブロック少量・粒子中量
4 褐色	焼土小ブロック・粒子少量,炭化粒子少量,ローム中ブロック・小ブロック少量	8 褐色	焼土粒子微量

遺物 出土遺物は特に多くはない。竈周辺から住居跡中央部やや西寄り、中~下層からやや集中して出土している。刀子は南東部覆土下層から出土している。第71図7~9の甕は混入と考えられる。

所見 本遺構は、切り合い関係から見て重複する第254号住居跡・第16号溝より古く、遺物からは9世紀前葉の住居跡と考えられる。

第254号住居跡 (第69・70・72図, PL28・52)

位置 II(H5)区の中央やや南寄り、E6_{g0}区に位置する。北東側に第253号住居跡と第2号道路が重複する。

規模と平面形 主軸長3.26m、幅3.27mのやや不整な方形である。

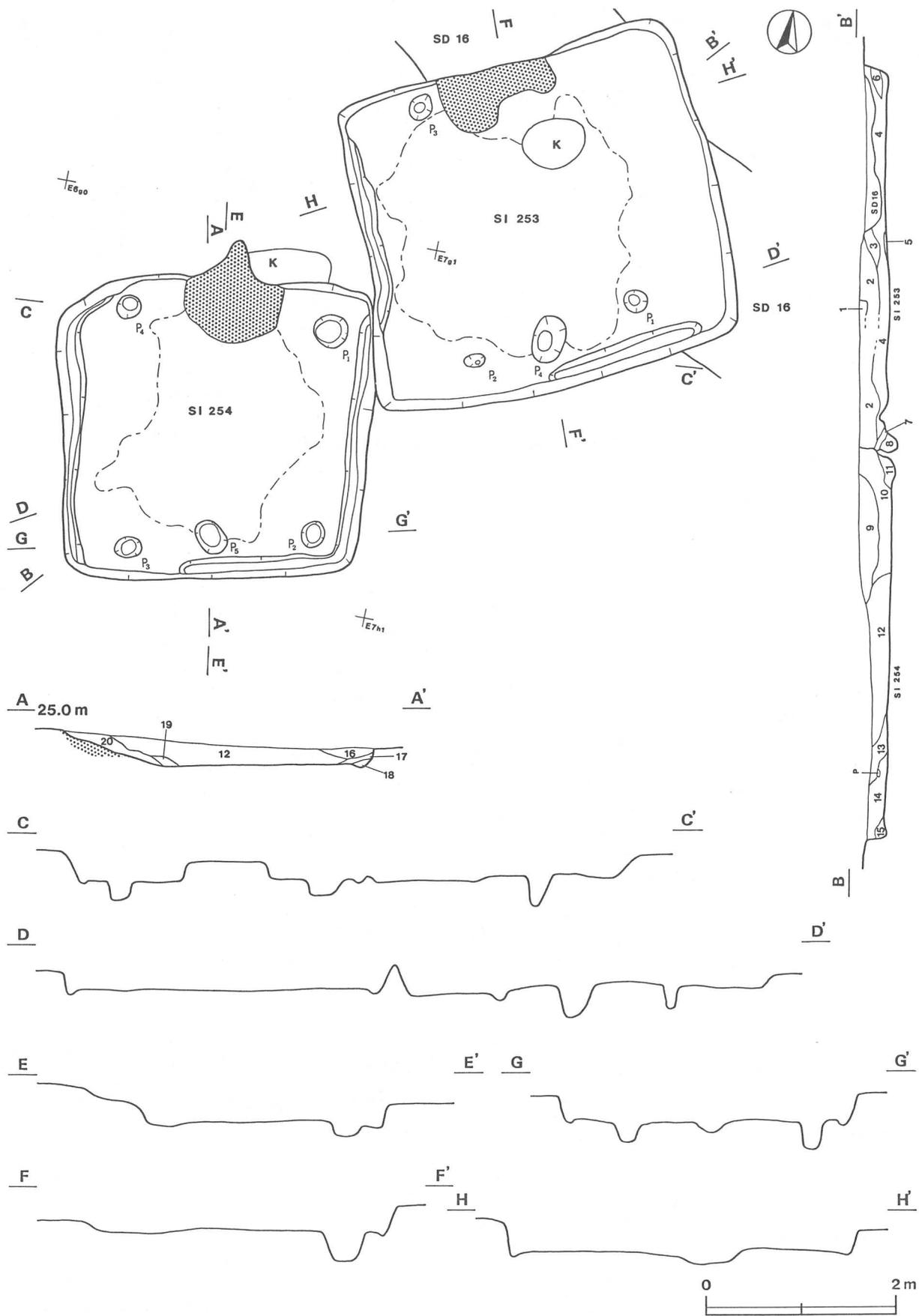
主軸方向 N-3°-W

壁 壁高33cmで、やや外傾しながら立ち上がる。

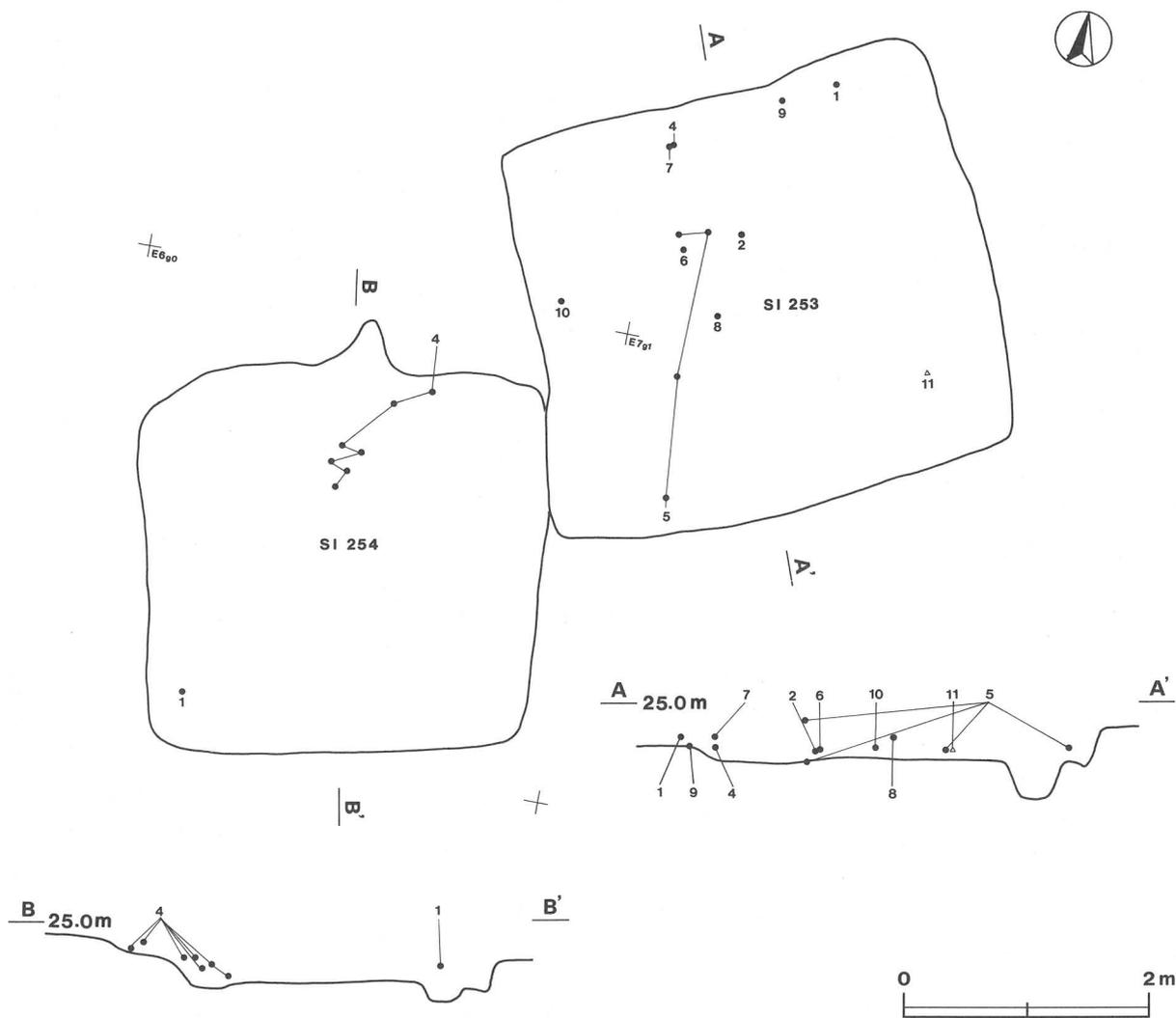
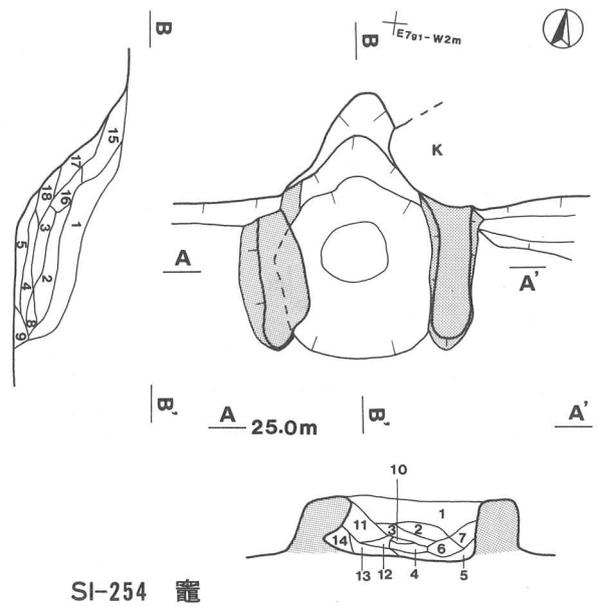
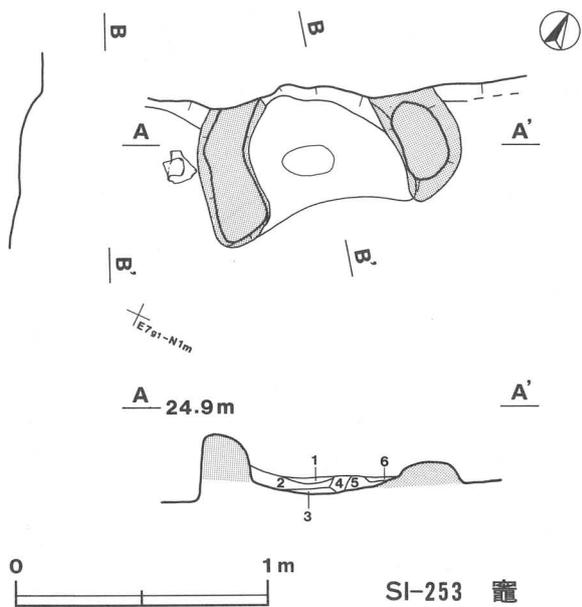
壁溝 西側と南東側に、部分的に廻る。幅10~20cm、深さ5cm前後で、断面は逆台形ないし半円形である。

床 平坦で、中央部は踏み固められ、堅緻である。

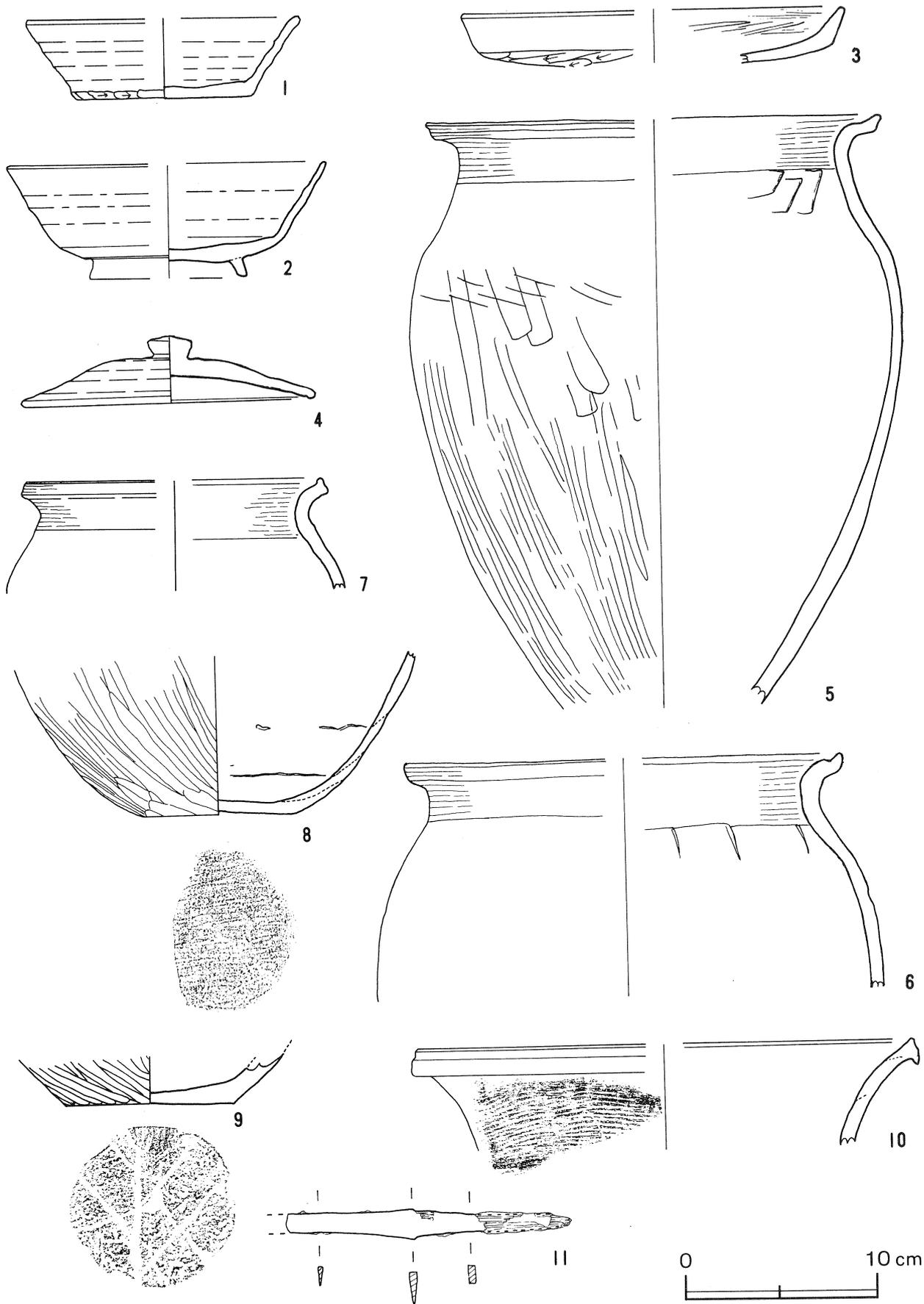
ピット 5か所(P₁~P₅)。P₁~P₄は、径25~37cm、深さ17~28cmの円形ピットで、各コーナー近くにあり、主柱穴と考えられる。P₅は長径38cm、短径27cm、深さ17cmの楕円形ピットで、南壁中央の壁際にあり、入口ピットと考えられる。



第69图 第253・254号住居跡実測图



第70図 第253・254号住居跡竈実測・出土遺物位置図



第71图 第253号住居跡出土遺物実測図

竈 北壁中央部に、砂まじりの粘土で構築されている。掘り方は、約70cmにわたり、奥行き45cm程、三角形状に北壁を掘り込んでいる。両袖が残存している。火床部の凹みは極めてわずかである。火床面は中央や奥が焼けて赤変・硬化している。煙道の立ち上がりは約40°である。

竈土層解説

1 暗赤褐色	焼土粒子少量,炭化粒子微量,粘土粒子中量	9 黒褐色	焼土粒子中量,炭化粒子微量
2 暗赤褐色	焼土粒子中量,炭化粒子少量,粘土小ブロック微量・粒子中量	10 暗赤褐色	焼土粒子少量
3 赤褐色	焼土粒子少量,粘土小ブロック少量・粒子中量	11 暗赤褐色	焼土小ブロック少量・粒子中量,粘土粒子微量
4 暗赤褐色	焼土小ブロック少量・粒子中量,粘土粒子少量,灰多量	12 暗赤褐色	焼土小ブロック微量・粒子少量,炭化粒子少量
5 暗赤褐色	焼土小ブロック少量・粒子多量	13 暗赤褐色	焼土粒子中量,炭化粒子中量
6 暗赤褐色	焼土小ブロック少量・粒子中量,炭化粒子少量	14 暗赤褐色	焼土粒子中量,炭化粒子微量
7 極暗赤褐色	焼土中ブロック微量・小ブロック少量・粒子中量,炭化粒子少量	15 暗赤褐色	焼土粒子少量,黒色土微量
8 暗赤褐色	焼土小ブロック微量・粒子中量	16 暗赤褐色	焼土小ブロック微量・粒子中量,炭化粒子少量
		17 暗赤褐色	焼土粒子少量,黒色土少量
		18 極暗赤褐色	焼土小ブロック少量・粒子多量,炭化粒子中量

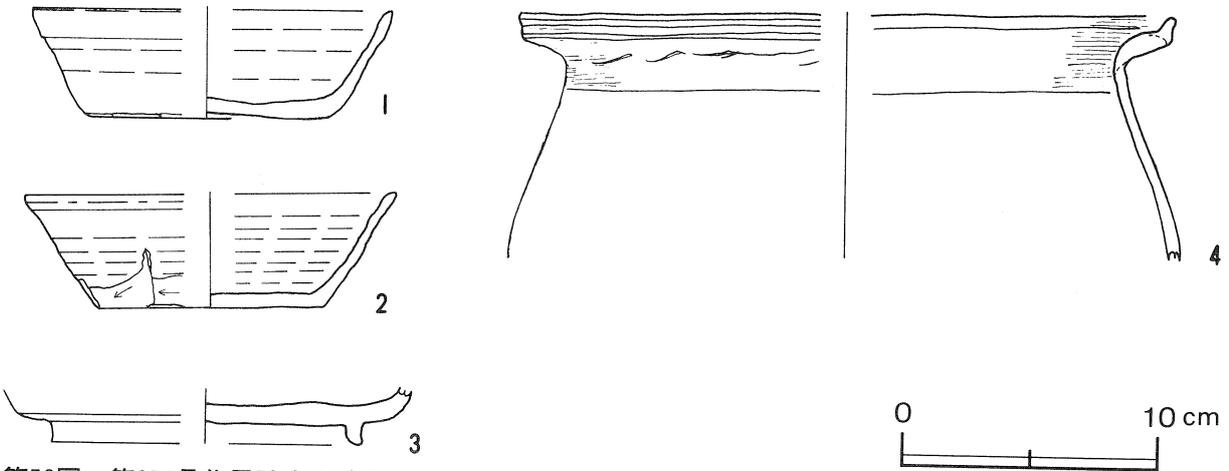
覆土 土層断面図中、第9～20層が本住居跡の覆土である。ほとんどの土層にロームブロックがかなり入っており、廃棄後の早い段階で、人為的に埋め戻されたようである。第253号住居跡の覆土を切っている。なお、覆土上面を第2号道路が走る。

土層解説

9 暗褐色	焼土粒子少量,炭化粒子少量,ローム小ブロック・粒子中量	14 褐色	焼土粒子微量,ローム中ブロック・小ブロック・粒子中量
10 褐色	炭化粒子少量,ローム中ブロック・粒子少量	15 暗褐色	焼土粒子少量,ローム大ブロック・小ブロック・粒子多量
11 褐色	焼土粒子微量,炭化粒子少量,ローム大ブロック中量・中ブロック中量・小ブロック多量・粒子中量	16 褐色	炭化粒子少量
12 褐色	焼土粒子微量,ローム大ブロック中量・中ブロック中量・小ブロック中量・粒子少量	17 褐色	焼土粒子少量,炭化粒子微量
13 暗褐色	焼土粒子少量,ローム中ブロック中量・小ブロック中量・粒子少量	18 オリーブ褐色	焼土小ブロック・粒子少量,炭化粒子少量,ローム中ブロック少量・小ブロック中量・粒子中量
		19 褐色	焼土粒子少量,炭化粒子少量
		20 黄褐色	焼土粒子・粒子少量,炭化物少量・粒子微量

遺物 出土遺物は少ないが、竈周辺にやや集中する傾向が見られる。

所見 本遺構は、出土遺物からは9世紀前葉の住居跡と考えられる。切り合い関係から見ると第253号住居跡より新しいが、遺物からは時期差は捉えられない。第2号道路は後世のものである。



第72図 第254号住居跡出土遺物実測図

第253号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土,色調,焼成	備考	
第71図 1	坏 須恵器	A [14.6] B 4.3 C [9.1]	平底。体部～口縁部は外傾して直線的に立ち上がる。	内・外面ヨコナデ。体部下位外面ヘラ削り。底部ヘラ削り調整。	砂粒・石英・長石 黄灰色 普通	PL51-9 P 308 45% 北東部覆土中層	
2	高台付坏 須恵器	A [17.0] B 6.2 D [8.4] E 1.1	平底に「ハ」の字状に開く高台が付く。体部～口縁部は外傾して直線的に立ち上がる。	内・外面ヨコナデ。高台は貼り付けたのちヨコナデ。高台内側の底部は回転ヘラ削り。	砂粒・雲母 にぶい黄橙色 不良, 土師質	PL52-1 P 310 35% 中央部覆土下層	
3	盤 土師器	A [20.2] B 3.0	体部は内彎気味に大きく開き, にぶい稜を持って口縁部に移行する。口縁部は短く外傾して立ち上がる。	内面丁寧な磨き。口縁部外面ヨコナデ, のちやや雑な磨き。体部外面ヘラ削り。	砂粒・スコリア・ 雲母, にぶい褐色 普通	PL51-11 P 311 20% 覆土中	
4	蓋 須恵器	A 15.5 B 3.7 F 2.4 G 1.1	つまみはややつぶれた擬宝珠形。天井部から端部まで内彎気味に大きく開く。端部はわずかに下方に屈曲する。	全面ヨコナデ。	砂粒・石英・長石・ 雲母 灰オリープ色 普通	PL51-10 P 313 70% 竈西側覆土下層	
5	甕 土師器	A [24.2] B (31.7)	最大径は体部上位。肩部は外反気味に内傾。口縁部は丸みを持って強く外反。端部は外上方へつまみ上げる。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面ヘラ削り, のち下半部ヘラ磨き。上位内面ヘラ削り, 中～下位ナデ。	砂粒・スコリア・ 雲母, にぶい褐色 普通	P 314 35% 中央部覆土下層	
6	甕 土師器	A [23.0] B (12.7)	体部上位は内彎しながら内傾する。口縁部は丸みを持って短く外反し, 端部は上方へつまみ上げる。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部内・外面ナデ。体部上位内面にはヘラ削り痕が残る。	砂粒・スコリア・ 雲母, にぶい褐色 普通	P 315 20% 中央部覆土下層	
7	小形甕 土師器	A [15.6] B (6.0)	体部上位は内彎しながらやや強く内傾。口縁部は丸みを持って短く外反し, 端部は内上方へつまみ上げる。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・長石・雲母 明赤褐色 普通	P 316 5% 竈西側覆土中層	
8	甕 土師器	B (8.7) C [8.0]	平底。体部は内彎しながら外傾して立ち上がる。底部近くでの内彎がやや強く, 丸みを帯びた体部下位。	体部下位ヘラ磨き。底部ヘラ磨き。内面ナデ。	砂粒・スコリア・ 長石・雲母, にぶい黄褐色, 普通	P 317 10% 中央部覆土中層	
9	甕 土師器	B (2.6) C 8.8	平底。体部は内彎気味に大きく外傾して立ち上がる。	体部下位ヘラ磨き。底部木葉痕。内面ナデ。	砂粒・スコリア・ 雲母, 褐色 普通	PL51-12 P 318 15% 竈東側覆土中層	
10	甕 須恵器	A [26.0] B (5.5)	口縁部だけの破片。外反しながら外傾し, 端部は上方へつまみ上げ, 下方へも突出させる。	外面平行叩き。端部～内面ヨコナデ。	砂粒・長石 黄灰色 普通	P 319 5% 西部覆土下層	
図版番号	器種	計測値				出土状況	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
11	刀子	(15.2)	1.8	0.4	(17.7)	南東部覆土下層	PL52-2, M 7, 茎に木質錆着

第254号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土,色調,焼成	備考
第72図 1	坏 須恵器	A [13.9] B 4.3 C 9.2	平底。体部～口縁部は外傾してほぼ直線的に立ち上がる。	内・外面ヨコナデ。体部最下位外面ヘラ削り。底部回転ヘラ切り, のちヘラ削り調整。	砂粒・雲母 灰オリープ色 普通	PL52-3 P 320 65% 南西隅覆土中層
2	坏 須恵器	A [14.4] B (4.5) C [9.0]	平底。体部～口縁部は外傾してほぼ直線的に立ち上がる。	内・外面ヨコナデ。体部下位外面ヘラ削り。底部一定方向の丁寧なヘラ削り。	砂粒・スコリア・ 長石・雲母 灰黄色, 普通	P 321 25% 竈内
3	高台付坏 須恵器	B (2.1) D [12.0] E 0.8	平底にほぼ直立する高台が付く。体部は外傾して立ち上がる。底部との間にはにぶい稜を持つ。	高台内側の底部は回転ヘラ削り。他はヨコナデ。高台は貼り付けたのちヨコナデ。	砂粒・礫 褐灰色 普通	P 323 10% 覆土中
4	甕 土師器	A [25.2] B (9.7)	体部上位は緩やかに内傾する。口縁部は頸部から屈曲し短く外反する。端部は外上方へつまみ上げる。	口縁部内・外面ヨコナデ。外面にヘラ先痕が残る。体部内・外面ナデ。	砂粒・スコリア・ 長石・雲母, 褐色 普通	P 324 20% 竈内・竈周辺

第256号住居跡 (第73・74図, PL29・52)

位置 II (H5) 区の西端中央部, E6e6区に位置する。南東には第257号住居跡が隣接する。

規模と平面形 南部から北西部にかけて大きく攪乱を受けているが, 北壁から東壁の一部, 及び南壁の一部が残存しており, 北壁に竈を持つ方形の住居跡と推定できる。主軸長は3.50m, 幅は(3.50)mである。竈の位置から見て, 現存幅は本来の幅に近いものと推定される。

主軸方向 N-16°-W

壁 壁高28cmで, やや外傾して立ち上がる。

壁溝 残存部分については, 竈部分を除いて全周する。幅約20cm, 深さ5cmで, 断面は逆台形である。

床 平坦で, 中央部は踏み固められ, 堅緻である。

ピット 確認されていない。

竈 北壁の中央やや東寄り(推定)に, 砂まじりの粘土で構築している。掘り方は, 幅85cm, 奥行き70cm程, 半円形に近い形で壁を掘り込んでいる。短い両袖が残存している。火床部は緩やかに凹む。赤変部は認められない。煙道は, 手前では約20°で緩やかに立ち上がるが, 最奥部では約45°とやや急になる。全体として, 竈の中心が壁の中に入り込む形であり, 残存する袖が短いのは偶然ではなく, 本来の形状を反映している可能性がある。

竈土層解説

1	にぶい黄褐色	焼土粒子微量, 炭化粒子微量, 粘土小ブロック微量・粒子少量	9	褐色	焼土粒子微量
2	灰黄褐色	焼土小ブロック微量・粒子少量, 炭化粒子微量, 粘土小ブロック中量・粒子多量	10	暗赤褐色	焼土粒子少量, 炭化粒子少量, 粘土粒子多量
3	暗赤褐色	焼土中ブロック微量・小ブロック少量・粒子中量, 炭化粒子微量	11	極暗赤褐色	焼土粒子少量, 炭化粒子微量, 粘土粒子少量
4	暗赤褐色	焼土小ブロック微量・粒子多量, 粘土粒子微量	12	暗赤褐色	焼土小ブロック少量・粒子中量, 粘土粒子中量
5	灰褐色	焼土小ブロック微量, 粒子多量, 炭化粒子微量, 粘土中ブロック微量・小ブロック少量・粒子中量	13	暗赤褐色	焼土粒子少量, 炭化粒子微量, 粘土粒子多量
6	褐色	焼土小ブロック微量・粒子中量, 炭化粒子微量, 粘土小ブロック微量・粒子中量	14	暗赤褐色	焼土粒子中量, 炭化粒子微量, 粘土粒子少量
7	暗赤褐色	焼土粒子少量, 粘土粒子中量	15	極暗赤褐色	焼土粒子少量, 炭化粒子少量, 粘土粒子多量
8	にぶい赤褐色	焼土小ブロック中量・粒子中量, 炭化粒子微量, 粘土粒子中量	16	暗赤褐色	焼土小ブロック・粒子少量, 粘土粒子中量

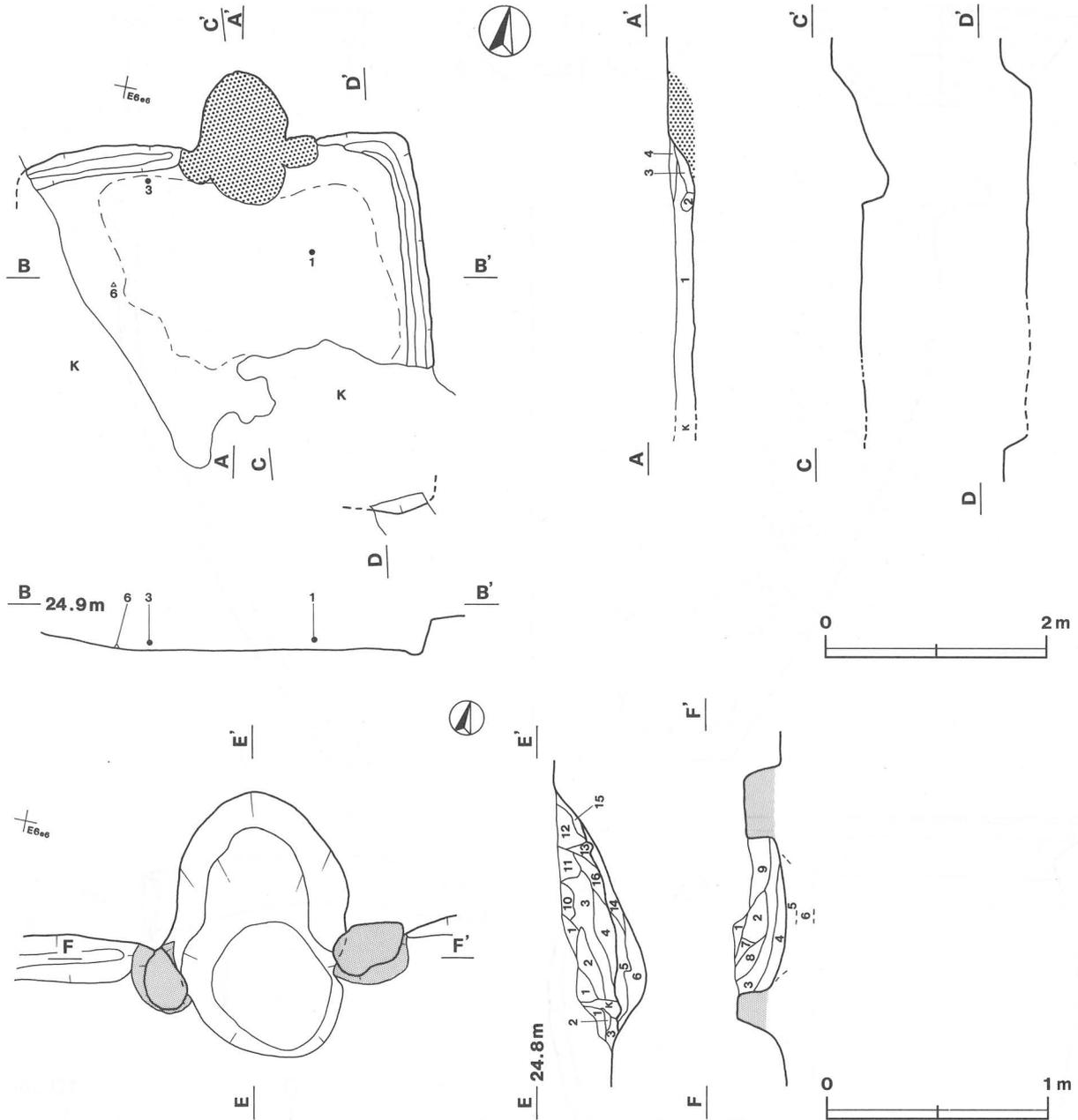
覆土 自然堆積である。

土層解説

1	暗褐色	焼土小ブロック・粒子微量, 炭化粒子微量
2	暗赤褐色	焼土粒子微量, 炭化粒子少量, 粘土粒子多量, 竈材崩壊土層
3	暗赤褐色	焼土小ブロック多量・粒子少量, 炭化粒子微量, 粘土粒子多量, 竈材ブロック
4	黒褐色	焼土小ブロック・粒子少量

遺物 出土遺物は多くはないが, 竈内・竈周辺から土器片がややまとまって出土している。また住居跡中央部床面直上で鉄鎌が出土している。いずれも本住居跡に伴うものと考えられる。

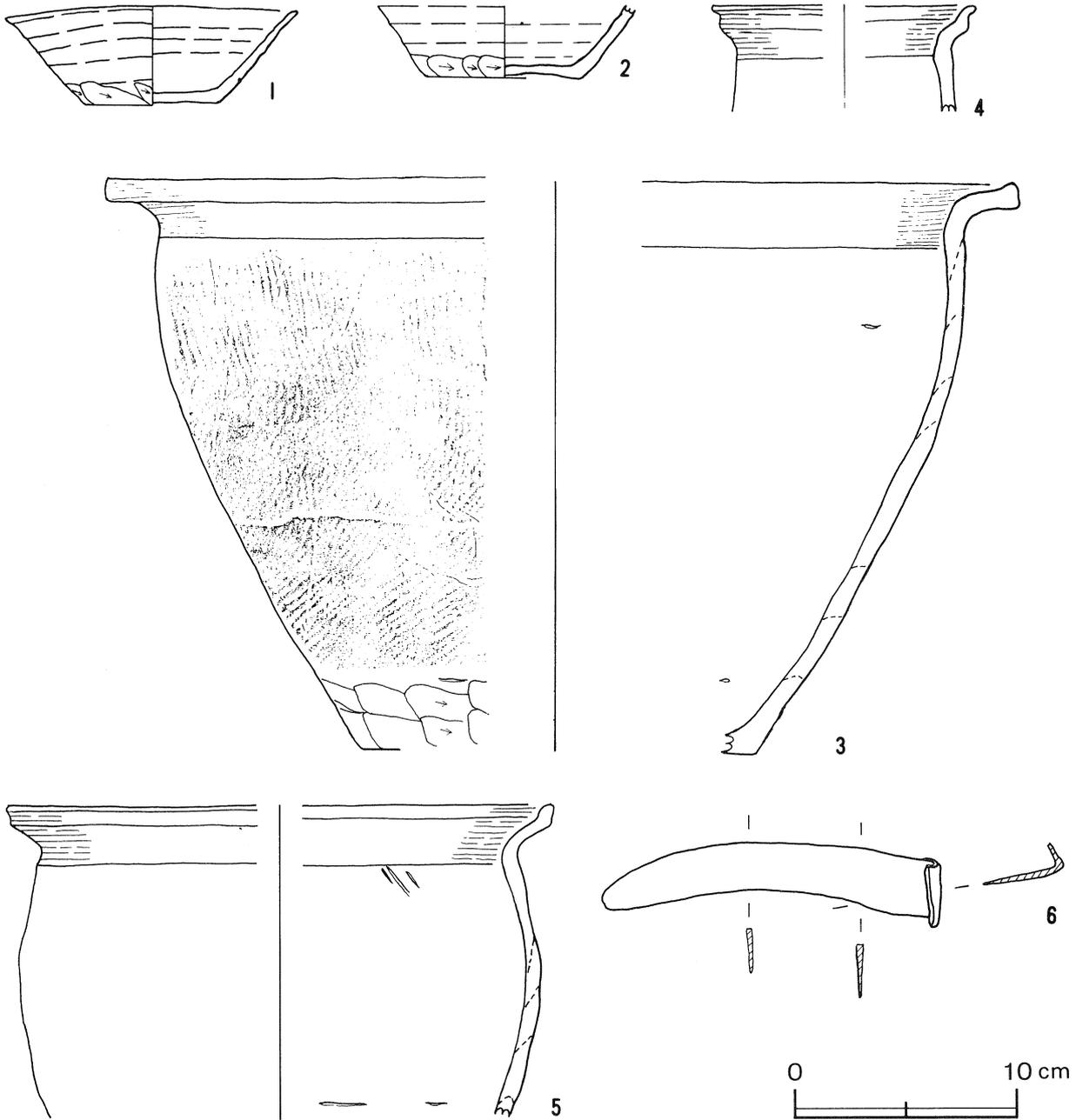
所見 本遺構は, 出土遺物から9世紀中葉の住居跡と考えられる。



第73図 第256号住居跡・竈実測図

第256号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土, 色調, 焼成	備考
第74図 1	坏 須恵器	A 13.1 B 4.2 C 5.8	平底。体部は外傾してほぼ直線的に立ち上がり, 口縁部はわずかに外反する。歪みがやや激しい。	内・外面ヨコナデ。体部下位外面へら削り。底部回転へら切り, のち極雑なへら削り。	砂粒・長石・雲母 黄灰色 普通	PL52-5 P325 80% 北東部覆土中層
2	坏 須恵器	B (3.3) C 6.8	上げ底気味の平底。体部は外傾してほぼ直線的に立ち上がる。口縁部欠失。	内・外面ヨコナデ。体部下位外面へら削り。底部回転へら切り, のち一定方向の静止へら削り調整。	砂粒・長石・雲母・ 礫, 黄灰色 普通	P326 40% 竈内
3	鉢 須恵器	A [41.0] B 26.1 C [18.0]	体部は内彎しながら外傾して立ち上がる。体部最大径は上位。口縁部は外反し, 端部は上方に肥厚する。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面平行叩き。下位外面へら削り。内面ナデ。	砂粒・長石・雲母 灰色 普通	PL52-4 P333 30% 竈西側床面直上



第74図 第256号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土, 色調, 焼成	備考	
第74図 4	小形甕 土師器	A [11.8] B 4.8	体部上位は直立に近い。口縁部は丸みを持って外反し, 端部は外上方へつまみ上げる。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部内面ナデ。外面は器表が荒れていて調整不明。	砂粒・石英・長石雲母, にぶい赤褐色, 普通	P 332 5% 竈内	
5	甕 土師器	A [24.6] B (14.3)	体部最大径は中～上位境界付近。口縁部は丸みを持って外反。端部は外上方へつまみ上げる。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・石英・長石雲母, 赤褐色普通	P 330 10% 竈内	
図版番号	器種	計測値				出土状況	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
6	鉄鎌	15.1	2.8	0.3	40.4	中央部床面直上	PL52-6, M 8

第257号住居跡 (第75~77図, PL30・52・53)

位置 II (H5)区の西端中央部, E6r7区に位置する。北西に第256号住居跡, 南東に第259号住居跡が隣接する。

規模と平面形 大きく攪乱され, 北壁に構築された竈と北東コーナー付近が残存するのみである。現存部分の規模は, 主軸長2.00m, 幅1.88mである。竈が北壁中央付近に構築されているものとすれば, 幅3m前後の規模の, 方形ないし方形に近い形の住居跡と推定できる。

主軸方向 N-11°-W

壁 壁高27cmで, やや外傾して立ち上がる。

壁溝 竈部分と北東コーナー部を除いて, 廻る。幅約15cm, 深さ4cmで, 断面は逆台形である。

床 平坦で, 中央部は踏み固められ, 堅緻である。

ピット 確認されていない。

竈 北壁の, 北東コーナーから1.4m程のところに, 砂まじりの粘土で構築されている。掘り方は, 北壁を, 幅約70cm, 奥行き約70cm程, 平面三角形に掘り込んでいる。東袖のみ残存している。火床部はわずかに凹み, 火床面は焼けて赤変・硬化している。赤変・硬化の部位は, 過半が壁の線より奥に入る。煙道は20~30°で緩やかに立ち上がる。

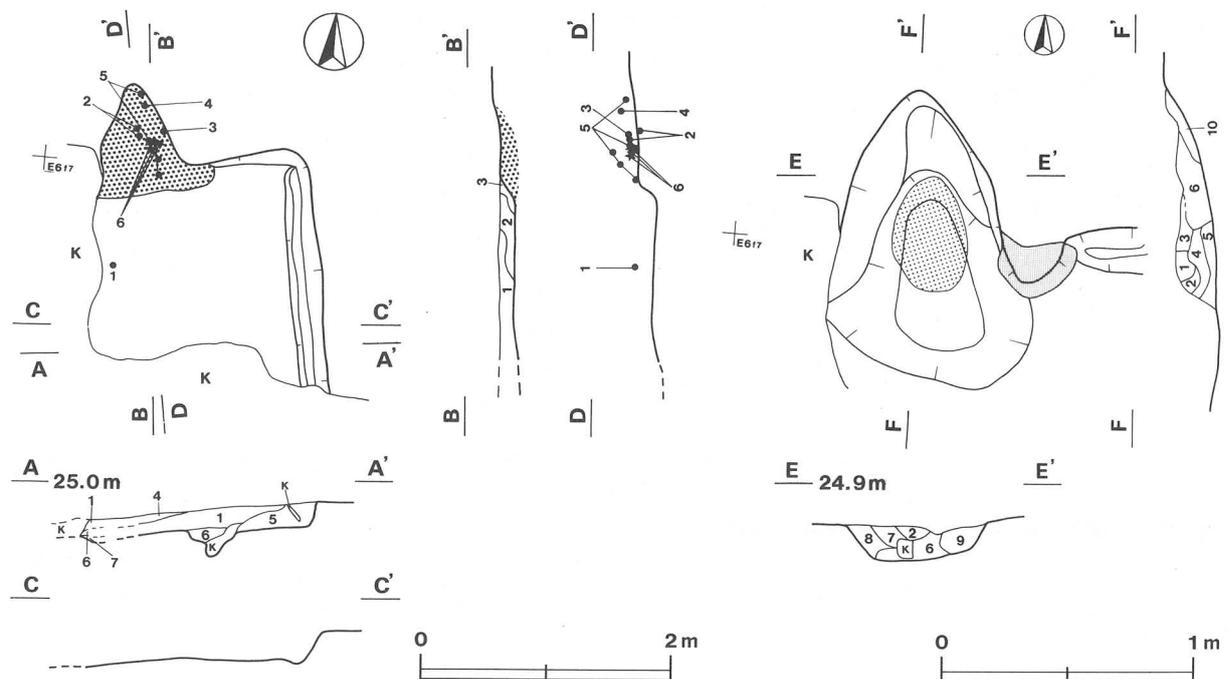
竈土層解説

1 黄褐色	焼土粒子微量, 粘土粒子多量	7 褐色	焼土小ブロック・粒子微量, 炭化粒子微量, 粘土粒子微量, 黄白色パミス微量
2 褐色	焼土粒子微量, 粘土粒子中量	8 極暗赤褐色	焼土小ブロック・粒子微量, 炭化粒子微量, 粘土粒子微量, 黄白色パミス微量
3 にぶい黄褐色	焼土粒子微量, 粘土粒子少量	9 暗褐色	焼土粒子少量, 粘土粒子少量
4 暗褐色	焼土粒子中量, 炭化粒子微量, 粘土粒子微量	10 にぶい赤褐色	焼土粒子中量, 粘土粒子微量
5 黒褐色	焼土粒子少量, 炭化粒子微量, 粘土小ブロック・粒子微量		
6 暗赤褐色	焼土小ブロック中量・粒子多量, 粘土小ブロック微量・粒子少量		

覆土 自然堆積である。

土層解説

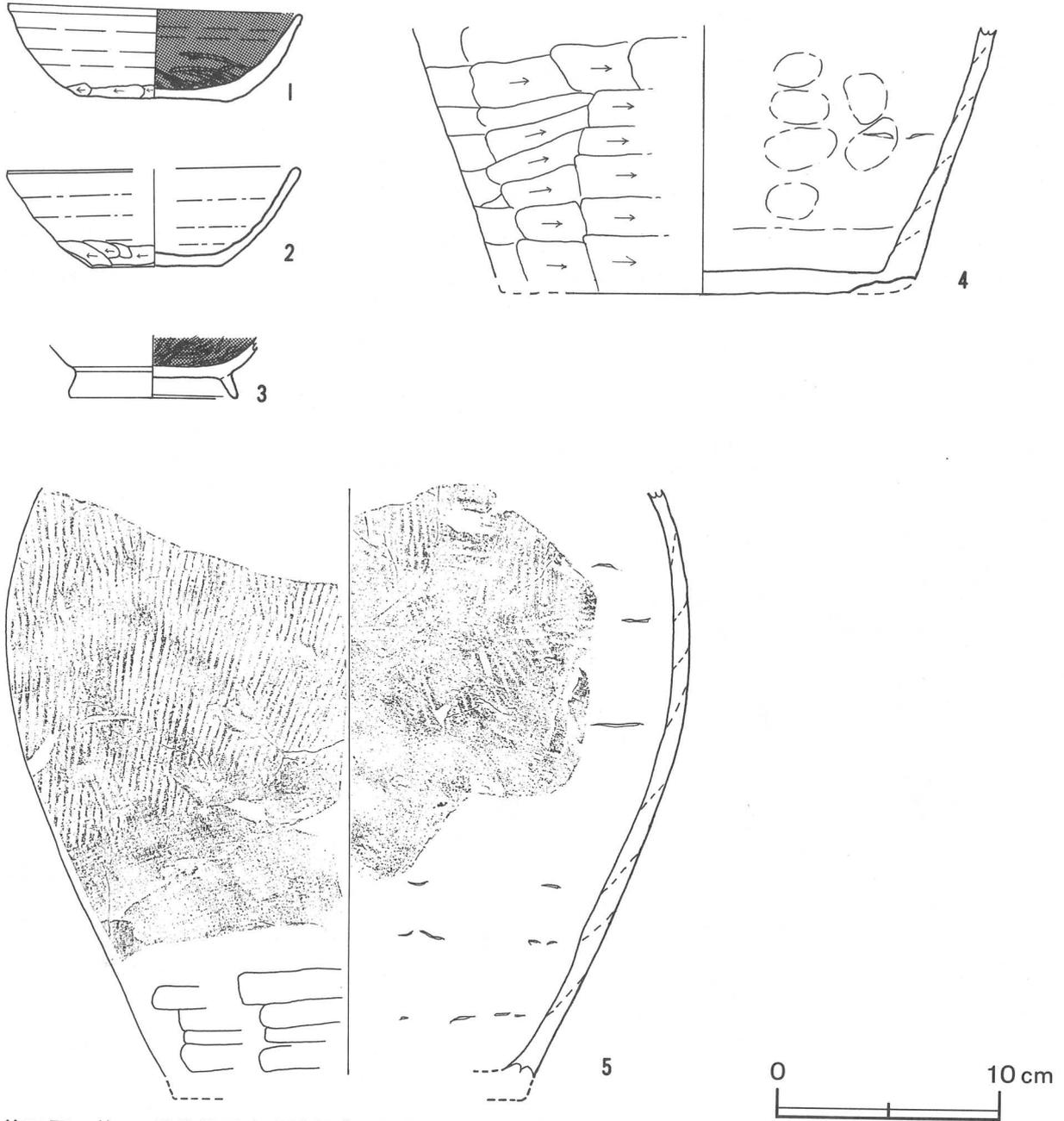
1 暗褐色	焼土粒子少量, 炭化粒子微量	5 褐色	焼土小ブロック微量・粒子少量, 炭化粒子微量
2 暗褐色	焼土小ブロック少量・粒子中量, 炭化粒子少量	6 褐色	焼土粒子微量
3 暗赤褐色	焼土粒子少量, 炭化粒子微量, 粘土粒子中量	7 褐色	焼土粒子微量
4 黒褐色	焼土粒子微量, 炭化粒子微量		



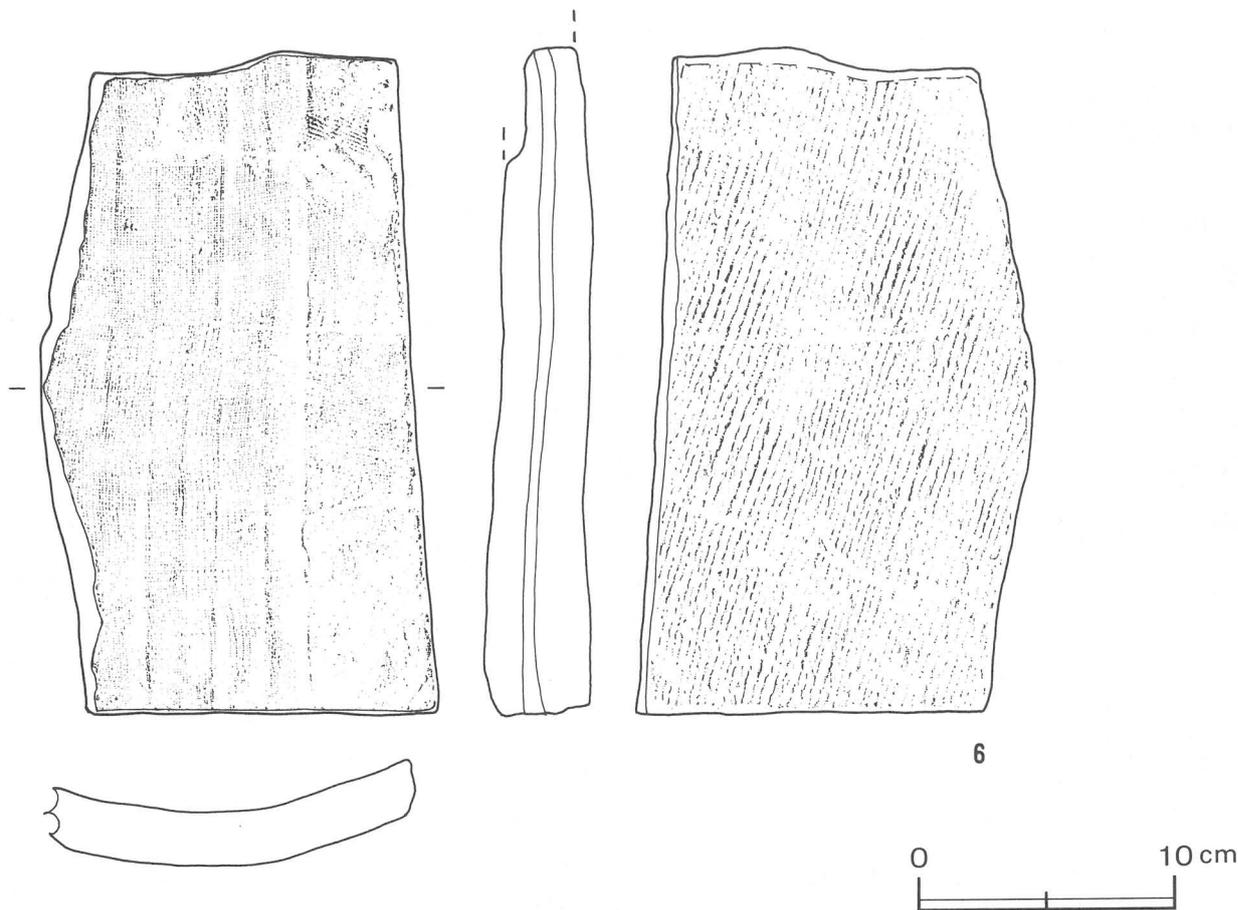
第75図 第257号住居跡・竈実測図

遺物 本遺構は大きく攪乱されていたが、残存した竈、及び竈前方（住居跡中央部）から、土師器・須恵器・平瓦がまとまって出土している。平瓦は大破片で、竈内から出土しており、竈の補強材に再利用されていた可能性がある。

所見 本遺構は、遺物から見て9世紀後葉の住居跡と考えられる。



第76図 第257号住居跡出土遺物実測図(1)



第77図 第257号住居跡出土遺物実測図(2)

第257号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土,色調,焼成	備考
第76図 1	坏 土師器	A 13.4	平底。体部は内彎しながら外傾して立ち上がり,口縁部はわずかに外反する。	体部内・外面ヨコナデ。体部下位外面ヘラ削り。底部一定方向のヘラ削り。底部内面雑な磨き・黒色処理。	砂粒・雲母にぶい橙色普通	PL52-7 P334 95% 中央部床面直上
		B 4.1				
		C 6.6				
2	坏 須恵器	A [13.2]	平底。体部は内彎しながら外傾して立ち上がる。器厚は薄い。	内・外面ヨコナデ。体部下位外面ヘラ削り。底部丁寧なヘラ削り。	砂粒・雲母 灰黄色 普通	P336 25% 竈内
		B 4.5				
		C [6.0]				
3	高台付坏 土師器	B (2.8)	平底に「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は高台のすぐ外側から立ち上がる。	内面磨き・黒色処理。体部外面ヨコナデ。高台は貼り付け,のちヨコナデ。底部中央部回転ヘラ削り。	砂粒・スコリア・雲母,にぶい橙色普通	P338 25% 竈内
		D 7.5				
		E 1.2				
4	甕 須恵器	B (12.3)	平底。体部は外傾してほぼ直線的に立ち上がる。	体部外面ヘラ削り。体部内面指押えのちナデ調整。粘土紐積み上げ痕が残る。	砂粒・雲母 灰オリーブ色 普通	P341 15% 竈内
		C [18.6]				
5	甕 須恵器	B (27.0)	体部のみの破片。最大径は中位上半。	粘土紐積み上げ。外面中位平行叩き。下位ヘラ削り。内面中位平行叩き,のちナデ。下位ナデ。	砂粒・長石・雲母 灰黄色 普通	PL52-8 P340 20% 竈内
		C [16.0]				

図版番号	器種	計測値				出土状況	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第77図6	平瓦	(26.4)	(15.5)	2.2	-	竈内	PL53-1, T4, 布目, 縄目叩き

第259号住居跡 (第78・79図, PL31・52)

位置 II (H5) 区の西端中央部, E6h8区に位置する。北西に第257号住居跡, 東に第254号住居跡が隣接する。

規模と平面形 大きく攪乱されており, 北東コーナーから南東コーナー付近のみが残存する。東壁に竈を持つ, 方形ないしそれに近い形の住居跡と推定される。主軸長 (2.50) m, 幅5.22mである。

主軸方向 N-67°-E

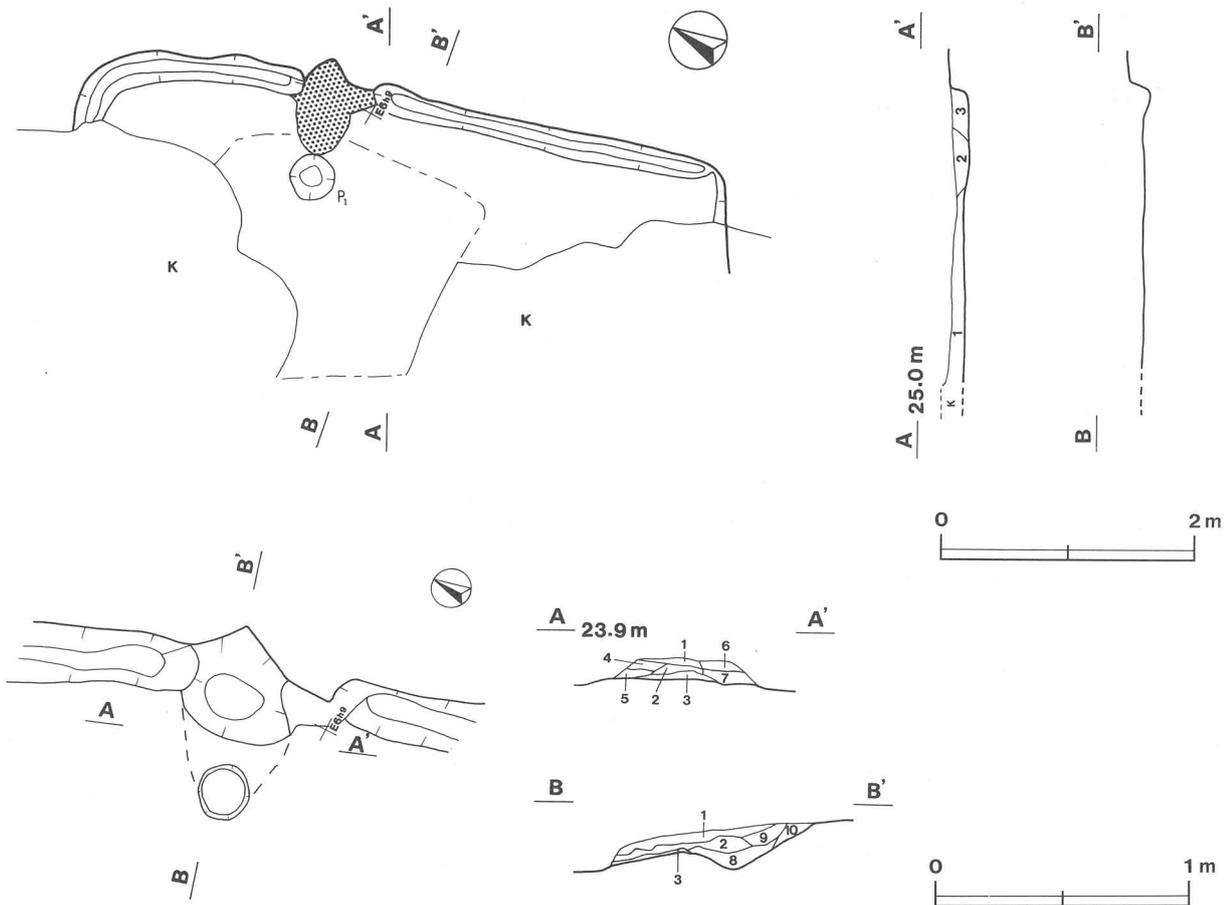
壁 壁高23cmで, やや外傾して立ち上がる。

壁溝 竈部分と南壁際を除き, 廻る。幅は約15cm, 深さ5cm程で, 断面は逆台形である。

床 平坦で, 中央部分は踏み固められ, 堅緻である。

ピット 1か所 (P₁)。竈の手前に位置する, 径36cm, 深さ約20cmの円形ピットである。性格は不明であるが, 竈に関するピットの可能性がある。

竈 東壁中央やや北寄りに構築されている。掘り方は小さく, 東壁を, 幅40cm, 奥行き15cm程掘り込んでいる。袖は残存していないが, 周辺の土層に砂まじりの粘土が含まれており, 本住居跡の竈は砂まじりの粘土で構築されていたものと考えられる。火床は6cm程の凹みを持つ。その他, P₁に隣接した位置にわずかな凹みがあり, 火床の凹みとの間は踏み固めが及んでいない。赤変は認められないが, あるいはこの部分まで火床部であった可能性がある。煙道は, 30°の傾きを持って直線的に立ち上がる。全体として, 壁内への掘り込みが極めて少ない竈である。



第78図 第259号住居跡・竈実測図

竈土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------------------|--------|-----------------------|
| 1 暗赤褐色 | 焼土粒子中量,炭化粒子少量,粘土粒子少量 | 6 黒褐色 | 焼土粒子多量,粘土粒子少量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土小ブロック微量・粒子中量,炭化粒子少量,粘土粒子少量 | 7 暗赤褐色 | 焼土粒子少量,炭化粒子微量 |
| 3 褐色 | 焼土粒子中量,炭化粒子少量,粘土粒子多量 | 8 暗赤褐色 | 焼土小ブロック微量・粒子中量,粘土粒子少量 |
| 4 黒褐色 | 焼土小ブロック少量・粒子中量 | 9 褐色 | 焼土粒子多量,炭化粒子中量 |
| 5 暗赤褐色 | 焼土中ブロック微量・小ブロック中量・粒子中量,粘土粒子少量 | 10 黒褐色 | 焼土粒子少量,炭化粒子微量 |

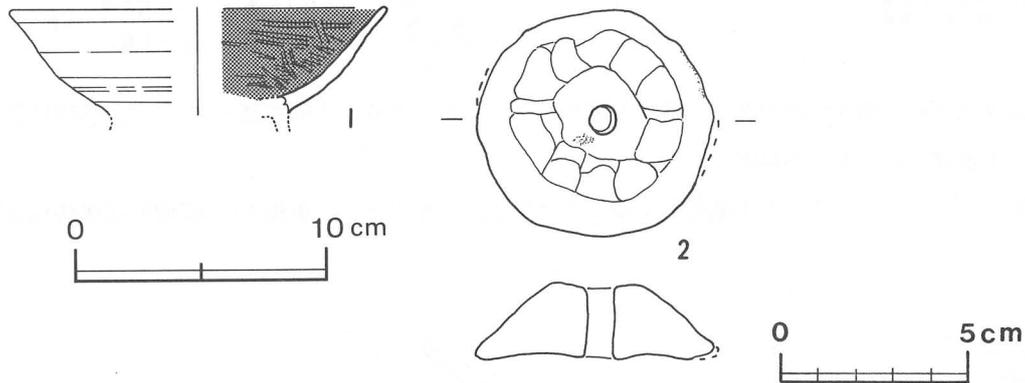
覆土 自然堆積である。

土層解説

- | | |
|-------|---------------|
| 1 暗褐色 | 焼土粒子少量 |
| 2 暗褐色 | 焼土粒子少量・炭化粒子少量 |
| 3 暗褐色 | 焼土粒子少量,炭化粒子微量 |

遺物 本遺構は大きく攪乱され、竈付近が残存しているのみであるが、遺物の出土はほとんどなかった。わずかに須恵器高台付坏と紡錘車が出土している。紡錘車は攪乱土中からの出土であり、厳密には本遺構に伴うか問題はあるが、重複する住居跡がなく、本遺構に伴った遺物と見ておきたい。

所見 出土遺物が少なく時期決定が困難であるが、出土遺物から10世紀前葉の住居跡と考えておく。



第79図 第259号住居跡出土遺物実測図

第259号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考	
第79図 1	高台付坏 土師器	A [15.0] B (4.2)	高台は欠失。体部は内彎しながら外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	外面ヨコナデ。内面ヘラ磨き・黒色処理。	砂粒・雲母 橙色 普通	P342 15% 覆土中	
図版番号	器種	計測値				出土状況	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
2	紡錘車	(径) 6.3	-	2.0	(59.3)	攪乱土中	PL52-9, DP12, 土製

第261号住居跡 (第80・81図, PL31)

位置 II (H5) 区の南部, E7g2区に位置する。南東側の低地に向かう斜面に立地している。中央部に第13号溝, 南東部に第262号住居跡等が重複している。

規模と平面形 上述のとおり他の遺構が重複し、また斜面に立地しているため、遺存状況は極めて悪く、規模や平面形の推定が難しいが、北西壁に竈を持つ、方形ないし方形に近い平面形の住居跡と推定される。主軸長は(4.37) m, 幅は5.15mである。

主軸方向 N-55°-W

壁 壁高16cmで、外傾する。

壁溝 認められない。北東壁近くに幅約30cm、深さ10cm、断面逆台形の溝が壁に平行して走るが、これについては性格等不明である。

床 平坦で、中央部は踏み固められ、堅緻である。

ピット 認められない。

竈 北西壁に構築されている。攪乱を受け、ほとんど崩壊している。周辺に砂まじりの粘土が散乱しており、竈材と考えられる。掘り方は、わずかな残存部分から推定すれば、幅85cm前後、奥行き30cm前後、平面三角形となる。焼けて赤変した部分が認められる。

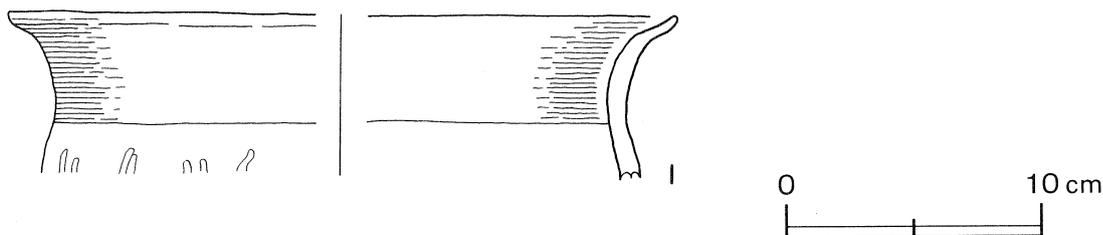
覆土 土層断面図中、第1～10層が本住居跡の覆土で、自然堆積である。第13号溝に切られている。なお、第262号住居跡との関係は、土層断面では捉えられていないが、第262号住居跡の覆土中に本住居跡の貼床が認められなかったため、本住居跡は第262号住居跡によって切られているものと考えられる。

土層解説

- | | | | |
|--------|---------------|---------|------------------------------|
| 1 黒褐色 | 焼土粒子少量,炭化粒子微量 | 6 極暗赤褐色 | 焼土小ブロック微量・粒子少量,炭化粒子微量,粘土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | 焼土粒子少量,粘土粒子中量 | 7 極暗赤褐色 | 焼土粒子少量,炭化粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土粒子微量,粘土粒子少量 | 8 暗赤褐色 | 焼土粒子微量,ローム粒子多量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土粒子微量 | 9 暗赤褐色 | 焼土粒子中量,ローム小ブロック中量 |
| 5 暗赤褐色 | 焼土粒子微量 | 10 暗赤褐色 | 焼土粒子少量,粘土粒子少量 |

遺物 本遺構は極めて遺存状況が悪く、遺物も細片がほとんどである。土師器甕を図示した(第81図)が、これも確実に本遺構に伴うものか疑問である。

所見 上述したような状況で、出土遺物による年代決定は不可能である。重複する第262号住居跡・第13号溝より古い。



第80図 第261号住居跡出土遺物実測図

第261号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土,色調,焼成	備考
第80図 1	甕 土師器	A [26.0] B (6.5)	頸部～口縁部破片。頸部のくびれは弱い。口縁部は丸みを持って外反し。端部は外上方へつまみ上げる。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面ナデ・ヘラ磨き。内面ナデ。	砂粒・長石・雲母にふい黄橙色普通	P347 5% 覆土中

第262号住居跡 (第81図, PL31)

位置 II (H5) 区の南部, E7g₃に位置する。南東側の低地に向かう斜面に立地する。北東部に第261号住居跡, 西に第20号土坑が重複する。

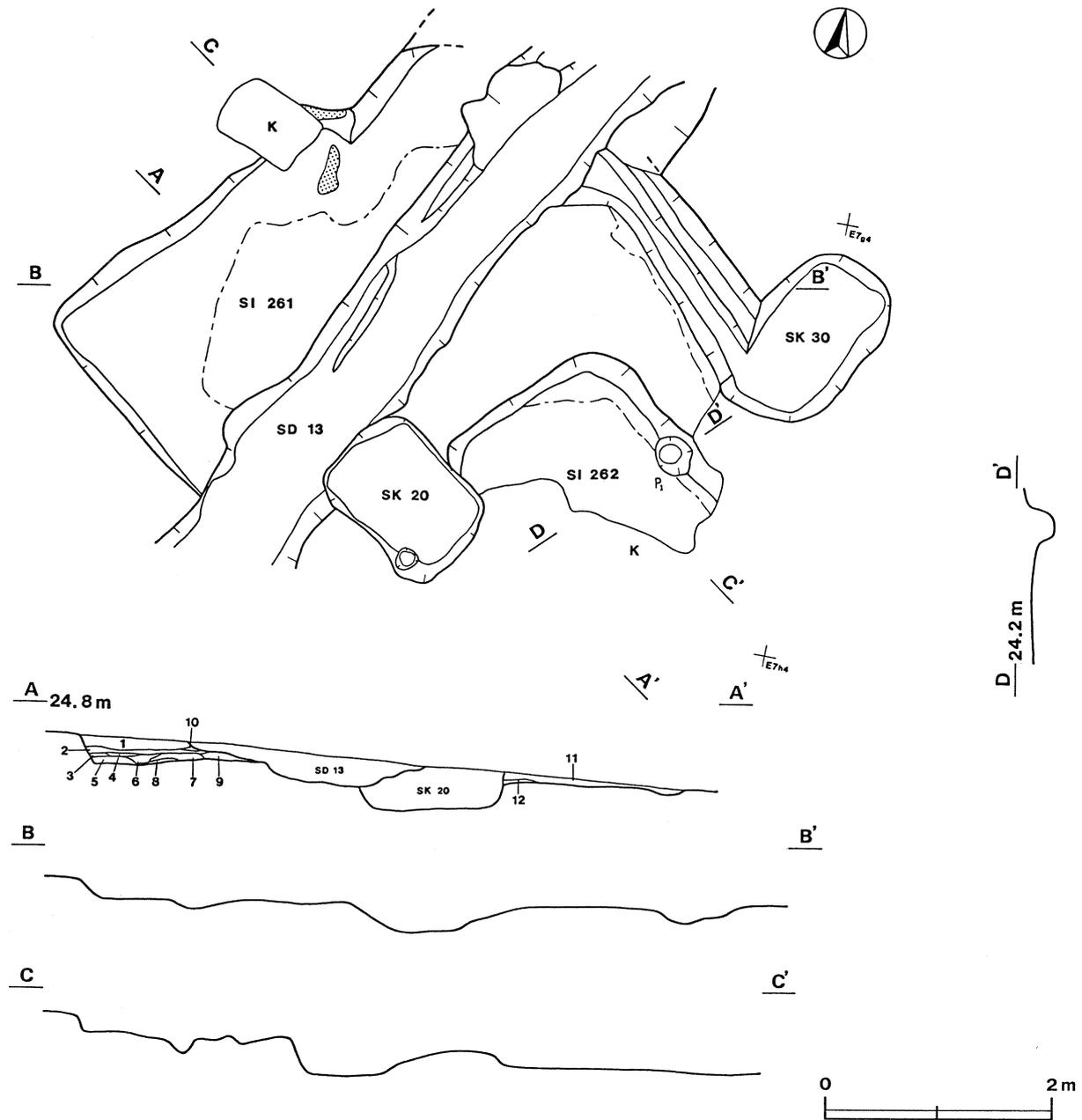
規模と平面形 傾斜地に立地するため、北西壁は残存するが、南東～南側が削平されており、全体が明らかではない。平面形は、残存部分から長方形と考えられ、主軸長は(2.07)m、幅は1.78mである。

主軸方向 N-45°-W

壁 壁高11cmで、外傾する。

壁溝 認められない。

床 平坦で、ほとんど全面が踏み固められており、堅緻である。



第81図 第261・262号住居跡実測図

ピット 1か所(P1)。北東壁から床にかけて位置する、径33cm、深さ20cmの円形ピットである。ただ、対応するピットがなく、位置的にも不自然であり、所属も含めて性格は不明である。

竈・炉 いずれも確認されていない。

覆土 土層断面図中の第11・12層が本住居跡の覆土である。自然堆積と考えられる。第20号土坑に切られている。なお、第261号住居跡との関係は前述のとおり、本住居跡が第261号住居跡を切っていたものと推定される。

土層解説

- 11 黒褐色 焼土粒子少量
- 12 極暗褐色 焼土粒子微量

遺物 出土していない。

所見 本遺構は、切り合い関係からは第261号住居跡より新しく、第20号土坑・第13号溝よりは古い。出土遺物がなく細かな年代決定できないが、形状や類例からはいわゆる竪穴遺構で、12世紀以降の住居跡と考えられる。

(2) 炉穴

第1号炉穴 (第82図, PL32)

位置 E6b0区に入れた旧石器時代文化層確認のための試掘坑の断面で確認された。中心はE6b9区にある。南側の低地に面した斜面から若干台地上の平坦面に入った場所である。南側には、わずか36cm(中心間で95cm)の隣接した位置に、第2号炉穴がある。

規模と平面形 径59cmの円形で、深さは10cmである。

壁 緩やかに立ち上がる。

底面 皿状である。ほとんど全面焼け、赤変・硬化が激しい。

覆土 土層断面図中、第1層が本遺構の覆土で、自然堆積である。第2層は焼土層であるが、ローム地山が焼けた層で、覆土ではない。

土層解説

- 1 褐色 焼土小ブロック微量・粒子少量, ローム中ブロック微量・小ブロック微量・粒子多量
- 2 赤褐色 焼土中ブロック中量・小ブロック少量・粒子少量

遺物 出土していない。

所見 形状や類例から、縄文時代早期の炉穴と考えられる。

第2号炉穴 (第82図, PL32)

位置 E6b0区に位置する。すぐ北には第1号炉穴が隣接する。第11号溝と重複しており、溝の立ち上がり面に焼土が現れていたため、確認された。

規模と平面形 溝で切られているため明確ではないが、径50cmの円形と推定される。深さは14cmである。

壁 緩やかに立ち上がる。

底面 皿状である。焼けて、若干赤変・硬化している。北側はやや赤変・硬化が激しい。

覆土 2層で、自然堆積である。

土層解説

- 1 褐色 焼土小ブロック・粒子微量
- 2 褐色 焼土中ブロック微量・小ブロック微量・粒子少量

遺物 出土していない。

所見 形状や類例から、縄文時代早期の炉穴と考えられる。

第3号炉穴 (第82図, PL32)

位置 第3・4号炉穴は、調査開始時の遺構確認作業では焼土の散布は認められたもののプランが確認できず、遺構とは認定できなかったが、旧石器時代文化層確認調査の際に試掘坑の土層断面で確認された。本遺構はE6r0区に位置する。南側の低地に面する台地縁辺である。南東側に第4号炉穴が重複する。

規模と平面形 径90cmの円形で、深さは37cmである。

壁 垂直に近い急傾斜である。

底面 皿状である。

覆土 土層断面図中、第1～8層が本遺構の覆土で、自然堆積である。焼土層は遺構底面から7～8cm上に堆積している。第4号炉穴を切っている。

第3号炉穴出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土,色調,焼成	備考
第82図 1	深鉢 縄文土器	-	深鉢の一部と思われるが、詳細は不明。	横位の太い沈線文。	砂粒・石英・長石 雲母,にぶい橙色 普通	TP119 1% 覆土中

遺物 縄文早期の土器の細片が3点出土している。2点はまったくの細片であり、1点のみ拓影図で示した。

所見 形状・遺物・類例等から、縄文時代早期の炉穴と考えられる。

土層解説

1 明褐色	焼土粒子微量,ローム粒子多量	5 黒褐色	焼土小ブロック微量,粒子少量,炭化粒子微量
2 黄褐色	焼土小ブロック・粒子微量,炭化粒子微量,ローム粒子多量	6 黄褐色	焼土粒子微量,炭化物微量,ローム粒子多量
3 にぶい黄褐色	焼土小ブロック微量・粒子少量,炭化粒子微量,ローム小ブロック微量・粒子多量	7 にぶい黄色	焼土粒子微量,ローム粒子多量
4 赤褐色	焼土小ブロック多量・粒子多量	8 にぶい黄色	焼土粒子微量,ローム粒子多量

第4号炉穴 (第82図, PL32)

位置 E6r0区に位置する。第3号炉穴が重複し、東方1.80m (中心間で3.20m) に第5号炉穴が位置する。

規模と平面形 西側を第3号炉穴に切られ、北側を試掘坑に切られており、全体が明らかではない。現状では、隅丸方形のコーナー部分のようなプランを示している。主要部分は、焼土の分布範囲を中心とする径1m程の部分と推定されるが、北側への広がりについては不明である。深さは30cmである。

壁 外傾する。

底面 焼土の下の部分で10cm程凹む。

覆土 土層断面図中、第9～11層が本遺構の覆土で、自然堆積である。焼土層は遺構底面から2～3cm上に堆積している。第3号炉穴に切られている。

土層解説

9 明黄褐色	焼土小ブロック・粒子微量,ローム粒子多量
10 明赤褐色	焼土中ブロック微量・小ブロック少量・粒子多量,ローム粒子多量
11 黄褐色	焼土粒子微量,ローム粒子多量

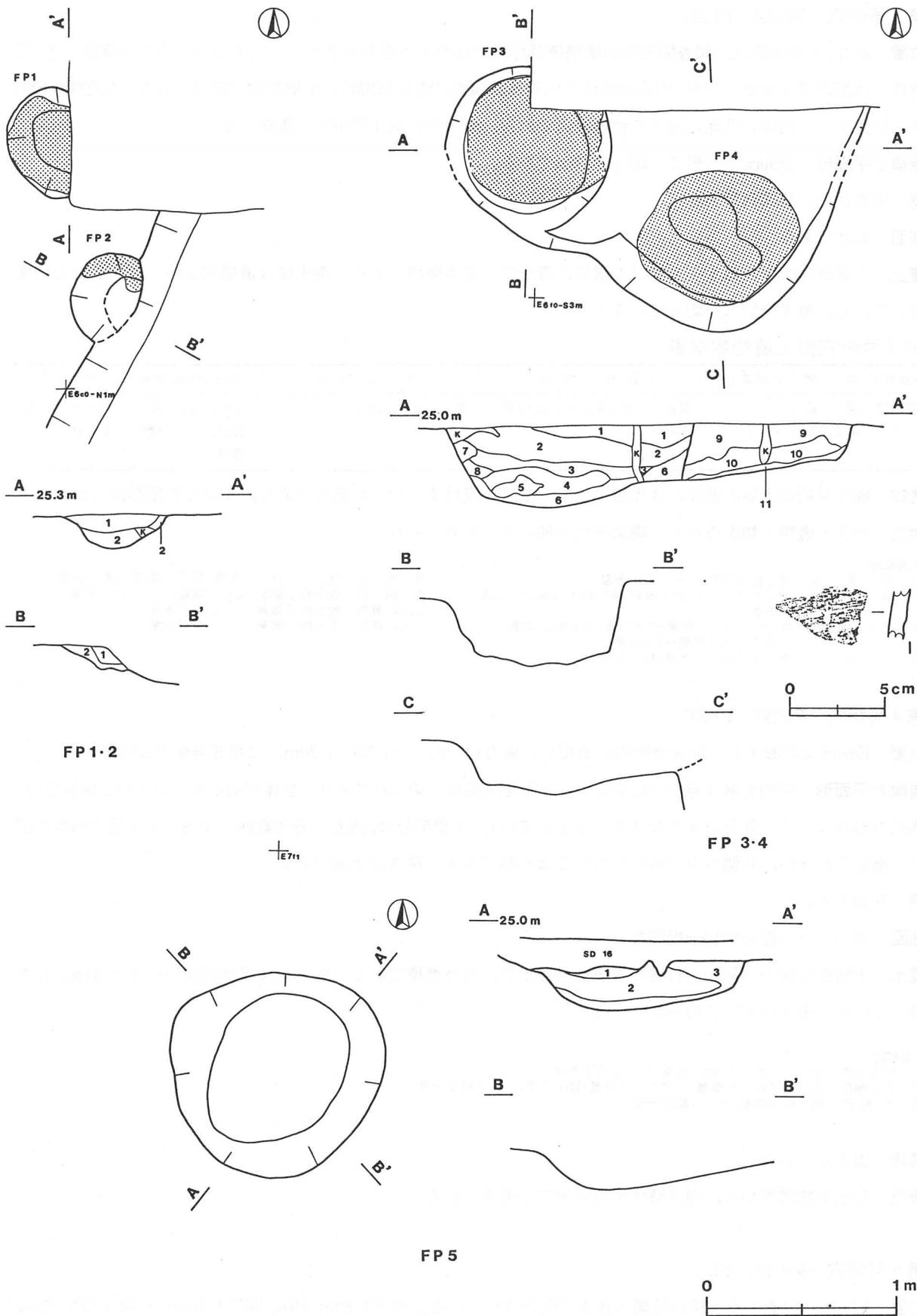
遺物 出土していない。

所見 形状や類例等から、縄文時代早期の炉穴と考えられる。

第5号炉穴 (第82図, PL32)

位置 F7r1区に位置する。第16号溝の底面で確認されている。西方1.80m (中心間で3.20m) に第4号炉穴が、さらに西側に第3号炉穴が位置する。

規模と平面形 径1.10mの円形で、深さは40cmである。



第82图 第1・2・3・4・5号炉穴実測・第3号炉穴出土遺物縄文土器拓影图

壁 緩やかに立ち上がる。

底面 皿状である。

覆土 第1～3層が覆土である。多少の違いはあるが、いずれも焼土層である。上部を第16号溝によって切られている。

土層解説

- 1 赤褐色 焼土中ブロック少量・小ブロック中量
- 2 赤褐色 焼土大ブロック少量・中ブロック中量・小ブロック多量・粒子多量
- 3 赤褐色 焼土中ブロック中量・小ブロック多量・粒子多量

遺物 出土していない。

所見 形状や類例等から、縄文時代早期の炉穴と考えられる。

(3) 土坑

II (H5)区では38基の土坑を確認し、調査したが、ここでは9基のみ報告する。報告を割愛する土坑は、覆土の状況等から見て近現代の農業に伴うと思われる土坑である。

第5A・B号土坑 (第83図, PL33)

D6is区に位置する。2基の土坑の重複で、確認された土坑をA、その下に重複していた土坑をBと呼称する。Aは不定形であるが、本来方形であった可能性がある。規模は長軸2.70m、短軸2.50m、深さは12cm、主軸方向はN-59°-Eである。底面はほぼ平坦であるが、軟弱である。壁は緩やかに立ち上がる。ピットが7か所確認されている (P1～P7) が、本遺構に伴うかどうかも含めて、性格は不明である。覆土は土層断面図の第1層で、自然堆積である。遺物は出土していない。時期・性格等は不明である。

BはAの下層で確認された。図中第2～4層が本遺構の覆土で、Aによって切られている。長軸95cm、短軸75cmの隅丸長方形で、深さは(30)cm、主軸方向はN-60°-Eである。底面は平坦で、壁は外傾する。覆土は人為的な埋め戻しと考えられるが、しまりがあり、この点、他の農業に伴う土坑とは異なる。時期・性格等は不明である。

土層解説

- 1 褐色 炭化粒子少量, ローム粒子多量
- 2 褐色 ローム粒子多量, しまりあり
- 3 暗褐色 炭化粒子少量, ローム粒子多量, しまりあり
- 4 明褐色 ローム中ブロック・小ブロック・粒子多量, しまり強

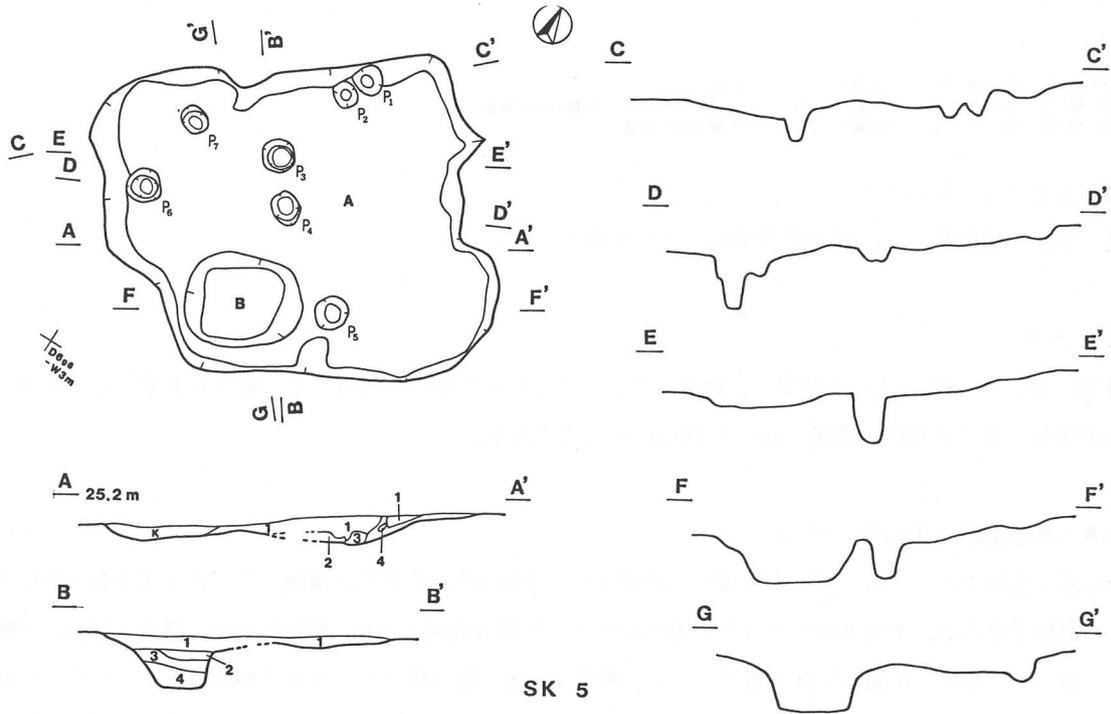
第6号土坑 (第83図, PL8)

II (H5)区の北西寄り, E6a6区に位置する。東側で第238B号住居跡と重複しており、本遺構がこれを切っている。長軸2.57m、短軸2.00mの不整楕円形で、主軸方向はN-79°-W、深さは30cmである。底面は数か所の凹みを持ち、やや不整である。壁の立ち上がりはほぼ垂直に近い。覆土は人為的な堆積である。本遺構に伴う遺物は出土していない。時期・性格等は不明である。

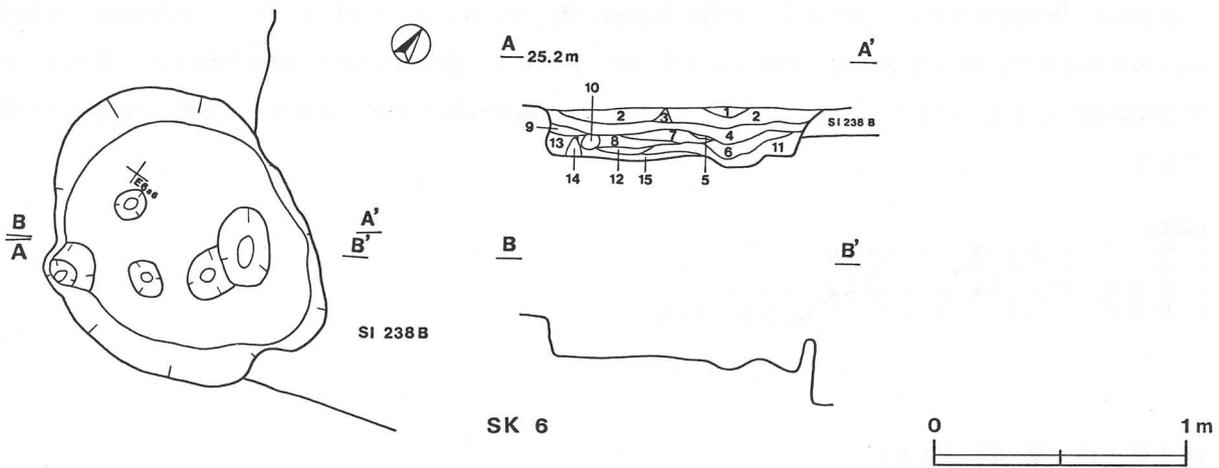
土層解説

- 1 黒色 ローム小ブロック・粒子中量
- 2 黄灰色 ローム小ブロック・粒子中量
- 3 浅黄色 焼土粒子少量, ローム大ブロック多量
- 4 黒褐色 焼土粒子少量, ローム小ブロック・粒子中量
- 5 明黄褐色 ローム大ブロック・粒子多量
- 6 明黄褐色 焼土粒子少量, ローム中ブロック・粒子中量
- 7 黄褐色 焼土粒子少量, ローム小ブロック・粒子少量
- 8 オリーブ褐色 焼土粒子少量, ローム小ブロック・粒子少量
- 9 オリーブ褐色 焼土小ブロック・粒子少量, ローム小ブロック・粒子中量

- | | | | |
|---------|-----------------------------------|---------|-----------------------|
| 10 明黄褐色 | 焼土粒子少量, ローム大ブロック・中ブロック・小ブロック・粒子多量 | 13 暗灰黄色 | 焼土粒子少量, ローム小ブロック・粒子中量 |
| 11 黄色 | ローム大ブロック・中ブロック・小ブロック・粒子多量 | 14 明黄褐色 | ローム中ブロック・小ブロック多量 |
| 12 赤色 | 焼土大ブロック・粒子多量, ローム中ブロック・小ブロック・粒子中量 | 15 黄灰色 | ローム小ブロック・粒子少量 |



SK 5

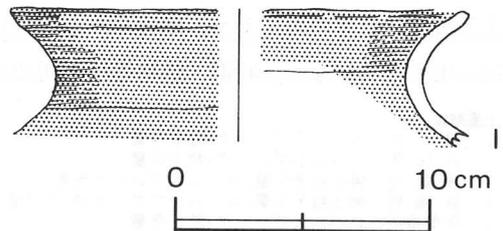


SK 6

第83図 第5A・5B号土坑実測図

第7号土坑 (第84・85図, PL33)

II (H5) 区の中央部, E6c9区に位置する。南東側で第248号住居跡を切り, 北西側で第1号道路, 東側で第15号溝に切られる。長軸5.94m, 短軸(3.92)mの不整楕円形で, 南部では隅丸長方形の一部のような形状をしている。主軸方向はN-38°-Eで, 深さは44cmである。底面はほぼ平坦である。壁は南半は35°と比較的急で, 北半は15°と緩や



第84図 第7号土坑出土遺物実測図

かに立ち上がる。覆土は自然堆積である。第84図1に示したような土師器甕破片等が出土しているが、本遺構に伴うと思われる遺物は出土していない。時期・性格等は不明である。

第7号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土,色調,焼成	備考
第84図 1	甕 土師器	A (17.7) B (5.0)	体部は球形(推定)。口縁部は頸部から丸みを持って外反し,口唇部はわずかに外上方につまみ上げる。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面ナデ。内面横位のヘラナデ。外面～口縁部内面赤彩。	砂粒・石英・長石・雲母, 橙色 普通	P353 5% 覆土中

土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------------|--------|-----------------|
| 1 暗赤褐色 | 焼土粒子少量, ローム小ブロック中量・粒子多量 | 3 暗赤褐色 | ローム粒子多量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土粒子微量, ローム粒子中量 | 4 暗赤褐色 | 焼土粒子微量, ローム粒子中量 |

第8号土坑 (第85図, PL33)

II (H5) 区の東端, D7_{n2}区に位置する。楕円形土坑が縦横に連結した形で, 連結部はトンネル状になっていた。全体では長軸1.59m, 短軸0.73mの瓢箪形に近い形である。主軸方向はN-6°-E, 深さは26cmである。底面は南側が深く, 北側が浅く, 傾斜している。壁は外傾する。トンネル天井付近は焼けており, トンネル部から南半にかけては, 覆土中に焼土・炭化物・骨粉が含まれている。ただ, 焼土の量は少なく, 火床面の赤変部分も認められず, 長期にわたる火の使用は考えられない。トンネル状の火を使う遺構という点では竈に類した構造物と言えなくもないが, それ以上は不明である。土器等は出土せず, 時期は不明である。

土層解説

- | | | | |
|----------|-----------------------------------|--------|-------------------------------------|
| 1 にぶい黄褐色 | 焼土小ブロック微量, 炭化物微量, ローム小ブロック少量・粒子中量 | 7 黒褐色 | 炭化粒子微量, ローム小ブロック微量・粒子少量 |
| 2 にぶい黄褐色 | 炭化物微量, ローム中ブロック少量・小ブロック少量・粒子中量 | 8 暗褐色 | ローム小ブロック微量・粒子中量 |
| 3 暗褐色 | 炭化粒子微量, ローム粒子少量, 骨粉微量 | 9 黒褐色 | 焼土小ブロック・粒子微量, 炭化粒子少量, ローム小ブロック・粒子微量 |
| 4 黄褐色 | ローム地山 | 10 黒色 | 炭化粒子微量, 骨粉少量 |
| 5 にぶい黄褐色 | 焼土粒子微量, ローム小ブロック少量・粒子中量 | 11 暗褐色 | 焼土粒子中量, 炭化粒子微量, ローム粒子中量, 骨粉少量 |
| 6 褐色 | 焼土粒子微量, ローム中ブロック微量・小ブロック微量・粒子多量 | | |

第14号土坑 (第85図, PL33)

II (H5) 区の南部, E7_{i3}区に位置する。長軸1.16m, 短軸0.90mの楕円形で, 主軸方向はN-40°-E, 深さは76cmである。底面は平坦面があり, 中央部分はピット状に落ち込む。壁は外傾する。覆土は人為的な埋め戻しと思われる。遺物は出土していない。時期・性格等は不明である。

土層解説

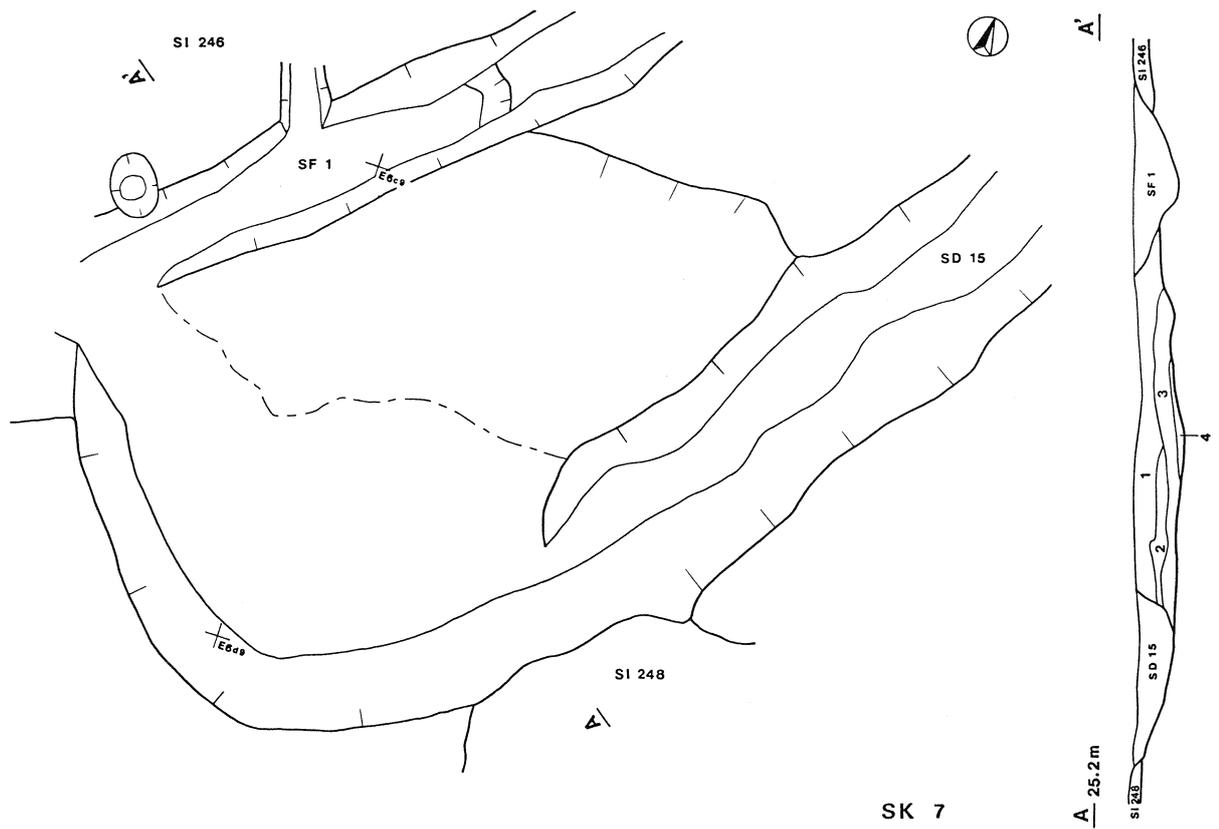
- | | | | |
|-------|--------------------------|-------|--------------------|
| 1 黒褐色 | ローム小ブロック・粒子少量, 粘土小ブロック少量 | 4 褐色 | ローム粒子中量, 粘土小ブロック微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量, 粘土中ブロック多量 | 5 褐色 | ローム粒子中量, 粘土中ブロック中量 |
| 3 褐色 | ローム粒子中量 | 6 黒褐色 | 炭化粒子微量, 粘土粒子微量 |

第15号土坑 (第85図)

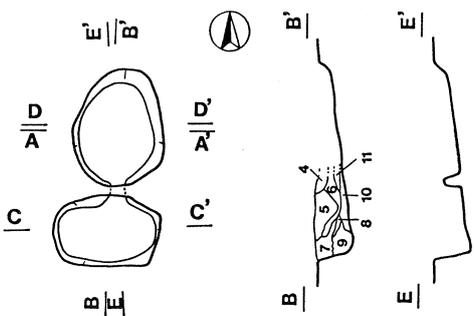
II (H5) 区の南部, E7_{i3}区に位置する。南側の低地に向かう斜面を降りた位置である。長軸0.77m, 短軸0.58mの楕円形で, 主軸方向はN-35°-E, 深さは12cmである。底面は平坦で, 壁は緩やかに立ち上がる。覆土は自然堆積である。遺物は出土していない。時期・性格等は不明である。

土層解説

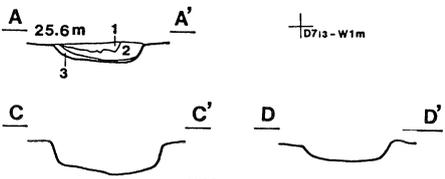
- | | |
|-------|-----------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子中量 |
| 3 褐色 | ローム小ブロック少量・粒子中量 |



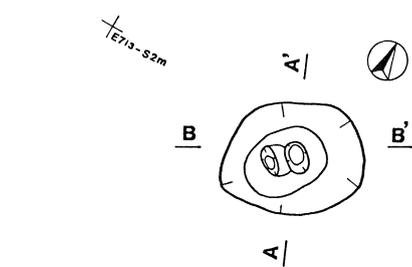
SK 7



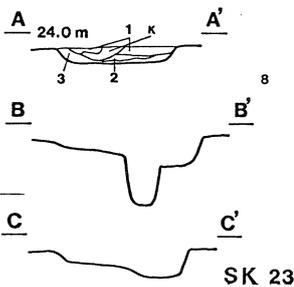
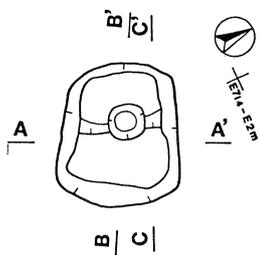
SK 8



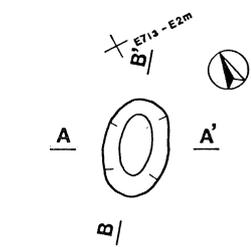
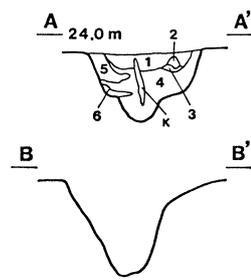
SK 8



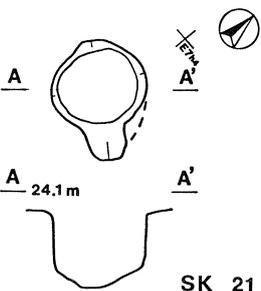
SK 14



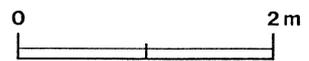
SK 23



SK 15



SK 21



第85图 第7·8·14·15·21·23号土坑实测图

第21号土坑 (第85図, PL33)

E7_{h4}区に位置する。南側の低地に向かう斜面を降りた位置である。現状では長軸0.97m, 短軸0.75mの不整形であるが、本来径0.75cmの円形土坑であったと考えられる。深さは60cmで、粘土がかった層(前記標準土層の第7層)まで掘り込んでいる。底面は皿状で、立ち上がりはほぼ垂直であるが、一部オーバーハングする。覆土は、黒色土主体の自然堆積土層である。上層の攪乱層から寛永通寶1点が出土している。時期・性格等は不明である。

第23号土坑 (第85図, PL33)

E7_{h4}区に位置する。II(H5)区の南側の低地にほぼ降りた位置にあたる。長軸1.15m, 短軸0.94mの隅丸長方形で、主軸方向はN-62°-W, 深さは23cmである。底面中央部には短軸方向に走る段差がある。また、その段差の部分に径30cm, 確認面からの深さ55cmの円形ピットを持つ。覆土は人為的堆積である。時期・性格等は不明である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック微量・粒子中量
- 2 褐色 ローム中ブロック・小ブロック・粒子中量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック微量・粒子少量

(4) 溝

II(H5)区では13条の溝を調査した。ここでは6条について報告する。出土遺物等から近代以降と考えられる第6号溝(調査区北端部)・第9号溝(東端部)・第10号溝(同)・第12号溝(中央部)・第13号溝(南部)・第14号溝(南部)は報告からは除外する。また自然の溝と考えられる第16号溝(第251号・第252号・第253号住居跡と重複)も報告からは除外する。

第7A・B号溝 (第86・87図)

調査区の北東部を2条の溝が平行して南北に走る。2条が平行しているため、一体として捉えるのが適当と考え、同一の遺構番号を付し、西側をA, 東側をBとした。Aは、第242号住居跡覆土上から第239A・B号住居跡をへて調査区を北へ抜ける(D7_{j1}~D6_{e8}区, N-28°-W)。長さ20.7m, 上幅0.80~2.28m, 下幅0.54~1.04m, 深さ27cmである。Bは、南は同じく第242号住居跡覆土上から始まるが、北側は第239A号住居跡の覆土上で終わり(D7_{j1}~D6_{f9}区, N-27°-W), 長さ15.5m, 上幅0.54~1.04m, 下幅0.16~0.44m, 深さ8cmである。断面はいずれも浅い皿状である。覆土はいずれも自然堆積である。時期・性格は不明である。

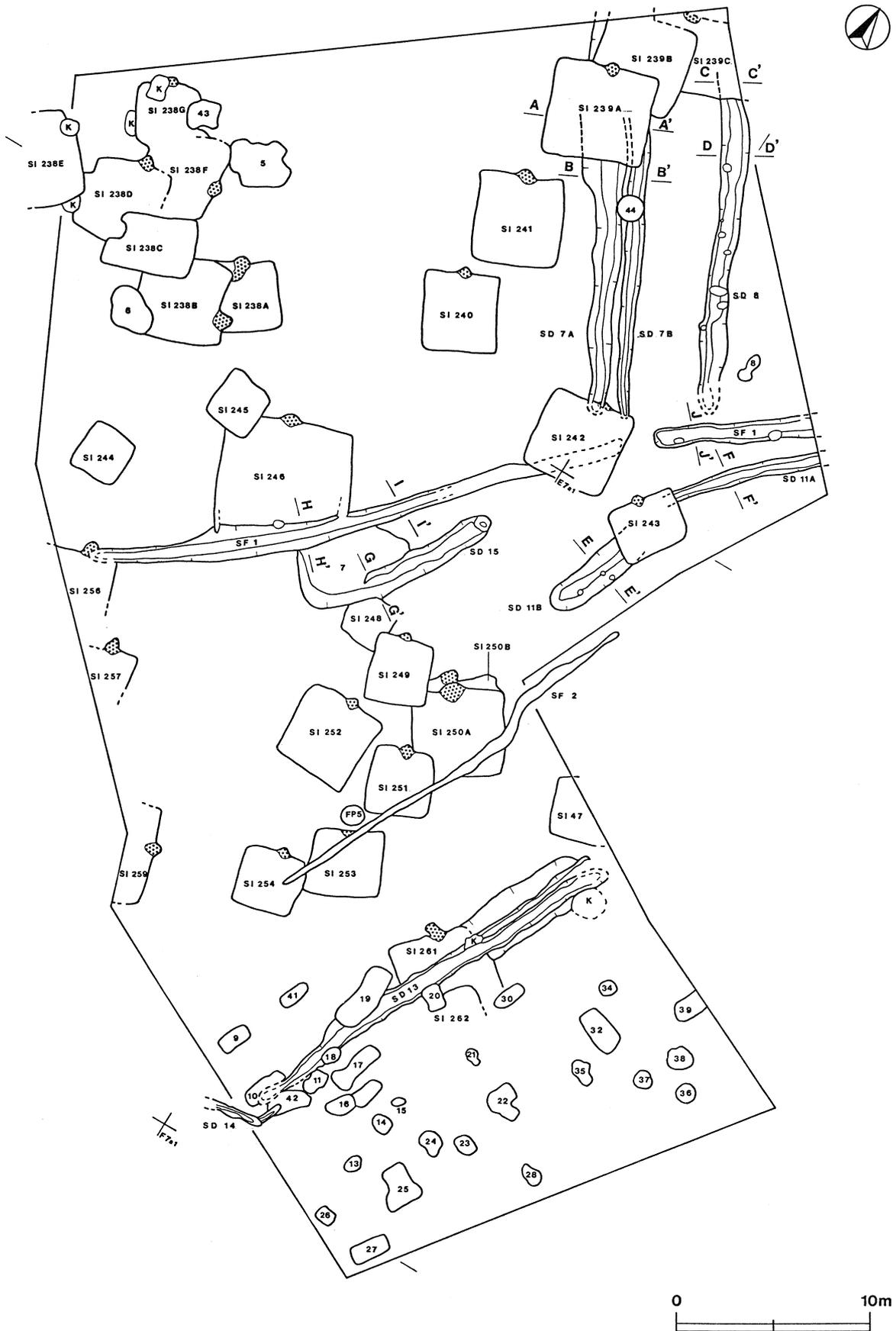
土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子微量, ローム粒子中量, 第7A号溝覆土
- 2 暗褐色 焼土粒子少量, ローム粒子中量, 第7A号溝覆土
- 3 黒褐色 焼土粒子微量, ローム粒子少量, 第7B号覆土

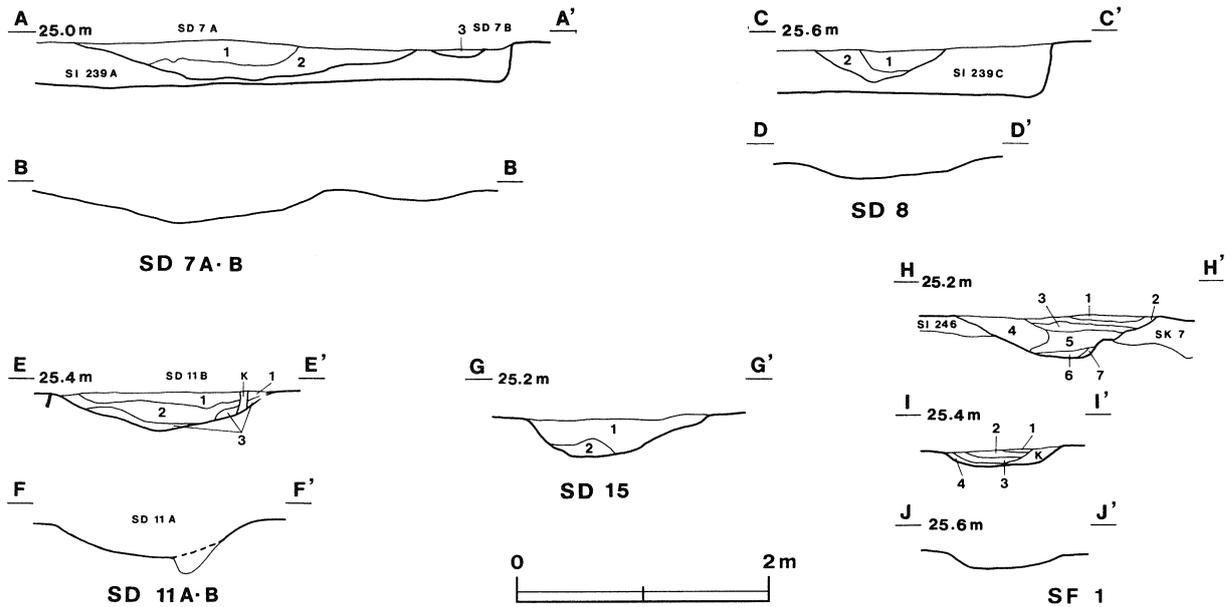
第8号溝 (第86・87図)

調査区の北東部, 第239C号住居跡(D6_{e0}区)からD7_{i1}区まで走る(N-30°-W)。第239C号住居跡を切る。西側を第7号溝が平行して走る。長さ16.7m, 上幅0.90~1.42m, 下幅0.37~0.76m, 深さ18cmで、断面皿状である。覆土は自然堆積である。時期・性格は不明である。

土層解説 1 暗褐色 ローム小ブロック微量・粒子中量 2 暗褐色 焼土粒子微量, ローム粒子少量



第86図 第7A・7B・8・11A・11B・13・14号溝・第1・2号道路実測図



第87図 第7A・7B・8・11A・11B・15号溝・第1号道路断面実測図

第11A・B号溝 (第86・87図)

調査区の中央東寄りに南西から北東方向に走り、東側は調査区外に延びる。第243号住居跡を切っており、その両側で規模や主軸方向が異なるので、2条の溝の複合の可能性が高い。第243号住居跡の東北側をA、南西側をBと呼称する。AはD7_{i3}~D7_{j2}区に位置し、主軸方向N-45°-Eで、約8m延びる。上幅0.56~0.86m、下幅0.18~0.48m、深さ13cmで、断面は皿状である。BはD7_{j2}~E7_{b1}区に位置し、主軸方向N-21°-Eで、約7m延びる。上幅1.55~1.74m、下幅0.41~0.53m、深さ32cmで、断面は皿状ないし逆三角形である。覆土はA・Bとも自然堆積である。時期・性格は不明である。

A土層解説

1 暗褐色 ローム小ブロック少量・粒子微量

B土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量
 2 暗褐色 ローム小ブロック少量・粒子少量
 3 褐色 ローム小ブロック中量・粒子多量

第15号溝 (第86・87図)

調査区の中央部 (E6_{b0}~E6_{c9}区) に位置する。第7号土坑を切っている。長さ7.25m、主軸方向N-31°-E、上幅1.20~1.50m、下幅0.25~0.78m、深さ44cmで、断面は皿状である。北端部は土坑状に落ち込んでいる。覆土は自然堆積である。時期・性格は不明である。

土層解説

1 暗赤褐色 焼土粒子微量, ローム粒子中量
 2 暗赤褐色 焼土粒子微量, ローム粒子多量

(5) 道路

踏み固め面が細長く連続するものを道路とした。II (H5)区では2条の道路を調査した。

第1号道路 (第86・87図, PL33)

調査区の中央部を南西から北東方向に走る (E6e6~D7h3区, N-49°-E)。D7j1区で1.72mほど途切れるが, 北東は調査区外に延び, 全長38mになる。第242号住居跡・第246号住居跡・第256号住居跡・第7号土坑を切る。踏み固め面はローム層上面で確認され, 中央部が盛り上がっている。踏み固め面の幅は0.65~0.95mである。下層は溝状になっており, 当初は溝として掘られた可能性もある。覆土も踏み固められていて, 少なくとももう1面の踏み固め面が認められる (II'土層断面図第4層, HH'土層断面図第7層)。溝は幅0.65~0.90m, 下幅0.30~0.70m, 深さ15cmで, 断面は皿状である。時期は, 混入する土師器の年代から平安時代以降と考えられる。

II'土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子微量, ローム粒子少量, しまり強
- 2 黒褐色 ローム粒子少量, しまり強
- 3 黒褐色 焼土粒子微量, ローム粒子中量, しまり極強
- 4 暗褐色 ローム粒子多量, しまり普通

HH'土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子微量, ローム粒子中量, しまり強
- 2 黒褐色 焼土粒子微量, ローム粒子中量, しまり極強
- 3 暗褐色 焼土粒子微量, ローム粒子中量, 粘土粒子微量, しまり強
- 4 極暗褐色 焼土粒子微量, ローム粒子少量, しまり普通
- 5 黒褐色 焼土粒子微量, 炭化粒子微量, ローム粒子中量, しまり極強
- 6 極暗褐色 ローム小ブロック・粒子中量, しまり強
- 7 極暗褐色 ローム粒子多量, しまり普通

第2号道路 (第86図, PL33)

調査区中央部を, 地境のコーナーに沿うように屈曲しながら, 北北東から南南西方向に走る (E7b2~E6g0区, N-22°-E)。ローム上面で確認した。長さは22mである。幅0.22~0.73mで, 中央部がわずかに盛り上がる。第250A号住居跡・第251号住居跡・第253号住居跡・第254号住居跡・第16号溝の覆土の上面を走る。時期は, これら重複する遺構よりは新しいが, 詳細は不明である。

(6) 遺構外の遺物

表面採集された遺物, 及び表土中・南側斜面部の包含層で出土した遺物について解説する。

① 拓本土器以外

須恵器・縄文土器尖底・鉄器・石器等, 拓本土器以外については観察表により解説する。

II (H5) 遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第88図 1	坏 須恵器	A [12.8]	平底。体部は内彎気味に外傾して立ち上がり, 口縁部はわずかに外反する。	内・外面ヨコナデ。	砂粒・長石・雲母 黄灰色 普通	PL53-3, P362 15%, 表採 墨書(判読不能)
		B 4.2				
		C [7.2]				
2	深鉢 縄文土器	B (6.5)	尖底。	粘土塊から成形。調整不明。	砂粒・石英・長石 橙色 普通	PL53-2 P361 5% 表土中

図版番号	器種	計測値				出土状況	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
3	刀子	(11.7)	2.0	0.4	(21.6)	第6号溝覆土に混入	M9
4	剥片	4.7	2.8	1.4	12.5	表土中	PL53-7, Q18, 黒耀石
5	ナイフ形石器	4.9	2.2	1.3	6.3	表土中	PL53-6, Q19, 硬質頁岩
6	剥片	5.8	3.7	1.5	26.8	表土中	PL53-8, Q21, 緻密質安山岩
7	有舌尖頭器	(2.2)	(1.4)	(0.7)	(2.2)	表土中	PL53-4, Q23, チャート
8	石核	7.8	7.3	10.9	531.4	表土中	PL53-5, Q17, チャート

②拓本土器

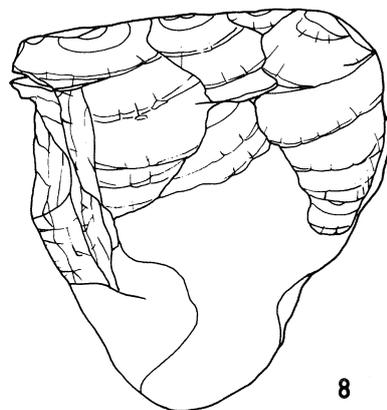
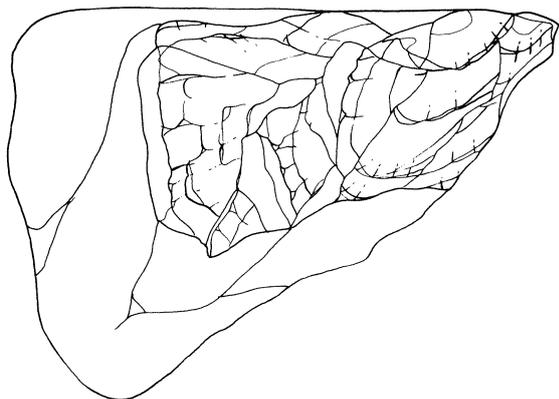
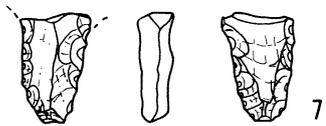
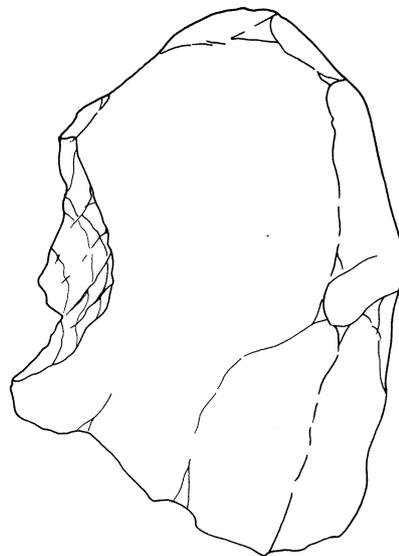
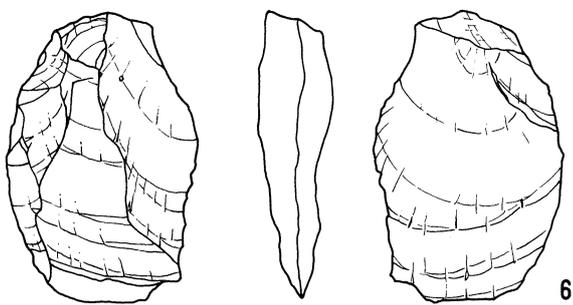
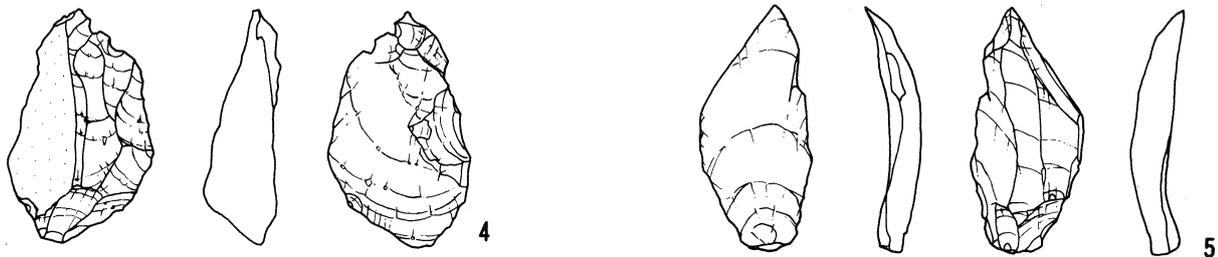
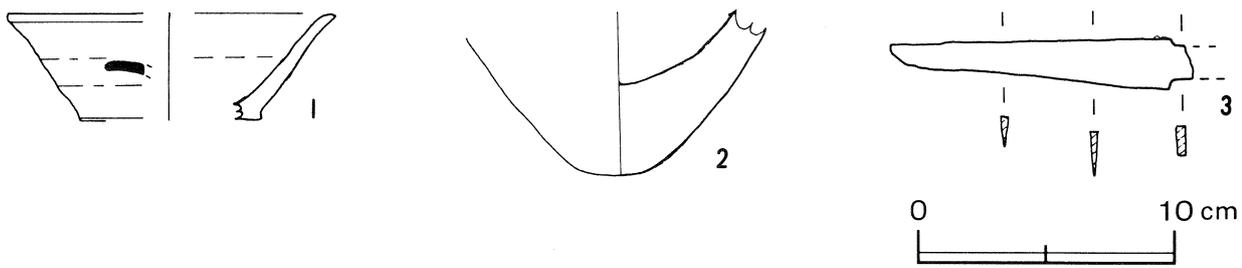
拓影図で示した縄文土器片については、分類して類ごとに説明し、個々の土器片については適宜若干の説明を加える。なお、縄文土器片については、炉穴以外の遺構から出土したものについては遺構出土遺物として扱わず、遺構外出土の縄文土器片と一括してここで扱う。

第1類土器群（第89図1～3，PL55） 撚糸文土器群で、早期前葉稻荷台式に属すると考えられる。1は縦走る条の細い撚糸文を施している。条間は疎である。胎土は比較的緻密である。2は土製円板に加工されている。条間がやや疎である。3は斜行する撚糸文を交差させる。条間はやや密である。

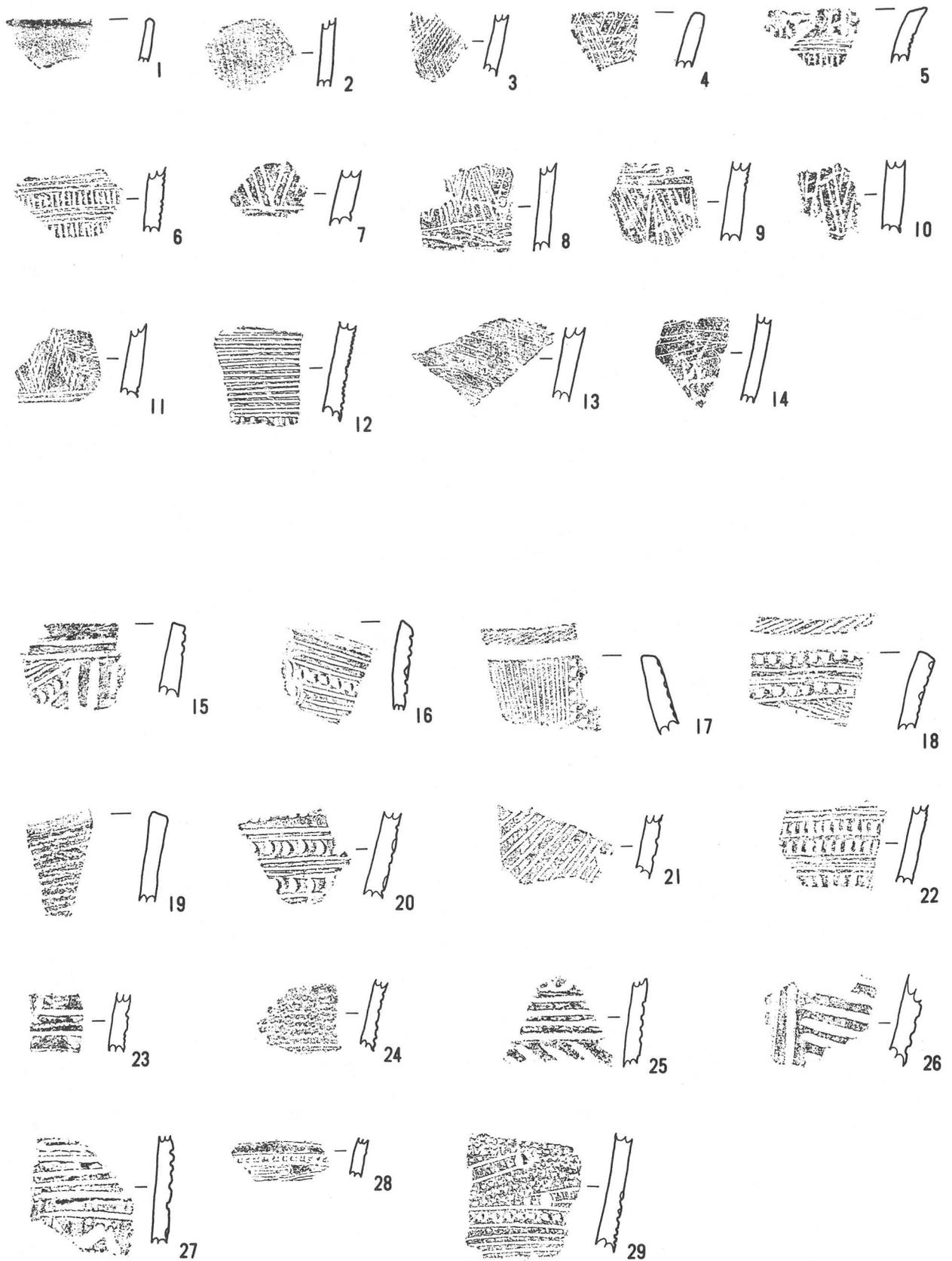
第2類土器群（第89図5・6・11・22，PL55・56） 沈線文土器群で、早期中葉三戸式に属すると考えられる。5は口縁部で、内そぎの外端部に耳状の突起を2個付け、その左右は爪形文を施す。5の下半と6・22はやや太い縦位の沈線を横位の細沈線によって区画する。5と6は同一個体と考えられる。11は細沈線による帯状格子目文を施す。

第3類土器群（第89図4・7～10・12～21・23～29，PL56） 沈線文土器群で、早期中葉田戸下層式に属すると考えられる。4・7～10は細沈線により鋸歯状文を描くものである。15は口縁部で、口唇部は薄くなる。縦横の沈線による区画の中に斜位の平行沈線を配し、平行沈線の間には爪形文を施す。16は波状口縁で、波頂部から縦長の連続刺突を垂下させ、そこから口縁に平行する3本1単位の沈線を引き、その間に棒状施文具による刺突を連続させる。口唇部付近外面には赤彩が施されている。17は内傾する口縁部である。口唇部は外そぎで細沈線文を施し、棒状施文具による刺突を縦に連続させる。18は波状口縁で口唇部に細沈線文を施す。19は波状口縁、24は平口縁で沈線を持つが、いずれもアナガラ属の貝による貝殻腹縁文を施している。20は半截竹管による刺突のほか、貝殻腹縁文を施す。27は横位の平行沈線文と、太沈線による弧状文を施す。28は半截竹管による平行沈線を施文後、連続刺突を施し、その下部に細半截竹管による平行沈線を施文後、その両端へ刺突を施す。29は棒状施文具の連続刺突文により文様帯を区切り、口縁部文様帯は平行する斜行細沈線文とその端部への刺突を施し、それらの間をアナガラ属の貝による貝殻腹縁文で充填する。胴部文様帯は横位の平行沈線文を施す。

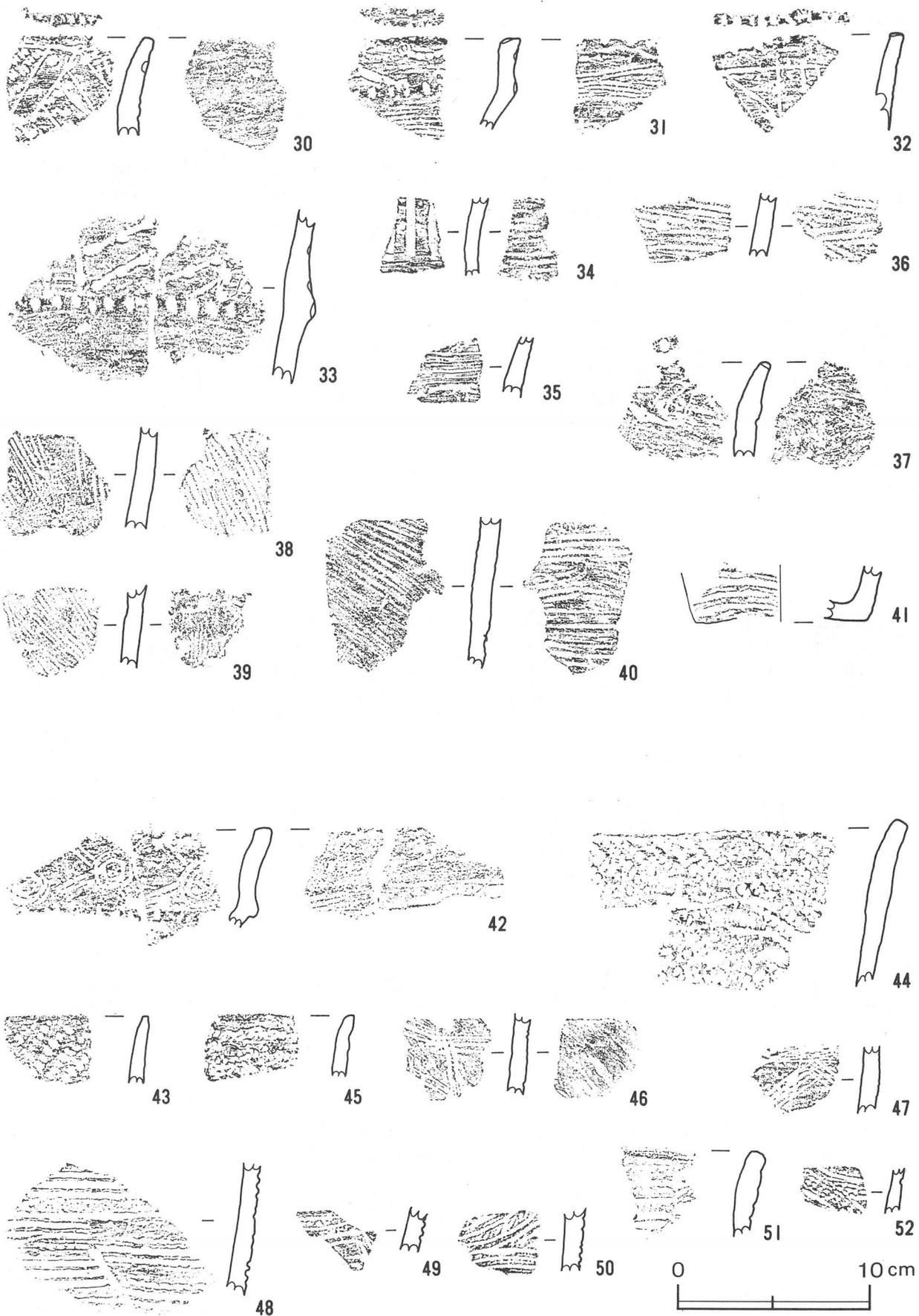
第4類土器群（第90図30～40・42，第91図53～55，PL56・57） 条痕文土器群で、早期後葉鶺鴒ヶ島台式に属すると考えられる。いずれも胎土に繊維を含む。30は2本1単位の斜位の平行沈線で文様を構成し、その交点に半截竹管による刺突を施し、それらの文様内を半截竹管の刺突により充填する。口唇部には刻みを入れる。31は狭い口縁部文様帯を持つ口縁部破片である。斜行する沈線の両端に円形竹管文を施し、口唇部近くの押し引き沈線による弧状文の端にも円形竹管文を施す。口縁の内外両端部と段に刻みを入れる。内端部の刻みは半截竹管の先端によるもので、刺突に近い。胴部外面と内面には条痕文を施す。32は波状口縁で口唇部に刻みを入れ、縦・横・斜めの鋭い沈線を組み合わせ、沈線上に半截竹管による刺突を施す。33は胴部上位から口縁部文様帯にかけての破片である。頸部の隆帯に刻みを入れ、その上部に縦位及び斜位の平行沈線文を施し、沈線上及び交点に半截竹管による刺突を施す。34は口縁部付近の破片で、太い沈線を縦横に施し、内面には条痕文を施す。茅山下層式に属する可能性もあるが、繊維の含有量がやや少ないので、鶺鴒ヶ島台式に含めて考えておく。37は段と口唇部に刻みを入れ、その間に細沈線で鋸歯状の文様を施す。繊維の含有量が多い。35は外面にのみ条痕文を施し、繊維の含有量が多い。36・38～40は内・外面とも条痕文を施す。38は底部に近い部分の破片である。胎土等から見て36と40、38と39は同一個体であろう。42は口縁部文様帯部分の破片である。頸部の隆帯と口縁の内外両端に刻みを入れる。文様帯には平行沈線文による菱形を連続させ、菱形の接点には2重の同心円文を、また菱形の上下の頂点には半截竹管による刺突を施す。胎土は角礫と雲母を多く含む。53は棒



第88図 遺構外出土遺物実測図



第89图 遺構外出土遺物繩文式土器拓影图(1)



第90図 遺構外出土遺物縄文式土器拓影図(2)

状施文具による押し引き文を沈線によって区画し、沈線の交点には刺突を施す。54は棒状施文具による押し引きを2条を1単位として施す。55は刻みを施した隆帯で区画し、その一部には竹管状施文具による刺突を施す。

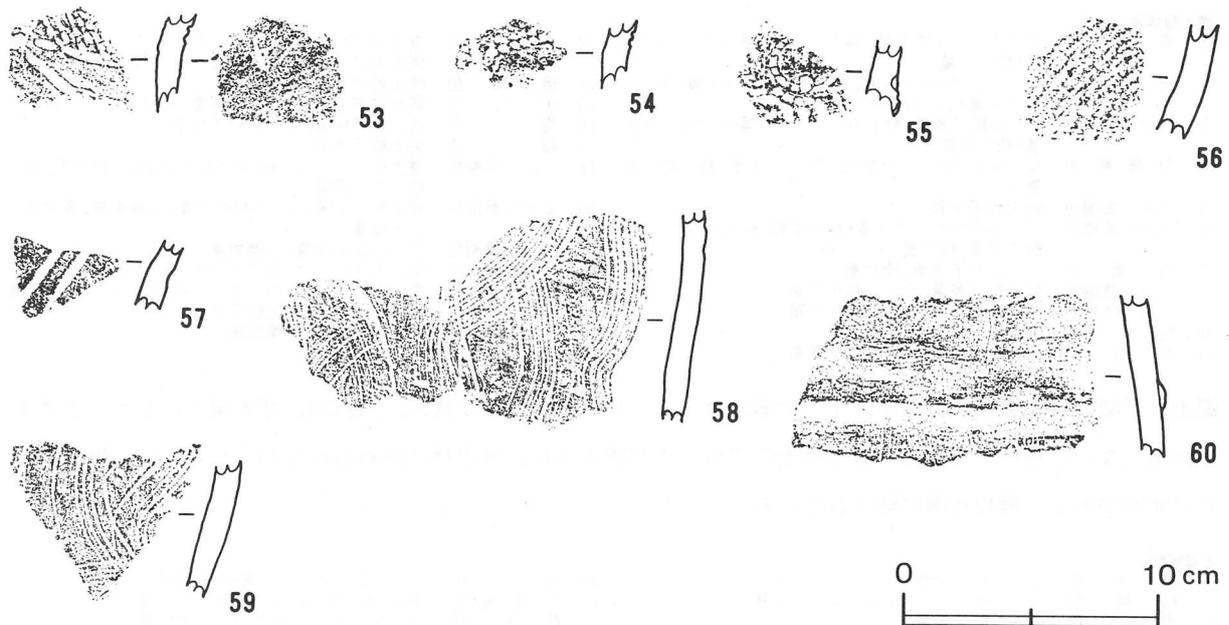
第5類土器群(第90図41・48, PL56・57) 前期前葉植房式に属すると考えられる土器群である。41は底部破片で、胴部外面には平行線文を施し、上げ底気味の底面は磨いている。48は押し引きによる平行線文を施している。いずれも胎土に多量の繊維をふくむ。

第6類土器群(第90図43~47, 第91図56, PL57) 羽状縄文土器群で、前期前葉黒浜式に属すると考えられる。43・56はLR, 44はRLの単節縄文を施文する。56は施文方向が一定しない。45はループ文を施文する。46・47は半截竹管による平行沈線で平行四辺形、または菱形を描く。56が繊維の含有量が少ないが、他はいずれも胎土に多量の繊維を含む。

第7類土器群(第90図49~51, 第91図57, PL57) 前期後葉浮島式に属すると考えられる土器群である。胎土に繊維をほとんど含まない。49・50は地文に撚糸文を施し、半截竹管による沈線で区画する。51は口縁部直下に太い半截竹管による変形爪形文を2条(下にもう1条か)施す。57は2条の沈線文を斜位に施すもので、所属不明であるが、一応ここに属させておく。

第8類土器群(第90図52, PL57) 貝殻腹縁文土器群で、前期後葉興津式に属すると考えられる。52は地文としてアナガラ属の貝の貝殻腹縁による刺突を連続させ、沈線により区画した後、区画外を磨り消している。

第9類土器群(第91図58~60, PL57) 後期前葉堀之内式に属する可能性が高いと考えられる土器群である。58~59き櫛歯状の施文具で縦位の緩やかな曲線を描く。60は太い隆帯を持ち、その下部に櫛歯状の施文具により、おそらく58~59と同様の文様を施す。



第91図 遺構外出土遺物縄文式土器拓影図(3)

3 III区の遺構と遺物 (第104図, PL34)

III(H4)区とIII(H5)区は同一の筆であるので、一括して記述する。III区は花室川から入る谷津の奥に位置するが、今回の調査区はその中央やや南寄り、谷頭の東側にあたる。

III区では、竪穴住居跡4軒、土坑4基、溝8条、道路1条を調査した。

(1) 竪穴住居跡

第196号住居跡 (第92~96図, PL35・54)

位置 調査区の南端, E11b5区に位置する。平成元年度調査区との境界線上に位置し、南部は平成元年度に調査されている。中央南寄りに第42号溝が重複し、西側に第236号住居跡が隣接する。

規模と平面形 主軸長7.96m, 幅8.03mの方形である。

主軸方向 N-35°-W

壁 壁高60cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 竈部分を除いて、全周する。幅20~30cm, 深さ10~15cm, 断面は逆台形である。

床 平坦で、中央部分は踏み固められ、堅緻である。

ピット 5か所(P₁~P₅)。P₁~P₄は径70~80cm, 深さ53~70cmの円形ピットで、それぞれコーナーに近く、支柱穴と考えられる。P₅は径49cm, 深さ52cmの円形ピットで、南東壁中央寄りに位置し、入口ピットと考えられる。

竈 北西壁中央に、砂まじりの粘土で構築している。掘り方は幅80cm, 奥行き60cmで、平面凸字状の掘り込みである。両袖が残存し、またブリッジ状部分も崩落したままの状態で、掛け口や煙道がほぼ推定できる状況である。火床部は平坦である。煙道の立ち上がりは約70°と急である。

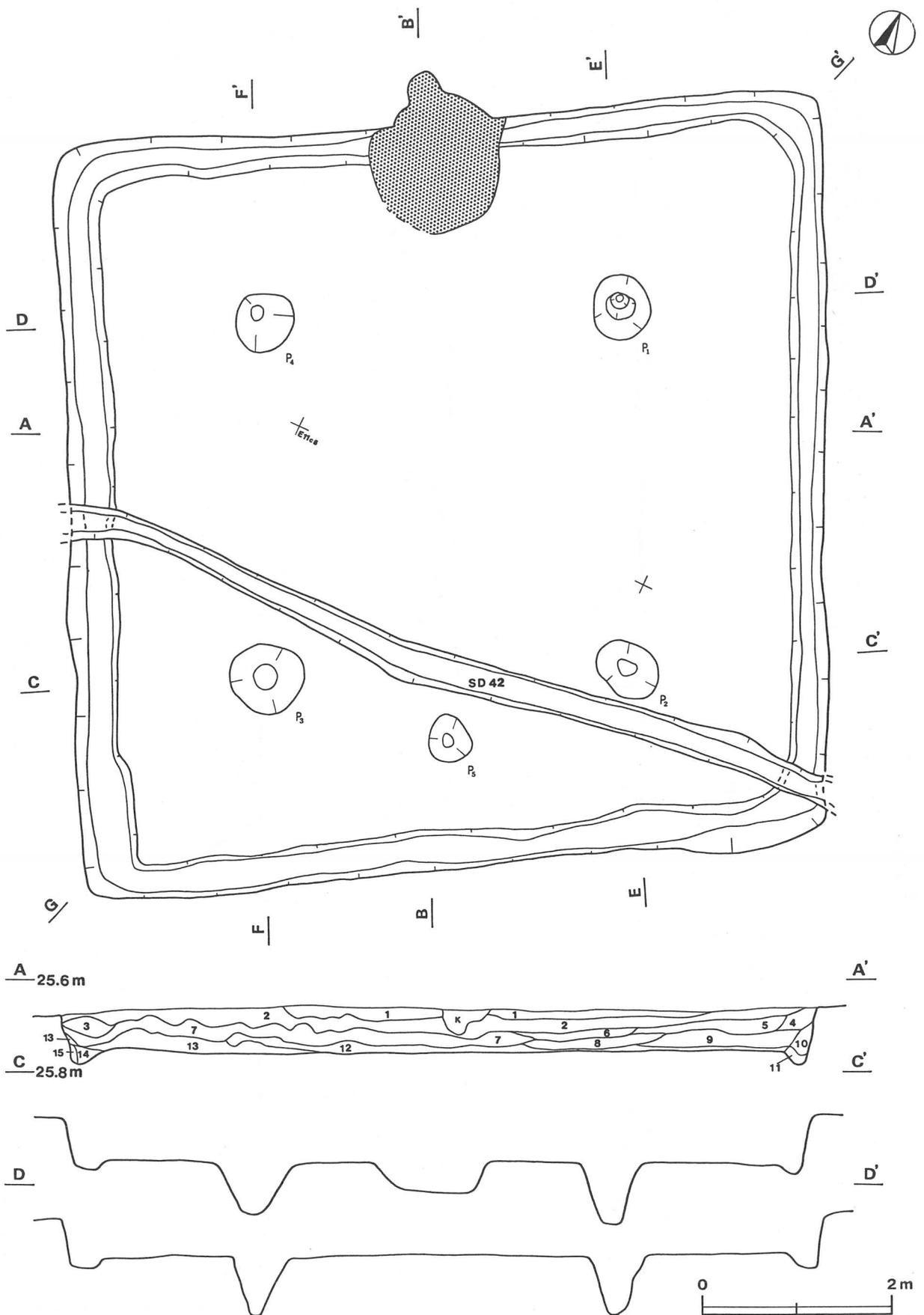
竈土層解説

1 褐色	粘土大ブロック多量・中ブロック少量・小ブロック少量・粒子少量	12 明赤褐色	焼土大ブロック・中ブロック・小ブロック・粒子多量
2 褐色	ローム小ブロック少量, 粘土大ブロック中量・中ブロック少量・小ブロック少量	13 明赤褐色	焼土大ブロック・中ブロック・小ブロック・粒子多量
3 におい黄褐色	ローム粒子多量, 粘土中ブロック少量・小ブロック少量・粒子中量	14 暗褐色	焼土粒子少量, 小礫微量
4 明黄褐色	ローム中ブロック少量・小ブロック中量, 粘土粒子微量	15 灰白色	竈材崩壊土, ローム粒子微量, 黄白色パミス微量
5 におい黄褐色	焼土粒子少量	16 褐色	焼土粒子中量, ローム粒子中量
6 におい黄褐色	ローム小ブロック少量・粒子中量, 粘土小ブロック・粒子少量, 礫少量	17 褐色	焼土粒子多量
7 明褐色	ローム粒子多量, 礫少量	18 におい黄褐色	焼土中ブロック少量, 炭化粒子少量, 小礫微量, 黄白色パミス微量
8 におい黄褐色	焼土粒子多量, ローム粒子中量	19 におい黄褐色	焼土粒子少量, ローム粒子中量, 小礫微量, 黄白色パミス微量
9 におい黄褐色	焼土粒子中量, ローム粒子中量	20 におい黄褐色	ローム粒子中量, 小礫微量
10 褐色	焼土粒子中量	21 明赤褐色	焼土大ブロック・中ブロック・小ブロック・粒子多量
11 明褐色	焼土粒子多量, ローム粒子多量	22 明赤褐色	焼土大ブロック・中ブロック・小ブロック・粒子多量
		23 におい黄褐色	焼土粒子中量, 炭化粒子中量
		24 におい黄褐色	焼土粒子多量, 小礫微量

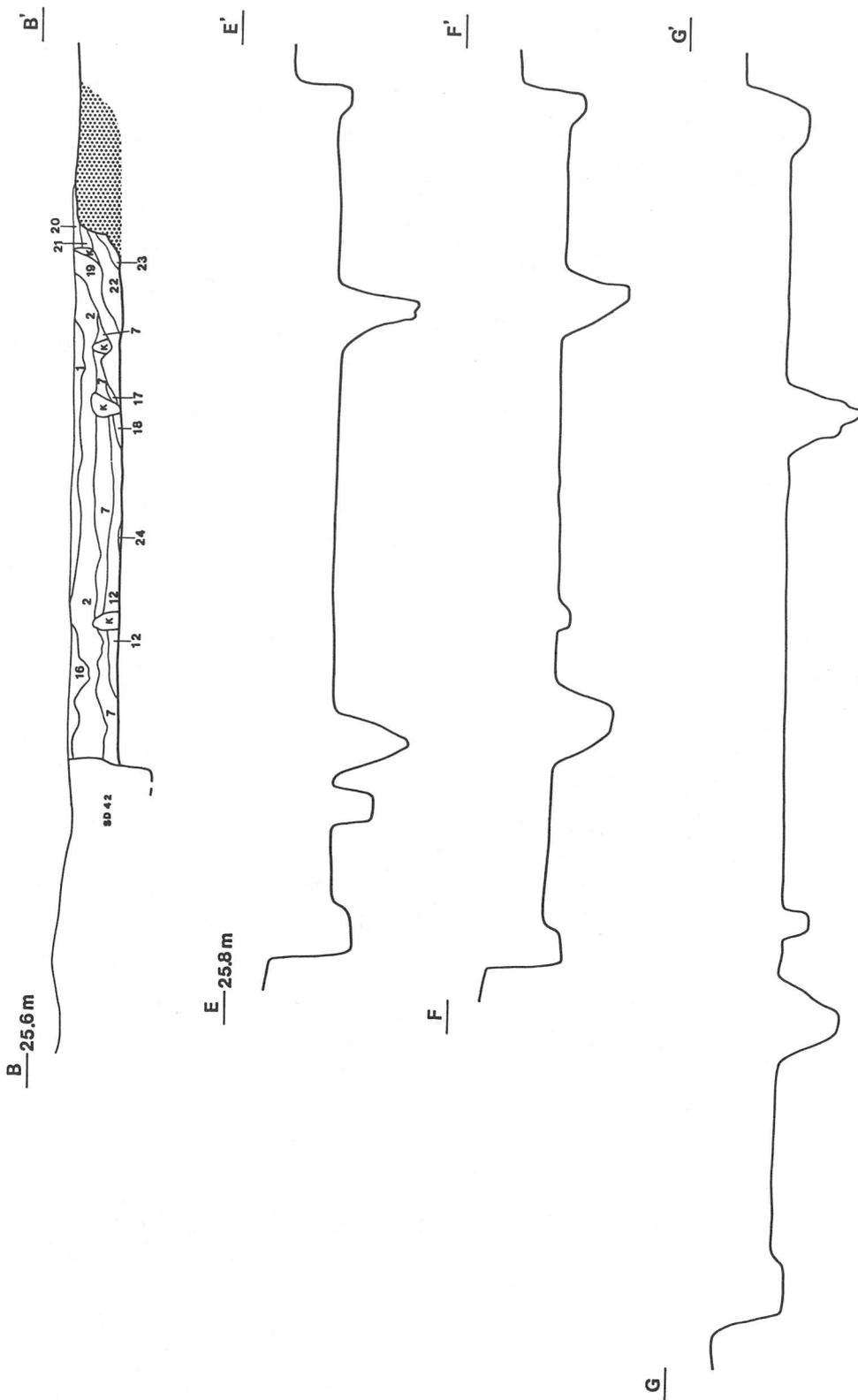
覆土 下層は自然堆積であるが、中・上層はロームブロックをかなり含み、人為的に埋め戻されたものと考えられる。なお、数か所で覆土下層に焼土のブロックが認められ、炭化材は認められなかったものの、焼失家屋の可能性はある。第42号溝に切られている。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子中量	13 褐色	ローム小ブロック少量・粒子中量
2 暗褐色	ローム中ブロック・小ブロック中量	14 明黄褐色	ローム中ブロック・小ブロック中量
3 褐色	ローム粒子多量	15 黄褐色	ローム中ブロック・小ブロック中量
4 暗褐色	ローム小ブロック・粒子中量	16 褐色	炭化物微量, ローム粒子少量
5 暗褐色	ローム粒子中量	17 褐色	炭化粒子微量, ローム粒子少量
6 暗赤褐色	焼土中ブロック微量・粒子中量, 炭化物少量・粒子中量	18 黄褐色	焼土粒子微量, ローム粒子多量
7 褐色	ローム中ブロック多量・小ブロック中量	19 黄褐色	焼土粒子微量, ローム粒子多量, 粘土粒子少量
8 極暗褐色	ローム中ブロック・小ブロック中量	20 黄褐色	焼土粒子微量, ローム粒子中量, 粘土粒子中量
9 褐色	ローム中ブロック・小ブロック・粒子中量	21 におい黄褐色	ローム粒子中量, 粘土粒子中量
10 褐色	ローム粒子多量	22 におい黄褐色	焼土粒子微量, ローム粒子中量, 粘土粒子中量
11 明黄褐色	ローム中ブロック・小ブロック中量	23 褐色	焼土粒子中量, 炭化粒子少量, 粘土小ブロック少量
12 におい赤褐色	ローム小ブロック中量・粒子多量	24 黄褐色	ローム粒子多量



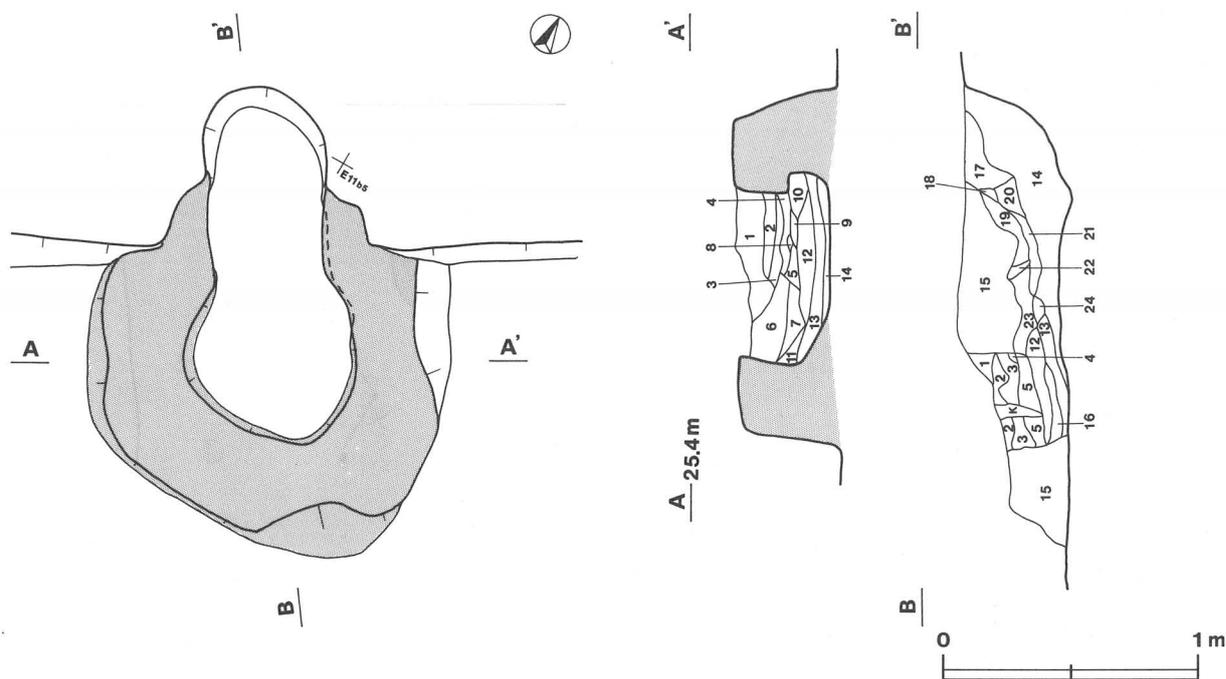
第92图 第196号住居跡実测图(1)



第93图 第196号住居跡実測图(2)

遺物 出土遺物は少ない。竈西側覆土下層で土師器坏(第96図3), 北コーナー付近床面直上で土師器甕(同8・9) がややまとまって出土している。

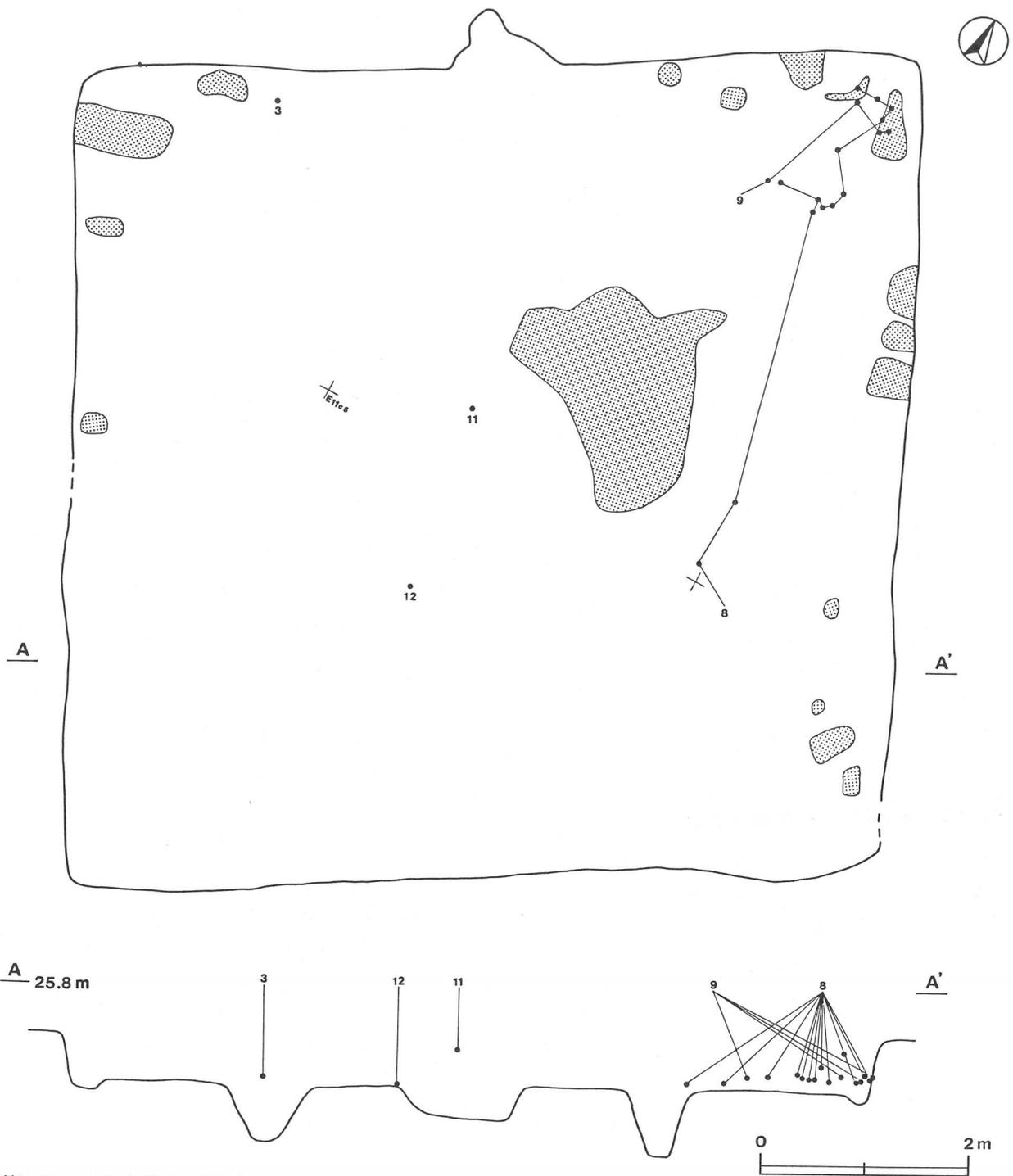
所見 本遺構は, 出土遺物から6世紀後半の住居跡と考えられる。



第94図 第196号住居跡竈実測図

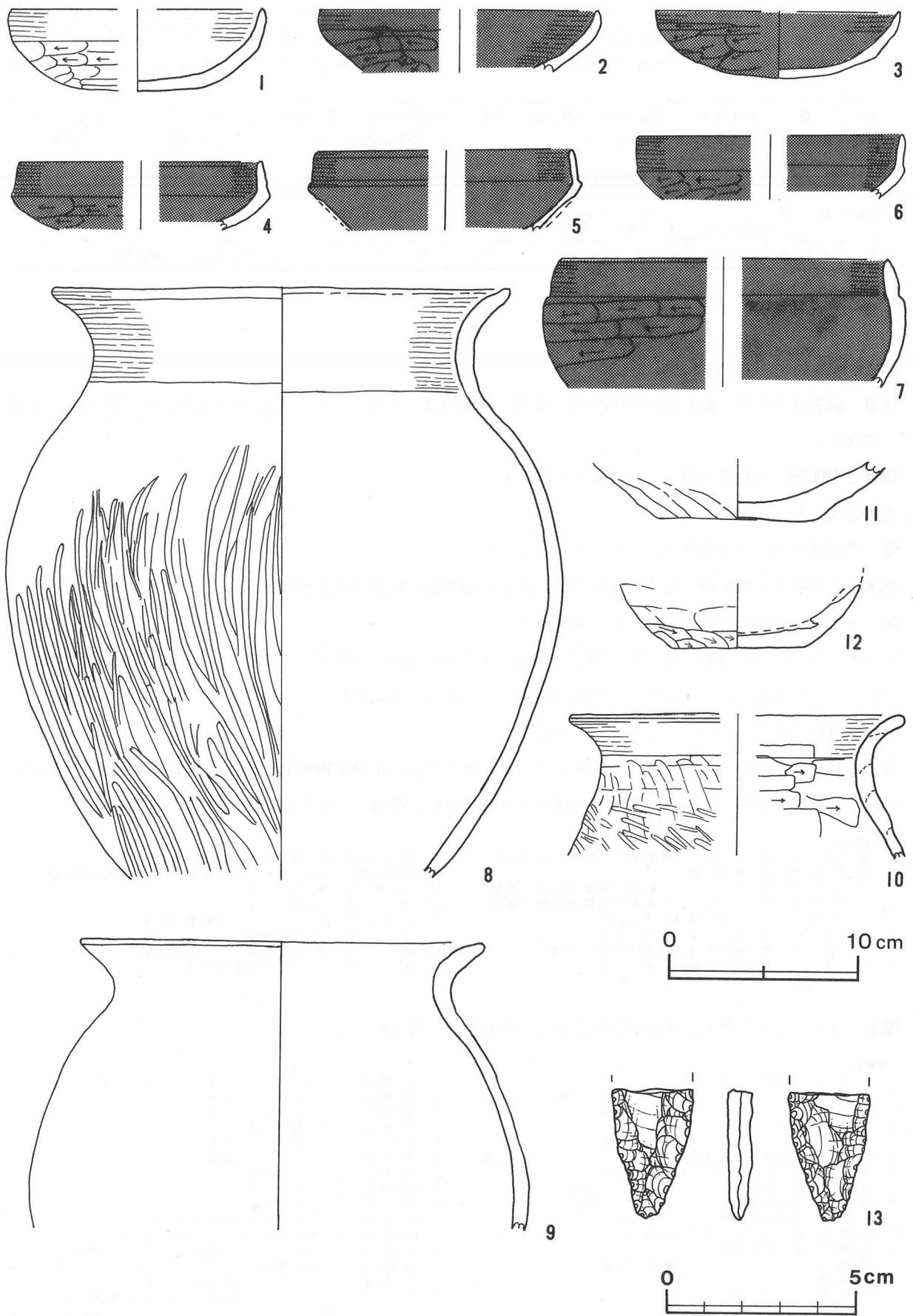
第196号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土, 色調, 焼成	備考
第96図 1	坏 土師器	A [13.4] B 4.5	丸底。体部は内彎して立ち上がる。体部と口縁部の間に鈍い稜を持つ。口縁部はやや外傾する。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面ヘラ削り。内面ナデ調整。	砂粒・スコリア 橙色 普通	PL54-3 P13 50% 覆土中
2	坏 土師器	A [14.9] B (3.3)	体部は内彎しながら立ち上がり, 口縁部は短く垂直に立ち上がる。	口縁部内・外面へ体部内面ヨコナデ。体部外面ヘラ削り。内・外面黒色処理。	砂粒・スコリア 褐灰色 普通	PL54-4 P14 20% 覆土中
3	坏 土師器	A [13.0] B 3.5	丸底。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は短くほぼ垂直に立ち上がる。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ調整。内・外面黒色処理。	砂粒・スコリア・ 雲母, 褐灰色 普通	P15 25% 西部覆土下層
4	坏 土師器	A [12.8] B (3.6)	体部は内彎して立ち上がり, 稜を持って口縁部へ移行する。口縁部は垂直に立ち上がる。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面ヘラ削り。体部内面ナデ調整。内・外面黒色処理。	砂粒・スコリア 黒褐色 普通	P16 10% 覆土中
5	坏 土師器	A [13.4] B (4.3)	体部は内彎して立ち上がり, 稜を持って口縁部へ移行する。口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面ヨコナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・スコリア 黒色 普通	P17 10% 覆土中
6	坏 土師器	A [14.0] B (3.4)	体部は内彎して立ち上がり, 稜を持って口縁部へ移行する。口縁部は垂直に立ち上がる。	口縁部内・外面へ体部内面ヨコナデ。体部外面ヘラ削り。内・外面黒色処理。	砂粒・スコリア 黒褐色 普通	P18 10% 覆土中
7	鉢 土師器	A [15.2] B (6.9)	体部は内彎して立ち上がり, 明瞭な稜を持って口縁部へ移行する。口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部内面ナデ調整。体部外面ヘラ削り。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・スコリア, 黒褐色 普通	PL54-5 P19 10% 覆土中



第95図 第196号住居跡出土遺物位置図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土,色調,焼成	備考
第96図 8	甕 土師器	A 24.3 B (31.5)	体部中位やや上寄りに最大径。頸部から口縁部にかけて丸みを持って外反。口唇部はわずかにつまみ上げ。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面中位以下斜位のヘラ磨き。体部内面ナデ調整。	砂粒・雲母・石英 灰褐色 普通	PL54-2 P20 60% 北隅床面直上
9	甕 土師器	A 21.4 B (15.3)	体部中位に最大径を持つ。頸部から口縁部にかけて丸みを持って外反する。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部内・外面ナデ調整。	砂粒・雲母・長石・ 石英,にぶい橙色 普通	PL54-1 P21 20% 北隅床面直上
10	甕 土師器	A (17.4) B (7.6)	頸部から口縁部にかけて丸みを持って外反する。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部外面ヘラ削り,のちヘラ磨き。体部内面ヘラナデ。	砂粒・スコリア・ 雲母,にぶい橙色 普通	PL54-6 P22 10% 覆土中



第96图 第196号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土、色調、焼成	備考
第96図 11	甕 土師器	B (3.2) C 7.8	平底。体部は内彎しながら大きく外傾して立ち上がる。	体部下位外面ヘラ削り。体部内面ナデ調整。底面粗い指ナデ。	砂粒・スコリア・石英・長石、にぶい橙色、普通	P24 10% 中央部覆土上層
12	甕 土師器	B (3.4) C 7.0	平底。体部は内彎しながら外傾して立ち上がる。	体部下位外面ヘラ削り。体部内面ナデ調整。底面ヘラ削り。	砂粒・スコリアにぶい橙色不良	P25 10% 中央部覆土下層

図版番号	器種	計測値				出土状況	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
13	尖頭器	(3.5)	2.2	0.7	(5.0)	覆土中	PL54-7, Q1, 硬質頁岩

第236号住居跡 (第97・98図, PL36・54)

位置 調査区の南部, E11c3区に位置する。南部に第42号溝が重複し, 北に第237号住居跡, 東に第196号住居跡が隣接する。

規模と平面形 主軸長・幅とも4.30mの方形である。

主軸方向 N-18°-W

壁 壁高60cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 北壁東半と東壁際に廻る。幅約20cm, 深さ6cm前後, 断面は逆台形である。

床 平坦で, 中央部は踏み固められ, 堅緻である。

ピット 5か所(P₁~P₅)。P₁~P₃は径27~33cm, 深さ18~24cmの円形ピットである。P₄は径45cm, 深さ24cmの円形ピットである。以上4か所が, 位置から見て, 主柱穴と考えられる。P₅は径29cm, 深さ30cmの円形ピットで, 位置から見て, 入口ピットと考えられる。

竈 北壁中央に, 砂まじりの粘土で構築している。掘り方は, 北壁を幅90cm, 奥行き33cmで, 平面三角形に掘り込む。両袖が残存している。火床部はほとんど凹まない。煙道の立ち上がりは, 約70°と急である。

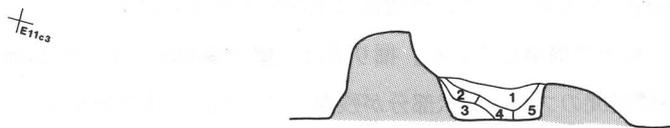
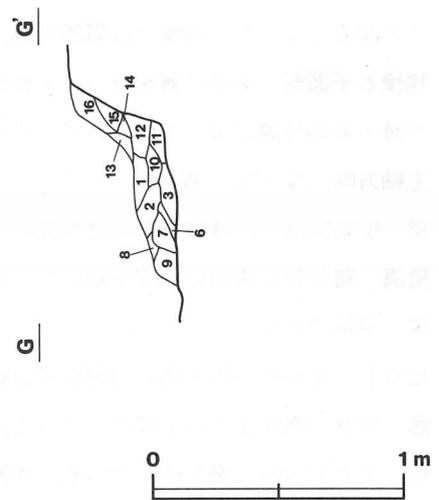
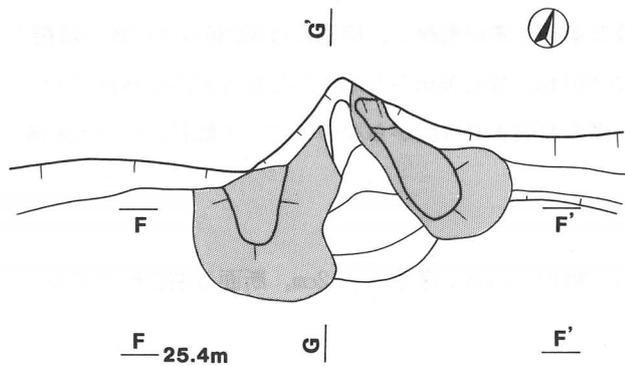
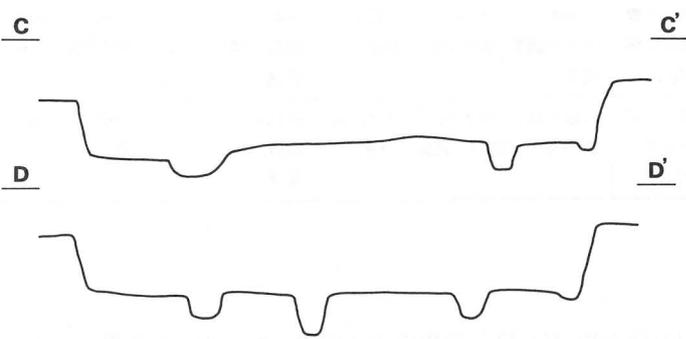
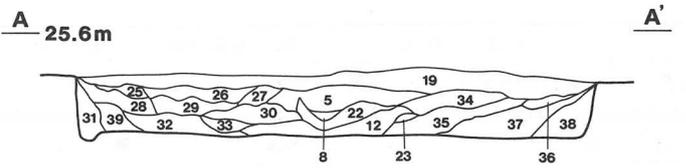
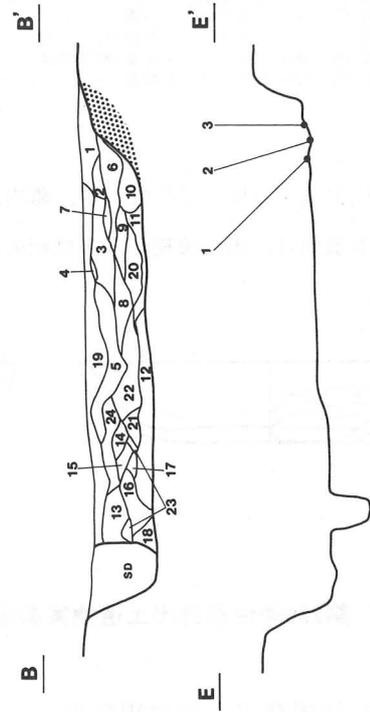
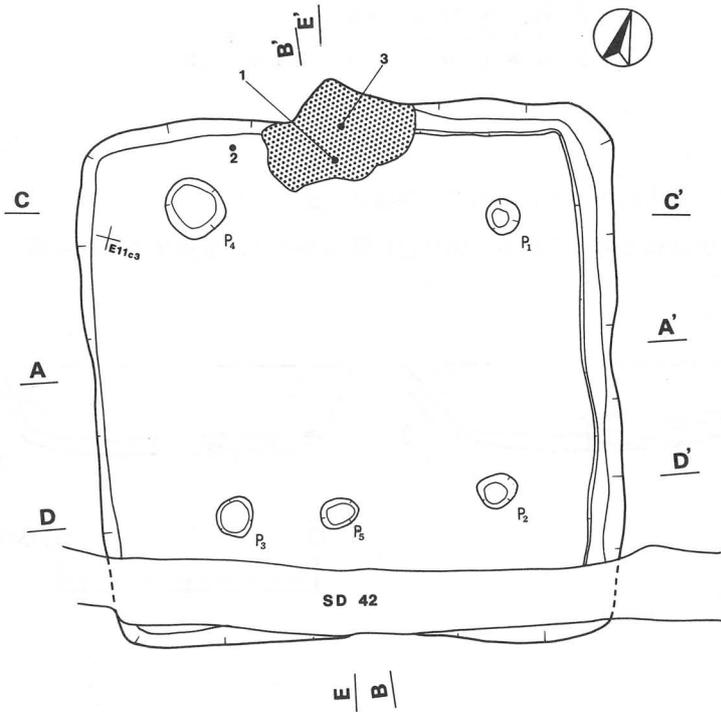
竈土層解説

1 暗褐色	焼土小ブロック微量・粒子少量, 粘土粒子微量	9 暗赤褐色	焼土粒子中量, 粘土粒子少量
2 暗赤褐色	焼土粒子中量	10 極暗赤褐色	焼土小ブロック中量・粒子多量, 炭化粒子少量
3 にぶい赤褐色	焼土小ブロック少量・粒子中量, 炭化粒子微量	11 暗褐色	焼土粒子少量
4 暗赤褐色	焼土小ブロック少量・粒子多量, 炭化粒子微量	12 褐色	焼土粒子少量
5 暗赤褐色	焼土粒子中量, 粘土粒子少量	13 暗赤褐色	焼土小ブロック少量・粒子中量
6 灰褐色	焼土粒子少量, 粘土粒子中量	14 黒褐色	焼土粒子微量
7 灰褐色	焼土粒子微量, 粘土粒子多量, 砂中量	15 褐色	焼土粒子少量, ローム粒子中量
8 暗褐色	焼土粒子少量, 粘土粒子少量	16 褐色	ローム粒子中量, 砂少量

覆土 ほとんどが人為的に埋め戻されている。第42号溝に切られている。

土層解説

1 暗褐色	粘土粒子微量	16 暗褐色	ローム中ブロック微量・小ブロック少量
2 褐色	ローム中ブロック中量・小ブロック少量・粒子中量	17 暗褐色	ローム小ブロック微量
3 暗褐色	ローム小ブロック少量, 粘土微量	18 暗褐色	ローム中ブロック少量
4 灰褐色	竈材ブロック	19 暗褐色	ローム粒子少量
5 褐色	ローム中ブロック少量・粒子中量	20 暗褐色	ローム中ブロック少量
6 暗褐色	焼土粒子微量, 炭化粒子微量, ローム小ブロック少量	21 黒褐色	ローム小ブロック微量
7 褐色	ローム小ブロック微量・粒子中量	22 暗褐色	小ブロック微量
8 暗褐色	炭化粒子微量, ローム小ブロック微量	23 黄褐色	ロームブロック
9 暗褐色	焼土粒子微量, ローム小ブロック微量	24 褐色	ローム粒子中量
10 灰褐色	竈材崩壊土層, ローム粒子少量	25 暗褐色	ローム小ブロック微量・粒子少量
11 暗褐色	焼土小ブロック・粒子微量, ローム小ブロック少量	26 暗褐色	炭化粒子微量, ローム小ブロック少量
12 暗褐色	粘土粒子微量	27 暗褐色	ローム小ブロック少量, 粘土小ブロック微量
13 暗褐色	ローム小ブロック少量・粒子中量	28 暗褐色	炭化粒子微量, ローム中ブロック・小ブロック・粒子少量
14 暗褐色	ローム小ブロック少量	29 暗褐色	ローム小ブロック微量・粒子少量
15 暗褐色	ローム小ブロック少量	30 黒褐色	ローム中ブロック微量・小ブロック少量, 粘土小ブロック微量



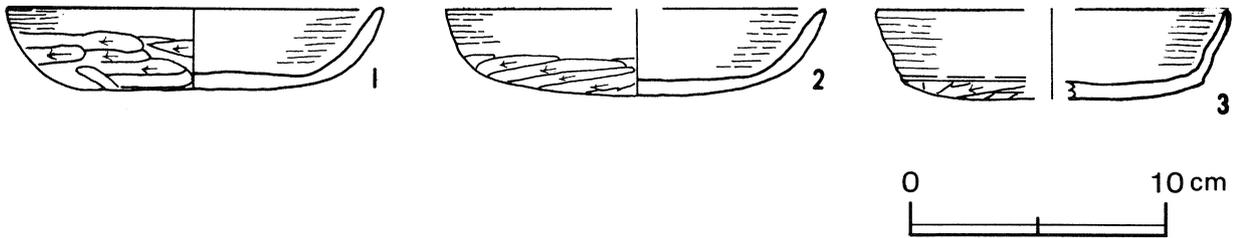
第97図 第236号住居跡・竈実測図

31 暗褐色 炭化粒子微量,ローム小ブロック少量
 32 暗褐色 ローム小ブロック少量
 33 黒褐色 ローム小ブロック微量・粒子少量
 34 黒褐色 ローム小ブロック少量・粒子微量
 35 暗褐色 ローム中ブロック微量・小ブロック少量

36 暗褐色 ローム小ブロック・粒子少量
 37 褐色 炭化粒子微量,ローム小ブロック少量・粒子中量
 38 暗褐色 ローム小ブロック・粒子少量
 39 暗褐色 ローム小ブロック微量・粒子少量

遺物 出土遺物は極めて少ないが、竈内、及び竈周辺からまとめて土師器坏が出土した。

所見 本遺構は、出土遺物から8世紀前葉の住居跡と考えられる。切り合い関係からは、重複する第42号溝が新しい。



第98図 第236号住居跡出土遺物実測図

第236号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土,色調,焼成	備考
第98図 1	坏 土師器	A 14.8 B 3.3	平底気味の丸底。体部は内彎しながら立ち上がり,口縁部に移行する。体部~口縁部に稜なし。	口縁部内・外面ヨコナデ。底部内面ナデ調整。体部外面~底面ヘラ削り。	砂粒・スコリア 橙色 普通	PL54-8 P65 60% 竈内
2	坏 土師器	A [14.8] B 3.4	やや平底気味の丸底。体部は内彎しながら立ち上がり,口縁部に移行する。体部~口縁部に稜なし。	口縁部内・外面ヨコナデ。底部内面ナデ調整。体部外面~底面ヘラ削り。	砂粒・スコリア・ 雲母, 橙色 普通	P66 60% 竈西側覆土中層
3	坏 土師器	A [13.8] B 3.5	平底に近い丸底。体部は底部との間に稜を持ち,外傾して立ち上がる。口縁部は内彎気味に立ち上がる。	口縁~体部内・外面ヨコナデ。底部内面ナデ調整。底面ヘラ削り。	砂粒・スコリア・ 雲母, 橙色 普通	P67 30% 竈内

第237号住居跡 (第99・100図, PL37・54・55)

位置 調査区の南部, D11j2区に位置する。III(H4)区とIII(H5)区の境界線上に位置したため、2年度にわたっての調査となった。西側には第39号溝, 及び第40号溝が重複し, 南側には第236号住居跡が隣接する。

規模と平面形 東壁に竈を持つ, 主軸長(3.90)m, 幅4.95mの方形ないし長方形の住居跡である。西側は第39号溝・第40号溝によって切られているが, 溝の西側までは広がらないので, 主軸長は4.70m未満である。

主軸方向 N-72°-W

壁 壁高34cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 竈部分と南側の一部を除いて, 廻る。幅10~15cm, 深さ8~12cm, 断面は逆台形である。

床 平坦である。

ピット 2か所(P₁・P₂)。径50~55cm, 深さ57cm程の円形ピットで, 位置的に支柱穴と考えられる。

竈 東壁の南側3分の1程のところに, 砂まじりの粘土で構築している。掘り方は, 壁に幅40cm, 奥行き25cm程, 平面半円形に掘り込んでいる。両袖と掛け口・煙道間のブリッジ状部分が残存している。火床部は平坦で, 全く凹みを持たない。火床の焚き口付近が焼けて赤変・硬化している。煙道の立ち上がりは, 約60°とかなり急である。

竈土層解説

1 褐色	焼土粒子少量,炭化粒子微量,粘土粒子微量	6 暗赤褐色	焼土粒子少量,ローム小ブロック中量
2 暗褐色	焼土粒子少量,炭化粒子少量	7 暗赤褐色	焼土中ブロック中量・粒子多量,炭化粒子少量,粘土小ブロック微量
3 暗褐色	焼土粒子少量,炭化粒子少量,粘土小ブロック多量	8 暗褐色	焼土粒子少量,炭化粒子少量
4 暗赤褐色	焼土小ブロック少量・粒子多量,炭化粒子中量	9 暗赤褐色	焼土粒子中量,炭化物・粒子少量
5 暗赤褐色	焼土中ブロック・粒子多量,炭化粒子少量		

覆土 自然堆積である。第39号溝に切られている。

土層解説

1 暗褐色	ローム中ブロック微量	4 暗赤褐色	焼土粒子中量
2 褐色	ローム中ブロック中量	5 暗赤褐色	焼土粒子少量,粘土小ブロック少量
3 暗赤褐色	粘土小ブロック・粒子少量	6 褐色	ローム粒子多量

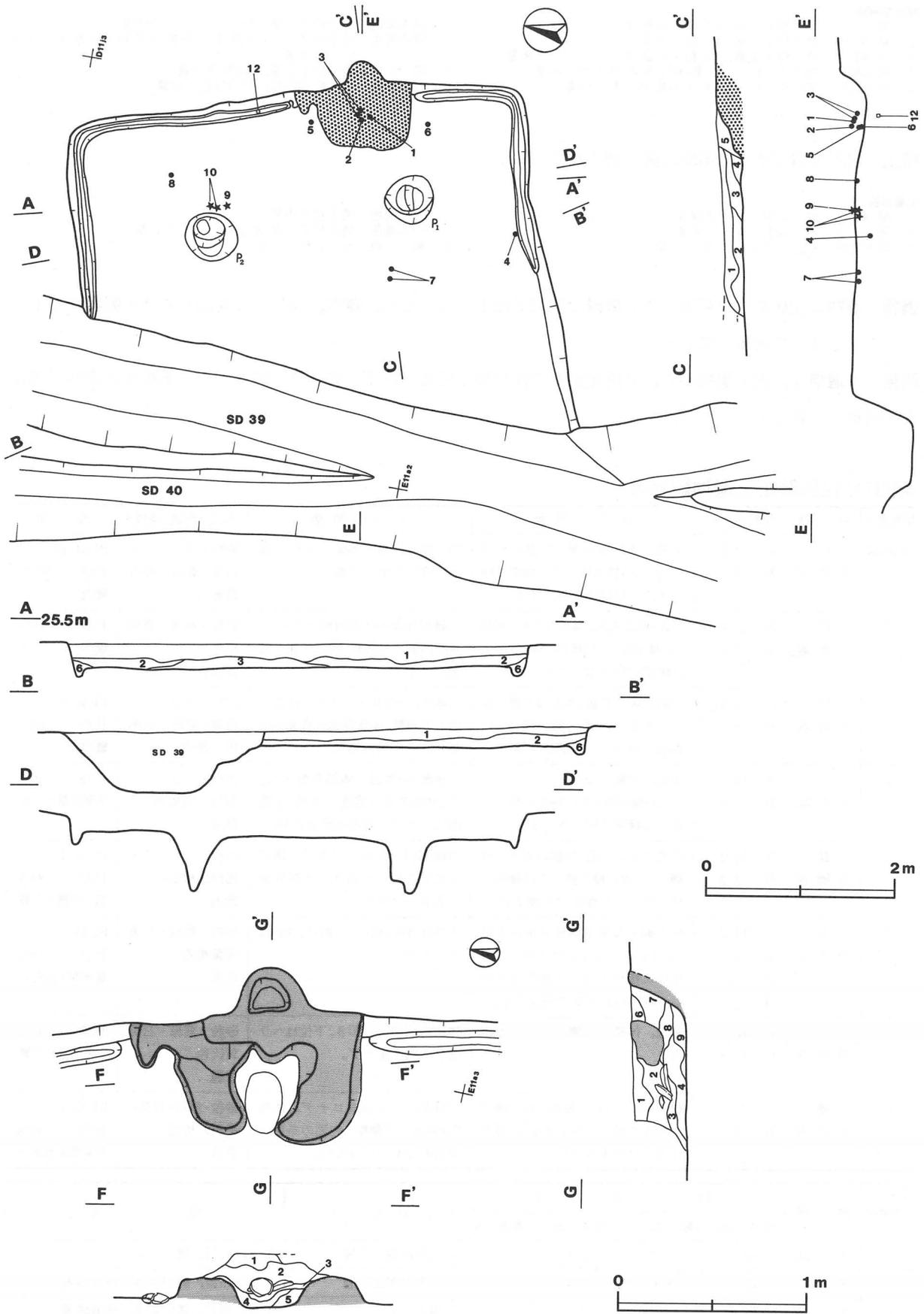
遺物 遺物は住居跡中央部等からも散漫な状況で出土しているが、竈内、及びその周辺からは土師器坏を中心としてまとまって出土している。

所見 本遺構は、出土遺物から、8世紀前葉の住居跡と考えられる。切り合い関係から、重複する第39号溝は本住居跡より新しい。

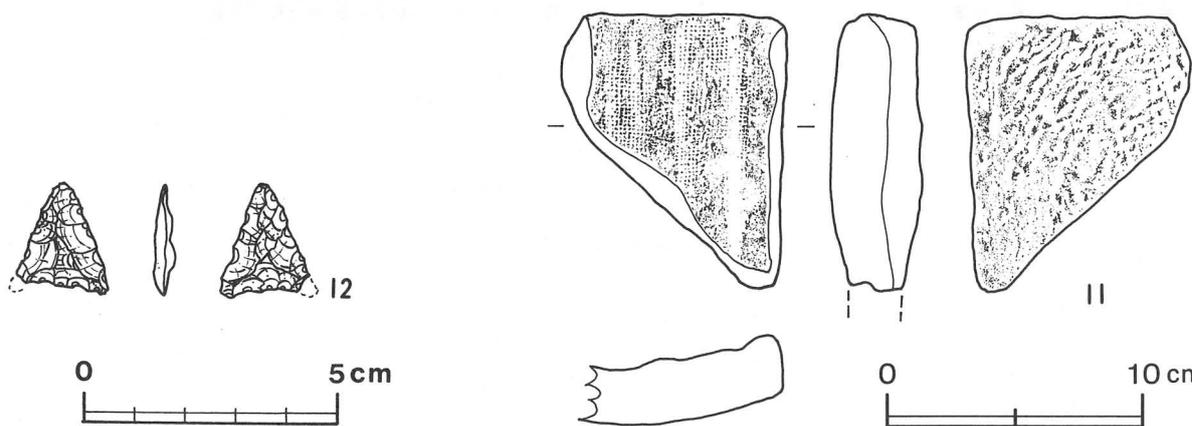
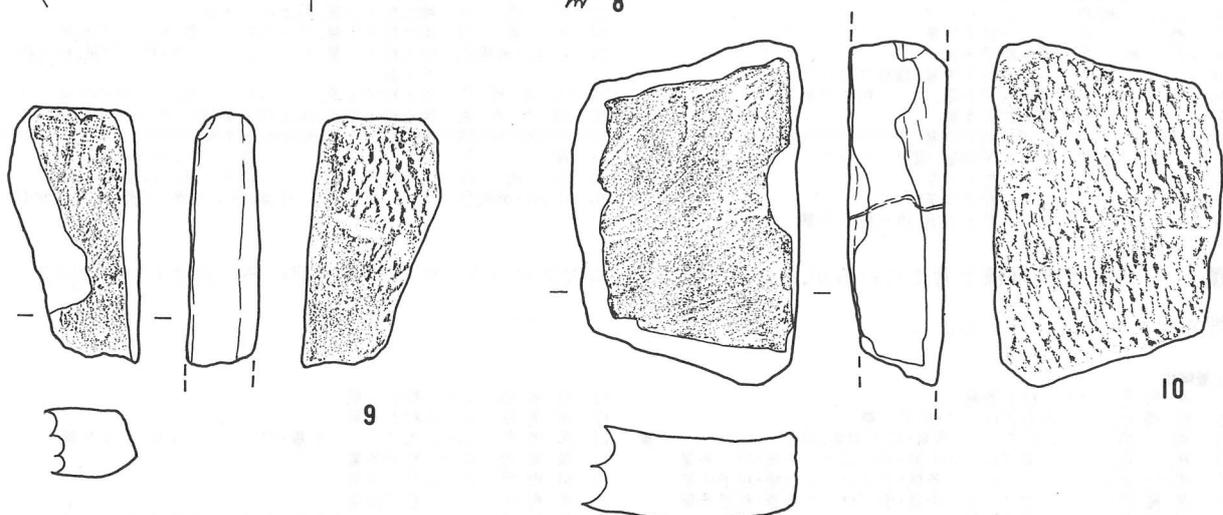
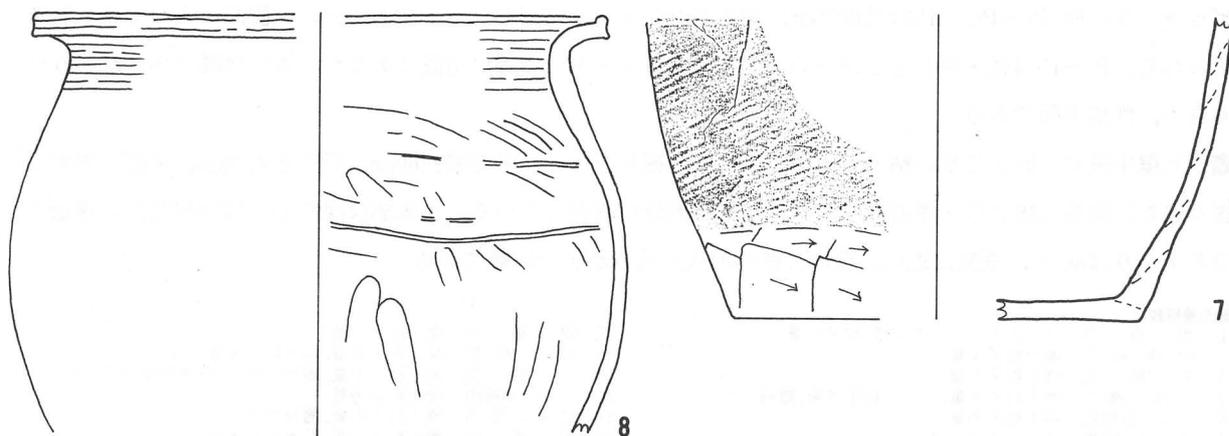
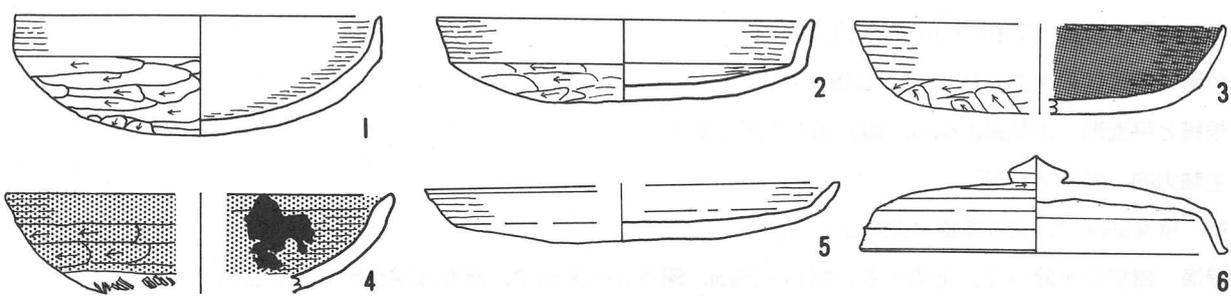
第237号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土,色調,焼成	備考
第100図 1	坏 土師器	A 14.2	丸底。体部は内彎して立ち上がり,にぶい稜を持って口縁部に移行する。口縁部は直立する。	内全面～口縁部外面ヨコナデ。体部～底部外面ヘラ削り。	砂粒・スコリア・石英・雲母, 橙色普通	PL54-10 P 68 100% 竈内
		B 4.8				
2	坏 土師器	A 14.8	平底気味の丸底。体部は大きく外傾し,稜を持って口縁部に移行する。口縁部はやや外反して立ち上がる。	口縁部外面～体部内面ヨコナデ。底部内面ナデ調整。体部外面～底面ヘラ削り。	砂粒・石英・雲母 橙色普通	P 69 70% 竈内
		B 3.2				
3	坏 土師器	A [14.6]	平底気味の丸底。体部は内彎しながら大きく外傾し,稜を持って口縁部に移行。口縁部は外傾。	口縁部内・外面ヨコナデ。底部内面ナデ調整。体部外面～底面ヘラ削り。内面黒色処理。	砂粒・スコリア・石英・雲母, 赤黒色, 普通	PL54-9 P 70 60% 竈内
		B (3.6)				
4	坏 土師器	A [15.0]	体部は内彎しながら立ち上がり,にぶい稜を持って口縁部に移行する。口縁部は短く外反する。	口縁部内・外面～体部内面ヨコナデ。体部外面～底面ヘラ削り。底面にハケ目。底面を除き赤彩。	砂粒・スコリア・雲母, 明褐色普通	P 71 20% 南東部覆土下層
		B (3.6)				
5	皿 土師器	A [16.2]	平底に近い丸底。体部は大きく外傾し,にぶい稜を持って口縁部に移行する。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部～底部内面ヘラ磨き。体部外面～底面ヘラ削り。	砂粒・スコリア・雲母, 橙色普通	PL54-11 P 72 80% 竈北側覆土下層
		B 2.2				
6	蓋 須恵器	A 14.3	やや扁平な擬宝珠形つまみを持つ。体部からにぶい稜を持って口縁部に移行する。口縁部は外傾し,端部はわずかに外反する。	天井部外面回転ヘラ削り。ほかはヨコナデ。	砂粒・雲母・石英 灰黄褐色普通	PL55-2 P 74 70% 竈南側床面直上
		B 3.8				
		F 2.3				
		G 1.1				
7	鉢 須恵器	B (12.1)	平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面中位は叩き,下位はヘラ削り。内面指ナデ。	砂粒・雲母・石英 黄灰色普通	P 77 15% 中央部覆土下層
		C [15.8]				
8	甕 土師器	A [22.4]	緩やかにくびれた頸部から口縁部が丸みを持って外反する。口唇部は上方につまみ上げ。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部内・外面ナデ調整。内面の条線は意図的なものではない。	砂粒・雲母・石英・長石, 橙色普通	PL55-1 P 75 10% 北東部床面直上
		B (16.5)				

図版番号	器種	計測値				出土状況	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
9	平瓦	(10.0)	(5.4)	2.7	—	北東部覆土下層	T 3, 布目, 縄目叩き
10	平瓦	(13.7)	(9.0)	3.4	—	北東部覆土下層	T 1, 布目, 縄目叩き, 桶痕顕著
11	平瓦	(10.9)	(8.8)	2.5	—	覆土中	T 2, 布目, 縄目叩き, 桶痕顕著
12	石鏃	2.3	(1.8)	0.4	(1.0)	東側壁溝内	PL55-3, Q 2, 黒耀石



第99图 第237号住居跡・竈実測図



第100图 第237号住居跡出土遺物実測図

第264号住居跡 (第101・102図, PL38)

位置 調査区の南部, D11j4区に位置する。

規模と平面形 主軸長3.64m, 幅3.40の方形である。

主軸方向 N-1°-W

壁 壁高55cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 竈部分を除いて, 全周する。幅15~25cm, 深さ3~8cmで, 断面は逆台形ないし皿状である。

床 平坦で, 中央部は踏み固められ, 堅緻である。

ピット 5か所(P1~P5)。P5は長径15cm, 深さ20cmの小さい楕円形ピットであるが, 位置的に入口ピットと考えられる。P1~P4は径・深さとも10~15cm程度で, 各コーナーに近い位置にあるが, 本住居跡に伴うかどうかも含め, 性格不明である。

竈 北壁中央に, 砂まじりの粘土で構築している。掘り方は, 北壁を幅約60cm, 奥行き約30cm, 平面三角形に掘り込む。両袖と掛け口・煙道間のブリッジ状部分が残存している。火床部は緩やかに10cm程凹む。煙道の立ち上がりは80°と, 垂直に近い。全体に壁への入り込みが少ない竈である。

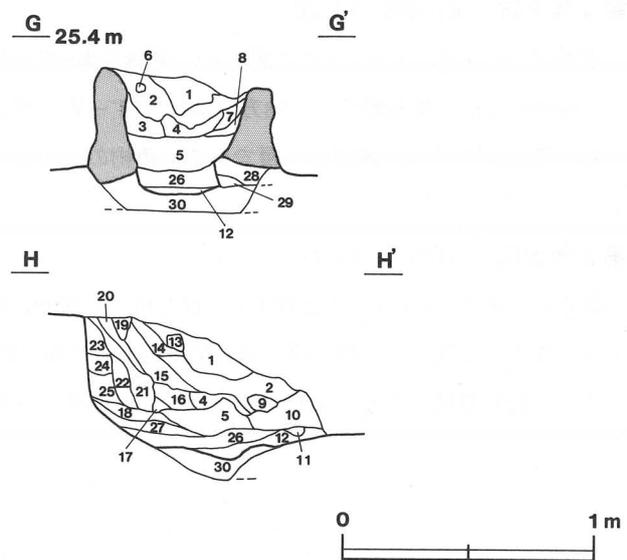
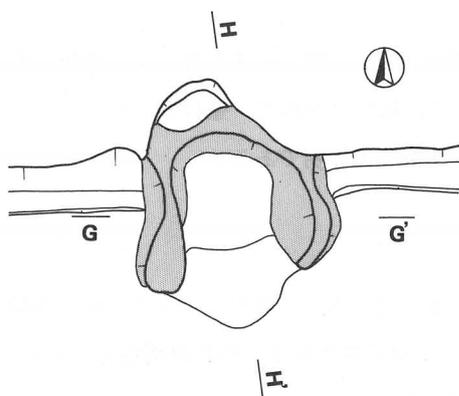
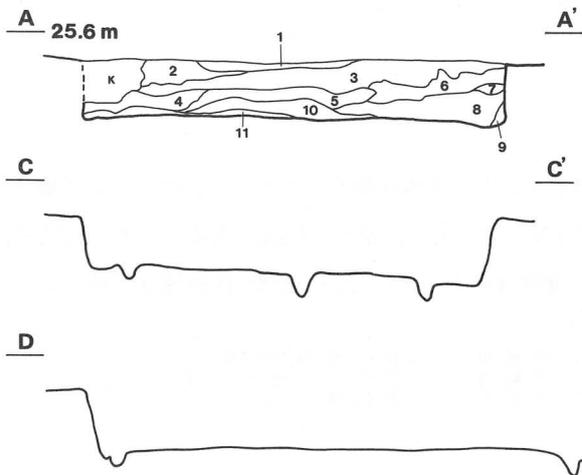
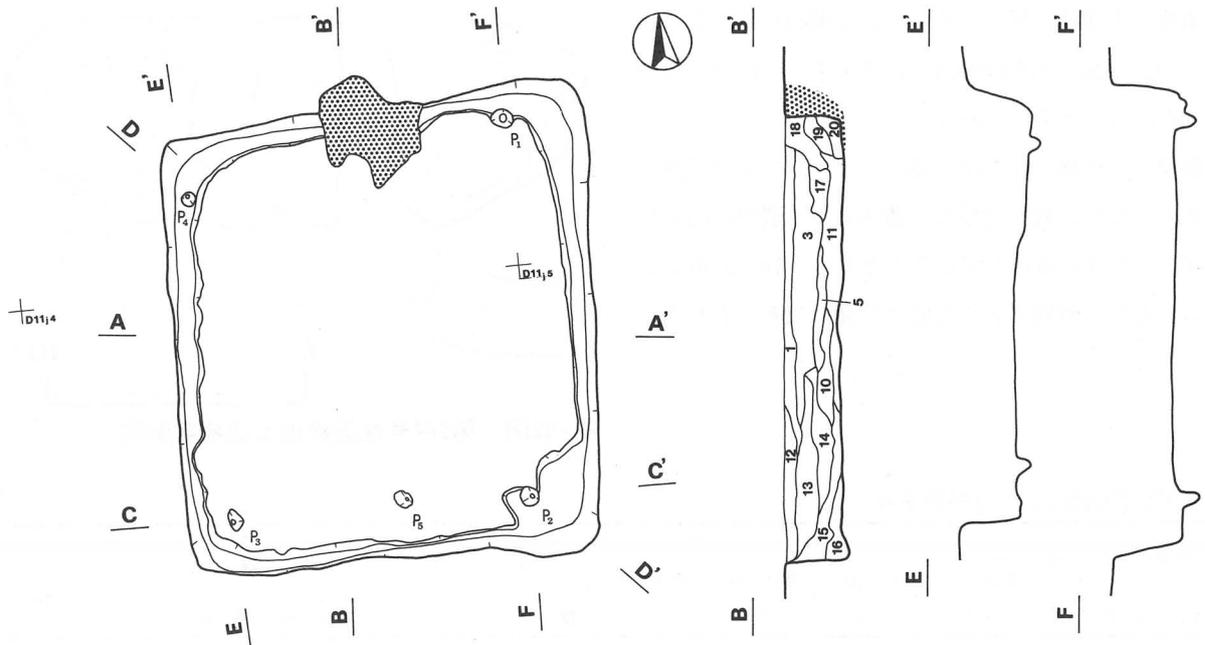
竈土層解説

1 黒褐色	ローム大ブロック中量・粒子少量	17 暗褐色	焼土粒子中量
2 暗赤褐色	焼土粒子少量	18 暗赤褐色	焼土粒子多量, 粘土粒子多量
3 赤褐色	焼土粒子中量	19 灰褐色	焼土粒子中量, 竈材 (掛け口・煙道間のブリッジ)
4 にぶい褐色	焼土粒子少量, ローム粒子多量, 竈材ブロック	20 にぶい赤褐色	焼土粒子多量
5 にぶい赤褐色	焼土粒子多量	21 にぶい橙色	焼土粒子中量, 竈材ブロック
6 にぶい褐色	ロームブロック	22 灰褐色	焼土粒子少量, 粘土粒子多量
7 褐色	ローム粒子少量	23 灰褐色	焼土粒子少量, ローム粒子少量, 粘土粒子多量
8 赤褐色	焼土粒子多量	24 にぶい黄褐色	焼土粒子少量, ローム小ブロック・粒子中量, 粘土粒子中量
9 にぶい褐色	ローム粒子中量, 竈材ブロック	25 灰黄褐色	焼土粒子少量, ローム粒子中量, 粘土粒子中量
10 暗赤褐色	焼土粒子中量, ローム粒子中量	26 暗赤褐色	焼土粒子中量, 炭化物中量, 粘土粒子少量
11 赤褐色	焼土粒子多量	27 灰黄褐色	焼土粒子少量, 粘土粒子多量
12 暗褐色	ローム粒子少量	28 褐色	粘土粒子少量, ローム粒子中量, 袖の基盤
13 にぶい褐色	粘土粒子中量, 竈材ブロック	29 暗褐色	炭化粒子少量, ローム粒子少量, 袖の基盤
14 褐色	ローム粒子少量	30 にぶい黄褐色	ローム中ブロック中量, 床形成層, 下層はローム地山
15 暗褐色	ローム粒子少量		
16 褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子少量		

覆土 下層は自然堆積と考えられるが, 中・上層はローム大ブロック・中ブロック等が多く含まれ, 人為的に埋め戻されたようである。

土層解説

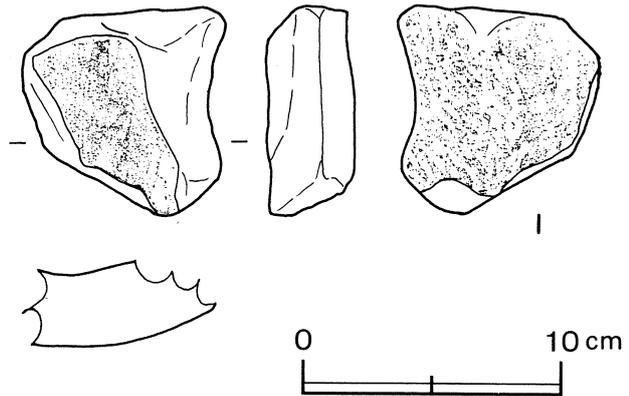
1 灰褐色	ローム粒子多量	11 暗褐色	ローム粒子少量
2 暗褐色	ローム小ブロック・粒子少量	12 黄褐色	ローム粒子多量
3 褐色	ローム小ブロック多量・粒子中量, 黒色土大ブロック少量	13 黄褐色	ローム大ブロック少量・中ブロック少量・粒子多量
4 褐色	ローム中ブロック中量・小ブロック中量・粒子多量	14 黄褐色	ローム粒子多量
5 褐色	ローム大ブロック多量・小ブロック少量・粒子中量	15 暗褐色	ローム粒子中量
6 黄褐色	ローム中ブロック中量・小ブロック多量・粒子多量	16 黒褐色	ローム粒子微量
7 黒褐色	ローム粒子少量	17 暗褐色	ローム大ブロック少量・中ブロック微量・粒子中量
8 黄褐色	ローム中ブロック中量・小ブロック少量・粒子中量	18 灰白色	粘土粒子多量, 竈材崩壊土
9 明黄褐色	ローム粒子のみ	19 明褐色	ローム粒子多量, 粘土粒子少量
10 褐色	ローム粒子中量	20 褐色	ローム粒子中量, 粘土粒子微量



第101图 第264号住居跡・竈実測図

遺物 本遺構に伴うと考えられる遺物は出土していない。平瓦片(第102図1)が覆土中から出土しているが、混入と考えられる。

所見 本遺構に伴う出土遺物がなく、時期は不明である。ただ、竈を付設し、遺構に伴う遺物が出土せず、平瓦片が混入していることから、10~11世紀を中心とした時期である可能性が高いと考えられる。



第102図 第264号住居跡出土遺物実測図

第264号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値				出土状況	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第102図1	平瓦	(8.2)	(7.8)	2.9	—	覆土中	T 5, 布目, 縄目叩き

(2) 土坑

第1号土坑 (第103図)

調査区の南西部, E10b9区に位置する。南西側がカットされており, 全体は捉えられないが, 現状では長軸(1.85) m, 短軸1.35mの隅丸長方形と考えられる。主軸方向はN-50°-Eで, 深さは47cmである。底面は皿状で, 壁は緩やかに立ち上がる。覆土は自然堆積と考えられる。遺物は出土していない。時期・性格等は不明である。

土層説明

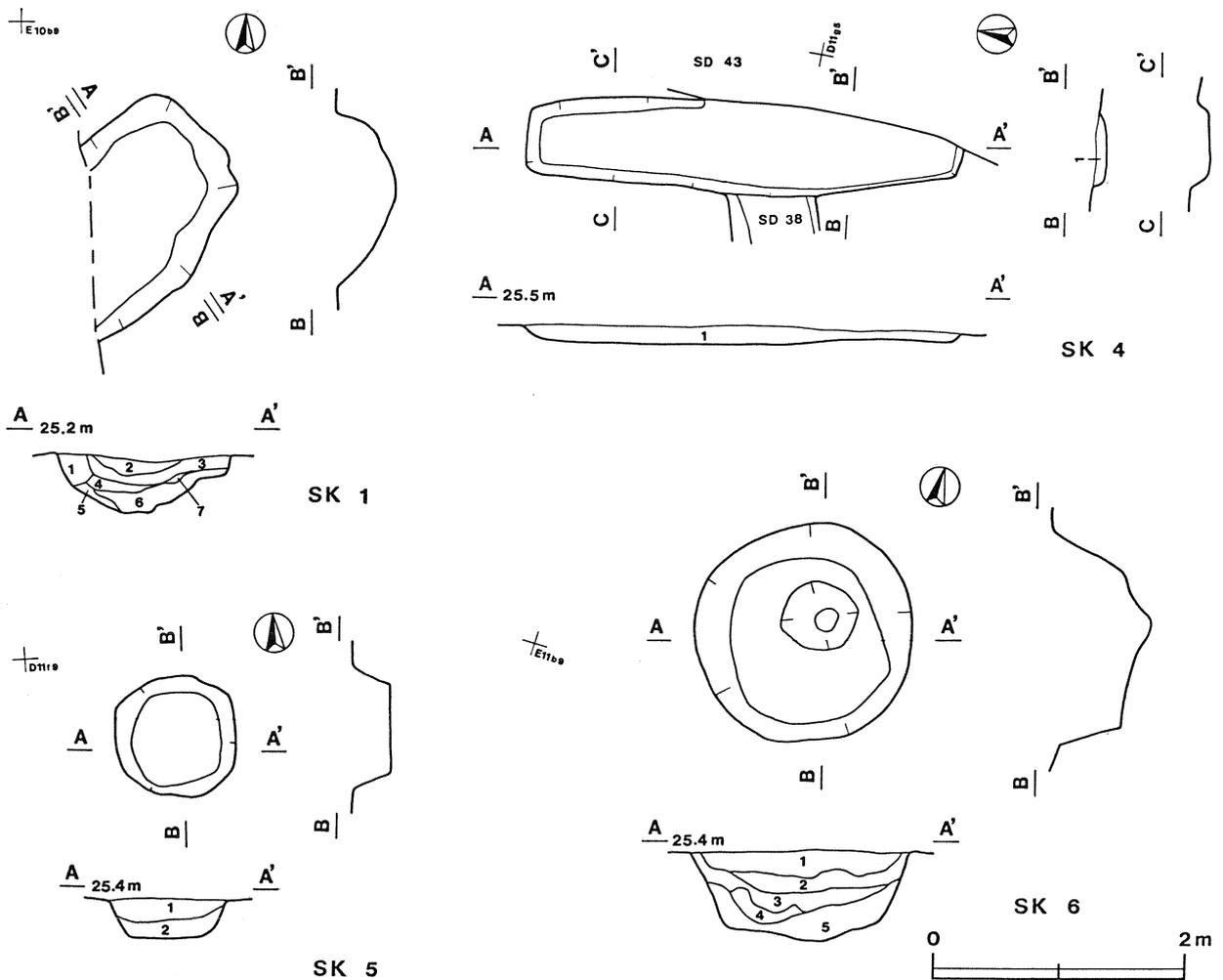
- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|-----------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子少量, 黒色土多量 |
| 2 暗褐色 | 炭化粒子微量, ローム粒子少量 | 6 暗褐色 | ローム小ブロック少量・粒子中量 |
| 3 暗褐色 | ローム大ブロック微量, 粒子少量 | 7 黒褐色 | ローム粒子少量 |
| 4 暗褐色 | ローム大ブロック微量, 粒子少量, 黒色土中量 | | |

第4号土坑 (第103図, PL39)

調査区の中央部, D11f5区に位置する。第38号溝・第43号溝の交差部分を切って掘り込まれている。長軸3.43 m, 短軸0.70mの長方形で, 主軸方向はN-12°-W, 深さは18cmである。底面は平坦で, 壁は緩やかに立ち上がる。覆土は1層で, 黒褐色土層である。遺物の出土はなく, 時期・性格等は不明である。

第5号土坑 (第103図, PL39)

調査区の東端, D11f9区に位置する。径1.00~1.05m, 深さ30cmの円形土坑である。底面は平坦で, 壁は外傾する。覆土は2層で, 上層(第1層)が黒色土, 下層(第2層)がローム粒子をやや多く含む黒褐色土である。いずれも自然堆積である。遺物の出土はなく, 時期・性格等は不明である。



第103図 第1・4・5・6号土坑実測図

第6号土坑 (第103図, PL39)

調査区の南東部, E11a9区に位置する。径1.73~1.83m, 深さ77cmの円形土坑である。底面は中央やや北東寄りが凹み, 壁は外傾する。覆土は自然堆積である。遺物の出土はなく, 時期・性格等は不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック微量・粒子少量
- 2 極暗褐色 焼土粒子多量, ローム小ブロック微量・粒子少量
- 3 黒色 焼土粒子微量, ローム小ブロック微量・粒子少量
- 4 黒褐色 焼土粒子少量, ローム大ブロック微量・小ブロック微量・粒子少量
- 5 黒色 焼土粒子微量, ローム粒子微量

(3) 溝

III区では, 平成4・5年度で都合8条の溝を調査した。

土層断面図は, 遺構の断面形状を併せて示す図を中心に掲載し, 遺構重複部分の土層断面図は繁雑さを避けるため割愛する。新旧関係は本文中で記述する。

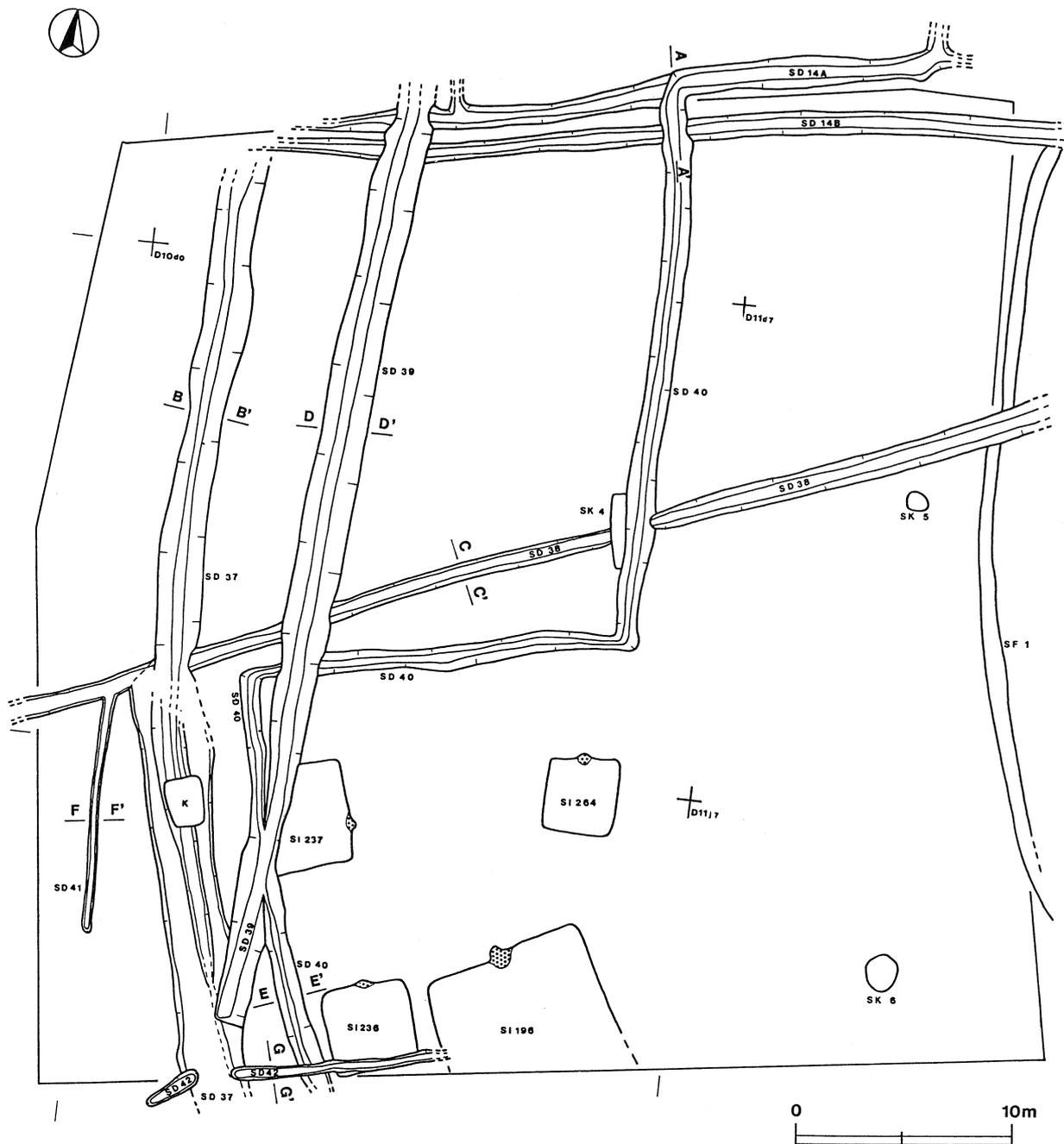
第14A・B号溝 (第104・105図)

調査区の北端を2条の溝が, ほぼ平行して, 東西に走る。北側を第14A号溝 (D11b1~C11j9区), 南側を第14B号溝 (D11b1~D11a0区) とした。平成元年度に調査された第14号溝に連結すると思われたものの, 2条のうち

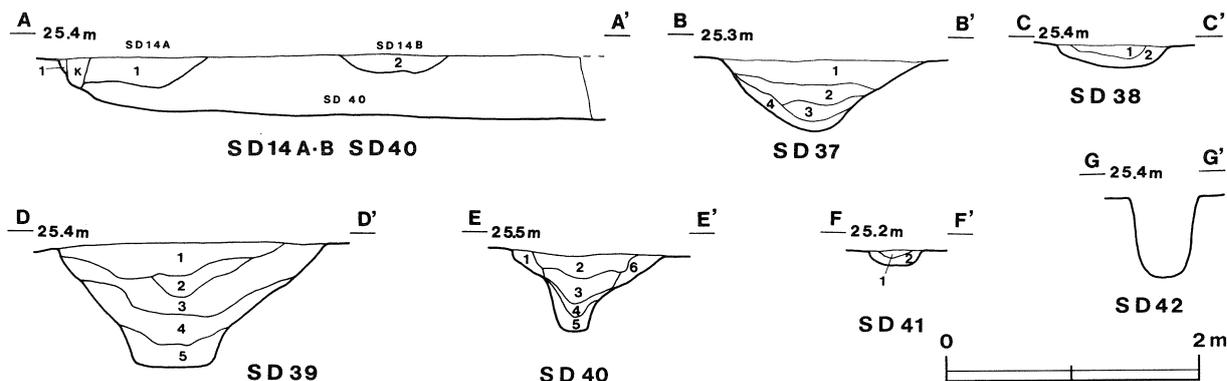
いずれが連結するか不明だったためである。調査の結果からは、Bが連結するものと考えられた。第14A号溝からD11a3区で枝別れして北に延びるのは平成元年度調査時の第29号溝に連続する。第39号溝、及び第40号溝を切っている。第14A号溝は、主軸方向はN-78°-E、長さ(31)m、上幅0.90~1.50m、下幅0.50~0.60m、深さ25~37cmで、断面は皿状である。第14B号溝は、今回調査分の長さ37.3m、主軸方向N-83°-E、上幅0.65~1.15m、下幅0.3~0.5m、深さ10~20cmで、断面は皿状である。A・Bとも覆土はしまりがなく、新しい溝のように思われる。地境と平行しており、その関係の溝と考えられる。

土層解説

- 1 褐色 炭化粒子微量, ローム小ブロック微量・粒子中量, 第14A号溝覆土
- 2 にぶい黄褐色 焼土粒子微量, 炭化粒子微量, ローム粒子中量, 第14B号溝覆土



第104図 第14A・14B・37・38・39・40・41・42号溝・第1号道路実測図



第105図 第14A・14B・37・38・39・40・41・42号構実測図

第37号溝 (第104・105図, PL40)

調査区の西端近く (D10c0~E10d1区) を南北に走る。東側を第39号溝が平行して走る。第38号溝と交差する。平成元年度調査分を含めた全長49.8mである。北半部では上幅1.80~2.55m, 下幅0.30~0.50m, 深さ56~60cm, 主軸方向N-20°-Eである。底面は平坦, 立ち上がりは緩やかで, 断面は鉢状をなす。隣接する第39号溝とは平行するほか, 規模・形状も比較的類似している。南半部では主軸方向をN-12°-Wに変え, 幅を増し, 底面は2条の溝の重複のような形状を示す。覆土は自然堆積である。時期は中世と考えられる。

土層解説

1 暗褐色 炭化粒子微量, ローム粒子少量
2 黒褐色 焼土粒子微量, ローム粒子少量

3 黒褐色 ローム粒子中量
4 暗褐色 ローム大ブロック少量・中ブロック少量・粒子中量

第38号溝 (第104・105図, PL39・40)

調査区の中央部を西南西から東北東方向 (D10i9~D11e0区, N-67°-E) に, 直線的に延びる。平成元年度に調査した第38号溝の連続で, 東側で同じく平成元年度に調査した第15号溝とも連続する (ここでは調査時の呼称に従い, 第38号溝としておく)。第41号溝を切り, 第37号溝・第39号溝・第40号溝・第4号土坑に切られる。覆土上を第1号道路が走る。長さは前回調査分を含めて100m, 上幅0.90~1.05m, 下幅0.4~0.7m, 深さ20cm前後である。底面は皿状で, 壁は緩やかに立ち上がる。覆土は自然堆積である。遺物の出土はないが, 出土遺物から中世とされる第37号溝・第39号溝に切られているので, それよりは古い時期の溝である。性格は不明である。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子微量
2 黒褐色 ローム小ブロック微量・粒子少量

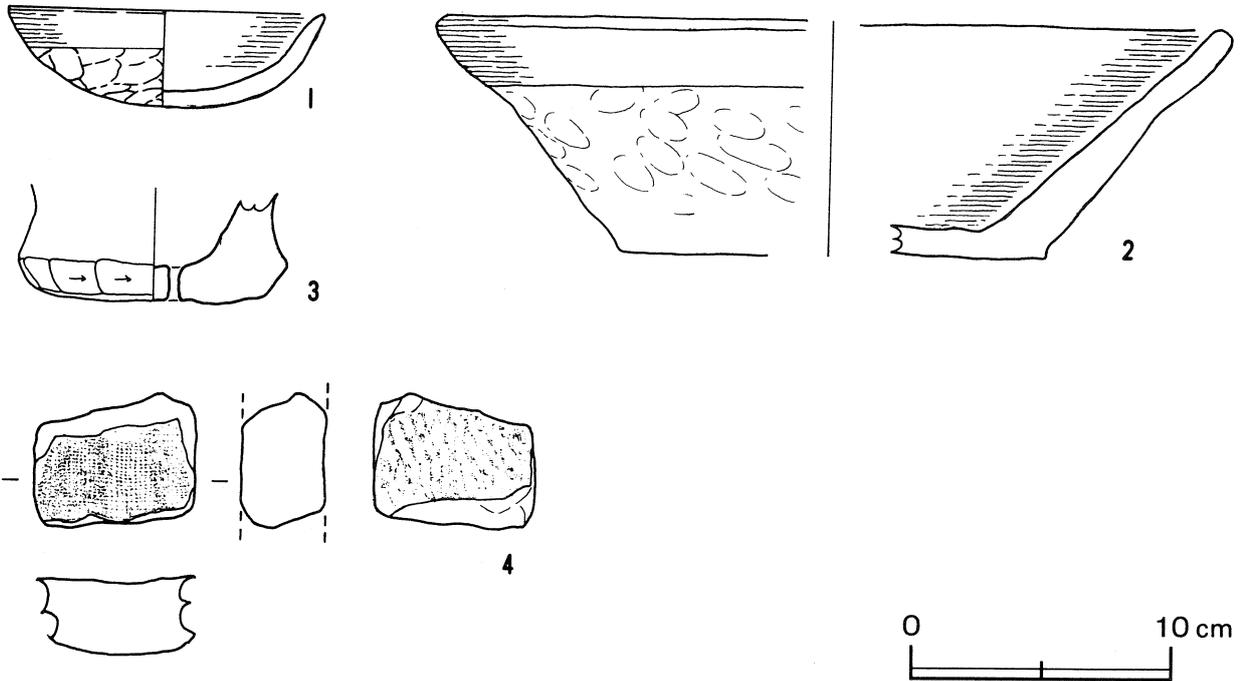
第39号溝 (第104~106図, PL40・55)

調査区西部を南北に走る (D11b2~E11c1区, N-5°-E)。平成元年度調査の第24号溝に連続する。西側には第37号溝がほぼ平行して走る。長さは今回調査分45m, 上幅1.85~2.20m, 下幅0.40~0.65m, 深さ0.83~1.00mで, 底面は平坦, 立ち上がりは外傾し, 断面鉢状である。覆土は自然堆積である。遺物はいずれも流れ込みであるが, 土師器・瓦・中世陶器が出土している。時期は中世, 性格は不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子微量, ローム粒子少量
- 2 暗褐色 炭化粒子微量, ローム粒子中量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量

- 4 暗褐色 ローム小ブロック少量・粒子中量
- 5 黒褐色 ローム小ブロック中量・粒子多量



第106図 第39号溝出土遺物実測図

第39号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土, 色調, 焼成	備考	
第106図 1	坏 土師器	A 12.3	丸底。体部は内彎しながら緩やかに立ち上がり, 稜を持たずに口縁部に移行する。	口縁部内・外面ヨコナデ。体部～底部外面ヘラ削り, のちナデ。底部内面ナデ。	砂粒・スコリア 橙色 普通	PL55-5 P 358 80% 覆土中	
		B 3.7					
2	鉢 陶器	A [29.8]	平底。体部は外傾して直線的に立ち上がり, 口縁部はわずかに内彎する。端部には外傾した面を持つ。	口縁部外面～体部内面ヨコナデ。体部外面指ナデ。底面無調整。内面に自然釉。	砂粒・石英・長石 にふい赤褐色 普通	PL55-6 P 360 15% 覆土中	
		B 9.2					
		C [16.4]					
3	播鉢 須恵器	B (4.5)	底部は丸底気味の平底で, 体部より外に張り出す。底部に1孔あり。器厚は全体に厚い。	体部外面ヨコナデ。底部外面ヘラ削り。内面調整摩滅により不明。底部穿孔の焼成前後不明。	砂粒・石英・長石・ 雲母, 灰色 普通	PL55-4 P 359 25% 覆土中	
		C 9.0					
図版番号	器種	計測値				出土状況	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
4	平瓦	(5.4)	(6.3)	2.9	—	覆土中	T 6, 布目, 縄目叩き

第40号溝 (第104・105図, PL39)

調査区北部から屈曲しながら南部に至る(C11j8～E11c3区), 上幅0.77～1.20m, 下幅0.20m, 深さ53～60cm程の溝である。底面は平坦で, 壁は下半で垂直に近く, 上半で外傾する。底面レベルは24.7m前後で一定している。覆土は自然堆積で, 一部では最下部に灰が含まれている。第38号溝を切り, 第39号溝・第42号溝・第14A号溝・第14B号溝・第4号土坑に切られている。第14A号溝とはD11a5区からC11j8区まで約13m程重複して走り, C11j8

区で北に折れる。本遺構に伴う遺物の出土はなく、時期・性格等は不明である。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------|-------|---------|
| 1 褐色 | ローム粒子中量 | 4 黒褐色 | ローム粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量 | 5 黒褐色 | ローム粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量 | 6 明褐色 | ローム粒子多量 |

第41号溝 (第104・105図)

調査区の南西部 (D10i0~E10b0区) を南北に (N-1°-W) 走る。北端で第38号溝に切られる。長さ11.5m, 上幅0.40~0.50m, 下幅約0.30m, 深さ11~15cmである。底面は平坦で、壁は外傾する。断面は逆台形である。覆土は自然堆積である。遺物の出土はないが、中世以前の第38号溝に切られており、本遺構の時期はそれ以前である。性格は不明である。

土層解説

- | | |
|-------|---------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量 |

第42号溝 (第104・105図)

調査区南端に東西に走る (E11d1~E11c4区, N-74°-E)。第37号・第40号溝, 及び第196号・第236号住居跡を切る。上幅0.5~0.6m, 下幅0.30~0.40m, 深さ約60cmで、底面は平坦, 壁は垂直に近く, 断面はU字形である。覆土は自然堆積である。時期は不明である。地境に沿っており, 根切りの溝と考えられる。

(4) 道路

第1号道路 (第104図)

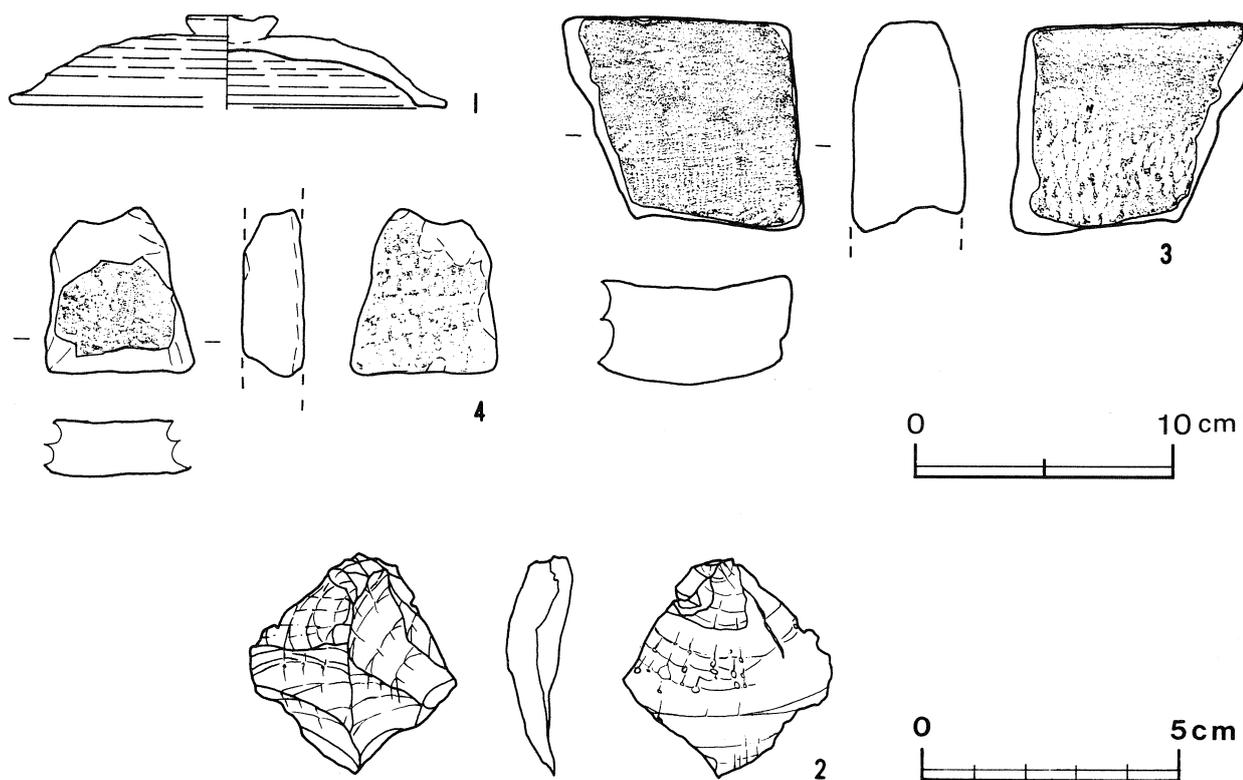
調査区東端を, 湾曲しながら南北に走る (D11b0~D11j1区)。幅50~75cmの踏み固め面の連続で, 37.7m程確認された。確認部分の主軸方向はN-2°-Eである。ローム上面を走り, 第14B号溝, 第38号溝との交差部分では, それらの覆土の上を通る。

(5) 遺構外の遺物 (第107図, PL53)

Ⅲ区で表面採集されたり, 表土中から出土した遺物が若干ある。これらについては, 観察表により解説する。

Ⅲ区遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土, 色調, 焼成	備考	
第107図 1	蓋 須恵器	A [16.8] B 3.6 F 3.4 G 0.8	天井部に扁平なつまみが付く。体部は丸みを持って大きく開く。裾部は水平に近くなる。内面には退化したかえりが付く。	つまみは貼り付け。体部外面上半回転ヘラ削り。体部外面下半・内面ヨコナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 灰色 普通	P363 55% 表採	
図版番号	器種	計測値				出土状況	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
2	剝片	4.4	4.1	1.3	12.6	表土中	PL53-9, Q27, 瑪瑙
3	平瓦	(7.8)	(9.4)	3.8	-	表土中	T7, 布目, 縄目叩き
4	平瓦	(5.8)	(6.6)	2.1	-	表採	T8, 凹面調整不明, 格子目叩き



第107図 遺構外出土遺物実測図

第4節 ま と め

1 平成4年度、及び平成5年度の調査

柴崎遺跡の平成4年度、及び平成5年度の調査の成果として、竪穴住居跡39軒、炉穴6基、土坑16基、溝19条、道路3条について報告した。ここでは主な遺構・遺物について、時代別にまとめておく。

(1) 旧石器時代

平成5年度調査においては、II(H5)区、及びIII(H5)区のほぼ全面に12.5%の試掘坑を設け、粘土層上面までローム層を手掘りして旧石器時代文化層の確認作業を行ったが、文化層は確認できなかった。旧石器時代の遺物は、II(H5)区・III(H5)区において、ナイフ形石器・尖頭器・石錐等の石器や剝片が表面採集されたり、表土中や後の時代の遺構の覆土に混入して出土している。ローム層の上部に含まれていた旧石器時代文化層が耕作等によって攪乱された結果と考えられる。

(2) 縄文時代

II区において、早期に属すると考えられる6基の炉穴が確認されている。また早期・前期を中心とする土器片がII(H5)区の台地斜面部を中心に出土している。早期では撚糸文系・沈線文系・条痕文系等、前葉から後葉まで出土し、前期でも羽状縄文系・貝殻腹縁文系等、前葉から後葉まで出土している。後期に属すると考えられる土器片も若干出土している。石器では、石鏃・打製石斧・有舌尖頭器が縄文時代に属するほか、石核も縄文時代に属する可能性が高い。

(3) 古墳時代

大雑把であるが、これ以降の関係する年代のうち、6～7世紀を古墳時代、8世紀代を奈良時代、9～10世紀を平安時代、12世紀以降を中世として、この項の記述を進める。⁽¹⁾

古墳時代の遺構としては、竪穴住居跡がある。今回報告した竪穴住居跡39軒のうち、時期不明のものが3軒ある。時期決定できた36軒のうち、II区7軒、III区1軒、合計8軒が古墳時代のもので、年代的にはいずれも後期に属すると考えられる。大型住居が多く、6mを越す住居跡3軒はいずれもこの時代に属している。中でも最大のものはIII区の第196号住居跡で、7.96m×8.03mの規模を持っている。

(4) 奈良時代

奈良時代の遺構としては、II区10軒、III区2軒、合計12軒の竪穴住居跡がある。注目される遺物としては、鉄鎌・鉄鏃・瓦片等がある。瓦片は縄目叩きのものがほとんどであるが、格子目叩きのものも混じる。これら瓦片の出土状況はいずれも再利用、ないし混入であって、これらの瓦が本来葺かれていた遺構とその所在は不明である。しかし、このことは当遺跡のこの時期の集落を考える際に欠くことのできない問題である。すでに土生朗治氏はIII区の掘立柱建物1棟について、寺院であることを強く示唆しており、その後同じ掘立柱建物について富永樹之氏が、慎重な姿勢をとりながらも、村落内寺院であろうとの指摘をしている。⁽²⁾⁽³⁾ こうした検討をさらに進める必要がある。

(5) 平安時代

平安時代の遺構としては、II区で12軒の竪穴住居跡が確認されている。注目される遺物としては、第238D号住居跡から出土した4個体の格子目叩きをもつ須恵器がある。これらの体部外面に付けられた叩き目はパターンが4個体とも共通し、同一の叩き板で付けられていることが明らかである。生産・流通の実態に迫る一つの糸口となる可能性を持つ遺物と言える。

(6) 中世

中世の遺構としては、いわゆる竪穴遺構がⅡ区で4軒確認されている。小規模な方形の竪穴遺構で、12世紀以降の住居の一形態と考えられているものである。今回報告した4軒にはいずれも炉・柱穴・階段等の施設はないが、床は踏み固められている。⁽⁴⁾

2 昭和62年度以降の調査

柴崎遺跡の、当教育財団による、昭和62年度からの一連の発掘調査は、平成5年度をもって終了した。全体で86,953㎡を調査し、調査した遺構は膨大な数にのぼる。遺構の種類と数だけとりまとめておく。⁽⁵⁾

主な遺構は、古墳時代から中世に及ぶ時期の竪穴住居跡393軒である。同時存在した住居数は明らかではなく、また消長もあったであろうが、古代から中世初期ごろにかけて相当大きな集落が展開していたことは確かである。そのほか、奈良・平安時代の掘立柱建物6棟、縄文時代早期の炉穴6基、中世の地下式墳10基、以下時期不明のものが多く、土坑57基、井戸22基、溝60条、道路3条が調査されている。遺構は確認されなかったが、旧石器時代、縄文時代前期・後期の遺物も出土している。⁽⁶⁾

註

(1) これらの時期の土器編年と年代観については、次の文献を参考にした。

檜村宣行 「茨城県南部における鬼高式土器について」 『研究ノート』2号 1993年7月

浅井哲也 「茨城県内における奈良・平安時代の土器（Ⅰ）・（Ⅱ）」 『研究ノート』創刊号・2号
1992年7月・1993年7月

(2) 「研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅲ）柴崎遺跡Ⅲ区」
『茨城県教育財団文化財調査報告』第72集 1992年3月

(3) 富永樹之 「「村落内寺院」の展開（上）」 『神奈川考古』第30号 1994年5月

(4) 中・近世研究班 「中世の竪穴遺構について」 『研究ノート』創刊号 1993年7月

(5) 前掲(2)のほか、「同（Ⅰ）柴崎遺跡Ⅰ・Ⅱ－1区」 『同』第54集 1991年9月、
「同（Ⅱ）柴崎遺跡Ⅱ区中塚遺跡」 『同』第63集 1991年3月によった。

(6) 土生朗治氏が前掲(2)において、このことについて検討を加えている。

表2 平成4・5年度調査住居跡一覧表

住居跡 番号	位 置		主軸方向	平 面 形	規 模(m) (主軸長×幅)	壁高 (cm)	床面	内 部 施 設				竈・電	覆土	出土遺物 (報告分のみ)	備 考
	地区	調査区						壁溝	主柱穴	ピット	入口				
137	II(H4)	E4 _{g1}	N-35°-W	方 形	5.13 × 5.13	6~10	平坦	—	4	—	1	竈	自然	土師器	7世紀前半
233	II(H4)	E3 _{f9}	N-3°-W	不整形	3.51 × 3.64	4~8	平坦	—	—	—	1	竈	自然	土師器, 須恵器, 紡錘車	9世紀前葉
234	II(H4)	E3 _{h9}	N-44°-W	[方形]	3.34 × (2.71)	10~15	平坦	全周	—	—	1	竈	人為	土師器	7世紀前半
235	II(H4)	E3 _{i6}	N-45°-W	方 形	6.36 × 6.16	38~56	平坦	全周	4	1	1	竈	人為	土師器, 須恵器	7世紀後半
47	II(H5)	E7 _{ds}	N-26°-W	不整形	3.61 × 4.08	15~31	平坦	全周	—	2	—	竈	自然	土師器, 須恵器, 刀子	8世紀前葉
238A	II(H5)	E6 _{aa}	N-40°-W	[方形]	3.57 × (3.14)	23~27	平坦	ほぼ全周	—	1	1	竈	人為	須恵器, 土製支脚	8世紀前葉
238B	II(H5)	E6 _{ab}	N-69°-E	方 形	4.42 × 4.25	27~32	平坦	全周	4	—	1	竈	自然	土師器, 須恵器	9世紀前葉
238C	II(H5)	E6 _{aa}	N-13°-W	方 形	4.18 × 4.72	13~50	平坦	ほぼ全周	4	1	1	竈	自	紡錘車, 刀子	時期不明
238D	II(H5)	D6 _{ja}	N-15°-W	方 形	4.12 × 3.95	5~10	平坦	一部	—	3	1	竈	自然	須恵器	9世紀後葉
238E	II(H5)	D6 _{ja}	N-47°-W	方 形	4.78 × 5.08	35~75	平坦	半周	4	1	1	竈	自然	土師器, 打製石斧	6世紀後半, S194に同じ
238F	II(H5)	D6 _{ja}	N-69°-E	方 形	4.27 × (4.45)	17~20	平坦	半周	—	4	1	竈	自然	土師器, 須恵器	9世紀中葉
238G	II(H5)	D6 _{ja}	N-26°-W	方 形	3.06 × 3.28	13~20	平坦	—	—	4	1	竈	自然	土師器	9世紀後葉
239A	II(H5)	D6 _{ra}	N-18°-W	方 形	5.00 × 5.37	20~45	平坦	全周	4	—	1	竈	自然	土師器, 須恵器, 管状土器, 土製支脚, 鉄鏃	9世紀前葉
239B	II(H5)	D6 _{ea}	N-5°-W	方 形	(4.72) × 4.80	8~30	平坦	全周	4	1	—	竈	自然	土師器, 須恵器	8世紀後葉
239C	II(H5)	D6 _{ea}	N-30°-W	方 形	(5.15) × 5.32	5~38	平坦	半周	4	1	2	竈	自然	土師器, 鉄鎌	8世紀中葉
240	II(H5)	D6 _{ia}	N-35°-W	方 形	4.00 × 4.00	36~48	平坦	全周	4	1	2	竈	自然	土師器, 須恵器	8世紀中葉
241	II(H5)	D6 _{ha}	N-36°-W	方 形	4.85 × 4.78	51~59	平坦	全周	4	—	1	竈	自然	土師器, 須恵器	8世紀前葉
242	II(H5)	D6 _{ja}	N-5°-W	方 形	4.47 × 4.50	40	平坦	全周	4	5	1	竈	自然	土師器, 須恵器, 不明土製品, 紡錘車, 砥石, 鉄鏃	8世紀前葉
243	II(H5)	E7 _{a2}	N-55°-W	長方形	2.95 × 3.60	30~40	平坦	一部	—	—	1	竈	自然	土師器, 土製支脚	8世紀前葉
244	II(H5)	E6 _{ca}	N-3°-E	方 形	2.79 × 2.65	5~8	平坦	—	—	4	—	—	自然	—	12世紀以降
245	II(H5)	E6 _{ba}	N-5°-E	不整形	2.95 × 2.75	4~10	平坦	—	—	—	—	—	自然	—	12世紀以降
246	II(H5)	E6 _{ba}	N-27°-W	長方形	(6.20) × 6.90	10~20	平坦	全周	4	—	1	竈	自然	土師器, 須恵器, 剝片	6世紀後半
248	II(H5)	E6 _{ca}	N-0°	方 形	2.42 × 2.40	5~13	平坦	—	—	1	—	—	自然	—	12世紀以降
249	II(H5)	E6 _{aa}	N-18°-W	長方形	3.65 × 3.25	18~35	平坦	全周	4	1	1	竈	自然	土師器, 須恵器	9世紀中葉
250A	II(H5)	E7 _{da}	N-29°-W	方 形	4.65 × 4.76	20~41	平坦	全周	4	—	1	竈	人為	土師器	7世紀後半
250B	II(H5)	E7 _{da}	N-30°-W	—	— × (3.38)	12	平坦	—	—	—	—	竈	自然	土師器, 土製支脚	7世紀前半
251	II(H5)	E7 _{ea}	N-24°-W	方 形	3.58 × 3.26	16~22	平坦	全周	—	—	1	竈	人為	土師器, 須恵器, 土質土器, 支脚	8世紀後葉
252	II(H5)	E6 _{ea}	N-5°-W	方 形	4.15 × 4.25	20~36	平坦	全周	4	1	1	竈	自然	土師器, 土製支脚	8世紀前葉
253	II(H5)	E7 _{fa}	N-20°-W	方 形	3.51 × 3.77	14~29	平坦	一部	3	—	1	竈	自然	土師器, 須恵器, 刀子	9世紀前葉
254	II(H5)	E6 _{ga}	N-3°-W	方 形	3.26 × 3.27	22~33	平坦	一部	4	—	1	竈	人為	土師器, 須恵器	9世紀前葉
256	II(H5)	E6 _{ea}	N-16°-W	[方形]	3.50 × (3.50)	16~28	平坦	一部	—	—	—	竈	自然	土師器, 須恵器, 鉄鎌	9世紀中葉
257	II(H5)	E6 _{fa}	N-11°-W	—	(2.00) × (1.88)	17~27	平坦	一部	—	—	—	竈	自然	土師器, 須恵器, 平瓦	9世紀後葉
259	II(H5)	E6 _{ha}	N-67°-E	—	(2.50) × 5.22	16~23	平坦	半周	—	1	—	竈	自然	土師器, 紡錘車	10世紀前葉
261	II(H5)	E7 _{ga}	N-55°-W	—	(4.37) × 5.15	16	平坦	—	—	—	—	竈	自然	土師器	時期不明
262	II(H5)	E7 _{ga}	N-45°-W	[長方形]	(2.07) × 1.78	11	平坦	—	—	1	—	—	人為	—	12世紀以降
196	III	E11 _{ba}	N-35°-W	方 形	7.96 × 8.03	45~60	平坦	全周	4	—	1	竈	人為	土師器, 尖頭器	6世紀後半
236	III	E11 _{ca}	N-18°-W	方 形	4.30 × 4.30	38~60	平坦	一部	4	—	1	竈	人為	土師器	8世紀前葉
237	III	D11 _{ja}	N-72°-E	方 形	(3.90) × 4.95	34	平坦	半周	2	—	—	竈	自然	土師器, 須恵器, 平瓦, 石鏃	8世紀前葉
264	III	D11 _{ja}	N-1°-W	方 形	3.64 × 3.40	43~55	平坦	全周	—	4	1	竈	自然	平瓦	時期不明

付章 柴崎遺跡土壌の自然化学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

目 次

I はじめに

II 試料

III 方法

IV 結果

V 考察

VI まとめにかえて

文献

図表一覧

図1 柱状図および重鋳物組成

表1 重鋳物分析結果

図版1 試料中の重鋳物

I. はじめに

茨城県南部に広がる常陸台地は、霞ヶ浦や北浦を含む谷に開析され、さらに東茨城・鹿島・行方・新治・稲敷の各台地に分かれている。これらの台地の地形・地質は坂本(1986)により以下のように記載されている。常陸台地は、利根川南部の下総台地に対比される段丘で、その構成層は後期更新世の海成層である。この海成層は見和層とよばれ、最終間氷期の下末吉海進に伴って形成されたものである。その上位に堆積する茨城粘土層は、下総台地をはじめとして関東平野中南部の台地に広く堆積する常総粘土層に対比される。常総粘土層は、菊地(1981)によれば、約4万9千年前に噴出した(町田・鈴木, 1971)箱根-東京軽石の降灰直前まで堆積したとされる。常総粘土層の上位には風成の褐色火山灰土層(いわゆるローム層)が堆積する。

常陸台地の最南部の稲敷台地は、桜川と小貝川低地に挟まれた台地である。台地南部では、台地は小野川や矢田川、花室川などにより開析が進んでいる。柴崎遺跡は、桜川と花室川に挟まれた北西-南東方向に細長く延びる台地上の花室川側の縁辺部に位置する。II区の調査範囲南側は支谷の谷頭にあたっている。

今回の発掘調査により、旧石器時代、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代の遺構・遺物が検出されている。なかでも、奈良・平安時代には、大規模な集落が形成されていたことが推定されている。また、旧石器時代では、遺物はナイフ形石器や剥片が表土中や後世の住居跡の覆土中から出土しているが、遺構は認められていない。

今回の自然科学分析では、ローム層の層序確立のために、重鉍物分析を行う。本分析では、ローム層の重鉍物組成の層位的変化を調べ、対比の鍵に用いる。武蔵野台地の立川ローム層では対比資料が比較的多いため、とくに有効な手段となっている。本遺跡周辺では対比資料は少ないが、本遺跡の層序を記載する際の基礎資料となる。また、ローム層中に混交する指標テフラ由来の細粒の火山ガラスの産状も併せて観察し、層序確立のための参考資料とする。

II. 試料

II区の試掘坑でローム層の土層断面が作成され、上位より1層から9層に分層されている。分析時の観察では、1層から5層は褐色、6層・7層は黄褐色、8層・9層は明黄褐色を呈する。ローム層上部に認められることの多い、いわゆるソフトローム層は認められていない。土層断面の肉眼観察では、4層中に火山ガラスが認められたとされる。また、3層が立川ローム層の第1暗色帯(BB I)、5層が第2暗色帯(BB II)に対比されると考えられている。

試料は、1層から9層まで各層から1点ずつ採取されており、試料番号1～9とする。重鉍物分析には、採取試料全点(試料番号1～9)を対象とする。

III. 方法

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm-1/8mmの砂分をポリタングステート(比重約2.96に調整)により重液分離、重鉍物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉍物」とする。「不透明鉍物」以外の

不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。

また、火山ガラスに関しては、重鉍物分析の処理により得られた軽鉍物分を偏光顕微鏡下にて観察する。

IV. 結果

結果を表1と図1に示す。斜方輝石と単斜輝石の両輝石は、6層から7層付近に量比の極大が認められる。カンラン石は、4層から下位に向かって減少する。

また、火山ガラスは、いずれの試料にもほとんど認められなかった。

V. 考察

栃木県や茨城県の台地上のローム層上部の指標テフラには、上位から立川ローム層最上部ガラス質火山灰(UG；山崎, 1978)に対比される可能性のあるテフラ、始良Tn火山灰(AT；町田・新井, 1976)、赤城-鹿沼軽石(Ag-KP；新井, 1962)などがある。

UGは、浅間火山の軽石流期のテフラの細粒部であると考えられており、その降灰年代は約1.2万年前とされている(町田・新井, 1992)。武蔵野台地の立川ローム層の標準層序におけるIII層上部が降灰層準と考えられ、南関東地方における後期更新世末の編年学的研究には重要な指標テフラとなっている。一方、UGの由来と考えられている浅間軽石流期のテフラには、浅間板鼻黄色テフラ(As-YP)やAs-YPと同一噴火輪廻のテフラと考えられている浅間草津テフラ(As-K)などがある(町田・新井, 1992)。As-YPは、分布主軸は東南東で、主に群馬県南部に分布し、その降灰年代は約1.3~1.4万年前と考えられている(町田・新井, 1992)。As-Kは、分布主軸は北東で、主に群馬県北西部から新潟県南部に分布する(町田・新井, 1992)。さらに、As-K(引用文献中ではAs-YPK)に対比される可能性のあるテフラは、東北地方南部から中部でも認められている(小岩・早田, 1994)。また、UGに対比される可能性のあるテフラは、当社によるこれまでの分析例でも茨城県や栃木県内の多くの遺跡で認められている。ATは、鹿児島県の始良カルデラを給源とし降灰年代は約2.1~2.5万年前と考えられている(町田・新井, 1992)。Ag-KPは赤城火山を給源とし、降灰年代は約3.1~3.2万年前と考えられている(町田・新井, 1992)。

本地域では、当社も含めたこれまでの分析例により、UGに対比される可能性のあるテフラの降灰層準はローム層の最上部であることが認められている。また、ATの降灰層準は、田原ローム層と宝木ローム層境界層の暗色帯の上部におかれ(町田・新井, 1976)、当社による分析例でも同様に認められている。Ag-KPは宝木ローム層の中位に挟まれる(阿久津, 1986)。

また、本地域のローム層の重鉍物組成の分析例は、これまでに阿久津(1957)や関東ローム研究グループ(1965)により報告されている。しかし、その量比の層位的変化の指標は、武蔵野台地ほど明瞭ではない。当社を含めたこれまでの分析例により、暗色帯上部付近において角閃石が下位に向かって増加すること、暗色帯の上部のATの降灰層準のやや下位にカンラン石の極大が認められることなどが指標になっている。

今回の分析結果からは、本地域のローム層中に認められる指標テフラは検出されなかった。土層断面観察ではATに由来する火山ガラスが4層中に認められたとされるが、本分析では認められなかった。さらに、本地域の重鉍物組成の層位的変化は、栃木県・茨城県の田原ローム層から宝木ローム層に認められる指標とは一致しない。したがって、本地点のローム層は、周辺台地上のローム層とは対比できない。

ところで、ローム層（ここではいわゆる関東ローム層のような細粒の火山砕屑物を母材とする土壌をさすものとして用いる）の成因については、従来は小噴火による降下火山灰の累積したもの（たとえば町田(1964)など）とする説が主に支持されてきた。しかし、最近では、いったん堆積した火山灰が風によって移動させられて累積したものとする説が主張されるようになった。この説は、中村(1970)により提示され、早川(1986)、早川・由井(1989)、早川(1990)などにおいて火山学および火山灰編年額上の種々の観察事実を根拠として述べられている。当社では、これらの文献において展開されている論拠から、この説がかなり有力であると考えられる。この説に従えば、ローム層も黒ボク土層も火山の噴火とは関係なく常に降りつもる風塵によって形成されたことになる。早川・由井(1989)に示されたその堆積速度の平均は約0.07mm/年程度であるから、ローム層が形成される過程をより短時間で捉えれば、地表面に降下した風塵が、そのまま落ちつくことはなく、風や降雨による再移動を繰り返したものと考えられる。また、ローム層の鉱物組成には周辺火山の噴出物の鉱物組成が反映されており、それは同じ地域、同じ時代では類似すると考えられる。したがって、同じ地域において鉱物組成の層位的変化を調べることにより、対比の指標が導き出され、層序対比が可能となっている。

VI. まとめにかえて

今回の分析により指標テフラや重鉱物組成による対比の指標が認められなかった理由は、以下が考えられる。

①本遺跡ではローム層の形成にあたって風塵の再移動が顕著であったため、降灰したATをはじめとする指標テフラも風や降雨により移動してしまい、ローム層中には保存されにくかった。また、重鉱物組成による層位的変化が捉えにくかったのも、同様の理由による。

②今回の分析試料は各層1点ずつ採取されており連続的には採取されていないため、結果的にATをはじめとする指標テフラの降灰層準付近からの試料採取が行われなかった。また、重鉱物組成の層位的変化が捉えにくく対比の指標が見いだせなかったのも同様に試料採取方法による。

今後、以下のような調査を行うことにより、本遺跡周辺の地形変遷やローム層の層序確立につながると考えられる。

①試料採取の間隔を狭くすることにより、対比が可能になることも考えられる。したがって、試料は厚さ5cm程度で連続的に採取することが望ましい。なお、本報告後の現地調査により同じ地点で再度連続的な試料採取を行っており、今後再検討する予定である。また、1層より上位の土層の分析によりUGに対比される可能性のあるテフラの降灰層準が認められないか検討する。9層より下位の土層の堆積過程を調査することにより茨城粘土層、見和層などを確認する。

②遺跡周辺の地形解析を既存の資料や現地調査によりさらに進める。

③周辺での分析調査例を蓄積する。

文 献

阿久津 純(1957) 宇都宮付近の関東ローム層. 地球科学, 33, P.1-11.

阿久津 純(1986) 3.4関東平野北部の更新統(7)鬼怒川流域. 「日本の地質3 関東地方」, P.185-187, 共立出版.

新井房夫(1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年. 群馬大学紀要自然科学編, 10, 4, P.1-79.

- 早川由起夫(1986) 火山灰土の成因と堆積速度。1986年度春季大会日本火山学会講演予稿集, P.34.
- 早川由起夫(1990) 堆積物から知る過去の火山噴火。火山第2集, 34, 火山学の基礎研究特集号, P.S121-S130.
- 早川由起夫・由井将雄(1989) 草津白根火山の噴火史。第四紀研究, 28, P.1-17.
- 関東ローム研究グループ(1965) 関東ローム —その起源と性状—。P.378, 築地書館。
- 菊地隆男(1981) 常総粘土層の堆積環境。地質学論集, 20, P.129-145.
- 小岩直人・早田 勉(1994) 東北地方中南部に分布する更新世末期のガラス質テフラ。地学雑誌, 103, P.68-76.
- 町田 洋(1964) Tephrochronologyによる富士火山とその周辺地域の発達史—第四紀末期について—(その1)
(その2)。地学雑誌, 73, P.293-308, 337-350.
- 町田 洋・新井房夫(1976) 広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義—。科学, 46, P.339-347.
- 町田 洋・新井房夫(1992) 火山灰アトラス。P.276, 東京大学出版会。
- 町田 洋・鈴木正男(1971) 火山灰の絶対年代と第四紀後期の編年—フィッシュン・トラック法による試み—。
科学, 41, P.263-270.
- 中村一明(1970) ローム層の堆積と噴火活動。軽石学雑誌, 3, P.1-7.
- 坂本 亨(1986) 3.4関東平野北部の更新統(9)常陸台地。「日本の地質3 関東地方」。P.189-190, 共立出版。
- 山崎晴雄(1978) 立川断層とその第四紀後期の運動。第四紀研究, 16, P.231-246.

表1 重鉱物分析結果

試料番号	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	不透明鉱物	その他	重鉱物同定粒数
1	65	91	7	18	11	58	250
2	65	87	5	23	7	63	250
3	65	109	10	14	8	44	250
4	62	100	8	17	16	47	250
5	38	141	11	18	9	33	250
6	1	149	51	9	14	26	250
7	0	137	60	1	9	43	250
8	0	26	1	0	34	189	250
9	0	15	2	4	24	205	250

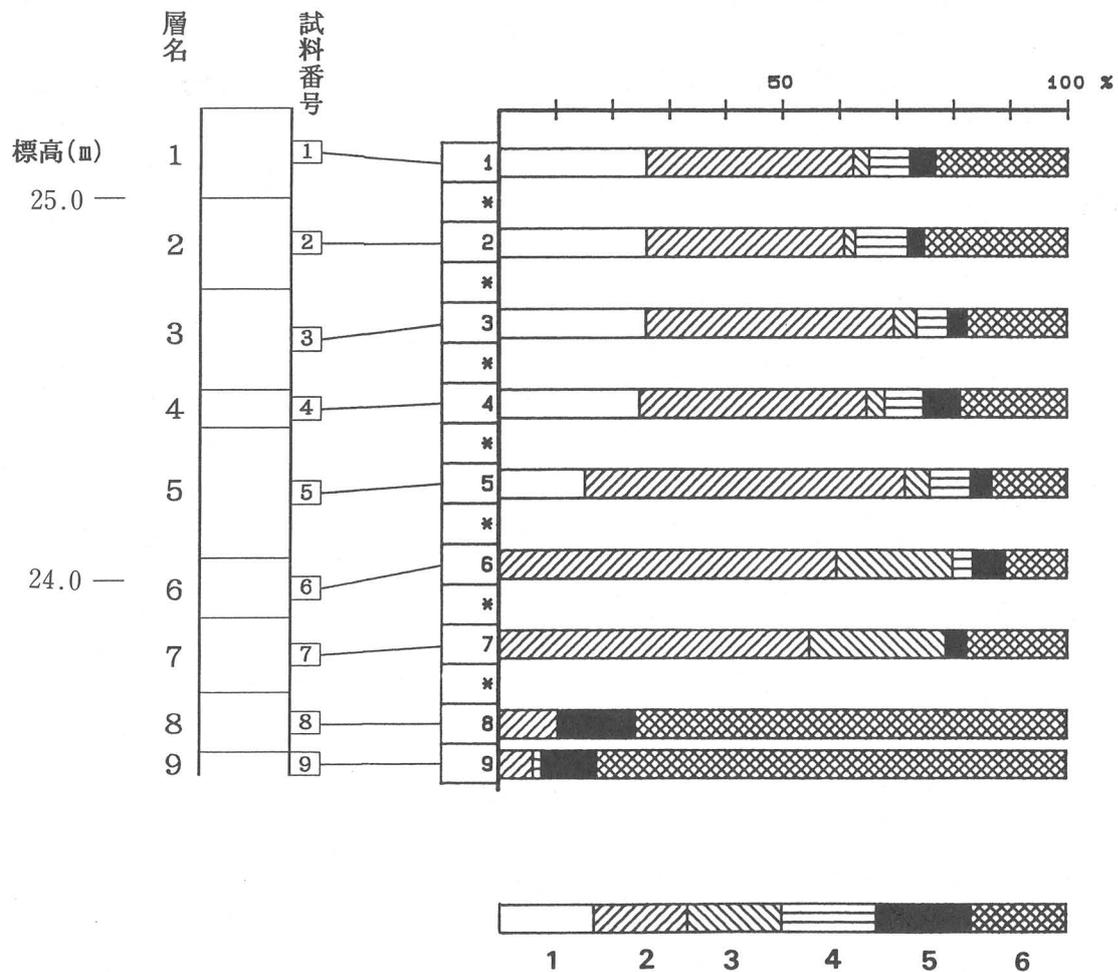
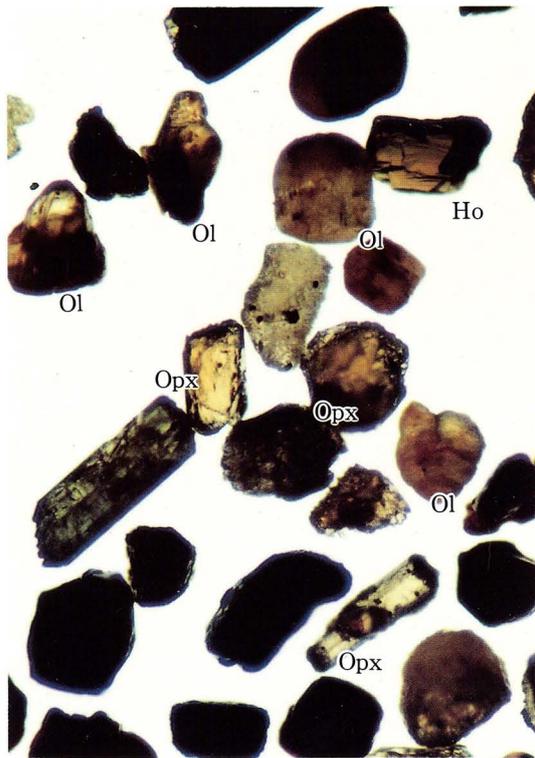


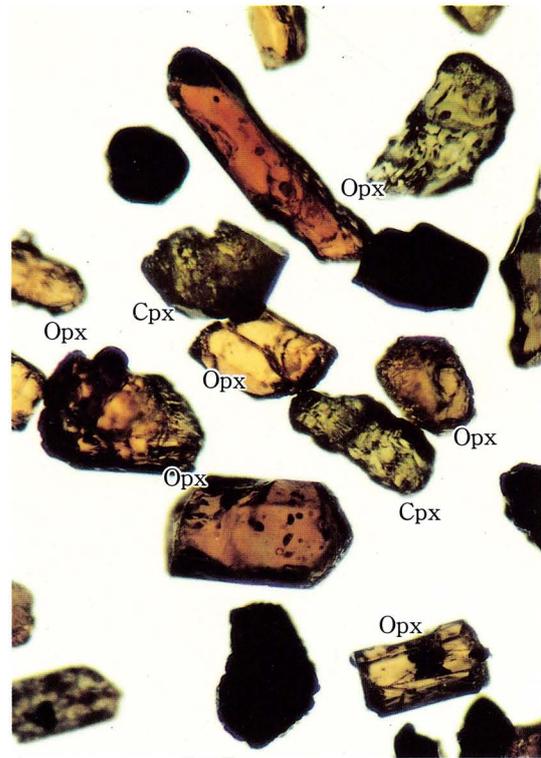
図1 柱状図および重鉱物組成
 1: カンラン石, 2: 斜方輝石, 3: 単斜輝石, 4: 角閃石, 5: 不透明鉱物,
 6: その他

図版1 試料中の重鉱物



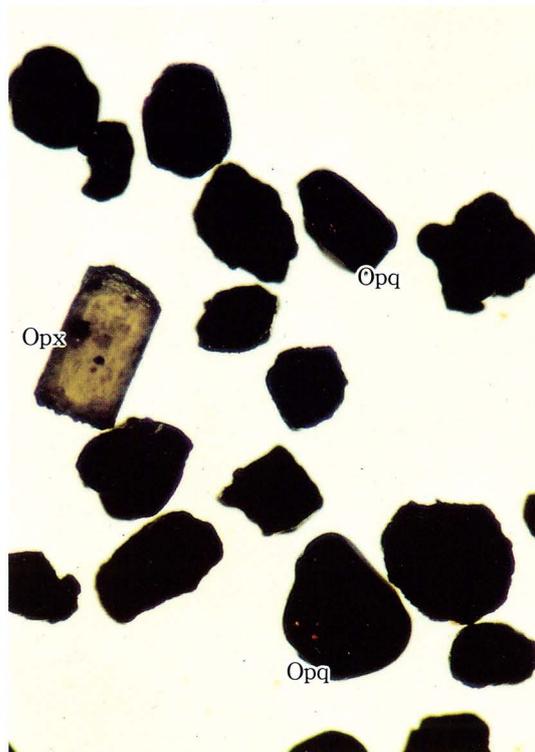
1. 重鉱物 (試料番号 2)

0.5mm



2. 重鉱物 (試料番号 6)

0.5mm



3. 重鉱物 (試料番号 8)

0.5mm

Ol : カンラン石, Opx : 斜方輝石, Cpx : 単斜輝石, Ho : 角閃石, Opq : 不透明鉱物